『中観光明論』(*Madhyamakāloka*) 後主張第１章
「聖典による一切法無自性性の証明」の研究（１）
—和訳・註解・チベット語校訂テキスト—[1]

計良 龍成

１．はじめに

『中観光明論』(*Madhyamakāloka*, 以後 MĀ) は，インド後期中観派の学者 Kamalaśīla（蓮華戒 740-795 年頃）の主著と見なされ，彼の人生最後期にチベットで著されたと言われる[2]．MĀ は，インド中観思想展開史上最も発展的な思想を述べる重要な作品の一つと考えられるが，チベットで著されたためであろうか，それがインド仏教思想界に影響を与えた形跡はなく，現在確認される限りでは，インドでは，１２世紀の始め頃（もしくは１１世紀後半頃）までその存在が知られることはなかったようである[3]．MĀ のサンスクリット原典写本は現在に至るまで発見されておらず，Śīlendrabodhi と dPal brtsegs によるチベット語訳として現存する．チベット仏教において，Kamalaśīla と彼の師 Śāntarakṣita（寂護 725-788 年頃）は，自立論証派 (*Svātantrika; Rang rgyud pa*) の，そして瑜伽行中観派 (*Yogācāra-Mādhyamika; rNal 'byor spyod pa'i dbu ma pa*) の学者と見なされている．

本稿は，MĀ 後主張 (*Uttarapakṣa*) 第１章「聖典 (*āgama*) による無自性性 (*niḥsvabhāvatā*) の証明」の部分和訳・註釈研究である．MĀ は前主張（*Pūrvapakṣa;* 反論）と後主張（答論）との二部から成る．後主張第１章は，前主張冒頭の「中観派は聖典により一切法無自性性を証明できない」という対論者（主に瑜伽行派）の反論に対して，Kamalaśīla が答える章である．第１章中の本稿訳出部分，即ち D147b5-159b1 の議論

[1]本稿は，法政大学法学部在外研究員として，2016 年 4 月 1 日より 2 年間（予定），オーストリア科学アカデミー・アジア文化思想史研究所 (Institut für Kultur- und Geistes-geschichte Asiens) に客員研究員として滞在し研究した，その成果の一部を含むものである．

[2]Kamalaśīla の生存年代は，FRAUWALLNER (1961) pp. 141-144 に従う．Kamalaśīla の生涯と彼の著作，そして *Madhyamakāloka* (MĀ) に関する基本情報については，KEIRA (2004) pp. 1-9 を見よ．

[3]fn. 14 を見よ．

Acta Tibetica et Buddhica 9: 1-121，2016.
© Faculty of Buddhism，Minobusan University，JAPAN

内容の考察については，最後の「唯心 (*cittamātra*) 思想解釈」の議論 (D156b4-159b1, **1.2.1.11-1.2.1.11.3, §60-§81**) を除き，KEIRA (2006)(2009)，計良 (2013) の研究が既にあるので，詳細はそれらを見ていただきたい．以下，第 1 章中の本稿訳出部分の議論内容を，上記の研究に基づき略説する．

後主張第 1 章初めの議論（本稿和訳 **1.2.1-1.2.1.2, §2-§9**）において，『入楞伽経』(*Laṅkāvatārasūtra* 以後 LAS) X kk. 165-166 に説かれる，世尊の Nāgārjuna への授記（所謂，龍樹授記）の記述を根拠にして，Nāgārjuna が示した中道及び『般若経』(*Prajñāpāramitāsūtra*) で説かれた中道が対論者（瑜伽行派）によっても承認されるべきであること，そして「語と事物との関係」等が考察とされる．その議論の中で，Kamalaśīla は，経典の信頼性・権威に関する Dharmakīrti の立場に従うことを表明している．「事物の力によって機能する推論」(*vastubalapravṛttānumāna*) と「経典に依拠した推論」(*āgamāpekṣānumāna*) という Dharmakīrti の説く二種の推論 (*anumāna*) を受け入れるだけではなく，*Pramāṇavārttika* (PV) I k. 215 で説かれる経典の信頼性・権威の確定方法としての「三種の考察」，即ち後にチベット仏教において *dpyad pa gsum / dpyad gsum* と名付けられた三考察を完全に受け入れるなど，経典の権威に関する Dharmakīrti の立場を完全に受け入れているのである[4]．また，他のところで既に発表したが[5]，Kamalaśīla は，彼の中観思想にとって最も本質的な事柄である真実智 (*tattvajñāna*) がどのようにして成立するかを説明する理論に関しても，Dharmakīrti の無知覚 (*anupalabdhi*) の理論を基礎とし，応用している．我々は，以上の事実からして，Dharmakīrti の認識手段 (*pramāṇa*) の理論は，一切法無自性という中観派の哲学的立場を確立・証明するための Kamalaśīla のまさしく理論的基盤または中核となっていることを理解することが出来るのである[6]．

---

[4]Kamalaśīla が経典の信頼性・権威に関する Dharmakīrti の立場に従い，「三種の考察」を受け入れていることについては，KEIRA (2006) を見よ．その「三種の考察」がチベットで *dpyad pa gsum / dpyad gsum* と名付けられるに先立ち，Kamalaśīla はそれを *tshul gsum gyi brtag pa* と呼んでいる．fns. 39 と 33 を見よ．

PV I k. 215: *pratyakṣenānumānena dvividhāpy abādhanam / dṛṣṭādṛṣṭārthayor asyāvisaṃvādas tadarthayoḥ //.* 英訳（TILLEMANS (1999) p. 28, 3-9）: “A [treatise’s] being non-belying [means that] there is no invalidation of its two [kinds of] propositions concerning empirical and unempirical things by direct perception or by the two sorts of inferences [viz., inference which functions by the force of entities (*vastubalapravṛttānumāna*) and inference based upon scripture (*āgamāśritānumāna*)].”

[5]KEIRA (2004) pp. 47-86.

[6]以上は，KEIRA (2006) での考察内容のまとめである．

第１章の後続する諸議論（本稿和訳 **1.2.1.3～, §10～**）では，Kamalaśīla は，了義 (*nītārtha*)・未了義 (*neyārtha*) の解釈，三自性（*trisvabhāva;* 三性）説・三無自性（*trividhā niḥsvabhāvatā;* 三無性）説の解釈，唯心思想の解釈等の諸問題を論じていく．それらの諸議論を通して，Kamalaśīla は中観思想と瑜伽行派の思想との両立化を企てているように思われる．両立化とっても，両者をそのまま対等な立場で両立化させようとしているのではない．あくまでも，これは中観派からの思想的接近であり，瑜伽行派の学説を中観派の立場から解釈し，中観思想を思想的に上位に置きながらも，両学説の思想的対立関係を解消し，両学説を思想的に調和・連結させるための両立化であり，また別の見方をすれば，瑜伽行派の者たちをも中観思想に導き入れるための両立化でもある[7]．この両学説の両立化のために Kamalaśīla が採った方法は， Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論と無自性性を論証する Kamalaśīla の *vastubalapravṛttānumāna* を基盤・根拠として，了義や三無性説等に対する中観派の解釈を提供することにより，中観派と瑜伽行派の間に在る教義上相容れない諸問題点を合理的に解決し，対立関係を解消することであったと思われる．詳細は KEIRA (2009) にて考察したが，実際，Kamalaśīla の了義・未了義・三性・三無性解釈は全て，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論と Kamalaśīla の金剛片 (*vajrakaṇa*) や縁起 (*pratītyasamutpāda*) 等の五論証因を述べる *vastubalapravṛttānumāna* に合理的に根拠付けられ，または裏付けされたものである[8]．三無性・三性についての自分の解釈を正当化するために，Kamalaśīla は多くの経典や，Nāgārjuna の *Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) 15-1, 15-2ab, 15-8 そして 21-17ab 等の論書を引用するが，その際も，Kamalaśīla はそれらを *pramāṇa* と，つまり縁起等の五論証因を述べる彼の *vastubalapravṛttānumāna* と矛盾しない言明として受け入れ，引用しているのである．Kamalaśīla の *vastubalapravṛttānumāna* も Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論に基づいて成立したものである．それゆえ，Dharmakīrti の理論が Kamalaśīla のそれらすべての解釈を確立するための基盤・根拠となっていると言うことは可能であろう．

上記のことは，Kamalaśīla の唯心思想解釈（本稿和訳 **1.2.1.11～, §60～**）についても言えることである．瑜伽行派の唯心思想は，外界の無自性性・無我 (*nairātmya*) を説く点で，真実義の一部 (*tattvārthaikadeśa*) に悟入することを可能にする教説と言う

[7] KEIRA (2009) p. 3, fn. 7 を見よ．

[8] Kamalaśīla の金剛片 (*vajrakaṇa*) や縁起 (*pratītyasamutpāda*) や離一多 (*ekānekaviyoga*) 等の，無自性性を論証する五論証因の詳細については，KEIRA (2004) p. 10, fn. 32 を見よ．

こともできる[9]．しかしながら，心の勝義の存在性は，無自性性を論証する *vastubala-pravṛttānumāna* によって否定・排斥される．従って，心は，勝義ではなく，世俗の存在である．それゆえ，「唯心である」(唯心性) という教説は，中観派が認める勝義を説いた教えではなく，教化対象者を，中観派が説く深遠なる勝義の教説に段階的に導き入れるという，救済論的目的を持って説かれた教えであると Kamalaśīla は解釈するのである．即ち，一度に全ての法の無自性性を理解できない者は，まず唯心説に依拠して，段階的に外界の対象の無自性性（外界の無我）を理解し，その後で，心の自性を段階的に考察するならば，心の無自性性（心の無我）をも理解して，深遠なる勝義の教理に悟入するである[10]．従って，Kamalaśīla の唯心解釈も，心は勝義の存在ではないと論証する彼の無自性性論証，即ち *vastubalapravṛttānumāna* や，「瑜伽行派の説く無二知 (*advayajñāna*) さえも無我であると悟入することこそが最高の真実 (*paramatattva*) への悟入である」という考えを合理的に正当化する彼の真実智の理論，即ち Dharmakīrti の理論の応用が基盤となり，それらに裏付け・根拠付けされて成立しているものであると理解することができるのである．

この唯心思想解釈の議論後半部（本稿和訳 **1.2.1.11.1-1.2.1.11.2, §67-§80**）において，Kamalaśīla は，Śāntarakṣita の唯心解釈と彼以外の世俗として外界の存在を認める中観派の師 Bhāviveka（等）の唯心解釈とを提示する．これは，Śāntarakṣita 著『中観

---

[9] *Bhāvanākrama* I (BhK I) pp. 216, 26-217, 14: *ata eva cānyena [mārgeṇa] mokṣābhāvā, ekam eva yānam uktaṃ bhagavatā / ... / vijñaptimātraṃ traidhātukam iti bhāvayan vijñānavādibāhyārthanairātmyam avatarati / anena tv asyādvayajñañasya nairātmyapraveśāt paramatattvapraviṣṭo bhavati / na tu vijñaptimātratāpraveśa eva tattvapraveśaḥ / ... / tasmānn advayajñānapraveśa eva tattvapraveśaḥ /.* 「まさにこれゆえに，別の道によっては解脱は無いから，世尊により唯一の乗が説かれたのである．—（中略）—『三界は唯識である』と修習して，識論者〔が説く〕外界の対象の無我に〔悟〕入する．他方，この〔唯一の乗〕によって，この無二知の無我に〔悟〕入するので，最高の真実に〔悟〕入したこととなるのである．然るに，唯識性に〔悟〕入することこそが真実への〔悟〕入なのではない．—（中略）—従って，無二知〔の無我〕に〔悟〕入することこそが真実への〔悟〕入なのである．」Cf. 一郷 (2011) pp. 41, 15-42,6.

BhK I p. 224, 3-7: *yadā tu spaṣṭataro bāhyārthānābhāsajñānāloko jāyate, tadā vijñaptimātrāvasthānāt, kṣāntināmakaṃ nirvedhabhāgīyaṃ bhavati* ***/ ekadeśapraviṣṭaś*** *ca samādhir ucyate grāhyākārānupalambha-praveśāt /.* 「さて，一層明瞭な，外界の対象の無顕現という知の光明が生ずるとき，唯識に住しているから，『忍と名付けられる順決択分』となる．そして〔それは，大乗において〕『〔真実義の〕一部に〔悟〕入した三昧』と言われる．所取の形象の無知覚に入っているからである．」*Abhisamayālaṃkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā* (AAA) p. 64, 2-4 も見よ: *yadā tu cittamātrāvasthānena spaṣṭataro bāhyārthābhi-niveśābhāvo jñānāloko jāyate tadā kṣāntyavasthā. grāhyākārābhāvānupraveśāt* ***tattvārthaikadeśapraviṣṭo*** *nāma samādhiḥ.*

[10] 本稿 pp. 59-61, **§63-§66** を見よ．

荘厳論註』(*Madhyamakālaṃkāravṛtti*，以後 MAV) に対する Kamalaśīla の註釈『中観荘厳論細疏』(*Madhyamakālaṃkārapañjikā*, 以後 MAP) D128a1 において，彼が殆ど詳しい説明もせずに述べた「二種の中観の道」(*dbu ma'i lam rnam pa gnyis*) についての詳しい考察に当たるのだろうと思われる．本稿では，諸資料を用い，MĀ のその箇所を可能な限り正確に訳出することに努めたが，彼の「二種の中観の道」の考えが意味するところの詳細は，紙面の都合上，触れないこととした．これは，稿を改めて論ずることとしたい．

２．先行研究

本稿にて訳出した前主張と後主張第１章の部分については，次の先行研究がある：松下 (1987a)(1987b), 一郷 (1991)(1993)(1994)(1995), 森山 (1991)(1994).

松下 (1987a)(1987b) は，MĀ の対論者の特定と主たる対論者である瑜伽行派による中観派批判を分析し，MĀ の前主張には，Vasubandhu（世親）の『釈軌論』(*Vyākhyā-yukti*，以後 VY) からの影響が大きいことを指摘した点が有益である．松下 (1987b) は前主張の関連部分の和訳を含む．しかしながら，松下 (1987a) が提示した対論者の特定の詳細に関しては，筆者と松下氏の考えは一部異なっている．それについては，本稿和訳の脚注に言及した[11]．

一郷 (1991) は MĀ 前主張の和訳であり，同 (1993)(1994)(1995) は，本稿訳出箇所に相当する後主張第１章の和訳研究である．これらの和訳研究は，MĀ が引用する諸文献の情報を与えてくれる等の点で有益である．しかしながら，MĀ 本文そして Kamalaśīla の中観思想の理解に関しては，筆者と考えを異にしているところが少なくない．それは特に，一郷氏が，経典の信頼性・権威に関する Dharmakīrti の立場に Kamalaśīla が完全に従っていること，そして Kamalaśīla が，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論と無自性性を論証する自身の *vastubalapravṛttānumāna* を基盤・根拠として，了義や三無性説等に対する中観派の解釈を提供しているということ，これらを十分に理解しているとは思われない点に起因していると考えられる．MĀ の唯心解釈の箇所（本稿翻訳 **1.2.1.11-1.2.1.11.3. §60-§81**）の理解については，一郷氏の考えは，森山氏の考えと比べると，筆者の考えに近いと思われるが，しかし全く同じというわけではない．これは一郷氏が Abhayākaragupta の *Munimatālaṃkāra* (以後，MMA) やそのチベット訳に挿入されている註（割注 *mchan*）を参照していないことによる

[11] fns. 21 と 116 を見よ．

点が大きいと思われる．一郷氏と筆者の考えの相違についても，脚注にて言及した．

森山 (1991) は中観派の唯心解釈を扱う箇所の部分和訳研究である．その中で森山氏が提示してる，三種の「中」（三種の勝義観）や異種の唯心解釈という考えは，筆者の考えとは大きく異なっている．この論文では，MĀ に対するチベット語の註釈や，MMA や MMA チベット語訳に挿入された註（割注）等は一切参照されていない．森山氏の考え・理解との相違も，脚注で言及した．

森山 (1994) は，Kamalaśīla が三性説解釈を提示する第 1 章中の箇所の一部，そして MĀ 他章の関連部分の和訳研究である．この論文は，結論として，「〔Kamalaśīla が〕『般若経』を典拠として，一切法空，不生（勝義）の正当性を示している」こと，そして「〔Kamalaśīla が〕二諦説の観点から三性説を解釈し，唯識派からの論難を退け，また中観学説の成立を根拠付けている」ことを明らかにしようとしたものである（〔　〕内の語は筆者による補足）[12]．この論文は，瑜伽行派が説く「言語表現し得ない（*nirabhilāpya;* 離言の）実在的基盤としての事物 (*vastu*)」に言及し，それを一つの視点として，Kamalaśīla の二諦 (*satyadvaya*) 説と彼の三性説解釈を考察している点が有益である．しかしながら，この論文は，上に引いたように，結論として，「〔Kamalaśīla が〕二諦説の観点から三性説を解釈し，唯識派からの論難を退け，また中観学説の成立を根拠付けている」と考えているまさにこの点で，筆者の考えと大きく異なっている．というのは，この論文は，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論からの視点，即ち先に述べたが，Kamalaśīla が，経典の信頼性・権威に関する立場も含め，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論に完全に従っており，その理論が Kamalaśīla の中観思想の核となっているという最も重要な視点を完全に欠いているのである．筆者は，Kamalaśīla の中観思想の成立を根拠付けているのは，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論であると考えている．この理論からの視点が欠落しているので，森山 (1994) からは，Kamalaśīla の了義解釈や三性・三無性説解釈は全て，Dharmakīrti の *pramāṇa* の理論と自身の無自性性論証の *vastubalapravṛttānumāna* を基盤・根拠としているという彼の解釈の本質的な特徴，そしてさらに，それらの解釈を提供することにより，瑜伽行派の論難を退けるだけではなく，瑜伽行派と中観派の教義上の対立関係を解消し，瑜伽行派の思想を中観派の思想に調和・連結させるという Kamalaśīla の解釈の意図・真意も見えてこないのである．また，この論文は，Kamalaśīla の三性・三無性説解釈の中で，特に重要と見なされる箇所を訳出していない．たとえば，本稿

[12]森山 (1994), p. 76 の結論を見よ．

和訳 **1.2.1.4, §18** は，対論者（＝瑜伽行派）の反論に答えて，Kamalaśīla が，『解深密経』(*Saṃdhinirmocanasūtra* 以後 SNS) の中で世尊が三無性説を意図して無自性・無生起説を説いたその世尊の意図（密意）を解釈・説明する重要な箇所であるが，訳出されていない．その箇所 **§18** からも分かるのだが，Kamalaśīla の三性・三無性説解釈は，彼の了義解釈と密接に連関している[13]．了義解釈と三性・三無性説解釈とを切り離して，後者だけを扱おうとしても，彼の解釈の本質的特徴と真意が十分に明らかになるとは思えない．

３．註釈文献等

MĀ の註釈には，サンスクリット語で著された，作者名も作品名も不明だが，註釈と見なしうる作品の断片４葉（筆者未見）と，チベット語の註釈二本とが現存している．サンスクリット語の註釈断片については，YE, LI AND KANO (2013), pp. 37-38 を見よ．その断片は，作者名・作品名だけでなく，著作年代も現段階では不明であり，また，Kamalaśīla の中観思想の理解に，どの程度の利用価値があるのかも不明である[14]．

チベット語註釈二本の内の一つは，Phya pa chos kyi seng ge (1109-1169) による註釈であり，これは現在利用可能である．その作品名であるが，テキスト冒頭に *dBu ma'i yig cha Phya pas byas pa'o /*（Phya pa 作『中観テキスト』）とあり，コロフォンには *dBu ma snang ba'i gzhung go don rigs pa'i tshul dang myi 'gal zhing blo chung*

---

[13]他にも，たとえば，本稿和訳 **1.2.1.4.3, §31-§32** を見よ．

[14]LI AND YE (2014) においては，MĀ にも引用されている *Yuktiṣaṣṭikā*(YṢ) k. 30 や k. 46 等のテキスト校訂に，このサンスクリット断片が使用されている．fns. 85,86 そして 89 を見よ．

MĀ はチベットで書かれたと言われることは既に述べたが，Dīpaṃkaraśrījñāna（982-1054 年頃）が bSam yas 寺を訪れたとき，インドには存在しなかった MĀ のサンスクリット語写本 (*rgya dpe*) を見付けたので，書写してそれをインド（即ち，Vikramaśīla 寺院）に送ったと伝えられる．KEIRA ibid. pp. 7-9 を見よ．また，KANO (2016) p. 91 も見よ．その送られた写本を読んだからだと推測されるが，Vikramaśīla 寺院の学者 Abhayākaragupta が１２世紀の初めに著した *Munimatālaṃkāra* (MMA) には，MĀ からの引用文が多く見付けられる．磯田 (1993) を見よ．このことから推測すると，作者も作品名も不明なこの MĀ の註釈断片は，Vikramaśīla 寺院に写本が届けられた後，おそらく１１世紀後半以降の作品ではないかと推測されうるが，詳細は不明である．VAN DER KUIJP (2014) は，この註釈断片を，Jñānavajra が彼の *Laṅkāvatārasūtra* に対する註釈 (*Lang kar gshegs pa'i mdo'i 'gral pa de bzhin gshegs pa'i snying po'i rgyan: *Laṅkāvatārasūtravṛttitathāgatagarbhālaṃkāra*) の中で言及している，作者不明の MĀ に対する註釈，即ち，*dBu ma snang ba'i rnam par bshad pa de kho na nyid kyi sgron ma* (**Madhyamakālokabhāṣyatattvapradīpa*) ではないかと推測している．Jñānavajra については，VAN DER KUIJP (2004) pp. 18-19 を参照．Jñānavajra の生存年代は未確定であるが，1050 年頃より前であることはないようである．

bas kyang bde blag tu rtogs pa byis pa'i 'jug ngogs（以後 BNZhG）と記されている．BNZhG の註記は一般に簡略で，少なくとも本研究に関してはあまり多くの有益な情報を与えてくれなかった．但し，重要と思われる註記については，脚注にて言及した[15]．

チベット語註釈の二つ目は，モンゴル人学者 bShad grub bsTan dar (1835-1915)（別名 bsTan dar sNgags rams pa）が著した *dBu ma snang ba'i brjed tho* (BNJ) であり，これも現在利用可能である．この註釈については，ICHIGO (1992) を見よ．BNJ は不完全な作品で, MĀ 後主張第２章以降の章に註釈することなく終わっている．しかし，前主張と後主張第１章については詳細に註釈しており，そこから，チベット仏教における MĀ の解釈を知ることができ，有益である．MĀ 本文の理解にも有益な場合が多いが，しかしいつも BNJ の解釈が正しいというわけでもない．参照した BNJ の解釈の詳細は本稿和訳の脚注にて言及した．

最後に，これは MĀ の註釈書ではないが，参照すべき文献として，Abhayākaragupta が１２世紀初めに著した MMA とそれのチベット語訳北京版（P）・ナルタン (sNar thang) 版（N）・Golden Manuscript（G）に挿入されている註記（割注）とを挙げておく．MMA は MĀ の多くの文を引用する[16]．（但し, Abhayākaragupta は引用した MĀ の文について殆ど解説せず，自身の理解・解釈を語らない.）MĀ 後主張第１章の本稿訳出部分からも，MMA は比較的多くの文を引用している．それゆえ，筆者は本研究において，MMA チベット語訳中の MĀ の引用文を参照し，それを MĀ 本文と比較・分析し，MĀ 本文の意味の把握にも利用した．しかしながら，MMA チベット語訳所引の MĀ の文は，Kamalaśīla の MĀ 本文と異なっている場合があり，Abhayākaragupta 自身（もしくは改訂者？）によって手が加えられたのではないかと思われる箇所もあるので, MMA チベット語訳所引の MĀ の文の利用に際しては, 少々注意が必要とも思われる[17]．MMA チベット語訳所引の MĀ の文の詳細については,

[15]Phya pa 以前に，rNgog lo tsā ba Blo ldan shes rab (?1059-?1109) は MĀ の要約を書いたようであるが，これは現在利用できない．KEIRA ibid. p. 17, fn. 41 そして VAN DER KUIJP (2014) p. 3, n. 6 を見よ．

[16]fn. 14 を見よ．*Marmakaumudī* (D3805 P5202) にも MĀ からの引用あり．

[17]MMA チベット語訳所引の MĀ の文（本稿訳出範囲内）について，筆者が気付いたこと或いは筆者の印象を，下に二点①②を記すこととする．

①．Abhayākaragupta の MMA チベット語訳における MĀ の引用文は，Kamalaśīla の MĀ 本文と異なっている場合がある．これは，Abhayākaragupta が参照した MĀ のサンスクリット写本がそのように異なっていたからとも考えられるが，筆者の印象では，むしろ Abhayākaragupta 自身（もしくは改訂者？）が MĀ を引用する際，自らの理解に従い，説明のため語句を加えたり，または読解を容易

本稿和訳の脚注にて言及した．

さて，近年このMMAのサンスクリット写本（筆者未見）がチベットで発見され，サンスクリットのテキスト校訂が加納和雄・李学竹によって進められている[18]．それゆえ，MĀ後主張第1章の本稿訳出範囲内からの引用を含むMMAのサンスクリットテキストも近い将来に公表されることと思われる．MMAにおけるMĀの本稿訳出範囲内からの引用文に関して，MMAのチベット語訳とサンスクリットテキストとでは，文の意味にどの程度の差異が出るのかは分からないが，もし文の意味が大きく異なり，筆者のMĀ本文の理解・解釈に影響が出るような場合は，本稿の修正版もしくは訂正表をどこかに出すことにしたいと思う．

MMAの中で，Abhayākaragupta は，引用したMĀの文について殆ど何も解説をしないけれども，MMAチベット語訳P版・N版・G版には三版同内容の割注が挿入されており，その割注は，MĀ本文の理解にも役立つ情報を多く提供してくれるので，

にするために語句を削除したり，手を加えているという可能性が大きいのではないかと思われる．たとえば，MĀ本文では見られないのに，MĀが引用する経典や論書の出典名や作者名が言及され付け加えられていたり（これは多例あり），MĀ本文やMĀ所引の詩頌の理解・解釈が難しい箇所では，語句や詩頌の一部が省かれていたりする（例としては，fns. 52や170を見よ）．そして，MĀの唯心思想解釈（本稿和訳 **1.2.1.11～, §60～**）にMMAが言及する際，Abhayākaragupta は，MĀの連続した複数の長い文を途中省略し，要約した形で引用するという手法を見せる（fn. 133を見よ）．この手法からも，Abhayākaragupta がMĀを引用する際，自らMĀの文に手を加えているという可能性が察せられるのだが，その可能性をより強く示す例は．fn. 166のMMAである．そこのMMAが引くのは，MĀ本文では少々読解困難な一文だが，MMAでは，MĀ本文の一節が省かれ，本文とは異なる語句・表現が用いられ，文がかなり簡略化（スリム化）され，その結果，MĀ本文とは少々意味が異なる文となっている．さらにfn. 171のMMAも見よ．MĀ本文では *sems tsam nyid* であるのに，そこのMMAの対応語句は *rnam par rig pa tsam nyid* である．しかし，*rnam par rig pa tsam nyid* は，MĀ本文の文脈では好ましくない．MĀ本文の議論の主題はあくまでも「唯心説」であり，「唯識」・「唯識性」という語は使われていないからである．以上により，Abhayākaragupta は，MĀを引用する際，自らMĀの文に手を加えているように見えるのである．

②．MĀ後主張第1章に関して，MMAは，Dharmakīrti が説く経典の信頼性の確定方法に言及せず，Kamalaśīla の了義解釈にも言及しない．このことと関係するとも思えるのだが，「SNSの中で密意説として説かれた無生起等の教説を中観派はどのように解釈するのか」という瑜伽行派の反論に対するKamalaśīla の答えとして，MMAチベット語訳所引のMĀは，「二極端を離れた中道が了義に他ならない」という，そこの議論の文脈としてはあまり好ましくない読みを提示する．この読みが好ましくない理由については，fn. 52を見よ．この箇所も，上①で述べたように，Abhayākaragupta 自身（もしくは改訂者）によって手が加えられているようにも思えるのだが，もしそうだったならば，Abhayākaragupta は，Kamalaśīla の了義解釈については，（それは確かに非常に難解であるが，）深く正しい理解を持っていたようにはあまり思えない．

[18]加納・李 (2013) と李・加納 (2014) を見よ．

MĀ 研究にとっては，有益な資料の一つである[19]．筆者はその有益性に気付き，既に KEIRA (2009) の中で P 版の割注を使用しているが，本稿和訳研究においては，この割注は，特に，MĀ の唯心思想解釈の後半部の議論（本稿和訳 **1.2.1.11.1-1.2.1.11.2, §67-§80**）に関して，他の中観論者の思想に言及しその著作を引用するなど，興味深い情報を与えてくれ，とても有益であった．但し，この割注の使用にも一つ問題がある．それは，この割注がどの語句に対する註記なのか，明瞭でない場合があることである．筆者は，本稿和訳研究において，MMA チベット語訳所引の MĀ の文を脚注に引く場合には必ず，P 版・N 版・G 版の割注を参照し，三版を比較・分析し，MĀ 本文の内容も考慮に入れた上で総合的に判断し，割注がどの語句に対する註記・説明なのかを理解するように努めた．また必要と思われる場合は，割注の語も含めて，MMA チベット語訳所引の MĀ の文を脚注に訳出することにした．

４．MĀ 校訂テキスト

本稿は，MĀ のチベット語訳校訂テキストを含む．その校訂テキストは，東京大学所蔵デルゲ (sDe dge) 版（D）を底本とし，それを，チョーネ (Co ne) 版（C），P 版．N 版，G 版の四版と比較・対照したものである．これら五版の比較・対照により判明した異読は脚注に記した．但し，｜ (*chig shed*) や ‖ (*gnyis shed*) 等については，五版の差異を記すことはしなかった．また，特に N 版・G 版で多く見られる *phyiro*，*dngosu*，*thaṃd* 等の略語表記 (*skung yig / yig ge skung tshul*) は異読として扱わず，それらは，原則，*phyir ro*，*dngos su*，*thams cad* という標準表記に改めて記すこととした．

テキスト校訂に上記五版を使用したが，どの版も適切な或いは理解可能な読みを与えない場合がある．その場合は，MĀ のチベット語文に対応する文を『修習次第初編』（*Bhāvanākrama I*，以後 BK I）等のサンスクリット語テキストに見付けることができたならば，その対応サンスクリット文に依拠して，MĀ のチベット語文を解釈・修正することとした．また，対応サンスクリット文は見付けられないが，MAV や MAP 等チベット語訳テキスト，MMA チベット語訳テキスト，BNJ や MMA 割注等チベット人の註釈・註記に対応文を見付けることができたなら，その場合は，そのチベット文に依り，MĀ の文を解釈・修正することとした．

MĀ 所引の経典・論書を含め，MĀ を翻訳するに当たっては，可能な限り，対応する

[19]李・加納 (2014) によると，この割注は，dPang Lo tsā ba Blo gros brtan pa (1276-1342) の手によるものらしい．同 (2014) p. 134(11) と fn. (6) とを見よ．

サンスクリット文をBK I等のテキストや原典に探し求め，見付け出すことができた場合は，そのサンスクリット文に基づき，MĀを訳すこととした．しかし，そのサンスクリット文に基づき訳すと，MĀの文脈に合わず，不適切と見なされる場合は，MĀのチベット文に従って翻訳することとした．

最後に，MĀにおける議論とその議論の歴史的・哲学的背景を理解するために，本稿では，『中観心論頌』（*Madhyamakahṛdayakārikā*，以後MHK），『般若灯論』（*Prajñāpradīpa*，以後PP），『二諦分別論』（*Satyadvayavibhaṅgavṛtti*，以後SDVV），MAV, MAPやSNS, VY,『中辺分別論註』（*Madhyāntavibhāgabhāṣya*，以後MVBh），『中辺分別論釈』（*Madhyāntavibhāgaṭīkā*，以後MVṬ）を初めとするMĀに先行する中観派や瑜伽行派のテキスト，そしてその他諸々のテキストを可能な限り参照した．それらのテキストに，MĀと対応する議論を見出した場合は，それを脚注にて言及し，議論内容の分析を行った．

＜和訳研究＞

中観光明論 (*Madhyamakāloka*)

1．聖典 (*āgama*) による一切法無自性性の証明（1）

1.1　前主張 (*pūrvapakṣa*)

§1. ここで，ある者は深遠なる勝義の教理の海に潜らずして[20]，〔次のように〕言う：聖典 (*āgama*) と正理 (*yukti*) とによって一切法は無自性〔である〕と証明する場合，先ず第一に，聖典によっては〔それを証明することは〕できないのである．(1)〔何故ならば，〕その〔ような無自性性を説く聖典〕を誰も承認しないからである．(2)〔何故ならば，〕言葉は，〔話者の〕単なる意図のみに付き従うものであり，そのような〔話者の言葉が指示する〕事物との〔必然的な〕関係はないので，認識手段によって成立したものでもないからである[21]．

---

[20] *gting dpogs pa* はサンスクリット語の *avagāhana* に対応する．*Prasannapadā* (PsP) の次の箇所を見よ：PsP$_T$ P132b7 と PsP$_{LVP}$ p. 358, 6.

[21] *dBu ma snang ba'i brjed tho* (BNJ) 30a, 4-6: *dang po ni sems tsam pa rnams na re / chos thams cad ngo bo nyid med par lung gi sgo nas sgrub par mi nus par thal / de ltar ston pa'i lung ni su yang khas mi len pa'i phyir dang / ngo bo nyid med ces pa'i tshig tsam gyis ngo bo nyid med par sgrub pa mi nus pa'i phyir / der thal / tshig tsam ni brjod bya'i don la bslu ba srid pas de rgyu mtshan du byas nas don gang yang sgrub par mi rung ba'i phyir / der thal / tshig ni smra ba po'i brjod 'dod tsam gyi rjes su 'brangs yin gyi zhen pa'i brjod bya'i dngos po dang ma 'brel ba'i phyir ro //. Blo gsal grub mtha'* (BSGT) p. 230, 1-3: *re zhig lung las ni chos thams cad ngo bo nyid med pa mi 'grub ste / de ni su yang khas mi len pa'i phyir dang / tshig ni 'dod pa tsam gyi rjes su byed pas don dang 'brel pa med pa'i phyir ro //.*

反論者の理由 (2)：「語と事物とに必然的な関係はない」について．*Pramāṇavārttika* (PV) I k. 213 を参照：*nāntarīyakatābhāvāc*[1] *chabdānāṃ vastubhiḥ saha / nārthasiddhis tatas te hi vaktrabhi-prāyasūcakāḥ // ([1] Miyasaka: nāntarīyakatā 'bhāvāc).* 英訳は TILLEMANS (2000) p. 28, fn. 106 を参照: "Because words have no necessary relation (*nāntarīyakatā*) with real entities, they [cannot] establish state of affairs, for they [just] show the speaker's intention." Cf. 松下 (1987a) p. 899(122). 松下氏は，ここの反論者を「仏説を一切認めない者（異教徒）」と見なしている．BSGT はここの反論者を自派のある者（仏教徒）と見なしている：(BSGT p. 230, 9:) ... *zhes rang gi sde pa kha cig zer ro //.* Cf. 一郷 (1991) p. 232, 15-17:「〔（経典の）無自性という〕言葉は（そのことを）主張している人にのみ通じるのであって，そのようなことがらと関係のない人にとっては正しい判断基準 (*tshad ma*) とはならないからです.」

〔言葉と無自性性との間に必然的な〕関係があるとしても，此岸を見る者 (*tshu rol mthong ba; arvāgdṛś*) たちは〔その関係を〕確定できないからである[22]．(3)〔何故ならば,〕かの〔仏陀の〕教説の主張を受け入れる理解者たちに対しても，〔汝は〕そのような〔無自性性を説く世尊の〕言葉を示すことができない〔から〕である[23]：そうでないならば (*gang gyis na; yena*)，疑い無く，全ての事物は無自性〔である〕と理解されるであろうが[24]．

§2. ある経典の中で，

> 一切法は無自性，無生起，本来寂静 (*ādiśānta*)，本性上涅槃 (*prakṛtiparinirvṛta*) である．

云々と説かれることも，未了義 (*neyārtha*) であると理解されるべきである．世尊の教示は，様々な意図に基づきなされるからである[25]．

---

[22]BNJ 30b1: *ngo bo nyid med ces pa'i bka' tshig de brjod bya dang 'brel du chug na yang ... /.*

此岸を見る者 (*tshu rol mthong ba; arvāgdṛś*) については，KEIRA (2004) p. 94, fn. 142 を見よ．Cf. 一郷 ibid. p. 232, 17-18:「〔著述主題と〕関係があるとしても凡夫たちでは（それを）確認できないからです.」

[23]BNJ によれば，世尊の言葉を受け入れる者たちに対しても，中観派が無自性性を説く世尊の言葉を示すことができないのは，「無自性性を教示する世尊の言葉が無いから」である．BNJ 30b1-2: *ngo bo nyid med par smra ba khyed kyis rgyal ba'i gsung rab kyi lugs khas len pa dag la yang dngos po ma lus pa ngo bo nyid med par rtogs par 'gyur ba'i tshig ni cung zad kyang bstan par mi nus te / de ltar ston pa'i tshig med pa'i phyir ro zhes 'dzer to /. Madhyamakāloka* (MĀ) 後主張 D148b6 (**1.2.1.3 §10**) との対応を考えると，BNJ の解釈は妥当なものと思われる：(D148b6:) *de ston par byed pa'i bcom ldan 'das kyi bka' med pa nyid do zhes brjod par yang rigs pa ma yin te /.*

[24]*gang gyis na (yena).* MĀ では，*gang gyis na (yena)* 節を伴った形の文が度々現れる．この *gang gyis na (yena)* は,「そうならば」・「その結果」・「さもなくば」等と訳されるべきである．この *gang gyis na (yena)* 節については，KEIRA ibid. fns. 154 と 240 とを見よ．Cf. 一郷 ibid. p. 232, 18-21:「かの〔仏陀の〕経文の教え (*lugs*) を承認している理解者たちにさえも，**疑いなく，一切の存在が無自性であるという理解が生ずるような言葉を**〔汝は〕少しも述べることができていないのです.」一郷氏の和訳は，*gang gyis na (yena)* 節を明確に訳していない．

[25]BSGT p. 230, 3-9: *gang yang mdo kha cig las chos thams cad ngo bo nyid med pa ma skyes pa gzod ma nas zhi ba rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa'o zhes bya ba la sogs pa 'byung pa de yang drang ba'i don du rtogs par bya ste / bdom ldan 'das kyi bstan pa ni dgongs pa sna tshogs kyi sgo nas 'jug pa'i phir ro ... //.*

引用文について．まず，*Saṃdhinirmocanasūtra* (SNS) p. 66, 24-26 を見よ: *chos thams cad ngo bo nyid ma mchis pa / chos thams cad ma skyes pa / ma 'gags pa / gzod ma nas zhi ba / rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa ... /.*『解深密経』大正 16, 693c28-29: 世尊復説一切諸法皆無自性無生無滅本来寂静自性涅槃. *Mahāyānasūtrālaṃkāra* (MSA) の該当個所は，LÉVI (1911) p. 122 を見よ. *Abhidharmasamuccaya* (AS) p. 35, 18-20 も見よ：*anutpannā aniruddhā ādiśāntā prakṛtiparinirvṛteti ko 'bhisaṃdhiḥ /*

その〔経典〕においては，構想された〔あり方〕(*parikalpita;* 遍計所執)・他に依る〔あり方〕(*parapantra;* 依他起)・完成された〔あり方〕(*pariniṣpanna;* 円成実) という三自性 (*trisvabhāva*) は，順序に従い，特徴 (*lakṣaṇa*)・生起 (*utpatti*)・勝義 (*paramārtha*) についての無自性を意図して，「一切法は無自性である」と説かれたのである[26]．従って，無自性の故に無生起である．その〔無生起〕の故に本来寂静である．その〔本来寂静〕の故に本性上涅槃なのである[27]．そのように，他ならぬ世尊〔自身〕が，

---

yathā niḥsvabhā[vā]s tathā 'nutpannāḥ, yathā 'nutpannās tathā 'niruddhāḥ, yathā 'nutpannāś cāniruddhāś ca tathā ādiśāntāḥ, yathā ādiśāntās tathā prakṛtiparinirvṛtāḥ //. また以下も参照せよ： 長尾 (1982) pp. 383-388, 松下 (1987b) pp. 484(63)-483(64), ns. 14 と 15.

「ある経典」(*mdo kha cig*). ここで，対論者（瑜伽行派）は，SNS に説かれる三転法輪説の第二法輪（『般若経』が説く一切法無自性説）から第三法輪（SNS が説く三無性説）への展開を根拠にして反論していることは明らかである．SNS の三転法輪説については，SNS pp. 85, 8-86, 5 を見よ．SNS のその箇所の和訳と解説は，堀内 (2009) pp. 116-122 を見よ．ゆえに，ここの「ある経典」とは，第二法輪の『般若経』を指していると考えられる．玄奘訳『大般若經』（初会）大正 6, 1038b9-12,（第二会）大正 7, 414b1-3,（第三会）大正 7, 751a17-19 には，不完全ながらもここの引用と対応した文が見付けられる：一切法皆無自性。無性故空。空故無相。無相故無願。無願故無生。無生故無滅。是故（第三会：由此）諸法本來寂靜自性涅槃。ここの引用と殆ど一致した文は，『佛説開覺自性般若波羅蜜多經』大正 8,855b24-25 に見付けられる：皆無自性不生不滅。本來寂靜自性涅槃。サンスクリット文『般若経』諸テキストにおける上記引用に完全一致した対応文は，筆者未見．藤田 (2007) p. 8, fn. (15) 参照.

無自性説が未了義説として理解されるべきであるという見解については，SNS p. 75, 4-9 を見よ: *don dam yang dag 'phags 'di la de bzhin gshegs pa ni ngo bo nyid med pa nyid rnam pa gsum po de dag nyid las dgongs nas drang ba'i don gyi mdo brjod pa'i rnam pas 'di lta ste / chos thams cad ngo bo nyid med pa / chos thams cad ma skyes pa / ma 'gags pa / gzod ma nas zhi ba / rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa'o zhes chos ston to /*「Paramārthasamudgata よ！ ここで如来は，それら三無性こそを意図して，未了義経が説かれるという仕方で，即ち『一切法無自性，一切法不生，不滅，本来寂静，本性上涅槃』という教えを説いたのである.」

[26]無自性説は三無性を意図して説かれたものであることについては，SNS p. 67, 26-30 を見よ: *don dam yang dag 'phags ngas chos rnams kyi ngo bo nyid med pa nyid rnam pa gsum po 'di lta ste / mtshan nyid no bo nyid med pa nyid dang / skye ba ngo bo nyid med pa nyid dang / don dam pa ngo bo nyid med pa nyid las dgongs nas chos thams cad ngo bo nyid med pa'o zhes bstan to //*「Paramārthasamudgata よ！ 私は，諸法の三無性，即ち，特徴の無自性性（相無性）・生起の無自性性（生無性）・勝義の無自性性（勝義無性）を意図して，一切法は無自性であると説いたのである.」AS p. 696, 8-12 (p. 84, 11-15 in Pradhan edition: p. 35,15-18 in Gokhale edition) も見よ：*yad uktaṃ vaipulye niḥsvabhāvāḥ sarvadharmā iti / tatra ko 'bhisandhiḥ / ... / api khalu parikalpite svabhāve lakṣaṇaniḥsvabhāvatām upādāya paratantre utpattiniḥsvabhāvatām upādāya pariniṣpanne paramārthaniḥsvabhāvatām upādāya //.* また *Abhidharmasamuccayabhāṣya* (ASBh) p. 679, 9-17 (p. 114, 20-26 in Tatia edition) も参照.

[27]MSA XI p. 68, 1-2 を見よ: *yo hi niḥsvabhāvaḥ so 'nutpanno yo 'nutpannaḥ so 'niruddho yo 'niruddhaḥ sa ādiśānto ya ādiśāntaḥ sa prakṛtiparinirvṛta ... /.* Cf. AS p. 698, 10-13 (p. 84, 16-19 in Pradhan edition: p. 35, 19-20 in Gokhale edition). 上記 fn. 25 を見よ．また，MSA XI k. 51 (a Sanskrit reconstruction in LÉVI (1911) p. 122, 32-33) も参照せよ： *niḥsvabhāvatayā siddhā uttarottaraniśrayāt / anutpannāniruddhādi-*

『聖解深密〔経〕』(*Ārya Saṃdhinirmocana*) 等の中で，〔無自性等を説く〕経〔文〕の意味についての意図の用法を説き示したのである[28].

§3. さらにまた，二として顕現する認識作用こそによって，一切法の生起等を識別するのであり，単に自己認識 (*rang rig pa*) だけによって〔識別するの〕ではないのである．また，二としての顕現は虚偽であるから，その〔二として顕現する認識作用〕によって確立されたあり方のもの一切もまた虚偽に他ならないのである[29]．従って，構想されたものの特徴は無自性であるので，「一切法は無生起〔である〕」等と言われたのであり，勝義として〔「無生起である」等と言われたの〕ではないのである．

§4. 従って，先ず第一に，聖典によっては〔一切法無自性を証明すること〕は出来ないのである．

1.2 後主張 (*uttarapakṣa*)

§1. 従って，上記〔の反論〕に対して〔我々は以下のように〕返答すべきである．

1.2.1 「聖典によって無自性性を証明することはできない」と言うことは正しくない

1.2.1.1 「誰も承認しないから」という対論者の理由 (1) について

§2. その内，先ず，「聖典によっては一切法は無自性〔である〕と証明することは出来ないのである．〔何故ならば,〕その〔ような無自性性を説く聖典〕を誰も承認しないからである．」云々と述べられたことに対して〔我々は〕答えるべきである．

śāntaprakṛtinirvṛtāḥ //.

[28]SNS pp. 69, 21-70, 21 を見よ. そこでは，特徴の無自性性（相無性）と勝義の無自性性（勝義無性）とを意図したそれぞれの立場から，「無自性・無生起・本来寂静・本性上涅槃」の経文の意味解釈が行われている. また，本論 fns. 65, 66 そして 73 も参照せよ.

[29]Cf. MĀ Uttarapakṣa D165b6-7: *gang yang skye ba la sogs pa'i rnam par dbye ba ni gnyis su snang ba'i shes pa kho nas byed kyi / rang rig pa tsam gyis ni ma yin no // gnyis su snang ba yang brdzun pa'i phyir des rnam par gzhag pa'i ngo bo yang brdzun pa kho na'o ... /.*

§3. ①誰もが承認しないから聖典は全く採用されるべきではないのか. 或いはまた，②〔全ての者が承認しているわけでなくても〕まさに採用されるべきでもあるのか[30].

1.2.1.1.1　最初の見解①は正しくない

§4. その内, 先ず, 最初の見解は正しくないのである．そうならば, 誰もどんな聖典にも依拠すべきではないことになってしまうからである．その〔聖典〕を誰もが承認することはないからである.

1.2.1.1.2　後者の見解②について

§5. その場合, ある〔一般〕人は, 傲慢の故に, 求めない故に, 或いは悪友と会っているが故に，心が蒙昧である故に，真の善知識を得ていない故に，反論者の立場に立つが故に，信等の根を欠いている故に，或いは正しく理解する学者と交わらない故に，最初と最後と中間においても善なる世尊の宝の様な教説に依拠しないとしても，単にその〔一般人が依拠しないという〕ことだけによって, 自他に利益を生じさせる手段を獲得し，正しい考察に巧みな学者たちさえも〔世尊の教説に〕依拠しないであろうか. 〔例えば,〕劣悪な商人たちは非常に貴重な宝石とは良く知らずに「捨てろ！」と言うが, 正しい考察に巧みな良き商人たちまでもがその〔宝石〕を取らないことはないのである[31].

---

[30]「誰も承認しないから，無自性性を説く聖典に依拠すべきでない」という対論者の考えに対して，Kamalaśīla は，以下，上の①②の議論を展開していく．議論①では，彼は，「どんな聖典を採用する場合でも，全ての者が承認することはあり得ない」という点を論じ，議論②では，「聖典の採用に当たっては，正しい考察に依拠しているかどうかが問題である」という点を論じていく．聖典やある物事について，一般人（凡人）は，蒙昧さ・知識不足等諸々の理由により，それを採用せず捨ててしまうかもしれないが，正しい考察を行う学者たちはそれを承認・採用するという場合もありうるのである．BNJ によると，議論②は「一般人（*phal ba;* 凡人）」と「学者 (*mkhas pa*)」とが対比される形で論じられている．BNJ 30b2-5: *su yang khas mi len zer ba mi 'thad de / mkhas pa yin na de brten byar khas len dgos pa'i phyir te / phal ba 'ga' zhig nga rgyal gyis sam don du mi gnyer ba la sogs pa'i rkyen gyis gsung rab rin po che thog mtha' bar gsum du dge ba la mi brten kyang mkhas pa yin na de la brten par byed dgos pa'i phyir / dper na / tshong pa ngan pa rnams nor bu rin thang med pa rnyed kyang ma shes nas bor ba la tshong pa bzang po legs par rtog pa la mkhas pa rnams de len pa bzhin no //.* BSGT p. 230, 15-18 によると，考察に巧みな優れた学者たちは無自性性を説く経典を承認するので，「誰も承認しないから」という対論者の理由 (1) は不成立 (*asiddha*) であると言う : *khyed kyis bkod pa'i rtags dang po ni ma grub pa yin te / bcom ldan 'das kyi gsung dang po dang bar dang tha mar dge pa brtag pa gsum gyis dag pa'i gser bzang po lta bu ni yongs su rtog pa la mkhas pa'i skyes bu dam pa rnams kyis khas len pa'i phyir ro //.*

[31]BNJ 30b3-5 参照．上記 fn. 30 を見よ.

§6.【反論】燃焼や試金石や切断によって〔調べられた〕純金のように，直接知覚と推論と〔同一文献中の記述間の〕相互矛盾との点で (*mngon sum dang rjes su dpag pa dang phan tshun 'gal ba dag gis*)〔無自性性を説かない経典の記述は〕矛盾しないから[32]，そして他の聖典もそれ（＝無自性性を説く経典）と反対であるから，繁栄 (*abhyudaya*) と至福 (*niḥśreyasa*) という果報を求め，あらゆる〔功徳と智慧の集積の〕完成を成し遂げる学者たちは，その〔無自性性を説く経典〕を捨てて，全く善き，宝石のごとき教説にまさしく依拠すべきであるのである．

【答論】以上が〔汝の〕主張であるならば，その場合汝は，他ならぬ世尊の教説をよく考察して，受け入れているので，『般若〔経〕』(*Prajñāpāramitā*) 等の中で世尊が明瞭に説示したこの中道にもどうして依拠しないのか[33]．

たとえ〔汝〕自身はその〔中道〕に依拠することができないとしても，聖 Nāgārjuna（龍樹）足下は，多種なる『正理の灯火の集まり』(*rigs pa'i sgron ma'i tshogs*) によってこの〔中道〕を明瞭に説いたので，その〔『正理の灯火の集まり』の〕力によっても，どうして〔中道を〕承認し得ないであろうか．〔承認し得るのである．〕まさにその故に，その師（＝ Nāgārjuna）はその〔中道〕を説示したから，そして第一地を獲得したから，『聖入楞伽〔経〕』(*Ārya Laṅkāvatāra*) 等の中で，世尊によって予言（授記）されたのである．もしこの〔師〕がこの〔中道〕を誤って説示したならば，世尊がそのように予言することもなかったであろう．従って，師〔Nāgārjuna〕の語が捨てられるならば，世尊の言葉〔も〕まさに捨てられることになるであろう[34]．それ故に，

---

[32]Cf. 一郷 (1993) p. 108, 2-3: 「（無自性を説かない経証が）直接知及び推理と相容れないものによって否定されることはないし，・・・.」対論者は，Dharmakīrti が説いた経典の信頼性の確定方法・経典採用方法を受け入れ，その方法に従って考察しているのである．詳細は KEIRA (2006) を見よ．本稿 fn. 4 と下記 fn. 33 も見よ．

[33]Kamalaśīla はここで，対論者は自ら『般若経』等の内容についても，同様の考察方法で，即ち，「直接知覚」と「推論」と「〔同一文献中の記述間の〕相互矛盾」という三種の手段によって考察し，その内容を矛盾のないものと確定して，そこに説かれる中道説を受け入れるべきであると述べているのである．この「三種の考察」による経典採用方法は，Dharmakīrti の考えに従ったもので，チベット仏教で *dpyad (pa) gsum* と呼ばれるものである．経典採用方法・経典の権威に関する Dharmakīrti の考えについては，TILLEMANS (1990) pp. 24-29, (1999) pp. 27-51, (2000) pp. 78-79 を参照せよ．Kamalaśīla が Dharmakīrti の考えに従っていることについては，KEIRA ibid. を見よ．また，fn. 39 も見よ．

[34]対論者は自分で『般若経』等の経典を三種の考察によって誤りのないものとして確定し受け入れるべきであるが，自分の力で考察できないために中道説を受け入れられないならば，中道説を教示したことで世尊によって授記された聖者 Nāgārjuna の典籍に依拠して中道説を受け入れるべきであると Kamalaśīla は述べているのである．BNJ 36b6-37a1 を参照： *gal te rang stobs kyis brtag mi thub na slob dpon klu sgrub kyi rigs tshogs sogs la brten nas kyang ci'i phyir mi brtag ste / slob dpon de ni lang gshegs kyi*

その〔中道〕は聖典によって確立されている (*lung dang ldan pa*) ので，聖 Nāgārjuna 足下によって説かれた道を捨てて，非聖者によって説かれたことに依拠するのは正しくないのである[35].

1.2.1.2 「語と事物とに必然的な関係はない」という対論者の理由 (2) について

§7. 我々は，〔事物と〕語に関してどんな勝義の関係も認めないのである．従って，その〔勝義の関係〕が否定されることによって〔我々が〕望ましくない〔結果〕に

---

mdo sogs las / mtha' thams cad dang bral ba'i dbu ma'i lam gsal bar ston pa nyid du lung bstan pas so //. この場合，対論者が『般若経』等の中道説を受け入れないならば，他の聖典の内容〔*Laṅkāvatārasūtra* (LAS) の龍樹授記の記述〕と矛盾することにもなるであろう．

また対論者は中観派と思想的立場が異なる故に，『般若経』等の中道説を受け入れられないかもしれない．その場合，三種の考察に基づく経典の受け入れの考えは相手を説得する力を持たず，議論は平行線をたどるであろう．相手を説得するには，正理 (*yukti*)，即ち，事物の力によって働く推論 (*vastubalapravṛttānumāna*) に依拠すべきであるからである．しかしその場合でも，龍樹授記の記述から判断して，龍樹の中道説を受け入れないならば，世尊の権威を否定することになるので，それを受け入れるべきなのである．

以上により，対論者が三種の考察により無自性性を説かない経典のみを受け入れるのは，対論者の経典考察が片寄っており不完全であることを意味する．

『正理の灯火の集まり』(*rigs pa'i sgron ma'i tshogs*) とは，Nāgārjuna の中道を説いた著作群のことを指していると思われる. チベット仏教においては，Nāgārjuna の『根本中論』(*Mūlamadhyamakakārikā*)・『六十頌如理論』(*Yuktiṣaṣṭikā*)・『廻諍論』(*Vigrahavyāvartanī*)・『空七十論』(*Śūnyatāsaptati*)・『広破論』(*Vaidalyaprakaraṇa*)・『宝行王正論』(*Ratnāvalī*) の六部作を指す『正理の六群』(*rigs pa'i tshogs drug*) という語が見られるが，その語と同義なのかどうかは不明である．

龍樹授記の記述については，LAS X kk. 165-166 を見よ: *dakṣiṇāpathavedalyāṃ bhikṣuḥ śrīmān mahāyaśāḥ / nāgāhvayaḥ sa nāmnā tu sadasatpakṣadārakaḥ // prakāśya loke madyānaṃ mahāyānam anuttaram / āsādya bhūmiṃ muditāṃ yāsyate 'sau sukhāvatīm //*「南方ヴェーダーリーに，吉祥にして大名声のある比丘がいる. 彼は Nāgāhvaya（＝ Nāgārjuna）という名前であり，有・無の主張を破し，『私の乗は無上大乗』と世間に示し，歓喜地（＝第一地）を獲得して，彼は極楽に赴く.」Candrakīrti も，*Madhyamakāvatārabhāṣya* (MAtBh) IV p. 76, 11-16 において，龍樹授記の典拠として，この LAS X kk. 165-166 を引用している．また *Tarkajvālā* (TJ) (ad *Madhyamakahṛdayakārikā* (MHK) 4-35cd) D188b2-5 においては，LAS X kk. 165-166 の引用は無いが，龍樹授記についての言及が見られる．ECKEL (2008) p. 190 参照．

[35] *lung dang ldan pa*.「聖典によって確立されている」とここで訳したが，この語は *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (MAV) と *Madhyamakālaṃkārapañjikā* (MAP) によると，「聖典によって知られる」という意味で解釈可能である．MAV ad *Madhyamakālaṃkārakārikā* (MAK) 45 D65a4-6: *tshul 'di ni lung dang ldan pa yang yin te / lang kar gshegs pa'i mdo las ... zhes gsungs so //*「この教理は聖典によって確立されていることでもある．『入楞伽経』の中で，・・・・と説かれている.」MAP D103a3: *lung gis shes par bya ba yang yin par bstan pa lung dang ldan pa yang yin te zhes bya ba la sogs pa smos so//*「「聖典によって確立されていることでもあって」云々という語は，聖典によって知られることでもあると〔いう意味で〕説かれたのである.」

陥る (*aniṣṭāpatti*) ことはないのである[36]．しかしながら，これ（＝言葉）は，言語協約 (*saṅketa*) を知る者に対して，〔話者が〕話者の意図により言語慣習に従って説く〔もの〕である．対象や状況等を誤認していない人によって説かれた語〔の意味〕は，〔その人が〕表示しようと意図した対象との関係が無いならば，どんな場合にも確定され得ないのである．そうでないならば（＝関係が無いのに確定されるならば），一切の言語慣習は全く断たれることになってしまうのである[37]．

瞋り無く（無瞋），愚かさ無く（無痴），貪り無き（無貪）人々の言葉は，真実の事柄こそを説くから，一切の言葉は全く誤った事柄のみ〔を説く〕わけではないのである．そのことは自派の伝統に於ても確定されているからである[38]．

§8. 従って，三種の考察によって (*tshul gsum gyi brtag pas*) 清浄なもの（＝誤り無きもの）として，そして最初（の段階＝聴聞 (*śruti*)），最後（の段階＝修習 (*bhāvanā*)），中間（の段階＝思惟 (*cintā*)）において〔も〕善きものとして確定されたその言明は欺かない (*avisaṃvāda*) ので，その〔ような言明〕は学者たちによってまさしく依拠されるべきである[39]．

---

[36]Cf. 一郷 ibid. p. 108, 22-23: 「それ（言葉）を否定したからといって困るわけではありません．」

[37]事物と語の関係は勝義としてあるのではなく，世俗の言語慣習上確立されているに過ぎないのである．

[38]*Vajracchedikā* (VCCH) の次の箇所を参照せよ．VCCH$_{HW}$ §14f p. 127, 12-13 (Cz p. 42): *bhūtavādī subhūte tathāgataḥ satyavādī tathāvādī tathāgato na vitathāvādī tathāgato /. Vajracchedikāṭīkā* (VCCHṬ) p. 340, 10-15: *yang dag pa gsungs pa zhes bya ba ni bsgrub par bya ba bstan to // de bzhin gshegs pa zhes bya ba ni gtan tshigs bstan pa ste / 'di ltar sangs rgyas bcom ldan 'das dag (D dag: P gzhan dag) nyon mongs pa dang shes bya ba'i sgrib pa spangs te / de bzhin gshegs pa de bzhin du 'di yang gshegs te byon pas de bzhin gshegs pa'o // de bas na yang dag pa phyin ci ma log par gsung ba ste / phyin ci log tu ston pa'i rgyu sgrib pa mi mnga' bas rgyu mi dmigs par sgrub po //.* 「『真実を語る者』(*bhūtavādin*) というのは論証対象 (*sādhya*) の説示である．『如来』というのは論証因 (*hetu*) の説示である．というのは，諸仏世尊は煩悩と所知に関する障害を除去しており，〔仏世尊である〕如来は，そのように (*tathā*)〔真実へ〕この者は行った (*gata*)，〔即ち〕到達したので，如来 (*tathāgata*) なのである．それゆえ，真実を誤りなく説くのである．誤って説示することの原因である〔煩悩と所知に関する〕障害が無い〔から〕である．従って，〔『如来』というのは〕原因の無知覚という論証根拠 (*sādhana*) なのである．」*Pramāṇavārttikasvavṛtti* (PVSV) ad k. 225, p. 112, 16-17 も参照せよ：*yathā rāgādiparītaḥ puruṣo mṛṣāvādī dṛṣṭas tathā dayādharmatādiyuktaḥ satyavāk /.* 「貪り等〔の煩悩〕に捉えられた人は虚偽を語るということが経験されるように，そのように，慈悲という美徳等を具えた者は真実を語る〔ということも経験される〕．」大前 (1988) を参照．

BSGT によると，自利と利他をあるがままに見る信頼できる人の言葉 (*yid ches pa'i tshig; āptavacana*) は対象を欺かないから，「語と事物とに必然的な関係はない」という対論者の理由 (2) は不成立であると言う：(BSGT p. 230, 19-20:) *gnyis pa yang ma grub ste / bdag gam gzhan don ji lta ba bzhin mthong ba yid ches pa'i tshig ni don la mi bslu ba'i phyir ro //.*

[39]ここに出る「三種の考察」(*tshul gsum gyi brtag pa*) の内容については，KEIRA ibid. pp. 181(634)-

§9. 我々は，如来の教説に対抗する非仏教徒たちに対して，その〔教説〕（＝無自性説）を証明するために，世尊の言明は認識手段であると述べたのではないのである．そうではなくて，聖典の内容を考察したならば, その〔教説〕が聖典によって確立されている場合，その〔聖典〕が〔その教説の〕証拠 (*khungs*) であると示すのである[40].

1.2.1.3 「無自性性を説く世尊の言葉は存在しない」という対論者の理由 (3) について：了義と未了義

§10. 「その〔無自性性〕を説示する世尊の言明は全く存在しないのである」と述べたことも正しくないのである．というのは，世尊は，了義 (*nītārtha*)〔を説く〕経典に依拠することを説いたのであり，未了義 (*neyārtha*)〔を説く経典に依拠することを説いたの〕ではないのである[41].

184(631) を見よ．「三種の考察」は，BSGT p. 230, 16 では，*brtag pa gsum* と呼ばれている．fn. 30 を見よ．Cf. 一郷 ibid. p. 1-2:「三種の（証相の）検討によって清められ・・・.」一郷氏は *tshul gsum gyi brtag pa* を「三種の証相の検討」を意味するものと見なしている．

最初 (*thog ma*)・最後 (*tha ma*)・中間 (*bar*) については，MAP D133b1-2 と KEIRA ibid. pp. 190(625)-191(624), n.17 を見よ．

[40] *lung dang ldan pa* については，fn. 35 を見よ．

khungs. 主に *Abhidharmakośabhāṣya* (AKBh) での用例 (p. 123, 17, p. 245, 16, etc.) から，サンスクリットの原語は *jñāpaka* であると見なし，「証拠」（＝「知らしめるもの」・「教えるもの」）と訳した．

経典は対論者を合理的に説得するための根拠とはならない．聖典（*āgama* 伝承教説）によって無自性説を証明するのは，その説が仏教の伝統から逸脱していないことを示すためである．KEIRA ibid. pp. 179(636)-181(634) を見よ．

§9 は，BSGT p. 232, 15-19 に引用される．Cf. BNJ 38, 2-3: *dbu ma pa rnams ni mu stegs can rnams la ngo bo med pa sgrub pa'i phyir bka' tshad ma nyid du brjod pa nyid ni ma yin gyi de bzhin gshegs pa'i gsung gi rjes su 'brangs pa rnams la de sgrub pa'i phyir de tshad mar brjod pa'i phyir ro //*「中観派の者たちは，非仏教徒たちに対して無自性〔説〕を証明するために,〔世尊の〕言葉は認識手段であるとまさに述べたのではないのであって，如来の〔教〕説に従う者たちに対してその〔無自性説〕を証明するために, それ（＝世尊の言葉）が認識手段であると述べたからである.」Cf. MIMAKI (1982) p. 233, 15-20: *"Nous ne citons pas la Parole du Bienheureux comme instrument critère pour prouver l'[absence de nature propre] aux non-bouddhistes (mu stegs can, tīrthika) qui sont en désaccord avec la Parole du Tathāgata. Mais nous la présentons comme source pour ceux qui sont munis de l'Āgama du [Bienheureux], à l'occasion de l'examen du sens de l'Āgama"*. Cf. 一郷 ibid. p. 109, 7-8: 「そうではなく, 経証の意味を検討するときに，それ〔如来の経文〕を経証としてもつ人に対して，それが典拠であると教えているのです.」

[41]「未了義経に依らず了義経に依る」というのは，菩薩の四つの拠り所（四依 *catuṣpratisaraṇa*）の内の一つである.『無尽意経』(*Akṣayamatinirdeśasūtra*) が以下 **§15** に引用されるが,『無尽意経』においても，本論で引用される個所の直後に，次の一文が説かれている：(P156a7:) *'di ni nges pa'i don gyi mdo sde la rton gyi drang pa'i don gyi mdo sde la mi rton pa zhes bya'o //* (Skt: (PsP$_M$ p. 208, 2-3:)

【問い】了義とは，またどんなことについて言うのか.

【答え】認識手段によって成立した〔事柄〕で，勝義を意図して説明された〔事柄について〕である．その〔ような事柄（＝了義）を説く経典〕はそれ（＝勝義）以外の他のどんな所にも〔人を〕導くことはあり得ないからである．一切法不生起も認識手段によって成立しているのである．まさにそれ故に，それ（＝一切法不生起）は，正理によって成立した〔事柄〕であるので，勝義といわれるのである[42].

§11. そのように，『聖法集〔経〕』(*Ārya Dharmasaṅgīti*) の中で，

> 不生起は真実である．生起等の他の法は非真実で，虚偽で，欺く性質を有する[43].

と説かれたのである.

§12. 『聖二諦説示〔経〕』(*Ārya Satyadvayanirdeśa*) の中でも，

> Devaputra よ！ 事物は，勝義として不生起である[44].

と説かれたのである．その〔不生起〕とは，雑染と清浄なる一切法について確立されたのであって，一部のものだけについて〔確立されたの〕ではないのである.

§13. そのように，同経（『聖二諦説示経』）の中で，

> Devaputra よ！ 即ち，例えば，土器内の虚空と宝器内の虚空とは，勝義として，同じ虚空界に過ぎない．この〔虚空〕については，区別されるべきことは少しもないのである．Devaputra よ！ 同様に，雑染も，勝義

---

iyam ucyate ... nītārthasūtrāntapratiśaraṇatā na neyārthasūtrāntapratiśaraṇatā //.)「これが『了義経が拠り所であって，未了義経は拠り所でない』と言われることである.」『大般涅槃經』642a21-23: 如佛所説是諸比丘當依四法。何等爲四。依法不依人。依義不依語。依智不依識。依了義經不依不了義經。*Vimalakīrtinirdeśa* (VKN) XII p. 120, 13-15 も参照せよ.

[42]Kamalaśīla の了義解釈については，KEIRA (2009) を見よ.

BSGT によると，無自性等の教説は勝義を説いているのだから，「無自性性を説く世尊の言葉は存在しない（無自性等の教説も未了義として理解されるべきである）」という対論者の理由 (3) も不成立であると言う：(BSGT p. 232, 6-7:) *yang ngo bo nyid med pa la sogs pa ston pa'i gsung rab rnams ni don dam pa ston pa'i phyir gtan tshigs gsum pa yang ma grub pa yin te /.*

[43]*Dharmasaṅgītisūtra* (DhSS) D6b1-2, P6b7-8. Cf. *Bhāvanākrama I* (BK I) p. 199, 6-7 を見よ: *an-utpādaḥ satyam asatyam anye dharmāḥ ... /. Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* (SDNS) D286a2 P329b7, *Munimatālaṃkāra* (MMA) D143b3 G225b4-5 N166a4 P172a3-4 に引用される.

[44]*'phags pa kun dzob dang don dam pa'i bden pa bstan pa (Ārya Saṃvṛtiparamārthasatyanirdeśa)* P258a3-4: *lha'i bu don ni don dam par mi skye ba ste /.*

として，完全に不生起である．清浄も，勝義として，完全に不生起である．輪廻も，勝義として，完全に不生起である．乃至，涅槃も，勝義として，完全に不生起である．この〔不生起〕については，区別されるべきことは少しもないのである．

【問い】それはどうしてか.

【答え】勝義として，一切法は完全に不生起であるからである[45].

と説かれたのである．

以上からして，この「無生起」〔という教説〕はまた，勝義〔に入るため〕の助けとなるから (*don dam pa dang mthun pa'i phyir*)，「勝義」といわれるのであるが，第一義として〔いわれるの〕ではないのである．第一義としては，勝義は一切の戯論 (*prapañca*) を超越したものであるからである[46].

---

[45] *'phags pa kun dzob dang don dam pa'i bden pa bstan pa* P259b6-260a1.

PsP$_{LVP}$ p. 375, 1-6: *tad yathāpi nāma devaputra yac ca mṛdbhājanasyābhyantaram ākāśaṃ yac ca ratnabhājanasyābhyantaram ākāśaṃ / ākāśadhātur evaiṣaḥ / tat paramārthato na kiṃcin nānākaraṇaṃ / evam eva devaputra yaḥ saṃkleśaḥ sa paramārthato 'tyantānutpādatā / yad api vyavadānaṃ tad api paramārthato 'tyantānutpādatā / saṃsāro 'pi paramārthato 'tyantānutpādatā / yāvan nirvāṇam api paramārthato 'tyantānutpādatā / nātra kiṃcit paramārthato nānākaraṇaṃ / tat kasmād dhetoḥ / paramārthato 'tyantānutpādatvāt sarvadharmāṇām iti //.* PsP では，経典名が『入二諦経』(*Satyadvayāvatārasūtra*) となっている．

[46] MMA D141b3-4, G225b5-6, N166a4-6, P172a4-5: *skye ba med pa 'di yang don dam pa*[1] *dang mthun pa'i phyir (D phyir: GNP phyir /) don dam pa zhes brjod kyi* [2]*dngos ni ma yin te /* [3] *dngos su na (DGN dngos su na: P de dngos su na) don dam pa ni* [4]*spros pa thams cad las 'das pa nyid kyi phyir ro //.*
([1] GNP 版割注: *spros bral.* [2] GNP 版割注: *don dam.* [3] GNP 版割注: *bden gnyis su / (GP /: N om.) skye sogs bkag pa don dam dang // (G //: NP om.) mthun pa'i phyir yang 'dod pa yin // (G //: P /; N om.) (= SDVK 9ab) ces dang rgyan du / (GP /: N om.) dam pa'i don dang mthun pa'i phyir // (G //: P /; N om.) 'di ni dam pa'i don ces bya / (= MAK 70ab).* [4] GNP 版割注: *skye mi skye stong mi stong la sogs pa.*)

「勝義」(*parama-artha*) という複合語は三種に解釈されることは既に知られている. (1)「勝れた対象」を意味する，同格限定複合語 (*karmadhāraya*) としての解釈，(2)「勝れた〔知〕の対象」を意味する，格限定複合語 (*tatpuruṣa*) としての解釈，そして (3)「勝義をもつもの」・「勝義に適合するもの」を意味する，所有複合語 (*bahuvrīhi*) としての解釈である.「勝義」の三種の解釈については，KEIRA(2004) p. 28, fn. 61 を見よ. Kamalaśīla はここで，認識手段によって成立した事柄で，勝義を意図して説かれた教え・言葉としての「無生起」は，「勝義に適合するもの」という意味で，即ち「勝義」の所有複合語としての解釈により勝義と見なされると説明しているのである. 次を参照せよ． MAK$_I$ 70: *dam pa'i don dang 'thun pa'i phyir // 'di ni dam pa'i don zhes bya // yang dag tu na spros pa yi // tshogs rnams kun las de grol yin //* 「〔また，無生起等〔の教説・分別〕は正しい世俗（*tathyasaṃvṛti;* 実世俗）に含まれるのであるけれども,〕勝義〔に入るため〕の助けとなるから，この〔無生起等〕は勝義といわれるのである．真実として，それ（＝勝義）はあらゆる戯論の網から離れているのである.」BK I p. 199, 7-9: *etac ca paramārthānukūlatvād anutpādaḥ satyam ity uktam / paramārthatas tu notpādo nāpy anutpādaḥ / tasya sarvavyavahārātītatvāt /*「このことは,『勝義〔に入るため〕の助けとなるから，不生起〔の教説〕

§14. 従って，何らかの無生起等を特徴とする限りの勝義に関して説かれたこと一切は，了義〔である〕と理解されるべきであり，〔不生起等の勝義と〕反対のことが未了義である．

§15. そのように，『聖無尽意〔経〕』(*Ārya Akṣayamatinirdeśa*) の中で，了〔義経〕と未了義経の特徴が説かれたのである．

> 【問い】了義経とは何か. 未了義経とは何か.
>
> 【答え】世俗の成立根拠を説いた経典が未了義経と言われる．勝義の成立根拠を説いた経典が了義と言われる．様々な語や文字を説いた経典が未了義と言われる．深遠で，観察し難く，理解し難いことを説いた経典が了義と言われる．我 (*ātman*)，衆生 (*sattva*)，命ある者 (*jīva* 命者)，養育者 (*poṣa*)，個人 (*puruṣa* 士夫)，個我 (*pudgala*)，人間（*manuja* マヌより生じた人），人類（*mānava* マヌの子孫である人間），作為者 (*kāraka* 作者)，感受者 (*vedaka* 受者) という様々な言葉で説かれるものを〔説き〕，主宰者は非存在であるのに，主宰者〔が存在するが〕如くに説いた経典は，未了義と言われる．事物の空性・特徴の非存在（無相）・願望の無いこと（無願）や無作，無生起，不生起，衆生の非存在，命ある者の非存在，個我の非存在，主宰者の非存在による解脱の教え（解脱門）を説いた経典は，了義と言われるのである[47].

と詳細に説かれたのである．

§16.「無生起等の教説は，他の諸経典では，別のこと（＝真実在の離言真如）を意図

は真実である』と説かれたのである．然るに，勝義としては，生起はなく，不生起もない．それ〔勝義〕はすべての言語表現を超え出ているからである．」

「第一義として」(*dngos su*)．第一義としての勝義は,「勝義」(*parama-artha*) という複合語の解釈からして,「勝れた対象」（同格限定複合語としての解釈）や「勝れた〔知〕の対象」（格限定複合語としての解釈）のように, 対象としての「勝義」を意味すると考えられる．

「戯論」(*prapañca*)．この語の意味は必ずしも明確ではないが, この語の本来の意味は「拡大」（概念的拡散 *conceptual proliferation*）であるようである．この語の意味と用法については，Schmithausen(1969) n. 101, II.A を見よ．また，Schmithausen(1987) ns. 510, 532(b), 1242, 1405, そして高橋 (2005) p. 171, fn. 35 を参照せよ．

[47] *'phags pa blo gros mi zad pas bstan pa* P155b6-156a7. Cf. PsP_M pp. 207, 2-209, 1 (＝ PsP_{LVP} p. 43, 4-9). MACDONALD (2015) Vol.II pp. 169-172 を参照． MĀ のここでの引用も，PsP での引用も，原典の同一個所 (P155b6-156a7) からの引用であるはずだが，両者の引用は一致していない．両者の引用はいずれも，その同一箇所を，途中省略または要約する形で引いていると思われる. Cf. 大正 13, pp. 205b11-b24.

した了義として説かれているのである」と述べたことも正しくない．そうならば，我 (*ātman*) 等の説も了義となるであろう[48]．従って，〔我等の説と等しいものではなく,〕勝義が述べられたものだけが了義であり，反対のもの（＝世俗が述べられたもの）は未了義であると理解されるべできである．

§17.『聖入一切諸仏境界智光荘厳〔経〕』(*Ārya Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra*) の中でも，

> 了義であるのは勝義である[49]．

と説かれ，無生起等も，『聖無尽意〔経〕』(*Ārya Akṣayamatinirdeśa*) の中で，了義であると示されたのである．従って，無生起等こそ勝義であると確定されるのである．

1.2.1.4　中観派の三性説・三無性説解釈

§18. [50]【反論】もしそうならば，然るに世尊は,『聖解深密〔経〕』の中で，三自性は三種の仕方で無自性であることを意図して, 一切法は無自性であるとどうして説いたのか[51]．

---

[48]無生起等の教説は，他の経典では何を意図して了義と説くものとされるのか，またなぜ我 (*ātman*) 等の説も了義となってしまうのか，Kamalaśīla はそれらについて何も説明しないので，この議論は理解が困難である．それゆえここでは，Bhāviveka（清辯）著『大乗掌珍論』に出てくる以下の議論を参考にして理解することにした.『大乗掌珍論』大正 30 p. 275a1-10：若言眞如雖離言説而是實有。即外道我名想差別説爲眞如。如彼眞如雖是實有。而就勝義有非有等分別不成。我亦如是彼亦計我。雖是實有周遍常住。作者受者而離分別。以非語言所行處故。分別覺慧所不縁故名離分別。彼教中説。言説不行心意不證。故名爲我。我相既爾。而復説言。縁眞如智能得解脱。非縁我智。此有何別。並無言説。有實性故。唯執朋黨。説如是言。故我不能信受如是似我眞如實有非有。羽渓 (1932) pp. 126, 13-127, 1 と金 (2014) p. 49, 5-14，そして La Vallée Poussin (1933) pp. 115, 10-116, 2 を参照せよ．この議論は，瑜伽行派が「言説・分別を離れたところの真如（離言真如）は真実在である」と説くならば，非仏教徒も「我は分別を離れたものであり，真実在である」と説くので，その真如説は我等の説と等しいものとなるであろう，というものである．この議論に基づいて，ここでの議論を理解すれば，次のように解釈可能であろう：瑜伽行派が，無生起等の教説は「生起等の分別を離れた真実在の真如」を説く了義説であると言うならば，同様に，「分別を離れ，真実在とされる我」等の説も了義説と認められるだろう．

[49]*Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra* (SBVAJĀA) III §34, p. 65 (532), 8: *yo nītārthaḥ sa paramārthaḥ /. 'phags pa sangs rgyas thams cad kyi yul la 'jug pa ye shes snang ba'i rgyan* P325b2: *nges pa'i don gang yin pa de ni don dam pa yin no //.*『如来荘厳智慧光明入一切佛境界経』大正 12, 247a10: 了義者即是第一義. BSGT p. 232, 10 に引用される．

[50]ここから始まる Kamalaśīla の三性説・三無性説解釈については，Keira (2009) pp. 13-20 を見よ．

[51]SNS p. 67, 26-30 を参照. 本書 fn. 26 を見よ. ここでは，*Triṃśikā* (Tr) k. 23 を参考にして訳した:

【答論】これは誤りではない．世俗の自性をも否認（損減）し，劣った論書の聴聞等に執着することで知が錯誤している者たち，また世俗として〔も〕存在しない全く虚偽なものに対して恒常等なる事物〔の自性〕を捏造（増益）し，顕現するがままに応じた色形等をもあるがままに〔実在するものとして〕把握する者たちは，捏造と否認という二極端に堕した知のゆえに，二極端を離れた非常に深遠な勝義の教理の海に入らないので，その〔者たちに二極端を離れた勝義を理解させる〕ために，世尊は，無生起等の教説は勝義についてのことに他ならないと述べ，〔そして〕三種の無自性（三無性）〔を意味する，その教説〕の意図（密意）を説くことにより，二極端を離れた中道を教示したのである．それゆえ，〔密意説としての無生起等の教説は，それが勝義を意図して説かれる場合，二極端を離れた勝義を説き明かすので，世尊は，『解深密経』の中で，無生起等は〕了義に他ならないという教えを立てたのである[52]．中観派の者たちも三自性（三性）の確立を承認しないのではない．

---

trividhasya svabhāvasya trividhāṃ niḥsvabhāvatām / sandhāya sarvadharmāṇāṃ deśitā niḥsvabhāvatā // (Tib: ngo bo nyid ni rnam gsum gyi // ngo bo nyid med rnam gsum la // dgongs nas chos rnams thams cad kyi // ngo bo nyid med bstan pa yin //).

ここで対論者は，無自性・無生起説は特別な意図を持って説かれたもの（密意説）であると世尊により SNS の中で教示されているので，それは未了義説ではないのか，なぜ了義説なのか，と反論しているのである．

[52]あるがままに〔実在するものとして〕：この〔　〕の補いについては次を見よ：BNJ 75b5: *gzugs la sogs pa ji ltar snang ba de bzhin du yod par sgro 'dogs pas ... /.* また下に記したように，MMA G219b1 N161a3 P166b8 では，割注に *bden par* という語が挿入されている．

その〔者たちに二極端を離れた勝義を理解させる〕ために (*de'i don du*): KEIRA ibid. p. 13, 22-23 においては，*de'i don du* を *for this reason* と訳し，理由の意味で理解したが，それを修正し，目的の意味で理解することとした．これは，ここの議論 (**1.2.1.4-1.2.1.4.3, §18-§32**) 全体の文脈と議論の最終局面 (**1.2.1.4.3, §31-§32**) で Kamalaśīla が明らかに説く「密意説が了義説であることは矛盾しない」という彼の了義解釈上の考えとを考慮して，ここの文を再解釈した結果である．

〔密意説としての無生起等の教説は，・・・〕：Kamalaśīla の三性・三無性解釈では，無生起等の教説が勝義無自性 (*paramārthaniḥsvabhāvatā;* 勝義無性) を意味する場合，その教説は，勝義について説いているので，了義説と見なされるのであるが，その場合，勝義無自性は二極端を離れているので，その教説は二極端を離れた勝義を説いているのである．fn. 74 を見よ．

MMA D138a1-4, G219a5-b4, N161a2-6, P166b6-167a4 を参照: *gang rnams kun rdzob pa'i rang bzhin*[1] *la yang (D yang: GNP 'ang) skur pa 'debs par byed pa*[2] *dang / gang dam pa ma (GNP dam pa ma: D dam pa) yin pa'i bstan bcos*[3] *nyan pa la sogs pa la mngon par zhen (DGP zhen: N byed) pas blo gros phyin ci log can rnams / kun rdzob yod pa ma yin pa (DNP ma yin pa: G ma yin pa ma yin pa) brdzun pa kho na*[4] *la rtag pa la sogs pa'i dngos por sgro 'dogs shing* [5] *gzugs la sogs pa ji ltar snang ba yang (D yang: GNP 'ang) ji lta ba de ltar*[6] *yongs su 'dzin par byed pa de rnams sgro 'dogs pa dang skur pa 'debs pa'i mthar lhung ba'i blos mtha' gnyis dang bral ba'o (D ba'o: GNP ba'o //) zhes ji lta ba bzhin du don dam pa'i tshul gyi (D gyi: GNP gyis) rgya mtsho shin tu zab mo la mi 'jug pas* [7]*de'i don du bcom ldan 'das kyis dgongs pa*

nges par 'grel pa'i mdor[8] [9] *skye ba med pa la sogs pa bstan pa* [10] *don dam pa'i dbang du byas pa nyid kho nar gsal par mdzad cing ngo bo nyid med pa (GNP pa: D par) rnam pa (DGN rnam pa: P rnam pa rnam pa) gsum gyi dgongs pa bstan pas dbu ma'i lam mtha' gnyis dang bral ba*[11] *nges pa'i don kho nar gzhung 'dzugs (D 'dzugs: GNP 'jug) par mdzad do //.*

([1] GNP 版割注: *skye ba snga phyi dang las 'phras sogs*. [2] GNP 版割注: *rgyang phan pa (= *lokāyata)*. [3] GNP 版割注: *rig byed sogs (= *vedādi)*. [4] GNP 版割注: *phyi rim pas gang zag gi bdag*. [5] GNP 版割注: *rang gi sde pas kyang*. [6] GNP 版割注: *bden par*. [7] GNP 版割注: *lang kar gshegs par / kun rdzob tu ni thams cad yod / dam pa'i don tu yod ma yin / dngos rnams ngo bo nyid med kyang / dam pa'i don du bstan pa yin / (= LAS X k. 120) zhes gsungs pa dang mthun (G mthun: NP mthun /)*. [8] MMA では，MĀ には無い *dgongs pa nges par 'grel pa'i mdor* が加えられている．[9] GNP 版割注: *rgyal pa'i yum la sogs par*. [10] GNP 版割注: *dgongs pa can ma yin gyi (GN gyi: P gyis /)*. [11] MMA では *rab tu bstan pa'i phyir* が省略されている．)

ngo bo nyid med par rnam pa gsum gyi ... . Tsong kha pa の *Legs bshad snying po* (LNy) 57a3-5 に引用される : *dbu ma snang ba las / de'i don du bcom ldan 'das kyis skye ba med pa la sogs pa bstan pa don dam pa'i dbang du mdzad pa kho nar brjod cing / ngo bo nyid med pa rnam pa gsum kyi dgongs pa bstan pas dbu ma'i lam mtha' gnyis dang bral ba rab tu bstan pa'i phyir nges pa'i don kho na gzhung 'dzugs par mdzad pa yin no /.* Lam rim での引用は，長尾 (1954) p. 166, 14-15 を見よ :「彼の経に三種の無自性の密意が説かれて，二辺を遠離した中道が顕示せられたのであるから，正に了義 (*nīta-artha*) が教として立てられたのである.」また BSGT p. 240, 14-17 に対応文が見られる : *[de ltar] ngo bo nyid med pa gsum gyi dgongs pa bstan pas dbu ma'i lam mtha' gnyis dang bral ba rab tu bstan pa'i phyir* ***'di nyid*** *nges pa'i don du gzhung 'dzugs par mdzad pa yin te /.* BSGT では，*rab tu bstan pa'i phyir* の後に，*'di nyid* という語が付け加えられている．MIMAKI (1982) p. 241, 29-30 では，この *'di nyid* は「中観派の一切法無自性＝中道」と訳されている： *l'[absence de nature propre des toutes les données des Mādhyamika =la Voie du Milieu].* この *'di nyid* を無自性・無生起と解釈することに筆者は同意するが，しかし，「＝中道」(=*la Voie du Milieu*) は，少なくとも MĀ のここの議論においては，Kamalaśīla が了義に関して行う一貫した説明（即ち，「勝義（＝無生起等）＝了義」・「勝義を意図した説（＝無生起等の教説）＝了義説」）と彼がここの議論で何を証明しようとしていたのかとを考えると，あまり好ましくないと思われる（下記も見よ）.

Cf. BNJ 75b4: *yum gyi mdo la sogs pa nges don gyi mdo kho na yin pa'i gzhung 'dzugs par mdzad pa'i phyir /.*「『〔仏〕母経』(＝『般若経』) 等はまさに了義経であるという教えを立てたからである.」BNJ の解釈は，上に引いた LNy 57a3-5 の MĀ の引用に対する Tsong kha pa の解釈と同じである : (LNy 57a3-5:) *dbu ma snang ba las / ... nges pa'i don kho na gzhung 'dzugs par mdzad pa yin no / zhes dgongs 'grel gyis ngo bo nyid med pa gsum gyi dgongs pa bstan pa de gnyis kyis yum gyi mdo la sogs pa nges pa'i don yin pa'i gzhung btsugs par 'chad do //.* Cf. 一郷 ibid. p. 111, 12-13:「三種の無自性の密意を説くことによって二辺を欠いた中道を明示されたのであるから，(『解深密経』は) 了義の教典にほかならない，と確定するのです.」Kamalaśīla はここで何らかの経典を了義経として確定・認定しようとしているのだとは思えない．ここの文のそのような解釈は，対論者（＝瑜伽行派）がここで出した反論に対する適切な答えになっているとは思えないからである．ここでの反論は次のような内容であった :「中観派（Kamalaśīla）は "勝義を意図した説（＝無生起等の教説）＝了義説" という考えを示すが，世尊は SNS で「無生起等の教説は密意説である」と説いている．中観派は SNS での世尊のこの言明（即ち，密意説としての無生起等の教説）をどのように解釈するのか．密意説としての無生起等の教説は了義説なのか，それとも未了義説なのか．しかし，密意説ならば，それは未了義説と解釈すべきではないのか.」fn. 51 も見よ．この反論に対して，Kamalaśīla が「『般若経』は了義経である」または「SNS は中道を説くから了義経で

ある」と返答したとするならば，それは答えとして不明瞭であり，不適切であると思われる．そのような返答からは，彼がここで真に答えるべき「密意説と了義説・未了義説との関係」が直接明瞭に理解されないからである．筆者は，Kamalaśīla はここで，「密意説としての無生起等の教説は了義説である」と答えているものと考える．それは，彼がここで次のように考えていると思われるからである：「世尊は，『般若経』の中で無生起等の教説は勝義についての教えであると説き，SNS の中でその教説の意図（密意）を明らかにして，その教説は三無性を意味し，二極端を離れた中道を示すことを説いたが，それは，二極端を離れた深遠な勝義の教理を人々に理解させるためである．それゆえ，密意説としての無生起等の教説は，二極端を離れた勝義を意図して説かれ，実際それを説き明かしているのであるから，その教説は了義を説くものと考えられる．」この考えこそが，この後でより明瞭に示される，彼の了義解釈の本質に他ならないのである．彼の了義解釈は，三無性を意図して説かれた無生起等の教説は密意説であるが，密意説も，それが認識手段によって確定された勝義を意図して説かれたものならば，了義説と見なされるべきである，という考えを示すものなのである．**1.2.1.4.3, §31-§32** と fns. 72, 74 を見よ．（注記：この了義と三無性の解釈により，Kamalaśīla は，瑜伽行派の思想を中観派の思想に調和・連結させ，両派の教義上の対立関係を解消し，両立化を図ろうとしているのである．KEIRA ibid. を見よ．）さて，Kamalaśīla が「密意説としての無生起等の教説は了義を説く」と考えるならば，彼は，SNS の中で密意説として説かれた無生起等の教説が了義を説いていることを証明しなければならない．そして，それは，事実，ここでの議論，即ち，SNS が説く三性・三無性説に関する議論の最終局面 (**1.2.1.4.3, §32**) において，証明されている．その箇所において，Kamalaśīla は，「SNS の中で世尊が『私は勝義無自性を意図して，一切法の不生不滅・本来寂静・自性涅槃を説いたのである』と説いたこの言明は，無生起等の教説は了義であること等を証明するために説かれたのである」ということを述べているのである．従って，このことから，ここの議論において彼が証明しようとしていたことは，「密意説であると説かれた無生起等の教説は SNS において了義説と見なされている」ということであると分かるのであり，従って，彼はここで何らかの経典を了義経として確定・認定しようとしているのではないということが分かるのである．

最後に，Kamalaśīla がここの議論において証明しようとしていたことは直前に述べた通りであり，彼は，無生起等以外の教説をここで了義説として証明しようとしていたのではないと考えられるので，ゆえに，MMA チベット語訳所引の MĀ が提示する以下の読みも好ましいものではないと思われる：「世尊は，〔『仏母（経）』（＝『般若経』）等で〕無生起等の教説は〔意図（密意）を持つものではないが，〕勝義についてのことに他ならないと明らかにして，『解深密経』では三種の無自性（を意味する）意図を説くことにより，二極端を離れた中道は了義に他ならないという教えを立てたのである．」（〔　〕内の語は割注．（　）内の語は筆者による補い．）MMA チベット語訳所引の MĀ が提示するこの読みでは，SNS の中で密意説として説かれた無生起等の教説は，それ自体，了義説なのか未了義説なのか，「密意説と了義説・未了義説との関係」が結局不明のままであり，従って，ここでの反論に対する答えとしては不明瞭で，不適切であると思われる．さらに一つ付け加えると，もし Kamalaśīla がここで「SNS で説かれた中道説は了義説である」ということを証明しようとしていたならば，そのような彼の考えが，より明瞭な主張の形で，ここの前後に少なくとも一度は示されても良いはずであるが，それは一度も示されず，また，そうだとすると，ここまでの一貫した説明とは異なって，中道説という無生起等の教説以外の教説をも了義説と見なすというのであるから，その中道説が了義説である根拠もここの前後で詳しく説明されるべきであるが，どこにも詳しい説明は見付けられない．それゆえ，もしここで Kamalaśīla が「中道は了義に他ならない」と述べたとするならば，それは，ここにのみ突然現れた考えのようで，奇妙に思われるのである．「何を了義説と見なすか」についての Kamalaśīla の説明は，ここまで「勝義を意図した説（＝無生起等の教説）＝了義説」という

そうでないならば,「現に見られているものとの矛盾」(*dṛṣṭavirodha*) 等〔の誤謬〕がどうして排除されるであろうか.〔排除されないのである.〕

1.2.1.4.1　他に依るあり方・生起の無自性性

§19. その〔三性の〕内, 考察されない限り一般的に承認され, 顕現した通りのもので, 幻の如く〔原因・条件に〕依存して生じる事物 (*dngos po; vastu*), それが他に依るあり方 (*paratantrasvabhāva;* 依他起性) のものである. その〔他に依るあり方のもの〕はまた, 世俗として幻の如くに, 他の条件の力によって生じるのであり, それ自体のみ〔で生じるの〕ではないので, 生起は無自性である（*utpattiniḥsvabhāvatā;* 生無性）と確立されるのである[53].

§20. 学者たちは, 依存して生じたものは自性として空であると確定しており, 自性が変異するもの (*kṛtrima*) であることは論理的に正しくないのである. 未だ生じないものに, 生じることと生じて無となることもないのである. 同一のものにおける存在と非存在とは, 継時的にも矛盾するからである. そのように,〔『中論』の中で,〕

自性が原因と条件とによって生じることは論理的に正しくない. 原因と

説明で一貫しており, そしてそれはこの議論の最後まで変わっていないと思われるのである.

[53]MMA D138b4, G219b4-6, N161a6-b1, P167a4-6 に引用される: [1] *de la gang ma brtags na* [2] *yid ches pa mthong ba ji lta ba sgyu ma bzhin du rten cing 'brel par 'byung ba'i dngos po de gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid do //* [3] *de*[4] *yang (D yang: GNP 'ang) kun rdzob tu sgyu ma ltar pha rol rkyen gyi stobs kyis (DGN kyis: P kyi) skye'i rang (GNP rang: D rang bzhin) kho na ni* [5] *ma yin pas skye ba ngo bo nyid med pa nyid du rnam par gzhag (D gzhag: GNP bzhag) ste /.*

([1] GNP 版割注: *dbu ma pa rnams kyang ngo bo nyid (GP ngo bo nyid: N ngo bo 'di) rnam par bzhag pa khas mi len pa ma yin te (GN khas mi len pa ma yin te (N te /): P khas ma len pa yin te /).* [2] GNP 版割注: *grags pa 'am.* [3] GNP 版割注: *bsam gyis mi khyab pa bstod par (/) rgyu dang rkyen las byung ba'ang lags / gzhan gyi dbang la kun rdzob ste / gzhan gyi dbang zhes rab tu gsungs / (P /: GN om.) (= Acintyastava 44abc) shes so // (GN //: P /).* [4] GNP 版割注: *gzhan dbang.* [5] GNP 版割注: *skye ba.* ( ) 内の語は筆者による補い.)

Cf. SDNS D287b4-5: *'di ltar ma brtags par grags pa dngos po rnams kyi rten (P rten: D byed) cing 'brel par 'byung ba'i ngo bo nyid gang yin pa de ni gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid de / kung rdzob tu sgyu ma la sogs pa bzhin du rkyen gyi dbang gis skye pas ngo bo nyid med pa'i phyir skye ba ngo bo nyid med pa yin no //*「というのは, 考察されない限り一般的に承認され, 縁起する性質の諸事物, それが他に依るあり方のものである. 世俗として幻等のように, 条件の力によって生じるので, 無自性であるから, 生起は無自性であるのである.」 Cf. BSGT p. 240, 11-12: *gzhan gyi dbang rten cing 'brel bar 'byung ba ni rnam par dpyad na skye ba med pa'i phyir skye pa ngo bo nyid med pa'o //.*

SNS p. 68, 11-13 参照: *de ni rkyen gzhan gyi stobs kyis byung ba yin gyi / bdag nyid kyis ni ma yin pas de'i phyir skye ba ngo bo nyid med pa nyid zhes bya'o /.*

条件とによって生じたならば，自性は作られたものとなるであろう[54].
さらにまた，どうして自性が作られたものであるだろうか[55].
もし本性として存在することが〔何かに〕あるならば，それが存在しないことは起こり得ないだろう．本性が他に変化することは全く不合理であるからである[56].

と説明されたのである．

§21. さらに，〔同論の中で,〕

自性をもって実在するものが, 非実在となることは論理的に正しくない[57].

と説明されたのである．

§22. また世尊によっても『聖仏説弘道広顕三昧〔経〕』(*Ārya Anavataptanāgarāja-paripṛcchā*) の中で,

諸条件によって生じるものは実に不生である．
それが生じることは自性としてはない．
条件に依存するものは空と説かれる．
空性を知る者は不放逸である[58].

と説かれたのである．

---

[54]*Mūlamadhyamakakārikā* (MMK) 15-1: (MMK$_{Ye}$:) *na saṃbhavaḥ svabhāvasya yuktaḥ pratyayahetu-bhiḥ / hetupratyayasaṃbhūtaḥ svabhāvaḥ kṛtako bhavet //.*

[55]MMK$_{Ye}$ 15-2ab: *svabhāvaḥ kṛtako nāma bhaviṣyati punaḥ katham /.*

[56]MMK$_{Ye}$ 15-8: *yady astitvaṃ prakṛtyā syān na bhaved asya nāstitā / prakṛter anyathābhāvo na hi jātūpapadyate //.*

[57]MMK$_{Ye}$ 21-17ab: *sadbhāvasya svabhāvena nāsadbhāvaś ca yujyate /.*

[58]*'phags pa klu'i rgyal po ma dros pas zhus pa* P238a6: *rkyen las skyes pa gang yin te ma skyes / de la skye ba ngo bo nyid kyis med / rkyen la rag las gang yin stong par gsung / stong nyid gang shes de ni bag yod pa'o //.*

PsP$_{LVP}$ p. 239 では，*Anavataptahradāpasaṃkramaṇasūtra* として引用される．PsP$_{LVP}$ p. 239, 10-13, p. 491, 11-14, p. 500, 7-10, p. 504, 1-4 を参照せよ： *yaḥ pratyayair jāyati sa hy ajāto na tasya utpādu svabhāvato 'sti / yaḥ pratyayādhīnu sa śūnya ukto yaḥ śūnyatāṃ jānati so 'pramattaḥ //.*

MMA D145a7-b1, G234a2-3, N172b4-5, P178b5-6: [1]*gang zhig rkyen las skyes pa de* [2] *ma skyes* [3] *// de yi skye ba rang bzhin las yod min // gang zhig rkyen gyi (DNG gyi: P gyis) dbang* [4] *de stong par brjod // gang zhig stong par shes te (GNP te: D de) bag yod pa'o*[5] *//.*
([1] GNP 版割注: *chos*. [2] GNP 版割注: *don dam par (GN par: P par /)*. [3] GNP 版割注: *la*. [4] GNP 版割注: *ngam (N ngam: G dam; P ngan) de la rag las pa (N pa: P pa /; G pas)*. [5] GNP 版割注: *mkhas pa*.)
Prajñāpradīpa (PP) や TJ そして MAtBh にも引用される．長尾 (1954) p. 420, n. 123 参照．

§23. 『聖海龍王所問〔経〕』(*Ārya Sāgaranāgarājaparipṛcchā*) の中では,

> 縁起しているものは，自性として非存在である．
> 自性として非存在であるものは，どんな場合にも，不生である[59].

と説かれたのである．

§24. まさにそれゆえ,『聖父子相見〔経〕』(*Ārya Pitāputrasamāgama*) の中でも，縁起に〔悟〕入することにより〔一切法の無自性・不生起を特徴とする〕法界 (*dharma-dhātu*) に〔悟〕入することが説かれたのである[60]．即ち,

> 世尊よ！ その内，無明はまさに無明として存在しないのである．それはどうしてかというならば，このように，無明は自性を欠いているのである．ある法に自性がないならば，その〔法〕は事物ではない．事物ではないものは完全に不成立である．完全に不成立であるものは生起することはないし，消滅することもないのである．不生不滅であるものは，過去のものと仮設されることはないし，未来のもの〔と仮設されることも〕なく，現在のものと仮設されること〔も〕ないのである．三時いずれにおいても妥当でないものは, 名称をもたず, 特徴なく, 特相なく, 仮設されることもないのである．〔しかし,〕衆生たちが理解するために〔は〕,〔無明は〕名称に過ぎない，言語協約に過ぎない,

---

[59]MĀ D206b1，MAV D72a5-6，MMA D145b1-2 G234a3-4 N172b5-6 P178b6-7 では，*blo gros rgya mtshos (MMA mtsho la) bstan pa*（『聖海意所問〔経〕』）として引用される．*'phags pa blo gros rgya mtshos zhus pa* P52a1: *rten cing 'brel bar gang byung ba // de dag gang la'ang rang bzhin med // gang dag ngo bo nyid med pa // de dag gang du'ang 'byung ba med //.*『佛説海意菩薩所問淨印法門經』大正 13, 494a16-17: 謂諸法縁生自性無所有 若自性不有即無少法生. 一郷 (1993) p. 33, n. 33 参照.

MMA D145b1-2, G234a3-4, N172b5-6, P178b7: [1]*gang rnams rten cing 'brel par 'byung // de rnams rang bzhin las* [2] *ci'ang (GNP las ci'ang: D cung zad) med // gang rnams rang bzhin las med pa // de rnams gang du'ang* [3] *mi 'byung ngo //.* ([1] GNP 版割注: *chos*. [2] GNP 版割注: *bden (GP bden: N bden pa) dngos su grub pa*. [3] GNP 版割注: *rang bzhin du (GN du: P du /).*)

[60]「縁起に〔悟〕入することにより・・・」．この文は *Pitāputrasamāgama* (PPS) からの引用ではなく，PPS P102a4 の次の文で始まる箇所の主題・議論内容への言及であろう: *de la ji ltar na rten cing 'bral bar 'byung ba la 'jug pas chos kyi dbyings las 'jug ce na /.* PPS では，この文の直後に,「無明を縁として行が，行を縁として識が・・・」という十二支縁起の定型句の簡略な説明が加えられ，MĀ のここでの引用に続く．Cf. 一郷 (1985) p. 224, 8-9,　同 (1993) p. 112, 13.

MAP D119a5: *rten cing 'bral bar 'byung ba la 'jug pas zhes bya ba ni ma rig pa la sogs pa'i rang bzhin dpyad pas zhes bya ba'i tha tshig go // chos kyi dbyings zhes bya ba ni chos thams cad kyi rang bzhin skye ba med pa'i mtshan nyid do //.*

世間的活動に過ぎない，世俗に過ぎない，表現されたものに過ぎない，仮設されたものに過ぎない〔と説く〕以外〔他の仕方はないの〕である．無明は勝義として認識されない．勝義として認識されない法は，仮設されることもないし，言語表現されること〔も〕ないし，表示されること〔も〕ないのである．世尊よ！ 名称に過ぎなく，言語協約に過ぎないものはまた，真実ではないのである[61]．

と詳細に説かれたのである．

§25. 従って，他に依るあり方のものは，真実の自性〔をもつもの〕としては論理的に正しくないのである．そうならば，幻等も実在するものであることになってしまうのである．それら（幻等）も，条件に依存するものとしては区別が無いからである．

---

[61]PPS P102a6-b3: *bcom ldan 'das de la ma rig pa ni ma rig pas ma mchis so // de ci'i slad du zhe na / 'di ltar ma rig pa ni / rang bzhin dang bral ba ste / chos gang la rang bzhin ma mchis pa de ni dngos po ma mchis pa'o // gang la dngos po ma mchis pa de ni yongs su ma grub pa'o // gang yongs su ma grub pa de ni mi skye pa'o // gang mi skye pa de ni mi 'gag pa'o // gang ma skyes ma 'gags pa de ni / 'das pa zhes gdags par bgyi ba ma lags ma 'ongs pa dang da ltar byung ba zhes gdags par bgyi ba ma lags so // gang dus gsum du mi dmigs pa de ni ming ma mchis pa / mtshan nyid ma mchis pa / mtshan ma ma mchis pa / gdags su ma mchis pa ste / gzhan du ni ming tsam dang / brda' tsam dang / tha snyad tsam dang / kun pa rdzob tsam dang / gdags pa tsam du sems can rnams gzung ba'i don du bgyi ba ma gtogs par ma rig pa de ni don dam par dmigs su ma mchis so // chos gang don dam par dmigs su ma mchis pa de ni gdags su ma mchis pa / tha snyad du bgyir ma mchis / brjod du ma mchis pa ste / bcom ldan 'das gang ming tsam zhes bgyi ba nas / gdags pa tsam gyi bar de dags kyang yang dag pa ma lags pa /.../.* MAV D72a7-72b5, BNJ 77a3-b3 にも引用される．

『大寶積經　菩薩見實會』　大正 11, 391b28-c8: 世尊。彼無明無明體不可得。何以故。性自離故。若法無體性彼即非物。以非物故即非成就。非成就者非生非滅。非生滅者即非過去非現在非未來。若於三世中不可得者。無名無形無相無想亦非差別。唯是但名但假但用但世俗但言説。爲教化一切凡夫衆生故。彼無明於第一義實不可得。不可得者即非善別用赤不可説。世尊。若是但名乃至但施設。彼即非實唯是虚妄。 Cf. 『父子合集經』　大正 11, 952c24-953a5.

「名称をもたず，特徴なく，・・・」 MAP D119a5-6: *ming ma mchis pa zhes bya ba ni sgra'i spyod yul ma yin pa'o // mtshan nyid ma mchis pa zhes bya ba ni skye ba la sogs pa'i mtshan nyid dang bral ba'o // mtshan ma ma mchis pa zhes bya ba ni 'du shes kyi yul sngon po la sogs pa'i mtshan ma med pa'i phyir ro // gdags su ma mchis pa zhes bya ba ni rnam par rtog pa'i yul ma yin pa'i phyir ro //.* 「『名称をもたない』とは語の対象領域ではないことである．『特徴がない』とは生起等の特徴を欠いていることである．『特相がない』とは表象作用の対象である青等の特相が無いからである．『仮設されることがない』とは構想作用の対象ではないからである．」

・・・〔と説く〕以外〔他の仕方はないの〕である： MAV D72a7-72b5 における引用を参考して訳した．MAV D72b3-4: *gzhan du ma lags kyi ming tsam dang / brda tsam dang / tha snyad tsam dan / kun rdzob tsam dang / brjod pa tsam dang / gdags pa tsam du sems can rnams gzung (P gzung: D gzud) pa'i don du bgyi ba ma gtogs par ... /.* 「他の仕方はないのであって，・・・(略)・・・と説く以外に・・・.」一郷 (1993) p. 123, n. 34,35 参照.

従って，この他に依るあり方のものは，幻と区別無いものであるから，生起は無自性であると確立されるのである．

§26. このように，その同じ『聖解深密〔経〕』の中で，

例えば，幻像のように，生起は無自性であると知るべきである[62].

と説かれたのである[63].

1.2.1.4.2 構想されたあり方・特徴の無自性性

§27. 幻等と区別の無い，まさにその他に依るあり方（依他起性）のものに対して，恒常・無常等の勝義の自性 (*rang gi ngo bo*) を捏造することが，構想されたあり方 (*parikalpitasvabhāva;* 遍計所執性) である．その〔構想されたあり方のもの〕がまた，構想された通りの特徴（相）〔をもつこと〕は不成立であるから，特徴は無自性である (*lakṣaṇaniḥsvabhāvatā;* 相無性) と確立されるのである．この〔特徴の〕無自性（相無性）も，客観的事実としては (*vastutas*)，〔勝義の自性が構想されたのと〕同じ他に依るあり方のものにおいて確立されるのである．その同じ〔他に依るあり方の〕ものが，その〔勝義の自性〕という特徴〔をもつもの〕として構想されたからである[64].

---

[62]SNS p. 69, 12-13: *dper na / sgyu ma byas pa ji lta ba de lta bur ni skye ba ngo bo nyid med pa nyid kyang blta bar bya /.* 大正 16, 694b2: 譬如幻像生．無自性性当知.

[63]Kamalaśīla の「生起の無自性性」（生無性）の解釈は，まず先の **§19** で示されており，そこでは，「その〔他に依るあり方のもの〕はまた，世俗として幻の如くに，他の条件の力によって生じるのであり，それ自体のみ〔で生じるの〕ではないので，生起は無自性である」と説かれていた．この説明は，彼独自の考えに基づくものではなく，SNS や他の瑜伽行派のテキストでも見られる解釈である．SNS p. 68, 11-13: *de ni rkyen gzhan gyi stobs kyis byung ba yin gyi / bdag nyid kyis ni ma yin pas de'i phyir skye ba ngo bo nyid med pa nyid zhes bya'o /.* ASBh p. 697, 10-13 (Tatia edition: p. 114, 21-23): *paratantrasya svayam utpattir nāsti pratyayāpekṣaṇād ato nāsya svena bhāvena bhāva ity utpattiniḥsvabhāvatayā niḥsvabhāvaḥ* ... . しかし，Kamalaśīla は，生起の無自性性のその説明に加えて，中観思想の立場から，ここで，別の解釈を与えている．即ち，中観派は，縁起しているものは勝義として自性を欠いていると考えるので，他に依るあり方は勝義あるいは真実として存在する本性 (*yang dag pa'i ngo bo nyid*) ではなく，それは勝義としては生起せず非存在の幻等と異ならない在り方である，という解釈である．生起の無自性性のこの解釈は，他に依るあり方のものそれ自体は勝義として生起せず，勝義真理のレベルでは非存在であることを意味している．

[64]対応文は MMA D138b5-7, G220a1-3, N161b2-4, P167a7-b1 に見付けられる：*gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid* [1] *de kho na la gang rtag pa dang mi rtag pa la sogs pa'i rang bzhin don dam pa par*[2] *sgro 'dogs pa de kun brtags pa'i ngo bo nyid do //* [3]*de 'ang (GNP de 'ang: D de'i 'di) ji ltar kun brtags pa'i mtshan*

§28. 従って，一切法は，無常等の確立されるがままの勝義の特徴を欠いているから，不生起なのである．従って，不滅なのである．従って，本来寂静なのである．従って，本性上涅槃であるのである．そのように，他ならぬその『聖解深密〔経〕』の中で，

> それ自体の特徴として非存在であるものは不生起である．不生起であるものは不滅である．不滅であるものは本来寂静である．本来寂静であるものは本性上涅槃である[65]．

と説かれたのである．

§29. また，〔同経の中で，〕

> 従って，私（＝世尊）は，特徴の無自性性を意図して，一切法は不生起であると説いたのである[66]．

と説かれたそのことについても，言葉通りの意味で (*yathārutārtha*) 理解することを否定しているのであり，世俗の他に依るあり方のものが〔既に〕説明したような構想された本性を欠いていることを証明して，否認し得ない世俗の〔他に依る〕在り方 (*rūpa*) をも説示しているのであり，まさに勝義として〔他に依るあり方のものが構想された本性を欠いていることを説示しているの〕ではないのである[67]．

---

nyid [4] *ma grub pa'i phyir / mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid du rnam par gzhag go // ngo bo nyid med pa 'di yang (D yang: GNP 'ang) dngos por na gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid kho na la rnam par gzhag (D gzhag: GNP bzhag) ste* [5]*de kho na la* [6]*de'i mtshan nyid du brtags pa'i phyir ro //.*

([1] GNP 版割注: *sgyu ma lta bu.* [2] GNP 版割注: *gang zag dang chos kyi bdag tu.* [3] GNP 版割注: *kun brtags.* [4] GNP 版割注: *don la.* [5] GNP 版割注: *gzhan dban.* [6] GNP 版割注: *rtag mi rtag sogs.*)

BSGT p. 240, 9-11 を参照: *'di ltar kun rdzob sgyu ma lta bu la rtag pa la sogs pa ji ltar kun btags pa'i mtshan nyid du ma grub pa ni mtshan nyid ngo bo nyid med pa'o //.* SDNS D287b5-6 も参照: *de la don dam par skye ba la sogs pa'i ngo bor sgro 'dogs pa gang yin pa de ni kun brtags pa'i ngo bo nyid de / de yang tshad mas ji ltar rnam par brtags pa bzhin ngo bo nyid ma grub pa'i phyir mthan nyid ngo bo nyid med pa yin no //.* また，SDNS D287a6-7 も参照: *sgyu ma bzhin du ma brtags na dga' ba rten cing 'brel par 'byung ba'i dngos po thams cad la byis pa rnams kyis don dam par skye ba la sogs par sgro 'dogs pa gang yin pa de nyid tshad mas gnod pa'i phyir kun brtags pa'i bdag nyid yin te /.*

de nyid la de'i mtshan nyid du nye bar brtags pa'i phyir ro. Cf. 一郷 ibid. p. 113, 10-11:「その同じもの（依他起性）がそれの相として例示的に表現されているからです．」

[65]SNS p. 69, 27-31: *rang gi mtshan nyid kyis med pa gang yin pa de ni ma skyes pa yin / ma skyes pa gang yin pa de ni ma 'gags pa yin / ma skyes pa dang ma 'gags pa gang yin pa de ni gzod ma nas zhi ba yin / gzod ma nas zhi ba gang yin pa de ni rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa yin /.*

[66]SNS pp. 69, 33-70, 2: *de'i phyir mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid la dgongs nas ngas chos thams cad ma skyes pa / ... zhes bstan to /.*

§30. 〔勝義としては,〕特徴の非存在を自性とする〔ような他に依るあり方のものの存在〕は全く論理的に妥当しないのである[68]．そのように,〔『中論』の中で,〕

> 特徴の無い存在は，どんなものも，どこにも，存在しない[69]．

と説かれた如くである．

1.2.1.4.3　完成されたあり方・勝義無自性性

§31. 一切法は勝義として常に本性上無自性に他ならないと確定されることが，完成されたあり方 (*pariniṣpannasvabhāva;* 円成実性) である．その〔完成されたあり方〕は，常に捏造された〔勝義の自性等〕が全く無いものとして成立しているからである[70]．またそれは，認識手段 (*pramāṇa*) によって成立することを本性とするものであるから,「勝義」とも言われるし,〔勝義は〕無自性によって特色づけられる (*prabhāvita*) から,「無自性性」でもあるのである．従って, この〔完成されたあり方〕は, 勝義として無自性であるのである．そのように,『聖解深密〔経〕』の中で,

> それは, 勝義でもあるし, 諸法の無自性によって特色づけられるものでもあるので，従って，勝義無自性 (*paramārthaniḥsvabhāvatā;* 勝義無性) であると言われるのである[71]．

---

[67]Kamalaśīla も「一切法不生起」等の教説を言葉通りに理解しているのはない．彼の解釈では（でも），その教説は三種無自性説（三無性説）を意図して説かれたものである．その教説が特徴の無自性性（相無性）を意図して説かれた場合，その教説は，言葉通りに諸法の全くの非存在を意味しているのではなく，構想された本性を欠いた，諸法の縁起している世俗的な在り方を説いているのである．

[68]*mtshan nyid med pa'i ngo bo nyid ni 'ga' yang rigs pa ma yin te /.* Cf. 一郷 ibid. p. 113, 25:「（勝義として）相無自性（が存在すること）は，いかにしても不合理です.」*mtshan nyid med pa'i ngo bo nyid* を「相無自性」と訳すことは妥当ではないだろう．また一郷氏は，この **§30** の段落を，次の勝義無自性性の説明・解説箇所に含まれるものと解釈している．

[69]MMK$_{Ye}$ 5-2ab: *alakṣaṇo na kaścic ca bhāvaḥ saṃvidyate kvacit /.*

[70]MMA D1386-7, G220a3-4, N161b4-5, P167b1-2: *gang yang chos thams cad don dam par rtag tu rang bzhin gyis ngo bo nyid med par gnas pa de yongs su grub pa'i ngo bo nyid de / de*[1] *ni rtag tu sgro btags pa med pa nyid du grub pa'i phyir ro //* ([1] Cf. GNP 版割注は，この *de* を *rang bzhin med pa* を指示するものと解釈する.) 以下も参照： BSGT p. 240, 12-14: *chos thams cad don dam par rang bzhin gyis ngo bo yid med pa kho nar yongs su grub pa ni don dam par ngo bo nyid med pa yin no //.* SDNS D287b6-7: *gzhan gyi dbang la ji skad bshad pa'i kun brtags pa'i ngo bo nyid kyis stong pa gang yin pa de ni yongs su grub pa'i ngo bo nyid de / de ni tshad mas yang dag par grub pa nyid du rtag tu grub pa'i phyir ro // de yang chos thams cad la khyab par byed pa nyid kyis spyi'i mtshan nyid kyis yin pa'i phyir don dam pa ngo bo nyid med pa yin pas thams cad mi 'gal ba kho na'o //.*

と説かれたのである．この〔勝義〕無自性（勝義無性）によって，一切法はまさに無自性であるので，無生起等の教説は了義である．その〔教説〕は，勝義を意図して説かれているから「現に見られているものとの矛盾」等〔の誤謬〕もないし，言葉通りに理解しているのでもないのである．従って，意図が説かれたものでも了義であることは矛盾しないのである[72].

§32. まさにそれゆえに，無生起等の教説は了義であることを証明するために，「現に見られているものとの矛盾」等〔の誤謬〕を排除するために，そして言葉通りに理解することを否定するために，同じ『聖解深密〔経〕』の中で，

> Paramārthasamudgata よ！ さらにまた，私（＝世尊）は，法無我によって特色づけられる勝義無自性をも意図して，一切法は不生起であり，一切法は不滅であり，本来寂静であり，本性上涅槃であると説いたのである[73].

と説かれたのである[74].

1.2.1.5 中観論者に相見等の謬見はない：『大信生起経』等の解釈

---

[71]SNS p. 68, 30-32: *de ni don dam pa yin la / don dam pa ni chos thams cad kyi ngo bo nyid med pa nyid kyis rab tu phye ba yin pas de'i phyir don dam pa ngo bo nyid med pa nyid zhes bya'o /.*

[72]Kamalaśīla の解釈では，意図を持って説かれたもの（密意説）でも，了義説と見なすことは可能なのである．瑜伽行派の解釈では，密意説は言葉通りの意味で理解するべきではない教説なので，了義ではなく，未了義を説く教説と見なされる．KEIRA (2009) を見よ．

[73]SNS p. 70, 5-8: *don dam yang dag 'phags yang don dam pa ngo bo nyid med pa nyid chos bdag med pas rab tu phye ba las dgongs nas ngas chos thams cad ma skyes pa / ma 'gags pa / gzod ma nas zhi ba / rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa'o zhes bstan to //.*

[74]Kamalaśīla によると，無生起等の教説が了義説であると見なされるのは，それが勝義について説いているからである．**1.2.1.3** の **§10**,**§14** そして **§16** を見よ．無生起等の教説が密意説として「勝義無自性」（勝義無性）を意味する場合，その教説はまさに勝義について説いているのであるから，密意説としての無生起等の教説は了義を説くものと見なされるのである．

ここ（**1.2.1.4.3, §31-S32**）においては，「勝義」が捏造（増益）と否認（損減）という二極端を離れていることも説かれている．先ず，勝義は無自性であるから，捏造された勝義の自性は全く無いものとして成立する．これが「完成されたあり方」であるが，これによっては，捏造という極端の排除が説かれている．他方，勝義は無自性であるが，「世俗が無自性・非存在であること」はなく，世俗の自性・生起は認められるので，「現に見られているものとの矛盾」等の誤謬はないし，「一切法無自性」をそのまま言葉通りに理解して，世俗の存在を否認することもない．これによっては，否認という極端の排除が説かれているのである．従って，勝義は二極端を離れているのであり，無自性・無生起という教説は，二極端を離れた勝義について説いているのである．世尊は SNS の中でこのように説いているのだと Kamalaśīla は解釈するのである．

§33. 【反論】もしそうであるならば，然るに『大信生起経』(*Dad pa cher byung gi mdo*) の中で，

> 私が，結合から生じる自性を意図して，一切法は非存在であると説いたそのことを，言葉通りに執着し，雑汚の諸法と清浄の諸法どちらも非存在であると執着して，非存在という特徴（無相）を把捉し，「非存在である」という見解（無見）が生じるのである．それゆえ，特徴についての見解（*nimittadṛṣṭi;* 相見）と言われるのである[75].

---

[75]経典名について．『大信生起経』＝『大乗起信経』(*Theg pa chen po la dad pa rab tu sgom pa; *Mahāyānaprasādaprabhāvanā*) であることについては, 松田 (1986) を見よ．この経文は MĀ Pūrvapakṣa D144b 3-5 にも引用されている．そこでの経典名は *Dad pa cher 'bhung gi mdo* ではなく，*Theg pa chen po la dod pa* (**Mahāyānaprasāda*) になっている．*Vyākhyāyukti* (VY) IV D102a3-4 P119b6-8 では，*Theg pa chen po'i mdo dod pa chen po skye ba* である．AS p. 35,8 では，『大法鏡〔経〕』(*Mahādharmādarśa*) である．

'phags pa theg pa chen po la dad pa rab tu sgom pa P19a6-8: *gang ngas 'dus pa las byung ba'i ngo bo nyid las dgongs te chos rnams med do zhes pa bsten pa de la sgra ji bzhin du mngon par zhen nas kun nas nyon mongs pa las byung ba'i chos rnams dang / rnam par byang ba las byung ba'i chos rmams la yang mngon par zhen cing med pa nyid du mtshan mar bzung bas med par lta bar 'gyur te / de'i phyir mtshan mar lta ba zhes bya'o //.* VY IV D102b2-3: *ngas kun tu sbyor ba las byung ba'i ngo bo nyid la dgongs nas chos rnams kyi med pa nyid bstan pa gang yin pa de la sgra ji bzhin gyi don du mngon par zhen cing kun nas nyon mongs pa'i chos rnams dang / rnam par byang ba'i chos rnams la yang med pa nyid du mngon par zhen pa na med pa nyid du mtshan mar bzung nas med par lta ba 'byung ba ste / de lta bas na mtshan mar lta ba zhes bya'o //.* 和訳するに当たっては，ASBh p. 112, 20-23 も参照した．

kun tu sbyor ba las byung ba'i ngo bo nyid. Guṇamati の *Vyākhyāyuktiṭīkā* (VYṬ) D267b5 P150a2-3 では，この自性を，構想されたあり方（*kun tu brtags (P brtags: D rtog) pa'i ngo bo nyid*）と解釈している．また，*Mahāyānasaṃgraha* (MS) VIII 7 では，「結合から生じる」(*sbyor las byung ba*) とは，「文字が相互に結合する」(*yi ge phan tshun sbyor ba*) こと，すなわち文字が結び付けられて名詞や動詞などの概念が言葉として構成されることであると言う．長尾 (1987) p. 254-257 を見よ．「文字が（相互に）結合する」というその考え方については，*Madhyāntavibhāga* (MV) V 14 と *Madhyāntavibhāgabhāṣya* (MVBh) ad MV V 14 を参照せよ．堀内 (2009) p. 313, fn. 119 も参照．

この経文は, Dharmapāla（護法）の『大乗広百論釈論』大正 30, p. 248a2-3 に引用されている：我唯依於相應自性説一切法自性皆無。若有如言而生執著。謂染淨法自性皆無。彼惡取空名爲邪見。Dharmapāla は，Guṇamati と同様，「相應自性」を構想されたあり方と見なしている．同論 p. 248a4 を見よ：相應自性即是世間遍計所執．また, 彼は「染淨法（染淨諸法）」を他に依るあり方のものと見なしている．同論 p. 248a6 を見よ：能詮所詮相應自性染淨諸法。即是依他。従って, 以上により，Dharmapāla はこの経文を，「構想されたあり方を意図して一切法は非存在であると説かれたのであり，他に依るあり方のものも非存在と執着してはならない」という意味を述べたものと解釈していると考えられる．松下 (1987b) pp. 495(52)-494(53) 参照．

mtshan ma'i lta ba. この経典が説く，「特徴についての見解」(*nimittadṛṣṭi;* 相見）等の二十八の不正なる見解 (*aṣṭāviṃśatir asaddṛṣṭaya*) と，VY や AS 等におけるそれら二十八見解の引用については，松下 ibid. pp. 500(47)-496(51)，Keira (2009) fns. 12, 16，堀内 ibid. pp. 312-317，本庄 (1990) pp. 65-68 を見よ．

と詳細に説かれたこのことはどのように解釈されるのか.

【答論】この〔結合から生じる自性を意図して世尊が説いた〕ことについても，先述の他に依るあり方が，世俗として原因や条件が結合することによってまさに生じ，幻のように無自性であるから，「結合から生じる〔自性〕」と言われるのである．そのように，『聖般若〔経〕』(*Ārya Prajñāpāramitā*) の中で，

> 結合から生じるものに，自性は存在しない．縁起するからである[76].

と説かれたのである．

§34. その同じ〔結合から生じる自性〕に関して，また，先述の構想されたあり方が，構想作用によって引き起こされて，その〔他に依るあり方のもの〕の上に忽然と生じるのであるから，「結合から生じる〔自性〕」と言われるのである[77].

§35. この〔結合から生じる〕自性は，〔他に依るあり方と構想されたあり方の〕二種どちらであっても，勝義としてあり得ないのである．従って，一切法は，この自性の点では，勝義として無自性であるが，世俗の自性も存在しないから〔無自性である〕というのではないのである．その〔世俗の自性〕が無いならば，雑汚と清浄の法が確立されることにもならないである．その〔雑汚と清浄の法〕はその〔世俗の自性〕によって特色付けられるのであり，勝義によって〔特色付けられるの〕ではないのであると他の諸経典の中で述べられるからである[78]．従って，勝義の意図を知らず，以前に〔は〕世俗の自性をも実在するもの (*dngos po'i ngo bo*) と把捉していて，後になってその〔世俗の自性〕も非存在〔である〕と考えて，無生起等の教説を言葉通りの意味で執着する者たちは，非存在等の特徴（無相等）を把捉するから，特徴等についての見解（相見等）が生じるので，それを否定するために，この〔『大信生起経』〕が説かれたのであり，中観派の者たちに対して〔説かれたの〕ではないの

また，それら二十八見解は，『大法鏡経』の経文として, Ratnākaraśānti の次のテキストにも引用されている : *Madhyamakālaṃkāropadeśa* (MAU) D230a5-b1，そして *Madhyamakālaṃkāravṛttimadhyamāpratipatsiddhi* (MAVMS) D114a6-b4.

[76] *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* (PVSPP) I p. 197, 19-20: *nāsti sāṃyojikasya dharmasya svabhāvaḥ pratītyasamutpannatvāt /.*

[77] BNJ 81b6-82a1 を参照: *gzhan dbang ni rgyu rkyen sbyor ba'i stobs kyis byung bas sbyor ba las byung zhes bya la / kun btags ni rtog pa'i gzos bsgrubs pa'i phyir sbyor ba las byung ba zhes bya ba yin no //*「他に依るものは，原因や条件が結合することによって生じるので，『結合から生じる』と言われるのであり，構想されたものは，構想作用のために引き起こされるので，『結合から生じる』と言われるのである.」

[78] **1.2.1.10, §59** を見よ.

である．彼ら〔中観派の者たち〕は，その〔無生起等の〕真実は特徴（相）の把捉一切から離反していると述べているのだから，彼ら〔中観派の者たち〕には，非存在等の特徴を把捉することはないのである．そのように，〔『中論』の中で，〕

> 他に依って知られず，寂静であり，〔言語表現を特徴とする〕戯論によって捉えられることなく，概念的思惟（分別）を離れており，多義ではないこと，これが真実の特徴である[79].

と説かれ，また，

> 「存在する」というのは，恒常性を把捉することであり，「存在しない」というのは，断滅を見ることである．それゆえ，学者は，「存在する」ということにも，「存在しない」ということにも依拠するべきではない[80].

と説かれた如くである．

§36. 非存在等の特徴を把捉する者たちは，真実を見るための機会を全く持たないのである．〔同論の中で，〕

> 自性・他性・存在・非存在を見る者たちは，仏陀の教説に真実を見ることはない[81].

と説かれているのである．

---

[79]MMK$_{Ye}$ 18-9: *aparapratyayaṃ śāntaṃ prapañcair aprapañcitam / nirvikalpam anānārtham etat tattvasya lakṣaṇam //.*

MMA D141b5 G226a3-4 N166b1-2 P172a8-b1: *gzhan* [1] *las rtogs (D rtogs: GNP rtog) min zhi ba*[2] *ste // spros (DGN spros: P spos) pa*[3] *rnams kyis ma spros* [4] *pa // rnam par mi rtog sna tshogs* [5] *min* [6] *// 'di ni de bzhin nyid* [7] *mtshan nyid //.* ([1] GNP 割注: *gyis bstan pa (GN pa: P pa /).* [2] GNP 割注: *rang bzhin dang bral ba (GN ba: P ba /).* [3] GNP 割注: *ngag.* [4] GNP 割注: *shing brjod du med (GN med: P med /).*「（・・・なく）て，言語表現され得ない（こと）（**nir-/an-abhilāpya;* 離言）」. PP XVIII D190a4 参照：*spros pa rnams kyis ma spros pa // zhes bya ba ni mngon par brjod pa'i mtshan nyid kyi spros pa nye bar zhi ba'i phyir ro //.* [5] GNP 割注: *te tha dad.* PP XVIII D190a3 参照: *rnam rtog med don tha dad min //.* [6] GNP 割注: *pa (GP pa: N sa) stong pa nyid du ro mnyam pa (GN pa: P pa /).*「空性として等味」. PP XVIII D190a5 参照：*don tha dad pa ma yin pa zhes bya ba ni chos nyid ro gcig pa'i phyir don dbyer med pa ste /.* [7] GNP 割注: *kyi.*)

[80]MMK$_{Ye}$ 15-10: *astīti śāśvatagrāho nāstīty ucchedadarśanam / tasmād astitvanāstitve nāśrayeta vicakṣaṇaḥ //.*

[81]MMK$_{Ye}$ 15-6: *svabhāvaṃ parabhāvaṃ ca bhāvaṃ cābhāvam eva ca / ye paśyanti na paśyanti te tattvaṃ buddhaśāsane //.*

§37. 「非存在である」というこの執着は，「存在する」という執着を前提としているのであると経典の中で説かれている．そのように，『聖入楞伽〔経〕』の中で，

> 非存在は存在を前提とするものであり，存在は非存在を前提とするものである．従って，非存在であると理解するべきではない．存在すると考えるべきでない[82].

と説かれた如くである．

§38. 従って，存在に執着することで力を失った者たちのみが，特徴等についての見解〔をもつの〕であり，存在を把捉することから遠ざかった者たちが〔その見解等をもつの〕ではないのである．彼ら〔存在を把捉することから遠ざかった者たち〕は，全く何にも依拠しないからである．そのように，〔『六十頌如理論』(*Yuktiṣaṣṭikā*) の中で，〕

> 依存して〔在る〕諸事物は真実として成立すると認める者たちにも，どうして，恒常等のそれらの誤りがないであろうか[83].
> しかしながら，依存して〔在る〕諸事物を，水面上の月のように，真実でもなく虚偽でもないと認める者たちは，〔邪悪な〕見解に連れ去られることはない[84].
> 存在を承認するならば，貪りと瞋りの根源であり，耐えがたく有害な見解への偏執が生じ，それにもとづいて諍いが起こる[85].

---

[82]LAS III k. 83: *astitvapūrvakaṃ nāsti asti nāstitvapūrvakam / ato nāsti na gantavyam astitvaṃ na ca kalpayet //.* これは MAV D73b6-7 に引用されている．MĀ 所引の k. 83 に従って第 3 句を訳すと，「従って，非存在であると述べるべきではない」となる．

[83]*Yuktiṣaṣṭikā* (YṢ) k. 44: (YṢ$_{LY}$:) *ye 'py upādāya bhāvānāṃ siddhim icchanti tattvataḥ / teṣām api kathaṃ na syur doṣās te śāśvatādayaḥ //.* YṢ$_T$ k. 44: *gang dag brten nas dngos po rnams // de nyid du ni grub 'dod pa // de dag la yang rtag sogs skyon // de dag ji ltar 'byung mi 'gyur // Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* (YṢV) k. 44: (YṢV$_T$:) *gang dag brten nas dngos po rnams // yang dag nyid du*[1] *grub 'dod pa // de dag la yang rtag sogs kyi*[2] *// skyon de ji ltar 'byung mi 'gyur*[3] *//* ([1] YṢV$_T$ *yang dag nyid du*: MĀ *bden pa nyid du*, [2] YṢV$_T$ *rtag sogs kyi*: MĀ *ji lta bur*, [3] YṢV$_T$ *skyon de ji ltar 'byung mi 'gyur*: MĀ *rtag sogs skyon der 'gyur ma yin*).

[84]YṢ$_{LY}$ k. 45: *upādāya tu ye bhāvān icchanty udakacandravat / nāpi tathyaṃ na cātathyaṃ hriyante te na dṛṣṭibhiḥ //.* k. 45 のチベット訳については，MĀ,YṢ$_T$,YṢV$_T$ すべて同形．k. 45 は MAV D74a2 にも引かれる MAV 所引 k. 45 の第 1 句は MĀ のとは異なり，*yang dag dngos rnams rten byas nas //* であるが，MAP D121a5 に見られるその第 1 句は MĀ のと同形である．

[85]YṢ$_{LY}$ k. 46: *rāgadveṣodbhavas tīvraḥ kaṣṭo dṛṣṭiparigrahaḥ*[1] */ vivādās tatsamutthāś ca bhāvābhyupagame sati //.* ([1] YṢ$_{Ldt}$ *tīvraduṣṭadṛṣṭiparigrahaḥ*: *Abhisamayālaṃkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā* (AAA) p. 161, 11-12 *tīvraḥ kaṣṭadṛṣṭiparigrahaḥ*.) YṢ$_T$ k. 46: *dngos por khas len yod na ni // 'dod chags zhe sdang*

と説かれたのである．

§39. 従って，無生起等の教説を言葉通りに執着する者たちを否定するために，〔この『大信生起経』は〕特徴等についての見解を非難しているのであるが，中観論者たちは無生起等の教説を言葉通りに執着することは無いのである．彼等〔中観論者たち〕は，勝義として〔の〕生起が無いこと等を承認しているからであり，また世俗の生起等も述べているからである．そのように，〔同論の中で，〕

> 真実を求める者たちには，初め，「すべては存在する」と説くべきである．
> その後，〔その者たちは，諸々の〕事柄を理解して無執着となり，寂静〔に達する〕[86]．
> 寂静の意味を知らず，聴聞だけを行って，福徳をなさない下劣な人たちは，破滅する[87]．
> 行為（業）には結果があること，および〔五つの〕生存状態（五趣）が説かれた．その〔行為や五趣の〕自性を完全に知ること，および〔それらの〕無生起も説かれたのである[88]．

'byung ba yi // lta ba mi bzad ma rungs 'byung[2] *// de las byung ba'i rtsod par 'gyur //* ([2] YṢV$_T$ 'dzin). AAA (Tib) P115a4-5: *dngos por khas len yod na ni // 'dod chags zhe sdang mi bzad 'byung // lta ba ma rungs yongs su 'dzin // de las byung ba'i rtsod par gyur //.* この AAA のチベット語訳は，MAV D76b3-4 に引用される k. 46 と殆んど同形である．ここでは，瓜生津 (1974a) p. 75 の和訳と SCHERRER-SCHAUB (1991) p. 287, 7-9 の仏訳とを参照して訳した．

[86]YṢ$_{LY}$ k. 30: *sarvam astīti vaktavyam ādau tattvagaveṣiṇām*[1] *// paścād avagatārthasya niḥsaṅgasya viviktatā //.* ([1] YṢV$_{Ldt}$ *-gaveṣiṇaḥ*.) k. 30 のサンスクリット引用文は，*Subhāṣitasaṃgraha* (SBhS) Part I, p. 385, 10-11 と *Nyāyaviniścayavivaraṇa* (NVinV) vol. II, pp. 17-18 に見つけられる． LINDTNER (1982) p. 111, fn. 30 を見よ．ここでは，YṢ$_{LY}$ に依拠し， SCHERRER-SCHAUB ibid. p. 236, 11-13 の仏訳を参照して訳した．YṢ$_T$ k. 30: *de nyid tshol la thog mar ni // thams cad yod ces brjod par bya // don rnams rtogs shing chags med la*[2] *// phyis ni rnam par dben pa'o*[3] *//* ([2] YṢ$_T$ *la*: YṢV$_T$ *nas*; MĀ *la*, [3] YṢ$_T$ *phyis ni rnam par dben pa'o*: YṢV$_T$ *de yi 'og tu dben pa'o*; MĀ *phyis ni rnam par dben pa nyid*).

[87]YṢ$_{LY}$ k. 31: *viviktārtham ajānānāḥ śrutimātrāvalambinaḥ / ye na kurvanti puṇyāni hatās te puruṣādhamāḥ //.* Cf. SBhS Part II, p. 46: *evam ajñātatattvā ye śrutamātrāvalambinaḥ / naiva kurvanti puṇyāni hatās te buddhaśāsane //.* LINDTNER (1981) p. 202, n. 29 および SCHERRER-SCHAUB ibid. p. 246, fn. 474 を参照．k. 31 のチベット語訳は YṢ$_T$,YṢV$_T$,MĀ すべて殆ど同形である．k. 31 は MAV D77a3 に引用されている．瓜生津 ibid. p. 61 の和訳と SCHERRER-SCHAUB ibid. p. 246, 3-6 の仏訳を参照．

[88]YṢ$_{LY}$ k. 32: *gatayaś ca samākhyātāḥ saphalatvaṃ ca karmaṇām / tatsvabhāvaparijñānam anutpādaś ca deśitaḥ //* YṢ$_T$ k. 32: *las rnams 'bras bu bcas nyid dang // 'gro ba dag kyang yang dag bshad // de yi rang bzhin yongs shes dang // skye ba med pa dag kyang bstan //.* YṢV$_T$ k. 32: *las kyi 'bras bu yod pa*[1] *dang // 'gro ba rnams*[2] *kyang shin tu*[3] *brjod // de yi rang bzhin yongs shes dang // skye ba med pa dag kyang bstan*[4] *//* ([1] YṢV$_T$ *las kyi 'bras bu yod pa*: MĀ *'bras bur bcas pa'i las rnams*, [2] YṢV$_T$ *rnams*: MĀ *dag*,

勝者たちは，目的をもって我と我所を説いているように，そのように，目的をもって，蘊・処・界を説いているのである[89].

と説かれたのである.

1.2.1.6 捏造と否認という二極端の否定（勝義不生と世俗の生起）：『入楞伽経』II k. 191, X k. 150 と諸経文の解釈

§40. 【反論】もしそうであるならば,『聖入楞伽〔経〕』等の中で,

構想された事物は全く存在しない．他に依る〔あり方の〕ものは存在する．捏造と否認と〔の極端〕を構想する者は破滅する[90].

と説かれたこのことは，どのように解釈されるのか.

【答論】このことについても，或る者は先述の構想されたあり方を真実のものとして捏造するが，その者の捏造を否定するために,「構想された事物は全く存在しない」(LAS II k. 191a) と説かれたのである．或る者たちは，先述の世俗の他によるあり方のものをも否定するから,「他に依る〔あり方の〕ものは存在する」(LAS II k. 191b) と説かれたのである．先述の〔捏造と否認という〕二極端を構想する者は，中道に入らないのである．断崖から転落した (*g-yang sa: prapātapatana*) 状態にいる

---

[3] YṢV$_T$ *shin tu*: MĀ *yang dag*, [4] YṢV$_T$ *pa dag kyang bstan*: MĀ *pa'ang bstan pa yin*). YṢV$_T$ と殆ど同形の k. 32 が MAV D77a3-4 に引用されている.

[89]YṢ$_{LY}$ k. 33 (= YṢ$_{Ldt}$ k. 33): *mamety aham iti proktaṃ yathā kāryavaśāj*[1] *jinaiḥ / tathā kāryavaśāt proktāḥ skandhāyatanadhātavaḥ //.* ([1] MĀ と MAV (D77a4) 所引 k. 33 *'jig rten dbang du (lokavaśāj).* LI AND YE (2014) p. 68 を見よ．MĀ と MAV 所引 k. 33 に従いそのまま訳すと,「〔勝者たちは,〕世間の人々に応じて」となる．) サンスクリット文は *Bodhicaryāvatārapañjikā* (BCAP) p. 376, 15-16 に引用されている．YṢ$_T$ k. 33: *dgos pa'i dbang gis*[2] *rgyal ba rnams // nga dang nga yi zhes gsungs ltar // phung po khams dang skye mched rnams // de bzhin dgos pa'i dbang gis gsungs //* ([2] YṢ$_T$ *gis*: YṢV$_T$ *du*). 瓜生津 ibid. p. 62 の和訳と SCHERRER-SCHAUB ibid. p. 251, 1-4 の仏訳を参照.

[90]LAS II k. 191: *nāsti vai kalpito bhāvaḥ paratantraś ca vidyate / samāropāpavādaṃ hi vikalpanto vinaśyati //.* この k. 191 は，MĀ Pūrvapakṣa D145a1 にも引用されている．MĀ Pūrvapakṣa では，この k. 191 と次に引用される LAS X k. 150 とは,「他に依るあり方である縁起するものは勝義として存在するが，その〔他に依るあり方〕のものについて構想されたあり方のものは不生起〔であること〕等」を示す経文として引用されている: (MĀ D145a2-3:) *'di las ni gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid rten cing 'bral bar 'byung ba ni don dam par yod la / de la kun brtags pa'i ngo bo nyid kyis skye ba med pa la sogs par bshad do zhes bstan par 'gyur ro //.* この k. 191 は *Satyadvayavibhaṅgavṛtti* (SDVV) D12b5 にも引用され，また『大乗広百論釈論』大正 30,p. 247b23-24 にも引用されている:遍計所執無依他起性有 妄分別失壞墮増減二邊.

から，破滅した者に等しいので，「捏造と否認と〔の極端〕を構想する者は破滅する」(LAS II k. 191cd) と説かれたのである[91].

§41. このことによって，〔『聖入楞伽〔経〕』等の中で，〕

> 一切法は，構想されたあり方としては不生起である．他に依る〔あり方〕に依拠して，人々の構想作用は生じるのである[92].

と説かれたこと〔を，中観派に対する批判とみなす解釈〕も否定されるのである．この〔経文〕によっても，先述の捏造と否認という〔二〕極端が否定されているのである．というのは，構想されるがままの他に依る〔あり方の〕ものは，勝義として不生起であるから，「構想されたあり方としては不生起」(LAS X k. 150ab$_2$) に他ならないのである．このことによっては，捏造という極端が否定されているのである．他に依る〔あり方の〕ものは世俗として生起するから，そしてその〔世俗の他に依るあり方〕に依拠して，変現するものが変現するように，他の構想作用が生起するから，従って，「他に依る〔あり方〕に依拠して，人々の構想作用は生じる」(LAS X k. 150cd) と説かれたのである．このことによっては，否認という極端が否定されたのである．世俗の生起は否認し得ないからである．

§42. 従って，あれこれの〔経典等の〕中で，他に依るあり方のものは存在すると説かれ，また諸事物は生起する等と説かれたこと一切は，愚かな者たちの恐怖の状態

---

[91] *g-yang sa* は，この場合，サンスクリット語の *prapātapatana* に対応すると思われる．例えば以下を参照：PsP$_T$ D198b1: *g-yang sa las 'dzin pa* (= PsP$_{LVP}$ p. 592, 4: *prapātapatanasaṃdhāraṇa*).

g-yang sa'i gnas la gnas pa'i phyir phung po dang 'dra bas... . Cf. 一郷 (1994) p. 304, 25-26:「懸崖の地に立っているから転落するに等しいゆえ・・・.」BNJ 85, 1-2 を参照せよ： *gang dags mtha' de gnyis su rtog par byed pa de dbu ma'i lam la mi 'jug par ston pa'i phyir du / sgro 'dogs pa dang skur 'debs pa'i // mtha' la rtog pa brlag par 'gyur // zhes gsungs te / g-yang sar lhung bas rang nyid phung bar byed pa'i phyir /.* 「この二極端を構想する者は中道に入らないことを示すために，『捏造と否認との極端を構想する者は，破滅する』と説かれたのである．断崖から転落したことで，自身を破滅させたからである.」一郷 ibid. p. 313, n. 5 を見よ. BNJ では，*g-yang sa* は「断崖」を意味しているが，*phung bar byed pa* は *'phung bar byed pa*（破滅させる）の過去形と見なされる．従って，一郷氏は *phung po* を「転落する」(*to fall down*) の意味に採るが，「破滅した者」が妥当だろうと思われる．

[92] LAS X k. 150: *parikalpitaṃ*[1] *svabhāvena sarvadharmā ajānakāḥ / paratantraṃ samāśritya vikalpo bhramate*[2] *nṛṇām //.* ([1] var. *parikalpita.* [2] var. *bhavate.*) LAS (Tib) P179b6: *kun brtags pa yi rang bzhin gyis // thams cad chos ni ma skyes pa // gzhan gyi dbang la gnas nas ni // mi yi rnam rtog 'khyam pa yin //.* k. 150cd を LAS 原典に従って訳すと，「他に依る〔あり方〕に依拠して，人々の構想作用は展開する」となる．k. 150 は MĀ Pūrvapakṣa D145a1-2 にも引用されている．また k. 150 は VY IV D106a4-5 に Vasubandhu の考えるところの了義説として引用されている．VY 所引 k. 150 は LAS 原典通りである．加えて，k. 150 は SDVV D12b5 に，MĀ 所引 k. 150 とほぼ同形で，引用されている．

を取り除くために，世俗の自性や生起に関して確立されたことを意図して説かれたのであると理解するべきであり，勝義として〔説かれたと理解するべき〕ではないのである．その〔勝義としての他に依るものの実在や事物の生起〕は，同じ経典の中で否定されているからである．すなわち，『聖入楞伽〔経〕』の中で，

> 然るに，知によって考察されるならば，他に依るものは無く，構想されたものも無い．完成した存在も無いのである．どのようにして，〔勝義としての実在や生起は〕知によって構想されるのだろうか[93]．
> 〔三〕自性は無く，〔六〕表識〔も〕無い．〔認識対象たる〕事物〔も〕無いし，アーラヤ〔識も〕無い．これらは，愚かで屍に等しい悪論理学者たちによって構想されたのである[94]．

と説かれたのである．

§43. 『聖法集〔経〕』の中でもまた，

> 良家の子息よ！ 世間に住する者は，生起と消滅に執着している．従って，大悲を有する如来は，世間の人々の恐怖の状態を取り除くために，世間的

---

[93]LAS II k. 198: *buddhyā vivecyamānaṃ tu na tantraṃ nāpi kalpitam / niṣpaṇṇo nāsti vai bhāvaḥ kathaṃ buddhyā vikalpyate //.* Cf. LAS X k. 374. MAV D68a6-7 に引用あり．MĀ では，勝義としての他に依るあり方のものの実在や事物の生起を否定するためにこの偈は引かれているが，MAP D110a7-b1 では，所知内在論を否定するために引用されている：*de ltar bcom ldan 'das kyis phyi rol gyi don yod par lta ba la dngos po rnams rang bzhin med pa nyid du bstan nas / shes bya nang gi yin par lta ba la yang bstan pa'i phyir / blo yis rnam par gzhigs na ni / zhes bya ba gsungs so /.* Cf. *Prajñāpāramitopadeśa* (PPU) D144a2-3 所引 k. 198.

[94]LAS III k. 48 (X k. 91): *na svabhāvo na vijñaptir na vastu na ca ālayaḥ / bālair vikalpitā hy ete śava-bhūtaiḥ kutārkikaiḥ //.* MAV D68a7 に引用される: *rang bzhin med cing rnam rig med // dngos po med cing kun gzhi med // ro mtshungs byis pa'i rtog ge pa // ngan pa rnams kyis 'di dag brtags //.* ここでは，Kamalaśīla の解釈 (MAP D110b3-7) を参考にして訳した：*gal te 'di dag med pa kho na yin na ni 'jig rten la ji ltar grags pa yin snyam pa la / rang bzhin med cing rnam rig med // ces bya ba la sogs pa smos te // rang bzhin ni gzhan gyi dbang gi ngo bo la sogs pa rnam pa gsum yin par dgongs so // rnam rig ces bya ba ni phyi rol gyi yul rnam par rig pa rnam pa drug gzung ngo // rnam par rig pa'i dmigs pa gang yin pa de ni dngos po'i sgrar dgongs so // pha rol po dag gis mig la sogs pa'am / bdag la sogs pa gang dag rnam par rig pa de'i rten nyid du brtags pa de dag ni rnam par rig pa'i rten yin pa'i phyir kun gzhi yin no // yang na 'jig pa'i tshe dngos po thams cad rang bzhin la sogs pa'i bag la zha bar 'gyur bas grangs can gyis yongs su brtags pa'i rang bzhin la sogs pa kun gzhi'i sgrar bzhed pa yin no // ro mtshungs zhes bya ba ni chos yang dag pa ji lta ba bzhin rnam par 'byed pa'i g-yo ba dang bral ba'i phyir shi ba dang 'dra ba rnams kyis zhes bya ba'i tha tshig ste / 'di skad du 'di dag don dam par na med pa kho na yin mod kyi / byis pas kun tu brtags pa'i dbang gis grags te yang dag par ni ma yin no zhes bstan pa yin no //.* この k. 48 は，PsP_{LVP} p. 262, 4-5 や PPU D144a3 にも引用される．

活動に従い，「生じる」・「滅する」と説いたのである．しかし，ここでは，決してどんな法も生じることはないのである[95].

と説かれたのである．

§44. 『聖般若〔経〕』の中でも，

長老 Śāriputra よ！ そのように，色形は本性を欠いている (*prakṛtiśūnya*). 本性を欠いているものは，生起することなく，消滅することも無い．生起することもなく，消滅することもないものは，他に変化することは知られない．感受作用から乃至認識作用まで，それと同様である[96].

と詳細に説かれたのである．

この中で，「本性」(*prakṛti*) とは，構想されたあり方に他ならない〔という〕ことは，論理的に正しくないのである．それ（＝構想されたあり方）は忽然と生じるもので，本性とは別物であるから，またそのよう〔な忽然と生じる構想されたあり方〕には，〔「本性」という〕言葉の意味は妥当しないからである[97].

或は又，勝義として不生起である色形等のものに対して，愚かな者たちが本性として構想した生起等のあり方が，彼らによってそれ（＝色形等）の本性として構想されたので，「本性」という言葉で表示されるべきであるならば，その場合，〔我々が〕意図した〔「本性」という言葉の〕意味と矛盾しないから，誤りは無いのである[98].

§45. 他の経典（＝『大信生起経』）の中で，

良家の子息よ！ 菩薩が諸法を，言葉通りの正しくない仕方で (*ayoniśo*)

---

[95]DhSS P46b2-3. サンスクリット文は BK I p. 199, 10-14 に見付けられる：*utpādanirodhābhiniviṣṭaḥ, kulaputra, lokasaṃniveśaḥ / tasmāt tathāgato mahākāruṇiko lokasyottrāsapadaparihārārthaṃ vyavahāravaśād uktavān utpadyate nirudhyate ceti na cātra kasyacid dharmasyotpādaḥ.* ここでの和訳はこの BK I のサンスクリット文に基づく．大正 17, 627a18-20: 善男子。爲愚癡凡夫著生滅法故。諸佛如來。以大慈悲爲護驚怖。隨順世諦作如是説諸法生滅。而一切諸法不生不滅。この DhSS の文は *Śikṣāsamuccaya* (ŚS) p. 263, 5-7, BCAP p. 589, 4-8, MAP D132b7-133a1,SDNS D288a1-2 にも引用されている．

[96]PVSPP I p. 253, 18-20: *tathā hy āyuṣman śāriputra rūpaṃ prakṛtiśūnyam / yac ca prakṛtiśūnyaṃ na tasyotpādo na vyayaḥ / yasya ca notpādo na vyayo no tasyānyathātvaṃ prajñāyate / vedanāsaṃjñāsaṃskārāḥ vijñānaṃ prakṛtiśūnyaṃ ... /.* 『大乗広百論釈論』 大正 30,p. 248a23-25 に引用されている: 佛告具壽舍利子言。色自性空。自性空故無生無滅。無生滅故無有變易。受想行識亦復如是。

[97]BNJ 86a2-3: *de ni rtog pa'i gzos glo bur du bsgrubs pa nyid kyis rang bzhin gyi sgra'i don du mi 'thad pa'i phyir ro //.*

[98]Kamalaśīla によると，勝義として不生起である事物に対して，勝義として生起すること等の本性が捏造された場合，そのような勝義の本性は，まさに構想されたものに他ならない．

考察する場合，大乗に対する信が生じることとはならないであろう．
言葉通りにではなく，意図を持った意味を正しい仕方で考察する場合，
大乗に対する信が生じることとなるであろう[99]．

と説かれたこのことについても，勝義の意図を知らず，世俗の自性をも否認する者たちは，法を正しくない仕方で考察するから，大乗〔に対する〕信が生ずることとはなり得ないので，その〔世俗の自性の否認〕が否定されるために，この〔経文〕が説かれたに過ぎないのである．どんな経典においても言葉通りの意味に執着することを除去するために，意図された意味を〔正しい仕方で〕理解するための努力を生じさせるために，そして他者の信頼を生じさせるために，〔この経文は〕説かれたのであり，中観派の教説を否定するために〔説かれたの〕ではないのである[100]．中観派の者たちは，〔無生起等の教説を〕言葉通りの意味には構想しないと以前に説明済みである[101]．

§46. そのように，『聖宝雲〔経〕』(*Ārya Ratnamegha*) の中でも，

【問い】どのようにして，菩薩は勝義を熟知した者となるのか．
【答え】良家の子息よ！ この場合，菩薩は，正しい智慧によって色形を観察し，乃至認識作用までを観察する．彼は色形を観察しながら，色形の生起を見ないのである．〔色形の〕原因 (*samudāya*) を見ないのである．

---

[99] この経文は，MĀ Pūrvapakṣa D144a7-b2 で，『大乗〔起〕信〔経〕』(*Theg pa chen po la dad pa; *Mahāyānaprasāda*) という経典名で引用されている．この経典については, fn. 75 を見よ．

'phags pa theg pa chen po la dad pa rab tu sgom pa P18b8-19a1: *rigs kyi bu byang chub sems dpa' sgra ji bzhin du tshul bzhin ma yin par chos rab tu rnam par 'pyad pa ni theg pa chen po la dad pa skye ba'i gnas ma yin no // sgra ji bzhin du ma yin gyi dgongs pa las byung ba'i don tshul bzhin yid la byed pa ni theg pa chen po la dad pa skye ba'i gnas yin no //.* これは，VY IV D102a4-5 に引用されている．また，Dharmapāla（護法）の『大乗広百論釈論』大正 30, p. 248b4-7 にも引用される：若有菩薩。如言取義不求如來所説意趣。是名於法非理作意。亦名非處信解大乗。若有菩薩不如其言而取於義。思求如來所説意趣。是名於法如理作意。亦名是處信解大乗。松下 (1987b) pp. 494(53)-493(54) 参照．

[100] BNJ 86a4-6: *dad pa cher 'byung gi mdo las // rigs kyi bu byang chub sems dpa' ... / zhes sogs gsungs pa ji ltar drang zhe na / de ni dgongs don mi shes pa'i dbang gis sgra ji bzhin du mngon zhen nas kun rdzob pa la skur ba 'debs par byed pa dgag pa dang / blo zhan pa rnams yid ches pa bskyed nas dgongs don rtogs par bya ba la 'bad pa skyed pa'i phyir / gsungs par zad de /.*

[101] MĀ D151a4-7(**§28**-**§29**), D151b3-6 (**§31**-**§32**), D152b5-7 (**§39**) を見よ．ここのチベット文は，*dbu ma pa rnams kyi ni* で始まっているが，MĀ D152b6 (**§39**) により，*kyi* を除去して，*dbu ma pa rnams ni* と読んだ方が良いかもしれない：(D152b6:) *dbu ma par smra ba rnams ni skye ba med pa la sogs pa bstan pa la sgra ji bzhin du mngon par zhen pa yang ma yin te /.* また BNJ 86b2 も参照せよ: *dbu ma pa rnams ni mdo de'i sgras zin ltar du grub par mi 'dzin pas .../..*

〔色形の〕消滅を見ないのである．同様に乃至認識作用までの生起を見ないのである．そしてその〔見ない〕ことは，勝義として〔の〕無生起に住する智慧によってであって，世俗的 (*vyāvahārika*) な自性の〔知〕によってではないのである[102].

と説かれたのである．

§47. 『聖入楞伽〔経〕』の中でも，

一切は世俗として存在する．勝義においては存在しない．諸事物が無自性であることも勝義において説かれたのである[103].

と説かれたのである．

§48. 無生起等の説を，「一切法は勝義の自性として生起し，世俗の自性として不生起である」という教えとして常に立てる者たちは，『聖宝雲〔経〕』等の中で説かれたこれら一切と全く矛盾することになるのである．〔なぜなら，〕誤った仕方で理解しているからである．すなわち，その〔経典の〕中では，色形等の一切は勝義として不生起等であることと世俗の自性として生起すること等が述べられた〔から〕である．『二諦説示〔経〕』等の中で，

Devaputra よ！ 一切法は勝義として不生起であるから，寂静である[104].

---

[102] *'phags pa dkon mchog sprin* P26b4-6. サンスクリット文は BK I p. 220, 10-18 に見られる：*kathaṃ bodhisattvo nairātmyakuśalo bhavati / iha, kulaputra, bodhisattvaḥ samyakprajñayā rūpaṃ pratyavekṣate vedanāṃ saṃjñāṃ saṃskārān vijñānaṃ pratyavekṣate / sa rūpaṃ pratyavekṣamāṇo rūpasyotpādaṃ nopalabhate / nirodhaṃ nopalabhate / samudāyaṃ nopalabhate / evaṃ vedanāyāḥ, saṃjñāyāḥ, saṃskārāṇāṃ, vijñānasyotpādaṃ nopalabhate / nirodhaṃ nopalabhate / samudāyaṃ nopalabhate / ayaṃ ca paramārthato 'nutpādavihāriṇyā prajñayā na punar vyāvahārikeṇa svabhāvena iti vistaraḥ /.* 大正 16 216b5-12, 249b23-28. またこれは，MAV D76a7-b2 に引用されている．

[103] LAS X k. 120: *sarvaṃ vidyati saṃvṛtyāṃ*[1] *paramārthe na vidyate / dharmāṇāṃ niḥsvabhāvatvaṃ paramārthe 'pi dṛśyate*[2] */ upalabdhiniḥsvabhāve saṃvṛtis tena ucyate //.* ([1] var. *saṃvṛtyā*. [2] var. *diśyate*.) *'phags pa lang kar gshegs pa* P178b2-3: *kun rdzob du ni thams cad yod // dam pa'i don du yod ma yin // chos rnams rang bzhin med pa la // dam pa'i don du 'dod na ni // dmigs pa rang bzhin med pa la // de phyir kun rdzob bstan pa yin //.* MĀ では，サンスクリット原文の *upalabdhiniḥsvabhāve* 以下の最後の句が引かれていない．また MĀ 所引の第３句（*dngos rnams ngo bo nyid med dang //*）の中の *dang* に対応する語は，原典には見付けられない．この k. 120 は MMA GNP 版割注 (G219b2-3, N161a4-5, P167a2) に引用されている：*kun rdzob tu ni thams cad yod / dam pa'i don tu yod ma yin / dngos rnams ngo bo nyid med kyang / dam pa'i don du bstan pa yin /.* 割注所引の k. 120 については，fn. 52 を見よ．ここでは，サンスクリット原文と MMA 割注所引の k. 120 とを比較・総合して翻訳することとした．MĀ 所引の k. 120 をそのまま和訳すると次のようになる：「一切は世俗として存在する．勝義においては存在しない．諸事物の無自性〔性〕と勝義も説かれたのである．」

云々と説かれたこととも矛盾するであろう．

§49. さらに，『聖入楞伽〔経〕』の中でも，

> 諸存在は世俗として生じる．勝義としては自性の無いものである．無自性である諸存在に対する誤認（迷乱 *bhrānti*），それが世俗と認められる[105]．

と説かれたのである．

§50. 『聖般若〔経〕』の中でも，

> Subhūti よ！ 誤り（*viparyāsa;* 顛倒）より他には，愚かな一般人たちが住して業を形成するところの実在物 (*vastu*) は，毛髪の先端に付着したものほどでさえも，無いのである[106]．

と説かれたこととも矛盾することになるのである．実在物それ自体の本性は，最高に

---

[104] *'phags pa kun dzob dang don dam pa'i bden pa bstan pa* P266a3: *lha'i bu don dam par shin du ma byung ba'i phyir chos thams cad ni zhi ba'o //.*

[105] LAS X k. 429: *bhāvā vidyanti saṃvṛtyā paramārthe na bhāvakāḥ / niḥsvabhāveṣu yā bhrāntis tat satyaṃ saṃvṛtir bhavet //.* k. 429 は BK I p. 202, 5-6 に引用される：*bhāvā jāyante saṃvṛtyā paramārthe 'svabhāvakāḥ / niḥsvabhāveṣu bhāveṣu bhrāntiḥ sā saṃvṛtir matā //.* ここでの和訳は，BK I 所引の k. 429 に基づく．k. 429 は，SDVV D9a3, MMA D139b3 G221b2-3 N162b5-6 P168b4 にも引用あり．SDVV, BK I, MĀ 所引 k. 429 のチベット語訳は一致している．MĀ と MMA D139b3 所引 k. 429 もほぼ一致している．Cf. AAA p. 420, 13-14.

niḥsvabhāveṣu bhāveṣu bhrāntiḥ. Kamalaśīla によると，「真実として無自性である諸事物に対して，それとは反対の〔有自性の〕あり方を捏造する誤認知（迷乱知 *'khrul pa'i blo*）」が世俗である．誤認知は，それによって真実が覆われ妨げられるかのように，作用するからである．MĀ D228a7-b1, P254a2-4 を見よ（そこでも，ここと全く同形の LAS X k. 429 が引かれている）：*dngos po yang dag par (P par: D pa) ngo bo nyid med pa dag la yang de las bzlog pa'i rnam par sgro 'dogs par (D par: P pa) 'khrul pa'i blo gang yin pa de ni kun rdzob ces bya ste / 'di 'am 'dis de kho na nyid kun tu sgrib pa lta bur byed 'gegs pa lta bur byed pa'i phyir ro // de skad du mdo las kyang / dngos rnams skye ba kun rdzob tu // dam pa'i don du rang bzhin med // rang bzhin med la 'khrul pa gang // de ni yang dag kun rdzob 'dod // (D //: P om.) ces gsungs so //.*（注記：MMA の GNP 版割注 (G221b2-3, N162b5-6, P168b4) も，k. 429c に対して，*rang bzhin med la gang [bden dngos su] 'khrul pa['i blo]*（「無自性である諸存在に対して〔実在する事物として〕誤認〔する知〕」）と注釈する（[ ] 内の語が割注）．）

de ni yang dag kun rdzob 'dod. MĀ 所引 k. 429d を訳すと，「それが実世俗と認められる」となる．しかし，BK I のサンスクリット文は *sā saṃvṛtir matā* であり，「実世俗」の「実」(*yang dag*) に相当する語はない. BK I の k. 429d のチベット語訳 (D29b4-5) は，MĀ のものと同形である．

[106] *Aṣṭādaśasāhasrikā prajñāpāramitā* (ADSPP) Parivarta 80, p. 123, 3-5: *(Bhagavān āha:) nāsti Subhūte antaśo bala(sic!)agrakoṭīnikṣepamātram api vastu yatra sthitvā bālapṛthagjanā karmābhisaṃskurvanti anyatra viparyāsena.* 『摩訶般若波羅蜜經』 大正 8 412c28-29：佛告須菩提。凡夫人所著起業處。無如毛髪許實事。但顛倒故。これは，SDVV D9a4-5 にも引用される．Dharmapāla（護法）の『大乗広百論釈論』 大正 30, p. 249a12-13 にも引用される： 佛告善現。無毛端量實物可依。愚夫異生造諸業行。唯有顛倒與彼爲依。

微細なものでも，否定されたからである．

1.2.1.7　顚倒を特質とするもの・虚妄分別は真実在ではない

§51. 【反論】〔『般若経』の中で〕誤り（顚倒）は否定されていないから，誤りを特質とする実在物がまさにあるのである．他ならぬそのことがまた，「無自性である諸存在に対する誤認，それが世俗と認められる」(LAS X k. 429cd) と言われたのである[107].

【答論】そのことも正しくない．もし誤り〔を特質とする〕実在物があるならば，その場合「実在物の自性は，最高に微細なものでも，否定された」という言葉は，どのようにして耳を悦ばすものとなろうか. 経典の意味を，「僅かな実在物も, 全く完全に非存在であるけれども，愚かな者たちは，誤りによって構想された，事物の非真実の本性に執着することで，業を形成するのである」と分析するならば，その場合には，それは耳を悦ばすものとなるであろう．『聖三昧王〔経〕』(*Ārya Samādhirāja*) の中で，

> 一切法は，常に自性を欠いている (*svabhāvaśūnya*)．勝者の子息たちは
> 事物を注意深く観察する．あらゆる存在は，すべてことごとく空である．
> 非仏教徒たちの空性は部分的である[108].

という詩頌が説かれたが，これも正しく解釈されることになるであろう．

§52. さらに，他の経典（＝『聖入楞伽経』）の中で，

> 三種の生存は仮設に過ぎず，事物の自性として存在しない．〔悪しき〕
> 論理学者たちは，仮設されたものを事物の自性として構想する[109].

---

[107]対論者は，無自性である諸存在に対する誤認（迷乱）を誤り（顚倒）と見なし，顚倒（＝迷乱）というあり方（相）は真実ではないが，顚倒（＝迷乱）という特質をもつ「他に依るあり方」（依他起性）は実在するだろうと反論しているものと考えられる． MVBh (ad MV III-3bcd) p. 38, 2-3: *paratantralakṣaṇaṃ sac ca na ca tatvato bhrāntatvād*[1] ... /. ([1] *Madhyāntavibhāgaṭīkā* (MVṬ) p. 113, 12: *bhrāntimātratvād*)「『存在するが真実としてではない』ことは，他に依るものの特徴（依他起相）である.〔それは〕迷乱したものとしてあるからである（MVṬ: 迷乱に他ならないからである）.」MVṬ p. 113, 9-14 と山口 (1935) p. 174, 1-5 を参照せよ.

[108]*Samādhirāja* (SR) IX k. 47, p. 51, 1-4: *svabhāvaśūnyāḥ sada sarvadharmā vastuṃ vibhāventi jināna putrāḥ / sarveṇa sarvaṃ bhava sarvaśūnyaṃ prādeśikī śūnyatā tīrthikānām //.* 『月燈三昧經』 大正 15, 558b29-c1 : 諸法體性空佛子觀是事 一切有悉空外道空少分．これは, MAV D81b7-82a1 と MAP D132b3-4 に引用される.

[109]LAS X k. 86: *prajñaptimātraṃ tribhavaṃ nāsti vastu svabhāvataḥ / prajñapti*[1]*-vastubhāvena*

と説かれたそのことも正しく解釈されることになるであろう.

§53. 誤り（顚倒）等が実在することはあり得ないのである．すなわち, 汝は「非真実の構想作用（*abhūtaparikalpa;* 虚妄分別）とは, 三界の心と心作用である」と言い, それら〔の心・心作用〕は非真実の形象を捉えて顕現するから, 誤り〔や誤認〕に他ならないと述べたのである[110]．虚偽なる自性を捉えて, 同本性 (*tādātmya*) の〔虚偽なる〕ものとして顕現する〔心・心作用〕が，どうして真実在 (*yang dag pa'i dngos po nyid*) であろうか. 同一性と別異性とは，相互に排除し合って存在することを特徴とする (*parasparaparihārasthitilakṣaṇa*) ものであるので，同一本性のものが他に変化することは矛盾するからである．そうでないならば（＝矛盾しないならば），サーンキャ学派等によって構想された第一原因 (*pradhāna*) 等の変様 (*pariṇāma*) それ自体を嫌悪することが〔どうして〕あるだろうか.〔汝は嫌悪しないはずである.〕そうでないなら (*gang gyis na; yena*)，汝は〔変様説を嫌悪するので，その説だけでなく〕それら（＝真実在の心・心作用）をも承認し〔得〕ないのである[111]．まさにそれゆえに,

---

kalpayiṣyanti tārkikāḥ //. ([1] var. *prajñaptiṃ*.) Cf. LAS III k. 52: *prajñaptimātrān tribhavaṃ nāsti vastusvabhāvataḥ / prajñaptivastubhāvena kalpayiṣyanti tārkikāḥ //.* ここでは，III k. 52 と X k. 86 両方のサンスクリット文を参照して翻訳した.

[110]MV I 8ab: *abhūtaparikalpas tu cittacaittās tridhātukāḥ /.*

Triṃśikābhāṣya (TrBh) p. 108, 7-9 を見よ: *adhyāropitārthākārās traidhātukās cittacaittā vikalpa ucyate / yathoktam / abhūtaparikalpas tu cittacaittās traidhātukā iti /* 「構想作用とは，捏造された対象の形象をもった，三界の心と心作用であるといわれる. 次のように〔『中辺分別論』に〕説かれている :『非真実の構想作用とは，三界の心と心作用である.』」*Triṃśikāṭīkā* (TrṬ) p. 489, 1-4 を参照: *ye traidhātukāś cittacaittā adhyāropitākāreṇa pravartante te vikalpaśabdenocyante / atra Madhyāntavibhāgaṃ jñāpakam āha / yathoktam ity ādi / tatra hy uktam traidhātukāś cittacaittā abhūtaparikalpā iti /* 「捏造された形象をもって機能する三界の心と心作用が,『構想作用』という語で説かれたのである. ここで,『中辺分別論』を証拠として,『次のように説かれている』云々と説いたのである. 実にそこでは,『非真実の構想作用とは，三界の心と心作用である』と説かれているのである.」Dharmapāla（護法）の『大乗広百論釈論』 大正 30, p. 249a13-19 も見よ: 顛倒即是虚妄分別。虚妄分別即心心法。・・・（略）・・・是則應如色等諸法顛倒境故其體實無。又境既無識云何有。

Kamalaśīla はここで瑜伽行派説を念頭に置き,「誤り（顚倒）＝非真実の構想作用（虚妄分別）」とみなし，瑜伽行派は虚妄分別は他に依るあり方（依他起性）でもあると考えるので，顚倒も他に依るあり方として実在すると考えるかもしれないが，それはありえないと批判しているのである.

「汝」(*khyed*). ここで「汝」と言われているのは，瑜伽行派の論師である．MV I 8ab に言及し，さらに下に見るように，サーンキャ学派の変様 (*pariṇāma*) 説を嫌悪し批判した者であるので，AKBh の中でその説の批判した Vasubandhu（世親）を指しているとも思われるが，しかし，誤り（顚倒）を虚妄分別と解釈し明示したのは，上で指摘したように，Dharmapāla（護法）ではないかとも思われるので，ここの箇所のみから即座に，この「汝」が誰であるのか，特定するのは困難である.

[111]*gang gyis na (yena).* MĀ に度々現れるこの *gang gyis na (yena)* 節を伴った文については，KEIRA

〔『中論』の中で,〕

> また或いは，本性 (*prakṛti*) が存在しているならば，何が他に変化することになるのだろうか[112].

と説かれたのである．

『聖二諦説示〔経〕』の中でも，

> Devaputra よ！我 (*ātman*) が勝義として我ではないように, Devaputra よ！諸々の煩悩も勝義として煩悩ではないのである．Devaputra よ！もし勝義として我が真実のものであるならば，Devaputra よ！ それゆえ，煩悩も勝義として真実のものであろう[113].

と説かれたのである． この〔経文〕によっては，次のように，「我〔や心〕は虚偽なる形象を捉えて活動するから，我〔や心〕と同様に，一切の煩悩〔も〕まさに虚偽なる自性のものである」と説かれたことになるのである．そうならば，〔我や心と同様，煩悩という心作用一切が虚偽なる自性をもつことからの〕含意として，「三界の心・心作用一切は虚偽なる形象を捉えて働くから，〔心・心作用〕それ自体の持つ形象と同様に，その〔虚偽なる形象〕と不異であるから，〔心・心作用も〕まさに虚偽なる自性のものである」と説かれたに他ならないのである．菩薩に対しては，〔この経文は〕特に，「一切の構想作用 (*vikalpa*) は煩悩〔の原因〕であるので，それ（＝我や心）が虚偽なものであるならば，一切の構想作用も虚偽なものに他ならないのである」と全く明らかに説いているのである[114].

(2004) fns. 154 と 240，また本稿 fn. 24 も見よ．Cf. 一郷 (1994) p. 308, 26-27:「なにゆえ，汝がそれらを承認しないことがありましょうか.」一郷氏はこの *gang gyis na (yena)* を疑問詞と見なしているようである．

[112]MMK$_{Ye}$ 15-9cd: *prakṛtau kasya vā satyām anyathātvaṃ bhaviṣyati /.* MĀ 所引の MMK 15-9cd をそのまま訳せば，次のようにも訳しうる：「もし本性が存在しているならば，どうして他に変化するだろうか.」(*gal te ngo bo nyid yod na // ji lta bur na gzhan du 'gyur //.*)

[113]*'phags pa kun dzob dang don dam pa'i bden pa bstan pa* P266a1-2: *ji ltar bdag don dam par na bdag med pa de bzhin du lha'i bu don dam par na nyon mongs pa rnams kyang nyon mongs pa ma yin no / lha'i bu de ste don dam par na bdag de bzhin nyid yin na ni lha'i bu don dam par na nyon mongs pa yang de bzhin nyid du 'gyur ro //.*『清淨毘尼方廣經』大正 24, 1078b23-24 も見よ: 天子。若我無我煩惱無煩惱。若我實者煩惱亦實。

[114]BNJ 88a1-2 参照: *de bzhin du rnam rig pas 'dod pa'i yang dag pa ma yin pa'i kun rtog la yang tshul de rig par bya'o //*「そのように,〔唯〕識派によって主張された非真実の構想作用についてもそのあり方

1.2.1.8　五蘊等は勝義の本性をもつものではない：『入楞伽経』X k. 135 (III k. 35) と諸経文の解釈

§54. 【反論】もし事物の勝義の本性 (*rang gi ngo bo*) が全く非存在であるならば，然るにその場合，〔『聖入楞伽経』の中で，〕

> 〔五〕蘊には，我は無い．我にも〔五〕蘊は存在しない．それらは構想された通りには存在しない．しかし，それらは存在しないというので〔も〕ない[115].

と説かれたこの〔経文〕はどのように解釈されるのだろうか．これによれば，二つの否定により，〔五〕蘊等は〔勝義の自性をもつものとして〕存在することが説かれたのである[116].

が理解されるべきである.」Kamalaśīla の考えでは，瑜伽行派が説く非真実の構想作用（＝三界の心・心作用）それ自体は，実在ではなく，虚偽なもの，即ち世俗的な存在である．

MMK$_{Ye}$ 23-3 を参照: *ātmano 'stitvanāstitve na kathaṃcic ca sidhyataḥ / taṃ vināstitvanāstitve kleśānāṃ sidhyataḥ katham //.*「我の存在と非存在とはどのようにしても成立しない．それ（＝我）無くして，煩悩の存在と非存在とがどうして成立しようか.」煩悩の拠り所である我や心が成立しない場合，煩悩も成立しない． ibid. 23-4 も参照せよ．また，PsP$_{LVP}$ (ad MMK 23-4) p. 454, 2-3 も参照: *sa cāśrayaḥ parikalpyamāna ātmā vā cittaṃ vā bhavet /.*「そしてその想定されている拠り所は，我かあるいは心であろう.」拠り所としての我や心が虚偽なもので不成立の場合，心に依拠する心作用は虚偽で不成立であるし，また一切の構想作用も虚偽で不成立のものとなるであろう．

vikalpa が煩悩の原因であることについては，以下を見よ：MMK$_{Ye}$ 18-5b: *karmakleśā vikalpataḥ /.*「業と煩悩は分析的思惟 (*vikalpa*) から〔起こる〕.」 ibid. 23-1ab: *saṃkalpaprabhavo rāgo dveṣo mohaś ca kathyate /.*「貪り（貪）・瞋り（瞋）・愚かさ（痴）は構想的思惟から生じると説かれる.」*Satyadvaya-vibhaṅgakārikā* (SDVK) 33 も参照せよ: *sems dang sems 'byung khams gsum pa // sgro btags rnam pa can rtog yin // de dag 'ching ba'i rgyu nyid du // ji ltar gzigs pa de bzhin gsungs //.*「構想作用とは，捏造された形象をもった，三界の心・心作用である．それら（心・心作用）が束縛の原因に他ならないと〔如来は〕見たとおりに説いたのである.」SDVK 33ab ≒ TrBh p. 108, 7 については，fn. 110 を見よ．

「菩薩」(*byang chub sems dpa'*). この「菩薩」とは，一般名詞ではなく，ある特定個人の瑜伽行派論師を指していると思われる．先述の「汝」(*khyed*) と同一人物であろう．fn. 110 を見よ．

[115]LAS X k. 135 (III k. 35): *na hy ātmā vidyate skandhe (III k. 135: skandhaiḥ) skandhāś caiva hi nātmani / na te yathā vikalpyante na ca te vai na santi ca //.* MĀ Pūrvapakṣa では，これは D145a3 に引用されている．またこれは，VY IV D106a3 において，Vasubandhu の考える了義説として引用されている．

[116]MĀ Pūrvapakṣa D145a3-4: *dgag pa 'di gnyis kyis kyang phung po rnams yod pa nyid du bstan pa yin no //* :「この二つの否定によっても，〔五〕蘊等は〔構想されたあり方としては非存在であるが，他に依るあり方としては勝義として〕存在することが説かれたのである.」Pūrvapakṣa においては，この k. 135 は，LAS II k. 191 と X k. 150 による中観派説批判に続いて引用されており，その二つの詩頌同様，k. 135 も，「諸法は他に依るあり方としては勝義として存在するが，構想されたあり方としては不生起・非存在であること」を示す経文として引用されていると思われる．MĀ D145a2-3 と fn. 90 とを見よ．他方，しかしながら，MĀ 本文の *dgag pa ('di) gnyis* が何を表しているのかあまり明瞭で

ない．k. 135cd には否定辞 *na* が三つあるからであり，k. 135 に関する議論の背景を考慮に入れると，MĀ のこの語句については以下の二つの解釈 (1)(2) が可能と思われるからである：

(1).「それらは構想された（＝捏造された）通りには存在し**ない**」・「それらは存在しない（＝否認される）というのでも**ない**」という二つの否定，即ち，捏造と否認との二つの否定を指すと見なす解釈．*Bodhisattvabhūmi* (BBh) では，捏造と否認の二つが否定され，それら二つを離れて存在するのが諸法の勝義の自性であり，その自性は無分別知の対象領域で，それはまた諸法の言語表現し得ない本質であることが説かれている．BBh$_{TK}$ p. 96, 4-11: (BBh$_{W}$ pp. 43, 24-44, 9:) *tatra kayā yuktyā nirabhilāpya-svabhāvatā sarvadharmāṇāṃ pratyavagantavyā // yeyaṃ svalakṣaṇaprajñaptir dharmāṇāṃ ... prajñapti-mātram eva tad veditavyam na svabhāvo nāpi ca tadvinirmuktas tadanyo vāggocaro vāgviṣayaḥ // evaṃ sati na svabhāvo dharmāṇāṃ tathā vidyate yathābhilapyate // na ca punaḥ sarveṇa sarvaṃ na vidyate // sa punar evam avidyamāno na ca sarveṇa sarvaṃ avidyamānaḥ kathaṃ vidyate // asadbhūtasamāropāsaṃ-grāhavivarjitaś ca (BBh$_{W}$ -vivarjito) bhūtāpavādāsaṃgrāhavivarjitaś ca vidyate // sa punaḥ pāramārthikaḥ svabhāvaḥ sarvadharmāṇāṃ nirvikalpasyaiva jñānasya gocato veditavyaḥ //* 「さて，どのような道理によって，一切法は言語表現し得ない自性をもつと理解すべきであるのか．諸法にとって，何であれ自相の仮設・・・（省略）・・・それは単なる仮設に他ならず，〔諸法の〕自性ではないし，またその〔自性〕を離れた，その〔自性〕とは別のものが語の〔適用〕領域，語の対象なのでもないと理解すべきである．そうであるならば，諸法の自性は，言語表現された通りに，その通りに存在するのではない．しかしまた，全く存在しないというのでもない．それでは，その〔自性〕は，そのように〔言語表現された通りに〕は存在しておらず，しかし全く存在していないというのでもないならば，どのように存在するのか．実在していないものを実在すると捏造する誤った把捉を離れたものとして，かつ，実在するものを否認する誤った把捉を離れたものとして存在するのである．そして，それが一切法の勝義の自性であり，まさに無分別の知の対象領域であると理解するべきである．」

(2).「二重否定」と見なす解釈．MĀ 本文における「（この）二つの否定」(*dgag pa ('di) gnyis*) とは，「存在し**ない**というのでも**ない**」(*na ca te vai na santi ca //*) という語句における二つの否定辞 *na* により「二重否定」を意味し，「（この）二重否定によって，五蘊等は〔言語表現し得ない本質＝勝義の自性をもつものとして〕存在することが説かれたのである」と解釈することも可能と思われる．VYṬ D269a6 P152a4 も参照せよ：*de dag (D dag: P ltar) med pa'ang (P pa'ang: D pa'ong) ma yin no (D no: P no //) zhes bya ba ni de dag brjod du med pa'i ngo bor ro //* 「『それらは存在しないというのでもない』というのは，それらは言語表現し得ない本性をもつものとして〔存在しないのでもない（＝存在する）ということ〕である．」（注記：*Satyadvayavibhaṅgapañjikā* (SDVP) D24b2 を見よ：*ma yin te zhes bya ba ni mi snang zhes bya bar sbyar ro // dgag pa gnyis kyis ni snang ba kho na'o zhes bya bar bstan to //.* ここでの「二つの否定（辞）」(*dgag pa gnyis*) という語も，文の内容からして，「二重否定」を意味していると解釈可能である．）

dgag pa ('di) gnyis の意味を上の (1)(2) どちらに解釈しても，MĀ のここでの対論者は，「事物の勝義の本性が全く非存在であるならば，LAS X k. 135 (III k. 35) の経文と矛盾するから，やはり五蘊等は勝義の自性をもつものとして存在していると認めるべきである」と言っていると思われる．

BBh においては，「言語表現の基体」であり，かつ「言語表現し得ない本質をもつ勝義の実在」である事物 (*vastu*) が説かれ，それは，「仮設のための語の原因である基体，仮設のための語の原因である拠り所であり，言語表現し得ない本質を持つ点で勝義の実在である *vastu*」と述べられている：(BBh$_{TK}$ p. 98, 6-7, BBh$_{W}$ p. 45, 16-18:) *prajñaptivādanimittādhiṣṭhānaṃ prajñaptivādanimittasaṃniśrayaṃ nirabhi-lāpyātmakatayā paramārthasadbhūtaṃ vastv ...* . 高橋 (2005) p. 18 を見よ．上に見た「諸法の勝義の自性」とは，この *vastu* の「言語表現し得ない本質」のことである．高橋 ibid. pp. 22-23 参照．Vasubandhu も

【答論】この〔経文〕は，〔五蘊等が勝義の自性をもつものとして存在することの〕証拠とは全くならないのである[117]．というのは，この〔経文の〕なかで，「それらは構想された通りには存在しない」(LAS X k. 135c) というこの〔文〕によっては，〔それらが〕真実として存在することが否定されたから，そして「しかし，それらは存在しないというのでもない」(LAS X k. 135d) という〔文〕によっては，これらは，世間的活動上は，顕現した通りに存在することが説かれたから，非仏教徒によって構想された我は世俗としても全く非存在であるが，諸蘊は世間的活動上はまさに存在するのであり，真実として〔存在するの〕ではない，と明らかに説かれたに他ならないのである．そうでないならば（＝上記二文の意味をそれぞれ，「真実としては非存在」・「世俗としては顕現した通りに存在」と解釈しないならば），その場合，同一のもの（＝諸蘊）について，「〔それは〕非存在である」と説いてから，さらに，「〔それは〕存在する」と説くことは，どうして適切なことであろうか．

VY においてこの *vastu* の成立を承認していると考えられる．VY D111a4-5 において，「言語表現は事物（基盤）をもたないもの (*dngos po med pa can*) でもない．その事物 (*dngos po: vastu;* 基盤) とは何であるのか．聖者たちが，聖知と聖見によって，言語表現し得ないものとして正等覚したものである」という SNS (P. 35, 19-23 = P. 36, 3-7) の文を引用し受け入れているからである：*de yang brjod pa ni dngos po med pa can yang ma yin te / dngos po de yang gang zhe na / 'phags pa rnams kyis 'phags pa'i shes pa dang 'phags pa'i mthong bas brjod du med par mngon par rdzogs par sangs rgyas pa gang yin pa ste /.*（注記：この SNS の文は，MĀ D162a6-b1 に引用され，Kamalaśīla はそこで，聖智の対象であり，一切法無我を特徴とする「法界」(*dharmadhātu*) が，存在に執着している人たちの恐怖の状態を取り除くために，*vastu* という語で説かれたのだ，と説明する．）また，Vasubandhu は VY IV D110a6-7 においても，「世俗であっても，何らかのものは必ず実在する基盤として (*dngos su: *vastutas*) 認めなければならないだろう．あるいは，それも存在しないならば，どうして世俗として存在すると説かれたのか」と述べ，世俗として存在するものにとっても，基盤として実在するもの，即ち *vastu* を承認すべきであると説いている：*kun rdzob kyang kha cig gdon mi za bar dngos su khas blang bar bya bar 'gyur ro // yang na de yang med na ni ji ltar kun rdzob tu yod pa nyid du gsungs pa yin /*.

Cf. 松下 (1987a), p. 896(125), 5-12. 松下氏は，ここで問題とされる LAS X k. 135 (III k. 35) について，これは「『釈軌論』に了義説として引かれる経文であるが，MĀ ではそれと解釈が異なる様に見える」(p. 896(125), 8-10) と述べ，またここでの議論は，「『五蘊が存在する』と説かれているから一切法無自性ではないと無自性説を批判するが，これは五蘊を仮有とする瑜伽行派の立場と相違する」(p. 896(125), 10-12) ので，MĀ での対論者は瑜伽行派ではないと考えているようである．しかしながら，Vasubandhu がなぜこの経文を了義説と見なしたのかを考えると，Vasubandhu も MĀ の対論者もこの経文では上に見た *vastu* の成立について述べている，と解釈して矛盾はないと思われる．従って，MĀ のここでの対論者を瑜伽行派の者と見なすことは可能だと思われる．

[117] *khungs su mi rung (ba)*. AKBh p. 146, 14 における用例から，サンスクリットの原語を *ajñāpaka* とみなして訳した．fn. 40 も参照せよ．Cf. 森山 (1994) p. 75, 20: 「これは，真実を知らせるものではない (*ajñāpaka*).」

§55. 『聖梵天所問〔経〕』(*Ārya Brahmaparipṛcchā*) の中で，〔五〕蘊の無自性が真実として説かれたこととも矛盾するであろう．それは，次のように，

> 〔五〕蘊は不生起で，無生起であると完全に知る者は，世間において実践するが，この世間には住しないのである[118].

と説かれた如くである．

§56. 『聖宝雲〔経〕』の中でも，諸蘊は勝義として全く非存在であるが，世俗としてはまさに存在するのであると全く明瞭に説かれたのである．〔すなわち,〕

> 良家の子息よ！十法を具えた菩薩は，世俗真理を熟知しているのである．
> 【問い】十とは何か．
> 【答え】即ち，色形を仮設するが，勝義として色形を認識しないし，執着もしない．感受作用，表象作用，形成作用，認識作用もそれ（＝色形）と同様である[119].

と詳細に説かれている．

§57. 『聖宝蔵〔経〕』(*Ārya Ratnākara*) の中でも，

> Ravidatta よ！即ち，例えば，虚空中には，絵画が生じたことはなかったし，生じることもないだろう．不生不滅で，行くことも来ることも無く，生まれることもなく，死ぬこともない．成ずることもなく，表現されることもない．従って，〔それは〕言語慣習に過ぎず，世俗に過ぎないのである．
> Ravidatta よ！ 同様に，色形乃至認識作用が生じたことはなかったし，生じることもないだろう．乃至同様に，〔それらは〕世俗に過ぎないのである[120].

という内容で詳細に説かれたことは，〔『聖入楞伽経』 X k.135 の〕意味と結び付け

---

[118] *'phags pa tshangs pa khyad par sems kyis shus pa (Ārya Brahmadattaparipṛcchā)* P38a7-8: *ma skyes pa dang ma byung bar // gang gis phung po kun shes pa // de dag 'jig rten spyod 'gyur yang // 'jig rten 'di la 'di mi gnas so //.*

[119] *'phags pa dkon mchog sprin* P104b5-7: *rigs kyi bu chos bcu dang ldan na byang chub sems dpa' kun rdzob la mkhas pa rnams yin no / bcu gang zhe na / 'di lta ste / gzugs su'ang 'dogs la don dam par na gzugs su'ang mi dmigs shing mngon par mi chags so // de bzhin du tshol ba dang / 'du shes dang / 'du byed rnams dang / rnam par shes pa yang 'dogs la / don dam par na rnam par shes pa yang mi dmigs shing mngon par mi chags so //.* この箇所は，MAV D70a6-7 に引用されている．

[120] *'phags pa dkon mchog 'byung gnas (Ārya Ratnākara)* P289a1-b8 で説かれる内容の要約と思われる．

られるべきである．

1.2.1.9 『勝義大空性経』中の文解釈

§58. 【反論】それでは，『勝義大空性〔経〕』(*Paramārthaśūnyatā*) の中で，

業も存在する．異熟も存在する．行為主体（*kāraka* 作者）は認められない[121]．

と説かれたことと矛盾するであろう．というのは，もし勝義として業等が存在するならば，その場合，一切の事物は無自性でないことになるであろう．或いは又，世俗として〔業等が存在するの〕であるならば，その場合，行為主体も世俗として存在するので，「行為主体は認められない」と述べられるべきではない[122]．

---

[121] *Paramārthaśūnyatāsūtra*（『勝義空性経』）『雑阿含』 第 335 経 大正 2, 92c18: 有業報而無作者。サンスクリット原文は，AKBh p. 129, 9, p. 468, 20-21 に見付けられる：*asti karmāsti vipākaḥ kārakas tu nopalabhyate ... /.* これは，MĀ Pūrvapakṣa D145a4 にも引用される．またこれは，MAtBh IV pp. 261, 20-262, 1 にも引用される．『勝義空性経』のチベット語訳全文は，AKBh の註釈書である *Upāyikā* から回収できる．松田 (1984) pp. 96-97 を見よ．また，本庄 (2014) pp. 349-351 も参照．

[122] MĀ Pūrvapakṣa D145a4-5: *'di ltar gal te don dam par las kyang yod / rnam par smin pa yang yod na ni de'i tshe chos thams cad ngo bo nyid med par mi 'gyur ro // 'on te kun rdzob tu yod na ni de'i tshe byed pa po yang kun rdzob tu yod pas byed pa po mi dmigs so zhes brjod par mi bya'o //.* この反論は，VY IV D109b4-5 に説かれる反論者の説にほぼ一致する．VY において，その反論者は声聞であり，説一切有部の学説に依拠して反論しているようである．有部の学説によると，「行為主体（作者）」は世俗として存在するもの (*saṃvṛtisat;* 世俗有) であるが，「業と異熟」は勝義として存在するもの (*paramārthasat;* 勝義有) である．『婆沙論』大正 27, 463b22-23: 作者受者是世俗有. 業異熟果是勝義有. また，『婆沙論』の 463b27 では，個我（*pudgala;* 補特伽羅）は「仮」（＝仮有）であり，五蘊は「実」（＝実有: *dravyasat;* 実体としての存在）であると説かれている：如是補特伽羅是假. 色等五蘊是實. 安井 (1970) p. 51 参照.

この声聞説（有部説）に対する Vasubandhu の答えは次のように要約されうる：「*pudgala*（＝行為主体・作者）は五蘊にその名が仮設されたものであるから, 世俗としての存在（世俗有）であるが, 実体としての存在（実有）ではない. 業と異熟は世俗有であり，かつ実有である. しかし，それらは世間智の対象であるから, 勝義としての存在（勝義有）ではない. 勝義 (*paramārtha*) とは, 勝れた (*parama*) 出世間智の対象 (*artha*) であり，その対象とは, 言語表現し得ない共通相 (*brjod du med pa'i spyi'i mtshan nyid: *nir-/an-abhilāpyasāmānyalakṣaṇa;* 離言の共相) である.」 VY D109b7-110a2: *gang zag kun rdzob tu yod kyi rdzas su ni ma yin te / phung po rnams la de'i ming gdags pa'i phyir ro // las dang rnam par smin pa dag ni kun rdzob tu rdzas su yod / don dam par ni med de / 'jig rten pa'i shes pa'i yul yin pa'i phyir ro // dam pa ni ye shes 'jig rten las 'das pa yin te / de'i don yin pas don dam pa'o // de gnyis kyi rang gi mtshan nyid ni de'i yul ma yin te / de'i yul ni brjod du med pa'i spyi'i (P spyi'i: D phyi'i) mtshan nyid yin pa'i phyir ro //.* 以上からして，Vasubandhu は, この声聞の反論に対して，自分たちは声聞とは異なり，一切法無自性説を（文字通りの意味としてではないが）承認するので，「業と異熟」を勝義有とは認めない. 業も異熟も行為主体も世俗有である.「行為主体は認められない」というのは，行為主体は世俗有であっても，実有としては認められないということである，と答えたのである.

【答論】この〔経文〕についても，以前と同様に，矛盾はないのである．というのは，業と果報とは世俗のみとして存在するに他ならないのだが，非仏教徒によって構想された行為主体は，世俗においてさえ，全く非存在であると説かれたのだから，矛盾の余地は何処にあるだろうか[123].

VY において Vasubandhu は,『勝義空性経』に関するこの議論により，声聞説批判を行っただけではなく，一切法無自性説を文字通りの意味で理解する一部の大乗者たちをも批判しているようである．声聞によるこの反論は，一切法無自性説批判でもあるので，その一部の大乗者たちに対しても有効であるが，その大乗者たちは無自性説を文字通りの意味で理解するので，その声聞の反論に答えられないであろうというのである．VY D110a4-5: *yang theg pa chen po pa kha cig thams cad rang gi mtshan nyid du ni med pa kho na yin la / kun rdzob tu ni bcon ldan 'das kyis chos rnams yod pa nyid du bstan to zhes sgra ji bzhin pa nyid kyi don yin par brjod pa gang yin pa de dag la ji skad bstan pa'i brtsad pa 'di yang 'byung bar 'gyur ro //.*

Vasubandhu は, 勝義とは出世間智の対象である「言語表現し得ない共通相」であると言い，従って，諸法には勝義として「言語表現し得ない本質・自性」があると考えているので，無自性説を，文字通りの意味で，即ち「諸法には全くどんな自性もない」という意味で理解しているのではない．彼は，言語表現・仮設の語の基体であり，言語表現し得ない本質をもつ *vastu* を承認しており，世俗であっても，何らかのものが，実在する基盤として承認されなければならず，その基盤としての *vastu* が存在しないなら，世俗有は成立しないと考えているのである．VY D111a4-5, D110a6-7 と fn. 116 とを見よ．Vasubandhu は，無自性説を，文字通りの意味で理解するのではなく，この *vastu* の成立を意味するものとして理解する者は，世俗有の成立と実有と実有でないものとの区別も説明できるので，声聞のこの反論に答えられるが，無自性説を文字通りの意味で理解する一部の大乗者たちには答えられないだろうと，その者たちの考えを批判しているのである．堀内 (2009) pp. 136-146 参照.

[123]Vasubandhu は, 一切法無自性説を文字通りの意味で理解する者たちは声聞のこの反論に答えられないであろうと述べたが，Kamalaśīla は既に,「中観派は一切法無自性説を文字通りの意味で理解することはない」と答えている． p. 33, p. 35 そして p. 40 を見よ．一切法の無自性性を勝義として受け入れる中観派とって，業や異熟は勝義有ではなく，世俗有であることは明らかである．行為主体（作者）については，例えば，ある視覚認識が成立した場合，その認識に対して，「Devadatta が見る」等という言語表現を適用することは世俗として認められると Kamalaśīla は述べているので，その Devadatta という行為主体も世俗有として認められることになる．BK I p. 218, 9-18, *Avikalpapraveśadhāraṇīṭīkā* (APDṬ) P165b5-166a3, Keira(2004) p. 78, fn. 123, p. 81, fn. 124 を参照せよ．それでは,『勝義空性経』の「行為主体（作者）は認められない」という文を，Kamalaśīla はどのように解釈すべきなのか，これがここで問題となるのである．彼はその文を「行為主体は世俗としても認めらない」という意味を持つものと解釈し，その世俗としても認められない行為主体とは，非仏教徒が構想した行為主体，例えば，主宰神 (*Īśvara*) 等を指すと考え，この『勝義空性経』の一文も，中観派にとって，経文解釈上の矛盾を引き起こすものではないと答えているのである．

ここでの対論者は直接的には声聞であるが，この議論の背後には VY における Vasubandhu の中観派批判ともとれる言葉があり，それを念頭に置いて Kamalaśīla は答えていると理解することも可能であろう．中観派は，法無我・無自性説を受け入れる大乗者としては Vasubandhu 等と同じと言われ得るが，彼らとは異なり,「言語表現の基体」であり「言語表現し得ない本質をもつ点で勝義の実在」である *vastu* の成立を認めることはない．しかしそれを認めずとも，中観派は，この経文を受け入れ可能であり, その理由を解釈上の矛盾なく説明することができると Kamalaśīla は言っているのである．

1.2.1.10 『入楞伽経』X kk. 136-137 等の解釈

§59. 【反論】そうなら，他の諸経典（＝『聖入楞伽経』）の中で，

> もし，愚かな者によって構想された通りに一切の事物がまさに存在し，見られた通りにそれらが在るならば，一切の者が真実を見ることになるであろう[124].
>
> 一切諸法は非存在であるから，雑汚も清浄も無い．それらは見られた通りには存在しない．しかし，それらは全く存在しないというのでもない[125].

と説かれたこのことは，どのように解釈されるのか.

【答論】このことも以前に説明し終えている[126]．というのは，この〔引用偈の〕中でも，「もし一切の事物が，全く顕現した通りに，勝義として存在することになったならば，その場合，一切の者が真実を見ることになってしまうだろう」(≒ LAS X k. 136) というこのことによって，一切の事物は勝義として全く無生起であることが教えとして確立されているのである．「一切諸法は非存在であるから・・・」(LAS X k. 137a) というこのことによっても，諸事物は世俗としてまさに存在するのであると述べられたのである．「それらは見られた通りには存在しない」(LAS X k. 137c) と

---

[124]LAS X k. 136 (III k. 36): *astitvaṃ sarvabhāvānāṃ yathā bālair vikalpyate / yadi te bhavet yathādṛṣṭāḥ (III k. 36: yathā dṛṣṭyāḥ.) sarve syus tattvadarśinaḥ //.* この k. 136 と次の k. 137 とは，MĀ Pūrvapakṣa D145a5-6 に，「一切法が不生，非存在ならば，雑染と清浄とを否認することになる」という対論者の考えを示すものとして引用されている．また，kk. 136-137 は，VY IV D106a3-4 に Vasubandhu の考える了義説として引用されている．

[125]LAS X k. 137 (III k. 37): *abhāvāt sarvadharmāṇāṃ saṃkleśo nāsti śuddhi (III k. 37: śuddhiś) ca / na ca (III k. 37 omits ca.) te tathā yathādṛṣṭāḥ (III k. 37: yathā dṛṣṭāḥ.) ca na te vai na santi ca //.*

[126]中観派は無生起説を文字通りの意味で理解し執着する者ではなく，「勝義として生起の無いこと」と「世俗として生起すること」を認める者であるということは，既に説明済みである． p. 35 と p. 40 を見よ．また，中観派は雑染と清浄を否認することはなく，雑染・清浄は世俗の自性として確立されるということも既に説明済みである． p. 37 を見よ．そして，「それらは全く存在しないというのでもない」という文が，先の **§54** の LAS X k. 135d (III k. 35d) と同様に，「それらは言語表現し得ない本性（＝勝義の自性）をもつものとして存在する」という意味をもつ文として解釈されるとしても，中観派はその文をそのようには解釈しないと回答済みである．pp. 51-53, fn.116 を見よ．それゆえ，ここでは，「それら（＝一切法）は見られた通り（＝顕現した通り）には存在しない」という文の解釈だけが問題となると考えられる．先の **§54** での LAS X k. 135d (III k. 35d) の意味について，Kamalaśīla は，「『それらは存在しないというもでもない』という〔文〕によっては，これらは，世間的活動上は，**顕現した通りに存在する**ことが説かれたから，・・・」と説明していたからである．この文について，彼は，「見られた通りには存在しない」というのは勝義としてであり，世俗（実世俗）としては諸法は見られた通りに存在するという立場で解釈し説明している．

説かれているからである．世間的活動の真理に依拠して，雑汚と清浄とを確立することは，『般若〔経〕』の中で説かれているからである．次のように，

> Subhūti よ！ 得ること，現前明了に観ずること，生じること，滅することや，雑汚と清浄とは，世間的活動としてであり，勝義としてではないのである[127].

と説かれた如くである．

1.2.1.11 中観派の唯心解釈

§60.【反論】そうならば（＝一切法は勝義として無自性であるならば），同じ経典（＝『聖入楞伽経』）の中で，

> 外〔界〕の対象を見ることは誤りである．対象は無い．心のみである[128].
> 正理によって考察している者たちにとって，所取と能取は消滅する．
> 愚かな者が構想するようには，外〔界〕の対象は存在しない[129].
> 習気によって乱された心が，対象の顕現を持つものとして生じる[130].

と説かれ，また他の〔経典〕（＝『華厳経』）の中でも，

> ああ，勝者の子息よ！ この三界は心のみである[131].

と説かれたこのことも，どのように解釈されるのか. 同様に，『聖解深密経』や『聖密厳経』(*Ārya Ghanavyūha*) 等の中で，「一切法は心のみを本体とするもので

---

[127] ADSPP Parivarta 75, p. 84, 2-10: *na kasyacit dharmasya ācayaṃ vā karoty apacayaṃ vā utpādaṃ vā nirodhaṃ vā saṃkleśaṃ vā vyavadānaṃ vā prāptiṃ vā abhisamayaṃ vā ... sarve ete dharmā lokavyavahāratām upādāya prajñaptā na punaḥ paramārthena.* 『摩訶般若波羅蜜経』大正 8, 404a8-10.

[128] LAS X k. 153cd: *bāhyārthadarśanaṃ mithyā nāsty arthaṃ cittam eva tu //.* MAV D65a6 に引用あり．

[129] LAS X k. 154: *yuktyā vipaśyamānānāṃ grāhagrāhyaṃ nirudhyate / bāhyo na vidyate hy artho yathā bālair vikalpyate //.* k. 154ab は，上の k. 153cd に引き続き，MAV D65a6 に引用される．

[130] LAS X k. 155ab: *vāsanair luḍitaṃ cittam arthābhāsaṃ pravartate //.* これら kk. 153cd-155ab は，VY IV D106a6-7 に Vasubandhu の考える了義説として引用されている．MĀ Pūrvapakṣa D145a7-b1 においては，これら kk. 153cd-155ab は，「心のみが勝義として存在し，他は〔勝義として存在し〕ない」という対論者の主張を証明するために引用されている：MĀ D145b2: *sems kho na don dam par yod kyi / gzhan ni ma yin no*.

[131] *Daśabhūmikasūtra* (DBhS) p. 98, 8-9: *cittamātram idaṃ yad idaṃ traidhātukam /.* 『大方廣佛華嚴經』（離世間品） 大正 10, 288c5： 菩薩摩訶薩。知三界唯心。BK I p. 217, 10: *bho jinaputra, cittamātram traidhātukaṃ ... /.* TJ D204b4, PP_{Ldt} XXV p. 88, 5-6, p. 90, 1-2 にも引用されている．

ある」と説かれたから，心のみが勝義として存在するのであり，他は〔勝義として存在し〕ないと証明されるであろう．それゆえ，一切法が無自性であることは成立しないであろう．

§61.【答論】それ〔らの経典〕も〔心のみが勝義として存在することの〕証拠とは全くならないのである．心がまさに存在すると説かれたように，あれこれの経典の中でさまざまに，色形 (*rūpa*) もまさに存在すると実に説かれているのである．それゆえ，その〔色形〕も勝義としてまさに存在すると〔どうして〕把握されないのか．

§62.【反論】〔外界の〕対象は，認識手段 (*pramāṇa*) によって排斥されるから，また他の諸経典の中でも否定されるから，勝義として存在するとは確立されないのである．教化対象者のそのような〔外界の対象は勝義として存在するという〕考えを考慮して，〔その者を〕人無我 (*pudgalanairātmya*) のみに〔悟〕入〔させ〕るという隠された意図をもって，それ（＝色形等の存在）が説かれたに過ぎないのである．

§63.【答論】もしそうなら，心も後から説かれる認識手段によって排斥されるから[132]，またそれ（＝心）は他の経典の中でもまさに無自性であると説かれるから，その「心のみである」(唯心性)〔という教え〕は，勝義であるとは捉えずに，勝義の教理の海に〔教化対象者を〕段階的に導くために説かれたに過ぎないと捉えるべきである[133]．

§64. 次のように，一度に，すべての法が無自性であることを理解できない者は，まず，唯心〔説〕に依拠して，段階的に〔外界の〕対象の無自性性に〔悟〕入するのである．まさにそれゆえに，「正理によって考察している者たちにとって，所取 と能取は消滅する」(LAS X k. 154ab) と説かれたのである[134]．

---

[132]Kamalaśīla は，ここで，MĀ D199a2-D222b1 に言及している．そこでは，一切法の勝義の自性の非存在が，認識手段により，即ち，以下の五つの理由により論証される： *vajrakaṇhetu, *sadasadutpāda-pratiṣedhahetu, catuṣcoṭyutpādapratiṣedhahetu, pratītyasamutpādahetu, ekānekaviyogahetu*.

[133]MMA D142b5-7 G228a5-b2 N168a4-6 P174a5-7: *gang 'phags pa sa bcu pa'i mdor gsungs pa / kye rgyal ba'i sras rnams 'di lta ste / (D /: GNP om.) khams gsum pa 'di ni sems tsam mo zhes pa de ni mdo gzhan*[1] *rnams su rgyas pa dang bcas par (D par: GNP pa) rang bzhin med pa nyid bstan pa'i phyir don dam pa pa*[2] *nyid du mi gzung gi sems tsam nyid du bstan pa de*[3] *ni rim gyis don dam pa*[4]*'i tshul gyi (GNP gyi: D gyis) rgya mtsho la zhugs (D zhugs: GNP gzhug) pa'i ched 'ba' zhig tu zad do zhes zung shig /*[5].
([1] GNP 版割注: *shes rab kyi pha rol tu phyin pa sogs*. [2] GNP 版割注: *nges pa'i don (GN don: P don /)*. [3] GNP 版割注: *de (G de: N da; P d of de illegible) tsam (NP tsam: G tsa of tsam illegible) gyis chog (GN chog: P g of chog illegible) pa (GN pa: P pa /)*. [4] GNP 版割注: *rnam pa thams cad pa'i stong (GP stong: N stang) pa*. [5] GNP 版割注: *rgyan du /(GP /: N om.) sems tsam la 'di brten nas ni // (G //: NP /) phyi rol dngos med shes par bya // (G //: NP /) tshul 'dir brten (GN brten: P brte) nas de la yang // (G //: NP /) shin tu bdag med (GN med: P m of med illegible) shes par bya (= MAK 92) zhes te /*. ( ) 内の語は筆者による補い．)

§65. その次に，心の自性を段階的に考察するならば，それも無我であると理解して，深遠なる教理に〔悟〕入するであろう[135].

§66. そのように，世尊によって〔『聖入楞伽経』の中で〕，

〔能取形象 (*grāhakākāra*) を特徴とする〕唯心〔の立場〕に立って，〔ヨーガ行者は〕外〔界〕の対象があるとは考えるべきではない．

〔無二を特徴とする〕真如を対象とする〔瞑想〕に住して，〔ヨーガ行者は能取形象を特徴とする〕唯心〔の立場〕を超えるべきである（＝ヨーガ行者は無二知 (*advayajñāna* に住するべきである）．

唯心〔の立場〕を超えた後に，〔ヨーガ行者は，所取形象 (*grāhyākāra*) と能取形象との両者の〕無顕現を超えるべきである（＝ヨーガ行者は，無二知の実在性 (*vastutva*) に対する執着を捨てるべきである）．

〔無二知の〕無顕現に住するヨーガ行者は，大乗（＝最高の真実）を見る[136].

---

[134]MMA D142b7-143a1 G228b2-4 N168a6-b1 P174a7-b1: *de ltar ni gang lan gcig la chos ma lus par rang bzhig med par rtogs par mi nus pa*[1] *de re zhig* [2] *sems tsam nyid la brten nas rim gyis phi'i don rang bzhin med pa nyid la 'jug go // de nyid kyi phyir* [3] *gsungs pa /* [4] *'di ltar rnam par lta rnams kyi // gzung dang 'dzin pa 'gag par 'gyur // (DN //: P /; G om.) zhes so //.*

([1] GNP 版割注: *'i (GN 'i: P ' of 'i illegible) gdul (GN gdul: P g of gdul illegible) bya (GN bya: P bya /).* [2] GNP 版割注: *lang kar gshegs par / sems tsam nyid la brten nas (GP nas: N pa) ni // (G //: NP /) phyi rol don la mi brtag go // (GP //: N om.) (= LAS X k. 256ab) zhes gsungs pa ltar / (GN ltar /: P ltar).* [3] GNP 版割注: *lang kar gshegs par (N par: GP par /).* [4] GNP 版割注: *phyi rol don med cing sems tsam so // (P //: GN om.) (= LAS X k. 153d).* ( ) 内の語は筆者による補い.)

[135]MMA D143a1 G228b4-5 N168b1-2 P174b1-3: [1]*de'i 'og tu rim gyis sems tsam gyi rang bzhin la* [2] *so sor rtog pa na* [3]*de yang* [4] *bdag med (GNP med: D nyid) pa nyid du khong du chud nas zab mo'i tshul*[5] *la 'jug par 'gyur* [6] *ro (DGN 'gyur ro: P 'byung ngo) //.*

([1] GNP 版割注: *don bden med du rtogs pa (GN pa: P pa /).* [2] GNP 版割注: *gcig (GN gcig: P cig) dang du bral sogs gyis (GN gyis: P gyis /).* [3] GNP 版割注: *sems (G sems: N sems /; P ms of sems illegible).* [4] GNP 版割注: *chos kyi.* [5] GNP 版割注: *stong pa nyid.* [6] GNP 版割注: *te de bzhin (G bzhin: NP ni) nyid la dmigs (GN dmigs: P gs of dmigs illegible) nas ni / (GP /: N om.) sems tsam las kyang bzla bar bya / (GP /: N om.) (= LAS X k. 256cd) zhes pa ltar / (N /: GP //).* ( ) 内の語は筆者による補い.)

Kamalaśīla の中観思想による解釈では，唯心説は勝義ではなく，世俗として説かれた教えであり，それが説かれた理由は，「一度に，すべての法が無自性であることを理解できない者」を，中観派の勝義の教理に段階的に導くという救済論的な目的のためである．またそれが説かれたのは，その説がその目的を達成するための有効な手段・方法であると見なされたからでもあろう．

[136]LAS X kk. 256-257. LAS X k. 256 (= BKI p. 210, 9-10): *cittamātraṃ samāruhya bāhyam arthaṃ na kalpayet / tathatālambane sthitvā cittamātram atikramet //.* LAS X k. 257: *cittamātram atikramya nirābhāsam atikramet / nirābhāsasthito yogī mahāyānaṃ na paśyate //.* k. 257 は，BK I p. 210, 11-12 に引用

〔そのヨーガ行者の状態は〕努力の要らない状態で，寂静であり，諸誓願によって清浄である．

〔そのヨーガ行者は，無二知論者にとっては〕最勝なる知を〔も〕無我であると〔無二知さえも〕無顕現〔なる知〕によって見るのである[137]．

と説かれたのである．

1.2.1.11.1 Śāntarakṣita の唯心解釈

§67. 他の者たちは言う[138]：唯心とは，〔心が心〕それ自体で成立するという本性

される: *citta[mātram] atikramya nirābhāsam atikramet / nirābhāse sthito yogī mahāyānaṃ sa paśyati //.* ここでは，BK I 所引の k. 257 に基づき訳す．Kamalaśīla の LAS X kk. 256-257 の解釈については，KEIRA (2004) pp. 75-81 を見よ．

[137]LAS X k. 258: *anābhogagatiḥ śāntā praṇidhānair viśodhitā / jñānaṃ anātmakaṃ śreṣṭhaṃ nirābhāse na paśyati //.* この k. 258 は，BK I p. 210, 13-14 に引用される: *anābhogagatiḥ śāntā praṇidhānair viśodhitā / jñānaṃ nirātmakaṃ śreṣṭhaṃ nirābhāsena paśyati //.* ここでは，BK I 所引の k. 258 に依拠し，BK I pp. 217, 14-218, 6 での Kamalaśīla の解釈に従い訳す．LAS X k. 258cd や MĀ 所引のチベット語訳 k. 258cd に従って訳すならば，次のようになる：「〔そのヨーガ行者は，無二知論者にとっては〕最勝なる知を〔も〕無我であるとして，〔その知を，無二知の〕無顕現において見ないのである．」（注記：心の無我を最終的に理解して勝義に悟入することを示す経文として LAS を引用しているのに，MĀ 所引 k. 258cd の読みに従うと，何が（どんな知が）無二知の無我を見るのか説明されないこととなる．）

[138]「他の者たち」(*gzhan dag*) とは BNJ によると Śāntarakṣita のことである．BNJ によると，MĀ D157a6-158b4 (**§67-§74**) が Śāntarakṣita の見解であり，その直後の D158b4-159a7 (**§75-§80**) が Bhāviveka（等）の見解である．BNJ 93a5-93b1: *'dir zhi 'tsho dang legs ldan gnyis kyi bshad tshul bkod de / dang po ni / gzhan dag na re sems tsam ni zhes pa nas zhes bya ba yin no zhes zer ro'i bar byung / gnyis pa ni / gzhan dag na re kun rdzob du rnam par shes pa dang 'dra bar phyi'i don yang gnas pa yin no // zhes pa nas gsungs pa lta bu'o zhis(sic!) pa brjod do'i bar byung ngo /.* MMA G230a4-6 N169b4-5 P175n5-6 も見よ．MMA の GNP 版割注もこの「他の者（たち）」を Śāntarakṣita（等）と見なし，彼自身の考えとして MAK 91 を引用し，さらに MAV D79b6 に同時引用される YṢ k. 21 と k. 34 とを MAK 91 の考えの正当性の証拠・根拠と見なして，その k. 21cd と k. 34ab を引用している：*[rnam rig spyod (P rig spyod: G rig dpyod; N rag dpyod) pa'i dbu ma pa slob dpon zhi ba 'tsho'i (GN 'tsho'i: P mtsho'i) zhags sogs] gzhan rnams na re [des (GN des: P das) dbu ma (GN ma: P illegible) rgyan du / (GP /: N om.) rgyu (GN rgyu: P gy of rgyu illegible) dang 'bras bur gyur pa yang // (G //: P /; N om.) shes pa 'ba' zhig (GN 'ba' zhig: P illegible) kho na ste // (G //: P /; N om.) rang gis (MAK$_1$ 91 gis: GNP gi) grub (PN grub: G 'grub) pa gang yin pa // (G //: P /; N om.) de ni shes par gnas pa yin // (G //: P /; N om.) (= MAK 91) ces gsungs shing / (P /: G //; N om.) de'i shes byed du rigs pa drug cu par / (GP /: N om.) skye ba dang ni 'gag pa dag / (GP /: N om.) shes pa 'ba' zhig kho na'o / (GP /: N om.) (= YṢ k. 21cd) 'byung ba che la sogs bshad pa / (GP /: N om.) rnam par shes su yang dag 'du / (GP /: N om.) (= YṢ k. 34ab) zhes gsung pa drangs pa ltar /].* ([ ] 内の語が割注．( ) 内の語は異読と筆者による補い．) Phya pa chos kyi seng ge による MĀ の註釈 *dBu ma'i yig cha / dBu ma snang ba'i gzhung go don* (BNZhG) では，この「他の者たち」に関して個人名は挙げられず，以下は，「所知の内〔在を説く〕中観説」(*shes bya nang gi dbu*

を持つことであるから，世俗としてまさに確立されるのだが，外〔界〕の対象は，世俗としても確立されないのである[139]．心の形象以外に，それ（＝外界の対象）が成立することはないからである．それゆえ，そのこと（＝外界の対象は世俗としても確立されないこと[140]）が説かれるために，世尊は，諸事物は心のみに過ぎないのであると説いたのであるが，それ（＝心）は勝義として存在するのではないのである[141]．他の経典の中で，それ（＝心）も無自性であると説かれたからである．

§68. そのように，『聖入一切諸仏境界智光荘厳〔経〕』の中で，

> 諸仏はどんなときも決して心も一切法も認識しない．〔汝は〕一切智者であり，認識対象を持たない．汝に帰命すべきである[142]．

---

ma'i lugs) が説かれたと言う．BNZhG 311, 8-313, 1 を見よ．

以下の議論については，MAV D78b5-79a5 と MAP D128a1-5 も参照せよ．MAV では，「世俗の存在 (*kun rdzob kyi dngos po*) とは何か」という点から，「（それは）心と心作用を本質とする」という見解と「（それは）外〔界〕を本質とする」という見解が考察されている．MAP は，その二つの見解の考察について，「ここでは，二種の中観の道を考察しているのである」と註釈する：(MAP D128a1:) *'dir dbu ma'i lam rnam pa gnyis dpyod par byed pa yin no //.* 以下は，この「二種の中観の道」についての考察と考えられる．

MMA では，MĀ における両中観の見解提示の順序とは異なり，MAV における順序のとおりに，最初に Bhāviveka（等）の外界を認める中観派の見解を提示し，その後で，Śāntarakṣita（等）の見解を提示している．

[139]MMA D143b2-3 G230a6 N169b5-6 P175b6-7: *sems tsam kho na* [1] *rang* [2] *gis rab tu grub pa'i ngo bo can nyid kyi phyir kun rdzob tu gnas la / phyi rol gyi don ni kun rdzob tu yang (D yang: GNP 'ang) mi gnas te /.* ([1] GNP 版割注: *don la ma (GN la ma: P illegible) ltos par.* [2] GNP 版割注: *rig.*)

sems tsam ni rang gis rab tu grub pa'i ngo bo nyid yin pa'i phyir. これについては以下を参照：*Tattvasaṃgraha* (TS) k. 2011ab: (TS$_k$) *svarūpavedanāyānyad vedakaṃ na vyapakṣate //.* MAK$_I$ 91: *rgyu dang 'bras bur gyur pa yang // shes pa 'ba' zhig kho na ste // rang gis grub pa gang yin pa // de ni shes par gnas pa yin //.* MAV D79a1: *rang gis grub pa'i ngo bo bos nas shes pa'i ngo bo gzhan rtog pa med do // rang gis grub pa'i rang bzhin yang rmi lam dang sgyu ma la sogs pa'i gzugs bzhin no //.* MAV D78b5: *rang gi rig pa yang kun rdzob kyi bden par gtogs pa nyid de gcig dang du ma'i rang bzhin du brtag mi bzod pa'i phyir ro zhes bya bas gtan la phab zin to //.*

MAP D128a3: *rang gyis grub pa'i ngo bo zhes bya ba la sogs pas ni don shin tu lkog tu gyur ba de nyid ston par byed do //.*「『〔知（＝心）が知〕それ自体によって成立するという本性を持つ』云々によっては，〔外界の〕対象は全く到達不可能であるというまさにそのことを説いているのである．」

[140]この（　）内の語句は，MMA の GNP 版割注による．fn. 141 を見よ．

[141]MMA D143b3 G230b1 N169b6-7 P175b7-8: *sems gyi rnam pa* [1] *ma gtogs pa* [2]*de ma grub pa'i phyir ro // de'i phyir* [3]*de rab tu bstan pa'i ched du bcom ldan 'das kyis (D kyis: GNP kyi) dngos po rnams sems tsam nyid du (D du: GNP om.) bstan to zhes gsungs so (P gsungs so: DGN gsung ngo) //.*
([1] GNP 版割注: *la don du gzhag pa (GN pa: P pa /).* [2] GNP 版割注: *don.* [3] GNP 版割注: *don kun rdzob tu yang ma grub pa (N pa: GP pa /).*)

[142]SBVAJĀA IV §37 v. 30: *cittaṃ na labdhaṃ buddhehi atyantāya kadācana / sarvadharmā ca sarvajña*

と説かれた如くである．

§69. 『聖宝積〔経〕』(*Ārya Ratnakūṭa*) の中でも，

> Kāśyapa よ！ 心〔の存在〕は，観察されたならば，認められない．認められないものは，認識不可能（不可得）である．認識不可能であるものは，過去にも無く，未来にも無く，現在にも無いのである．過去にも無く，未来にも無く，現在にも無いものは，〔過去・未来・現在の〕三時を超越しているのである．三時を超越しているものは，有でもなく，無でもない．有でもなく，無でもないものは，生じたものではない．生じたものでないものには，自性は存在しない．自性が存在しないものには，生起することがない．生起することがないものには，滅することがない．滅することがないものには，過ぎ去ることがない．過ぎ去ることがないものには，行くこともないし，来ることもなく，死ぬこともないし，生まれることもない．行くこともなく，来ることもなく，死ぬこともなく，生まれることもないものには，いかなる形成作用もない．いかなる形成作用もないものは，因果の制約を越えたもの（＝無為）である．因果の制約を越えたものは，聖者たちの種姓 (本性) である[143].

---

nirālamba namo 'stu te //. 'phags pa sangs rgyas thams cad kyi yul la 'jug pa'i ye shes snang ba'i rgyan D300b2, P328b6-7: *sangs rgyas rnams kyis*[1] *lan 'ga' yang // sems dang chos kun gtan mi*[2] *dmigs // chos rnams thams cad kun mkhyen pa // mi rten khyod la phyag 'tshal lo //.* ([1] D *kyis*: P *kyi*. [2] P *mi*: D *ma*.) v. 30 は BSGT p. 238, 2-5 に引用される: *sangs rgyas rnams kyis nam yang ni // gtan du chos rnams thams cad dang // sems ma brnyes shing chos mkhyen pa // dmigs mi mnga' la phyag 'tshal bstod //.* MIMAKI (1982) p. 239, fn. 596 も見よ．英訳は www.84000.co を参照．『佛説大乘入諸佛境界智光明莊嚴經』大正 12, 263a9-10：智者於心無所得。是中亦復畢竟無。於一切法正遍知。無所縁尊今讃禮。

[143] *Kāśyapaparivarta* (KP) [102] p. 149, 11-19: *cittaṃ hi kāśyapa parigaveṣamāṇaṃ na labhyate yan na labhyate tan nopalabhyate tan nātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ / yan nātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ tatradhvasamatikrāntaṃ yatryadhvasamatikrāntaṃ / tan naivāsti neva nāsti / yan naivāsti na nāsti / tad ajātaṃ yad ajātaṃ / tasya nāsti svabhāvaḥ yasya nāsti svabhāvaḥ tasya nāsty utpāda / yasya nāsty utpādaḥ tasya nāsti nirodhaḥ yasya nāsti nirodhaḥ tasya nāsti vigamaḥ avigamas tasya rna gatir nāgatir na cyutir nopapattiḥ yatra na gatir nāgatir na cyutir nopapattiḥ tatra na kecit saṃskāraḥ yatra na kecit saṃskāraḥ tad asaṃskṛtaṃ / tad āryāṇāṃ gotra.* Cf. ŚS p. 234, 15-18: *cittaṃ hi kāśyapa parigaveṣyamāṇaṃ na labhyate / yan na labhyate tan nopalabhyate / yan nopalabhyate tan naivātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ / yan naivātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ tat tryadhvasamatikrāntaṃ / yat tryadhvasamatikrāntaṃ tan nevāsti na nāstītyādi //.* Cf. PsP_M p. 212, 3-7 (PsP_{LVP} p. 45, 1-4): *cittaṃ hi kāśyapa parigaveṣyamāṇaṃ na labhyate / yan na labhyate tan nopalabhyate / yan nopalabhyate tan naivātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannam / yan naivātītaṃ nānāgataṃ na pratyutpannaṃ tasya nāsti svabhāvaḥ / yasya nāsti svabhāvas tasya nāsty utpādaḥ / yasya nāsty utpādas tasya nāsti nirodhaḥ.*

と詳細に説かれたのである．

1.2.1.11.1.1. Śāntarakṣita の中道解釈

§70. それ故，また同〔経〕の中で，

> Kāśyapa よ！「恒常である」というこのことは，一つの極端である．
> Kāśyapa よ！「無常である」というこのことは，もう一つの極端である．
> Kāśyapa よ！同様に，「有である」というこのことは，一つの極端である．
> Kāśyapa よ！「無である」というこのことは，もう一つの極端である．
> この二つの極端の「中」としてあるものは，形の無いもの (*arūpin*) であり，見られないもの (*anidarśana*) であり，抵抗の無いもの (*apratigha*) であり，固定されないもの (*apratiṣṭha*) であり，顕れ出ないもの (*anābhāsa*) であり，認知されないもの (*avijñaptika*) であり，留まる（執着する）ところ無きもの (*aniketa*) である．このことが中道であり，諸法の真実の観察といわれる[144]．

'phags pa 'od srung gi le'u P124a3-8.

[144]KP [56] p. 86, 8-11: *nityam iti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ anityam iti kāśyapa ayam dvitīyo 'ntaḥ yad etayor dvayo nityānityayor maddhyaṃ tad arūpy anidarśanam anābhāsam avijñaptikam apratiṣṭham aniketam iyam ucyate kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣā /.* ibid. [60] p. 90, 2-4: *astīti kāśyapa ayam eko 'ntaḥ nāsīty ayam dvitīyo 'ntaḥ yad etayor dvayor antayor maddhyam iyam ucayte kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇāṃ bhūtapratyavekṣāt*. Cf. PsP_{LVP} p. 270, 8-10. MĀ 所引の KP は，[56] と [60] とを組み合わせたものと考えられる．[60] に関しては，Skt 原典と Tib 訳には多くの違いが見られる．

この MĀ 所引の KP では，二極端の「中」の特徴として，*thogs pa med pa* (*apratigha*) が加えられ，六特徴（六相）ではなく，七特徴となっている．しかし，この直後の Śāntarakṣita の説明には，*thogs pa med pa* についての説明がないので，経文中の *thogs pa med pa* は省いた方が良いのかもしれない．*thogs pa med pa* (*apratigha*) は，KP [56][57] には説かれないが，[98] p. 144, 3 に見られる．

さて，なぜ MĀ はここで KP [56][60] を引用し，それについての Śāntarakṣita の考え・解釈に言及するのであろうか．直前に Śāntarakṣita は，心は勝義として存在せず，無自性であることを証明する経典として KP [102] を引用した．しかし他方，瑜伽行派は，この同じ KP の [56][60] を解釈し，それらを，「心・認識作用が勝義として存在すること」等の，中観思想と対立する教義を示す証拠・根拠と見なしているのである．それ故，Śāntarakṣita 自身の KP [56][60] 解釈を示し，そして瑜伽行派による解釈の誤りを指摘するために，それらがここで引用されたのである．MĀ Pūrvapakṣa D145b3-5, P157b1-4 においても，ここと同じ経文が引用され，反論者（＝瑜伽行派）は，その経文を根拠にして，常・無常等の二極端を離れた，即ち中道としての心・認識作用は勝義として存在すると考え，中観派の無自性・無生起説に反論している：*'phags pa dkon mchog brtsegs pa las kyang / 'od srungs rtag ces bya ba 'di ni mtha' gcig go // 'od srungs mi rtag ces bya ba 'di ni mtha' gnyis pa'o // 'od srungs de bzhin du yod ces bya ba 'di ni mtha' gcig go // 'od srungs med*

ces bya ba 'di ni mtha' gnyis pa'o // mtha' 'di gnyis kyi dbus gang yin pa ni bstan du med pa (P bstan du med pa: D gtan du med pa) / mi gnas pa / snang ba med pa / rnam par rig pa med pa gnas pa med pa ste / 'di ni chos rnams kyi dbu ma'i lam la yang dag par so sor rtog pa'o zhes gsungs te / 'dis ni rnam par shes pa don dam par yod pa / bstan du med pa la sogs pa'i yon tan dang ldan pa / rtag pa dang chad pa'i mtha' gnyis dang bral ba yod do zhes bstan pa yin no //. （Pūrvapakṣa での引用では，*arūpin* と *apratigha* の二特徴が欠如している.）

ここからの Śāntarakṣita の論述は,「中道」(*madhyamā pratipat*) と KP [56][60] とについての瑜伽行派の解釈が前提になっていると思われる．瑜伽行派のその解釈の詳細は, MVBh I pp. 17, 16-18, 17 と ibid. V pp. 69, 18-73, 14（特に，p. 70, 7-20），そしてそれらに対する Sthiramati の註釈 MVṬ pp. 10, 4-16, 5, pp. 234, 23-237, 25 などから知ることができる．以下では, 瑜伽行派の,「中道」と KP [56][60] とについてのどのような解釈が中観派との教義上の対立を引き起こしているのか，それを明らかにしておくために，上記テキストの該当箇所を引用し，瑜伽行派の解釈を分析する．

KP [56] の解釈．MVṬ pp. 234, 25-235, 7 を見よ: *rūpādayo nityam iti tīrthikāntaḥ / te hi parikalpita-rūpān vastutvenābhiniveśya nityatvena kalpayanti nityaviparyāsopahatatvāt / anityam iti śrāvakāntaḥ / tāir api kalpitasvabhāvānāṃ rūpādīnāṃ vasturūpenānityatvena samāropitād antatvam / atyantasaṃsārod-vegakarān nirvāṇasya cāntapātanād anityadarśanasyāntatvam / tadubhayaparivarjanārtham iti nityānitya-darśanaparivarjanārthaṃ madhyamā pratipad / yā rūpādīnāṃ nanityapratyavekṣā nānityapratyavekṣeti / tad punaḥ katamat /* ***nirvikalpajñānam*** */ yan na rūpādīn rūpādiṣv eva nityatvenānityatvena cānugacchati /.* 和訳は山口 (1935) p. 371, 5-11 を見よ．ここでは,「常見と無常見とを離れるために, 中道があり, その中道とは無分別知である」と説かれている．Cf. *Kāśyapaparivartaṭīkā* P282a5-b3. 武内 (1967)，勝呂 (1989)，SILK(2009) も参照せよ．

瑜伽行派の「中道」解釈．MV I v. 2 を見よ : *na śūnyaṃ nāpi cāśūnyaṃ tasmāt sarvvam vidhīyate / satvād asatvāt satvāc ca madhyamā pratipac ca sā //.*「それ故, 一切は空ではなく, 非空でもないといわれる．有であるから, 無であるから, そして有であるから．そしてそれが中道である.」つまり,「中道」とは「一切が空ではなく, また非空でもないこと」, MVBh によれば「一切が一方的に空ではなく, また一方的に非空でもないこと」である．そして, 瑜伽行派のこの「中道」解釈は,『般若波羅蜜多経』等の中で説かれる「これ一切は空ではなく, 非空でもない」という教えに一致するというのである．MVBh p. 18, 15-17 を見よ : *sā ca madhyamā pratipat / yat sarvvaṃ / nāikāntena śūnyaṃ nāikāntenāśūnyaṃ / evam ayaṃ pāṭhaḥ Prajñāpāramitā-diṣv anulomito bhavati "sarvvam idaṃ na śūnyaṃ nāpi cāśūnyam" iti /.* MVṬ pp. 15, 21-16, 5 では, KP [60] を引用し，次のように註釈する：*sā hi madhyamā pratipad iti Ratnākūṭādimadhye 'stīti Kāśyapāyam eko 'ntaḥ / nāstīty ayaṃ dvitīyo 'ntaḥ / yad etayor dvayor antayor madhyam iyam ucyate Kāśyapa madhyamā pratipad dharmāṇām bhūtapratyavekṣeti [yad paṭhyate] sā madhyamā pratipad evam anulomakṛtā / sarvam iti saṃskṛtam asaṃskṛtaṃ ca / nāikāntena śūnyam ity abhūtaparikalpasya tacchūnyatāyāś ca sadbhāvāt / nāpy ekāntenāśūnyaṃ dvayasyābhāvāt / sarvanāstitvaṃ sarvāstitvaṃ vānta eva syāt / na madhyamā prati-pat /.* KP [60] で説かれている中道は，ここでは次のような仕方で，上の『般若波羅蜜多経』等の中での教えと一致すると説かれている．即ち,「一方的に空でない」というのは，虚妄分別とその虚妄分別における空性とが存在するからあり,「一方的に非空でもない」というのは, 所取と能取との二が非存在だからである．もし一方的に空ならば,「一切が無であること」がまさに極端であり, あるいは, もし一方的に非空ならば,「一切が有であること」がまさに極端である．それらの極端があれば, 中道は無い．従って, 中道は「一切無・空」ではなく，また「一切有・非空」でもないのである．

KP [60] の解釈は，MVṬ p. 237, 10-25 でより詳しく述べられる: *tīrthikaśrāvakāntapratipakṣeṇa madhyamāṃ pratipadaṃ deśayitvā bodhisattvāntapratipakṣeṇa madhyamāṃ pratipadaṃ pratipādayann*

āha / astīti śāśvatāntaḥ / nāstīty ucchedāntaḥ / tayor eva pudgaladharmayoḥ / sarvadā svalakṣaṇasamāropād astīti śāśvatāntaḥ / sarvathā svarūpāpavādān nāstīty ucchedāntaḥ / tadparivarjanārthaṃ madhyamā pratipat / yad anayor antayor madhyam iti / ubhayāntavigamo 'tra madhyam abhipretam ity eke / ubhayalakṣaṇam atra dvayor antayor madhyam ity apare / kathaṃ kṛtvā / yo hy abhūtaparikalpavad dharmadhātuvad vā jñeyam abhidheyaṃ ca vastu dravyataḥ paramārthataś cāstīty abhiniveśaḥ sa śāśvatāntaḥ / tasya tathā 'sattvāt / tathā śaśaviṣāṇavan nāsty eveti darśanam ucchedāntaḥ / kiṃ kāraṇam / tasya prajñaptito 'stitvāt / atas tannirākaraṇenocchedānta ucyate / ataś cāstitvanāstitvayor madhyaṃ dravyataḥ paramārthataś ca nāsti prajñaptito 'stīty ubhayalakṣaṇaṃ bhavati /. 和訳は山口 ibid. pp. 373, 14-374, 9 を見よ．この MVṬの中で，Sthiramati は，次の二つの「中」解釈があることを指摘する：一つは，「両極端を離れることが，ここで，『中』と意図されている」というある者 (*eka*) の解釈であり，他方は，「無と有いう両方の特徴が，ここで，有と無の二極端の『中』である」という別の者 (*apara*) の解釈である．ここの「有と無の二極端」の文脈では，後者（別の者）による解釈が瑜伽行派の解釈であり，前者による解釈は瑜伽行派が採用するものではないようである．つまり，Sthiramati によると，瑜伽行派は，前者のように，「離二辺 ＝ 中・中道」とは考えず，虚妄分別のようなあるいは法界 (*dharmadhātu*) のような，認識対象（*jñeya*）または言語表示対象（*abhidheya*）とされる事物 (*vastu*) は，「実体としてまたは勝義として存在しない」（無）そして「仮設（世俗）として存在する」（有）という無と有の両方の特徴が，有の極端と無の極端の「中」なのである．ここで，「対象である事物は実体としてまたは勝義として存在しない」という無の特徴の理解のために，若干説明を加えておく．TrBh では，有の極端を説く者と無の極端を説く者のそれぞれの考えが挙げられ，有の極端を説く者の考えとして，「認識対象は実体として (*dravyatas*) 存在する」という，ことも関連する考えが挙げられている．まず，TrBh p. 38, 18-20 を見よ（無の極端を説く者の考えは省略）：*atha vā vijñānavad vijñeyam (Tib shes bya) api dravyata eveti kecin manyante / ... asya dviprakārasyāpy ekāntavādasya pratiṣedhārthaḥ prakaraṇārambhaḥ //.* TrṬ$_T$ によると，この考えを説くのは，外界の対象を説く或る者であり，その考えは，「一切は存在する（有である）」と説く一つの極端論とされる：(TrṬ$_T$ D4b4-7:) *yang dgos po'i yang dgos pa gzhan du rnam pa gzhan gyis bstan pa'i phyir / yang na rnam par shes pa bzhin du shes bya yang zhes bya ba la sogs pa smras so // phyi rol gyi don du smra ba kha cig ni ji ltar rnam par shes pa rdzas su yod pa de bzhin du shes bya yang rdzas nyid du yod do snyam du sems / ... / de'i phyir mtha' gcig tu smra ba 'di rnam pa gnyis dgag par gang zag dang chos la bdag med par bstan pa'i phyir rab tu byed pa brtsams so // mtha' gcig tu smra ba 'di rnam pa gnyis zhes bya ba ni thams cad yod par smra ba dang / ... zhes bya ba'i tha tshig go //.* この有の極端論を承認できない理由を，Sthiramati は次のように述べる：(TrBh p. 42, 6-8:) *evaṃ vijñānasvarūpe bahiś cātmadharmābhāvāt parikalpita evātmā dharmāś ca na tu paramārthataḥ santīti vijñānavad vijñeyam (Tib shes bya) api dravyata evety ayam ekāntavādo nābhyupeyaḥ /.* 外界の対象を説く或る者が「認識対象は実体として存在する」と説いたとしても，認識対象は構想されたものに他ならないから，それらは勝義として存在しない．それゆえ，この極端論は承認できない，と Sthiramati は言うのである．従って，MVṬのここの箇所で，「認識対象や言語表示対象である事物は実体としてまたは勝義として存在する」と執着する考え（有の極端・常辺）が否定されているが，そのような対象である事物が存在するのは，実体あるいは勝義のどちらとしても，それは構想されたものに他ならないから，勝義として存在しないと否定されることになるのである．従って，MVṬがここの箇所で言う「実体としてあるいは勝義として存在しない」という無の特徴は，「構想されたものの勝義としての非存在」を意味し，構想された対象・所取が無いならば能取も無いので，上述の「一切は（一方的に）非空ではないこと」，即ち，所取と能取の二の無（＝空性）を意味すると考えられる．他方，「仮設として存在する」とは，「一切は（一方的に）空ではないこと」，即ち，「虚妄分別があること」（→仮設世俗）そして「その虚妄分別の中

に空性があること」（→顕了世俗）とを意味すると考えられる．山口 ibid. p. 382, 註 (8) を参照．顕了世俗 (*udbhāvanāsaṃvṛtti*) 等の三種世俗については，MV 3-10bc に対する MVBh と MVṬとを見よ．さらにまた，Sthiramati は，「所取と能取の二の無」（＝空性）に関して，MVṬ p. 14, 4-7 で次のように言う：*grāhyagrāhakabhāvena rahitatā viviktatā hy abhūtaparikalpasya śūnyatā / na tv abhūtaparikalpo 'py abhāvaḥ / yathā śūnyā rajjuḥ sarpasvabhāvenātatsvabhāvatvāt sarvakālaṃ śūnyā na tu rajjuḥ svabhāvena / tathehāpi /.*「所取と能取との存在を欠いていること，〔即ち〕離れていることが，つまり，虚妄分別の空性である．しかし，虚妄分別までもが非存在であるというのではない．たとえば，縄は蛇の本性を欠いている．それ（蛇）を本性とするものではないから，〔縄は蛇の本性として〕常に空である．しかし，縄はそれ自体としては〔空では〕ない．この場合も，それと同様である．」虚妄分別それ自体は「他に依るあり方」（*paratantrasvabhāva;* 依他起性）であり，虚妄分別が二を離れていること，即ちそれの空性は，「完成したあり方」（*pariniṣpannasvabhāva;* 円成実性）である．瑜伽行派の考えでは，二を離れている場合，虚妄分別までもが非存在であるということはなく，「他に依るあり方」と「完成したあり方」とは実在するのである．瑜伽行派のこの考えは，「中」解釈においても，中観派と教義上の対立を引き起こす原因となっていると考えられる．（注記：Dharmapāla（護法）も，『大乗廣百論釋論』大正 30 244b7-11 の中で，この KP [60] を引用し，上の Sthiramati の解釈と類似する解釈を提示している：如契經中。佛告迦葉。諸法性相非有非無。有是一邊。無是第二。謂常與斷。此二中間。無色無見無住無像。不可表示不可施設。此意説言。世俗有故。依之建立生死輪迴。勝義空故。諸法性相非有非無。心言路絶。遠藤 (1932) p. 420, 7-10 を見よ．）

上に，Sthiramati が「両極端を離れることが，ここで，『中』と意図されている」というある者の解釈，即ち，「離二辺 ＝ 中」という解釈と，瑜伽行派はその解釈をそこでは採用していないことを見たが，その「ある者」というのは，中観派を指していると思われる．Sthiramati の年代 (c. 510-570) と KP [60] を引用する中観論書とを考慮すると，彼が直接的に批判の対象としているのは，Bhāviveka である可能性が大きいと思われる．Bhāviveka の「中」・「中道」の考えについては，PP XXIV D230b5-231a1 を見よ：*dbu ma ni skye ba dang / skye ba med pa dang / yod pa dang / med pa'i mtha' gnyis spangs pa'i phyir / 'di lta ste / skyes pa yang ma yin / ma skyes pa yang ma yin / yod pa yang ma yin / med pa yang ma yin / rtag pa yang ma yin / mi rtag pa yang ma yin / stong pa yang ma yin / mi stong pa yang ma yin pas / de'i phyir shes rab kyi pha rol tu phyin pa las / ji skad du / dbu ma'i lam bsgom pa ni mig dngos po yod ces bya bar yongs su mi rtog / med ces bya bar yongs su mi rtog go zhes bya ba la sogs pa gsungs pa dang / 'phags pa dkon mchog brtsegs pa'i mdo las / 'od srungs yod ces bya ba 'di ni mtha' gcig go // med ces bya ba 'di ni mtha' gnyis so // mtha' de gnyis kyi bar gang yin pa de ni gzugs can ma yin pa bstan du med pa / thogs pa med pa / mi gnas pa / snang ba ma yin pa / rnam par rig pa ma yin pa / gnas med pa'o zhes gsungs pa de dag grub po //.* ここで Bhāviveka は，「中」とは「生・不生」「有・無」「常・無常」等の二極端を離れていることであると考えている．（注記：ここでは，MĀ での引用と同様に，「中」の特徴として *thogs pa med pa* (*apratigha*) が加えられ，七特徴となっている．）彼の「中」についての考えは，『大乗掌珍論』大正 30 p. 276b7-c1 においても，詳しく説かれる：既能如是遠離二邊。即能生長處中妙行。**此離二邊處中道理。**由如上説二種比量有爲無爲色類無故説名無色。由無色故。亦無有等諸分別故。無有少法可相表示。言彼既然此亦如是。故名無示。由無性故所依能依皆不成就。無有住持。故名無住。若有爲相或無爲相。若所分別非所分別。若能分別非能分別。如是等相覺慧不行。故名無現。遠離一切有相無相。此境界識皆不生故。名無了別。由無色故。無形質故。方維幟幟皆無有故。名無幟幟。如世尊告迦葉波言。常爲一邊無常第二。此二中間無色無示無住無現無所了別無有幟幟。是則名爲處中妙行。如實觀察一切法性。廣説乃至有爲一邊無爲第二。乃至廣説。又如佛告迦葉波言。明與無明皆無有二無二差別。此中正智是則名爲處中妙行。既能如是遠離二邊。於能安住無二想上所起分別無二之想。亦能了知障礙出世無分別慧寂靜安住。如所説因速能永斷。永斷彼故即無如是如是分別。語意二言並皆止息。證得無動

と説かれている．その〔経文〕は,「中」であるものが, 実在 (*dngos por yod pa*) し, 認識作用の本性として在ることを証明しているのではないのであり，そうではなくて，あらゆる二極端を離れ，全ての法の無自性を特徴とし，戯論 (*prapañca*) の無い法界 (*dharmadhātu*) を述べているのである．その法界も，それ自体として,「これである，あれである」とは観察不可能であるから，形の無いものなのである．他の者たちに示すことができないから，見られないものである．内なる界・処のあり方のものとして固定されないから，固定されないものである．外なる界・処のように顕現し得ないから, 顕れ出ないもののである．眼識等の界の自性から超越しているから, 認知されないものである．貪欲等のあらゆる煩悩の住処ではないから，留まる（執着する）ところ無きものと言われるのである[145].

無現無相。離諸戯論。諸法實性於其所縁無動證入。自相妙智相續安住。雖勤修習無倒空觀。而於空性終不作證。如是名爲勝義靜慮。羽渓 (1932) pp. 131, 15-132, 12 と金 (2014) pp. 54, 9-55, 4 を参照せよ．Cf. La Vallée Poussin (1933) pp. 125, 11-126, 21 と Hsu (2013) pp. 265, 16-268, 12. （注記：『大乘掌珍論』大正 30 p. 270c21 にも KP [60] に言及する一文がある：如是餘處説迦葉波。有是一邊無是第二。）また，Bhāviveka は上記引用箇所の少し後で，瑜伽行派が考える「所取・能取の分別を完全に離れた出世間無分別知」について，それも勝義的真理からすれば非実在であると説き，瑜伽行派の考えを批判している：(『同論』 p. 277a2：）就勝義諦如是出世無分別智亦非實有。

以上,「中道」と KP [56][60] とに関して，中観派との教義上の対立を引き起こす原因となっていると考えられる瑜伽行派の解釈を見た．MĀ の以下の議論では，Śāntarakṣita は，Pūrvapakṣa に反論として挙げられた「中道としての心・認識作用（無分別知）は勝義として存在する」という瑜伽行派の解釈を批判しているだけでなく，MVṬ中の KP [60] の解釈において示された瑜伽行派の「中」解釈，即ち，Sthiramati がそこで示した「無と有の両特徴が有と無の二極端の『中』である」という解釈についても，Śāntarakṣita は批判していると思われる．MVṬの KP [60] の解釈においては，Sthiramati による中観派（直接的には Bhāviveka）批判と見なしうる記述があったため，Śāntarakṣita は，瑜伽行派の「中」解釈を斥け，自身の中観思想による「中」解釈を提示する必要もあったのだろうと考えられる．

[145]Śāntarakṣita は，MĀ Pūrvapakṣa に反論として挙げられていた，KP [56][60] を「二極端を離れた無分別知が勝義として存在すること」の証拠と見なす瑜伽行派の経文解釈を斥け，この経文は,「あらゆる二極端を離れ，無自性を特徴とし，戯論（概念化作用・概念的拡散）の無い法界」を示しているものと解釈する．BNJ 95b1-3 を参照せよ: *'od srungs rtag ces bya ba 'di ni mtha' gcig go // zhes sogs gsungs pa yang mtha' gnyis dang bral ba'i sems don dam par yod pa'i khungs su mi rung ba yin te / de ni rtag chad kyi mtha' la sogs pa'i mtha' thams cad dang bral ba / dpyad du med pa la sogs pa'i khyad chos drug ldan gyi stong pa nyid mthar thug bstan pa'i phyir ro //.* BNJ によると，KP のこの経文は，二極端を離れた心が勝義として存在することを証明するものではあり得ず，その経文は，常・断等のあらゆる極端を離れて，心も,「形の無いもの」等の優れた六性質（六特徴・六相）をもち, 空性に極まることを説いているのである．

さて，この部分の解釈だけを見ると，Śāntarakṣita の解釈は Bhāviveka の解釈と大きく異なっているようには思われない．Bhāviveka も『大乘掌珍論』大正 30 p. 276b27-b28 において，二極端を離れた「中」においては,「戯論を離れた諸法の実性を證得する」と説いているからである：證得無動無現無相。離諸戯論。諸法實性．fn. 144 を見よ．しかしながら，その後の「中」としての六特徴（六相）の解釈については，Śāntarakṣita と Bhāviveka の解釈は同じではない．Bhāviveka の解釈は，fn. 144 の

§71. もし〔二極端の〕「中」に，心それ自体の本性から成る何らかの勝義の事物があることになったならば，その場合，それ（＝「中」）は存在するので，それに対して，「恒常である」とか「無常である」と執着することはどうして極端となるであろうか．事物のありのままの真実に付き従って，正しく思惟すること（＝如理作意すること）が〔極端の把握へと〕陥落させる状態であるということは正しくないのである．恒常〔と無常〕という自性以外で，事物の自性となる，他の事物のあり方はあり得ないのである[146]．

§72. 【反論】「中」に〔対象として構想された〕事物それ自体の本性が無いならば，「非存在である」と把握することは極端にはならないであろう[147]．

『大乗掌珍論』の引用を見よ．ここで，Śāntarakṣita が述べている六特徴の解釈は，『瑜伽論』（摂決択分）にある六特徴の説明と類似し，内容的には殆どそれと同じと見なされうる：（大正 30 p. 743a22-a24:）一者不可自尋思。二者不可説示他。三者超過色根所行。四者超過一切相。五者超過識所行。六者超過煩悩所行。(Tib D111b4-5:) *bdag gis brtag par mi nus pa dang / gzhan dag la bstan du med pa dang / dbang po gzugs can gyi spyod yul las yang dag par 'das pa dang / mtshan ma thams cad las yang dag par 'das pa dang / rnam par shes pa'i spyod yul las yang dag par 'das pa dang / nyon mongs pa'i spyod yul las yang dag par 'das pa'o //.* BNZhG 312, 4 からも，『瑜伽論』の説明と類似・同内容であることが理解される: *rang dang gzhan gyi yul ma yin pa dang dbang po dang yul dang rnam shes su mi gnas pa dang nyon mongs pa'i gnas ma yin pa brtag du med pa la sogs pa dang sbyar pa'o /.* Śāntarakṣita は，瑜伽行派による経文解釈を斥けつつも，『瑜伽論』中に見られる説明を用いて，自身の中観思想に基づいた「中」解釈を提示しているのである．

[146] ここでは，MVṬの KP [56] についての解釈，即ち「常・無常という二極端を離れた『中』とは，勝義として存在する無分別知である」という瑜伽行派の解釈に対して，Śāntarakṣita が批判しているものと考えられる．BNJ 95b3-5 を参照せよ: *gal te dbu ma'i lam don dam par yod na de don dam par rtag mi rtag gang rung du 'dzin pa'i blo yang mthar 'dzin su mi 'gyur te / dngos po'i gnas lugs ji lta ba bzhin gyi rjes su song ba'i blo yin pa'i phyir / khyab ste / tshul bzhin yid la byed pa ni ltung ba'i gnas su mi rigs pa'i phyir ro // 'dod mi nus te / 'od sungs rtag ces bya ba 'di ni mtha' gcig go zhes songs gsungs pa'i phyir /* 「もし中道が勝義として存在するならば，それは勝義として何か恒常あるいは無常なものであると把握する知も，極端を捉えて〔執着して〕いることにはならないのである．〔なぜなら，〕事物のありのままの状態（＝真実・勝義）に付き従っている知であるからである．〔この「事物の真実に付き従っている知は，極端の把握ではない」という〕遍充関係は〔妥当である〕．正しく思惟すること（＝如理作意すること）が〔極端の把握へと〕陥落させる状態であることは正しくないからである．〔恒常・無常として把握（執着）する知が事物の真実に付き従っていることは〕認められないのである．『Kāśyapa よ！恒常であるというこのことは一つの極端である』云々と説かれたからである．」

〔極端の把握へと〕陥落させる状態 (*ltung ba'i gnas*)．BNZhG 312,7 を参照：*ltung ba'i gnas ni mthar 'dzin pa'i g-yang sar lta ba'o //.*

[147] MVṬの KP [60] についての解釈がここでは問題にされていると思われる．MVṬでは，「有と無という二極端を離れること」（離二辺）が「中」ではなく，「有と無の二極端に対して，無と有の両特徴が『中』である」という瑜伽行派の解釈が示されていた．つまり，「対象である事物は実体または勝義として存在する」と外界の対象を説く者たちは執着するが，対象は構想されたものであるから，「それは勝義として存在しない」と理解・把握するところの「無の特徴」，そして「それは仮設（世俗）として存在する」と把握するところの

【答論】それも正しくないのである[148]．「非存在である」と把握することはまた，「存在する」と把握することが無いならば，無いからである．〔否定〕対象の無い否定 (*nirviṣayapratiṣedha*) は存在し〔得〕ないのである[149]．従って，「非存在である」と把握することがある場合，「存在する」と把握するそのことも必ずあるので，〔「有である」・「無である」という〕この両極端があるであろう[150]

「有の特徴」，これら無と有の両特徴が有と無の二極端の「中」であった．fn. 144 を見よ．ここの反論は，対論者である瑜伽行派が自派の解釈の妥当性を主張して，「中」には対象として構想された事物それ自体の本性が無いのだから，その無いことについて「無い・非存在である」と把握・判断し，無の特徴を理解することは，正しい認識であり，「『無である』という極端」とはならない，と述べたものと考えられる．

Cf. BNZhG 312, 7: *gal te khyed chos nyid cir yang ma grub pa ma brjod na myed pa'i mtha' dang bral ba myi 'thad do zhe na /.*「もし，汝（＝中観派）〔にとって，『中』である〕法性はどんなものとしても不成立で不可説ならば，〔中観派が説く〕『無の極端から離れること』は正しくない，というならば．」 BNZhG は，ここの反論を，対論者（＝瑜伽行派）が中観派の「中」解釈の誤りを指摘し，中観派を直接的に批判したものと解釈する．しかし，この反論に対する Śāntarakṣita の答論は，要約すると，次のようである：「『非存在である』と把握することが極端にはならない，ということも正しくない．そのように把握することがあれば，二極端が成立するであろう．」答論において，Śāntarakṣita は，自身の「中」解釈に対する瑜伽行派の批判に答えているというよりも，むしろ，瑜伽行派の主張・解釈は妥当でないと批判し，その理由を説いているようである．従って，この反論は，瑜伽行派が中観派の解釈に対する直接的な批判を説いたものではなく，瑜伽行派が自派の解釈の妥当性を主張したものと捉えた方が良いと思われる．

[148]NP の二版では，この文の後に，次の一文が挿入されている： *med do zhes bya bar 'dzin pa yang rigs pa ma yin te /.* 「『非存在である』と把握することも正しくないのである．」

[149]SDVV ad SDVK 9cd: (D6a3:) *dgag bya med na bkag pa mi 'byung ba'i phyir te / yul med pa'i bkag pa mi rigs pa'i phyir ro //.*「否定対象が無いならば，〔それの〕否定も起こらないからであって，〔否定〕対象の無い否定は〔論理的に〕正しくないからである．」SDVK 9cd: *dgag bya yod pa ma yin pas (SDVK pas: SDVV phyir) // yang dag tu na bkag med gsal //.* SDVK 9cd は AAA p. 45, 6 に引用される：*niṣedhyā-bhāvataḥ spaṣṭaṃ na niṣedho 'sti tattvataḥ.* MĀ 本文の *yul med pa'i dgag pa* に対応するサンスクリット語は *nirviṣayapratiṣedha* であろう．AAA p. 152, 17: *nirviṣayapratiṣedhāsaṃbhavāt*: (Tib:) *yul med pa la dgag pa med pa'i phyir ro //.* AAA p. 619, 22-23: *nirviṣayapratiṣedhānupapattes* (Tib:) *yul med pa la dgag pa mi 'thad pas /.* 上と同じ考えは MAK 72ab でも述べられている：*yul med pa la dgag pa yi // sbyor ba legs pa yod ma yin //* (= AAA p. 45, 6, p. 838, 17: *na ca nirviṣayaḥ sādhu prayogo vidyate nañaḥ /.*)

Cf. 一郷 (1995) p. 220, 16: "空間的に非存在のものについては否定は存在しないのです．" Cf. 森山 (1991) p. 92, 6: "対象の絶対否定 (*prasajya-pratiṣedha*) はありはしない．"

[150]瑜伽行派は，対象として構想された事物について，「それは勝義として存在しない」と否定するが，瑜伽行派は，中観派とは異なり，その「存在しない」という否定を真実・勝義として積極的に理解するのである．SDVV ad SDVK 9 D6a2: *gzhan dag ni yang dag pa kho nar 'dzin pas /.* SDVP D24b6-7: *gzhan dag ni rnal 'byor spyod pa dag gis skye ba la sogs pa bkag pa ni / yang dag pa kho nar don dam par 'dzin pas ... /.* 瑜伽行派がその「存在しない」という否定を勝義として積極的に理解し，受け入れているならば，否定対象の無い否定は成立し得ないから，「存在する」という否定対象もそこでは必ず成立しているはずである．それゆえ，Śāntarakṣita は，瑜伽行派の「中」解釈においては，有と無の二極端が成立すると批判するのである．

他方，中観派は，瑜伽行派とは異なり，否定を勝義と捉えることはない．中観派が「真実としての生起」等

§73. もし「中」に〔勝義として存在する〕事物があるならば，その場合，その〔「中」〕について「存在する」と把握することが，どうして誤り（*viparyāsa* 顚倒）となるだろうか.『聖三昧王〔経〕』の中で，「中」という勝義の存在である事物に留まることを否定するために説かれたこととも矛盾するであろう[151].

> 「有である」・「無である」という両者何れも極端である．浄・不浄というこれらも極端である．それゆえ，両極端を捨てて，賢者は「中」にも留まらない[152].

と説かれたのである．経〔文〕の意味は，依拠されるべき〔ところの〕「中」という〔勝義の〕存在である事物を本性とするものは全く無いのだから，「賢者は『中』にも留まらない」(SR IX k. 27d) というのが妥当であるということである[153].〔もし「中」に〕何か〔勝義の〕事物があるならば，どうして賢者はそれに留まらないであろうか.

§74.『聖出世間品』(*Ārya Lokottaraparivarta*) の中でも，

> ああ，勝者の子息よ！ さらにまた〔偉大なる菩薩は〕，三界は心のみに過ぎないと〔悟〕入する．三時もまた心に等しいと理解する．そして，その

を否定する場合，否定対象は他者により構想された事柄であり，構想された事柄は非存在であるから，その否定対象の否定も真実として非存在・不成立なのでである．fn. 149 中の SDVK 9cd (= AAA p. 45, 6) を見よ．中観派にとって，他者によって構想された事柄を否定対象とする否定は，あくまでも世俗として成立することである．しかし，その否定を理解する知は，勝義に一致し，勝義に入るための助けとなるので，勝義と見なされるのである．SDVV ad SDVK 9cd D6a2: *de yang rigs pas dpyad na kun rdzob kho na ste /.*「その〔真実の生起等の否定〕も正理によって考察するならば，世俗に他ならないのである.」SDVP D24b7-25a1 参照．ibid. 9ab: *skye la sogs pa bkag pa yang // yang dag pa dang mthun phyir 'dod //.*「生起等の否定も，真実〔に入るため〕の助けとなるから，〔我々中観派は勝義であると〕認めるのである.」

[151]瑜伽行派の「有と無の二極端に対して，無と有の両特徴が『中』である」という「中」解釈では，「無の特徴」として，「所取・能取の二の無」・「虚妄分別の空性」が説かれる．しかし瑜伽行派は，そこで，虚妄分別それ自体までもが非存在であるとは考えていない．fn. 144 を見よ．瑜伽行派の解釈では，虚妄分別が所取・能取の二を離れている場合，「中」においては，虚妄分別それ自体とそれが二を離れた状態としての有，即ち「他に依るあり方」と「完成したあり方」としての実在性・勝義の存在性が残るのである．そうならば，「中」について「存在する」と把握することは，誤り（顚倒）ではなく，正しい認識となるが，それでは非有非無（空非空）の中道は成立し得ないであろう．また，「中」が勝義の存在性をもつならば，その解釈は，「『中』も勝義として非存在である」と説く SR や『出世間品』の経文と矛盾することになるのである．

[152]SR IX k. 27 p. 48, 13-16: *astīti nāstīti ubhe 'pi antā śuddhī aśuddhīti ime 'pi antā / tasmād ubhe anta vivarjayitvā madhye 'pi sthānaṃ na karoti paṇḍitaḥ //.* PsP_{LVP} p. 270, 11-14 に引用有り.

[153]BNJ 96a3-4. BNJ によると，この三昧王経の文は，勝義として有・無等が極端であるだけでなく，勝義として成立した「中」も極端であると説いているのである: *don dam par yod med sogs mtha' yin par ma zad dbus don dam par grub pa yang mtha' yin no zhes bshad do //.*

心は「〔両〕極端」と「中」の無いものであると〔悟〕入するのである[154].

と説かれているのである．経〔文〕の意味は，生起と消滅という「〔二〕極端」と存続を特徴とする「〔二極端の〕中」とは勝義として非存在であるから，〔偉大なる菩薩は,〕心は「〔両〕極端」と「中」とが無いものであると〔悟〕入するであろう、〔即ち、〕理解するであろうということである[155].

---

[154]*Ārya Lokottaraparivarta* のこの文は，BK I p. 217, 9-11 に引用される: *uktaṃ cārya lokottaraparivarte "punar aparam, bho jinaputra, cittamātraṃ traidhātukaṃ avatarati, tac ca cittam anantamadhyatayāvatarati" iti /.* MAV D79a7-b1 にも引用される．引用は fn. 155 を見よ．『大方廣佛華嚴經』（離世間品）大正 10, 288c5-6: 菩薩摩訶薩知三界唯心．三世唯心．而了知其心無量無辺.

[155]BK I p. 217, 11-13: *antayor utpādabhaṅgalakṣaṇayoḥ sthitilakṣaṇasya ca madhyasyābhāvād anantamadhyaṃ cittam /.* MAV (ad MAK 92) D79a7-79b2: *tshul 'di ni rang 'byung ba med pas sems de rang bzhin med par rtogs su zin kyang / mtha' thams cad spangs pa dbu ma'i lam 'di rtogs na / gcig dang du ma'i rang bzhin dang bral bas rang bzhin med par shin tu rtogs so // de'i phyir 'jig rten las 'das pa'i le'u las / kye rgyal ba'i sras dag gzhan yang khams gsum pa ni sems tsam du rtogs te / dus gsum yang sems dang mtshungs par rtogs so // sems de yang mtha' dang dbus med par khong du chud do zhes bstan pa 'di legs par bshad par 'gyur te / skye ba dang 'jig pa'i mtha' dang gnas pa'i mtshan nyid kyi dbus med pa'i phyir mtha' dang dbus med pa'o //.* 「この〔唯心の〕教義に関して，〔他に依って生じるのであって〕それ自体で生じるものではないので，その心は無自性であると理解されるけれども，一切の極端を離れたこの中道を理解するならば, 離一多性のゆえに無自性で〔あること〕を完全に理解するのである．それ〔の完全な理解〕から,『離世間品』の中で,『ああ，勝者の息子よ！ さらにまた〔偉大なる菩薩は〕，三界は心のみに過ぎないと理解する．三時もまた心に等しいと理解する．そして，その心は "〔両〕極端" と "中" の無いものであると理解するのである』と説かれたこの〔教え〕が正しく説かれたことになるのである．生起と消滅という『〔二〕極端』と存続を特徴とする『〔二極端の〕中』は非存在であるから，〔心は〕『〔両〕極端』と『中』とが無いものなのである.」Kamalaśīla によると,『離世間品』のこの経文が「正しく説かれたことになるのである」というのは，真実に悟入する段階的な方法・行程 (*rim pa; krama*) が，MAV における先述のとおりに説かれたから,「正しく説明されたことになる」というのである：(MAP D128b2:) *legs par bshad par 'gyur zhes bya ba ni de kho na la 'jug pa'i rim pa ji skad bshad par bstan pa'i phyir ro //.* この MAP の註釈により，Śāntarakṣita が『離世間品』のこの経文を，唯心思想から中観思想へと教化対象者を段階的に導く救済論的 "gradualism" を説いているものと見なしていることが分かる．従って，その経文が MĀ のここに引用されていることから，上に見てきた Śāntarakṣita による瑜伽行派の「中道」解釈批判と彼の「中」解釈は，まず唯心思想を理解し，次にその唯心思想における「心」また「中道」としての「心」も勝義としては無自性であると理解して，中観派の勝義の教義に悟入するという彼の救済論的 "gradualism" の説明の中に位置付けられていたのだと理解することができるのである.

以上からして, MĀ のこの箇所 (D157a6-158b4), 即ち唯心の教義や外界の対象についての Śāntarakṣita の見解が示されたと見なされるこの箇所は，後半部分に，「中」（中道）についての議論が挿入され，彼の「中」についての考えが詳しく説かれているが，MAV ad MAK 91-92 において説かれる内容とその展開，つまり「唯心解釈→外界の対象は世俗としても不成立→心の勝義としての非実在性→ gradualism」という内容とその展開とに概ね一致すると考えられる.（注記：MMA の GNP 版割註は MAK 91 を Śāntarakṣita 自身の見解と見なし引用している． fn. 141 を見よ．Cf. 松本 (1984) p. 143, pp. 147-151. また，割註の MAK 92 の引用は，fn. 133 を見よ.）MĀ のここの後半部分で,「中」（中道）についての

以上は〔Śāntarakṣita が〕述べたことである．

1.2.1.11.2　世俗として外界を認める中観論者の唯心解釈

§75. 他の者たちが言う[156]：世俗として，認識作用と等しく，外〔界〕の対象も存在するのである．そうでないならば，『聖十地〔経〕』(*Ārya Daśabhūmika*) の中で，第八地において，菩薩は世界に属する極微の数等を完全に知ると説かれたことと矛盾するであろう[157]．そのように，

議論が挿入されたのは，上の MAV の引用にあるように，中道の理解は，離一多性による無自性性を完全に理解するためには必要であると言いながらも，Śāntarakṣita は MAV では説明しなかったので，Kamalaśīla はここで，彼の考えの詳細を示しておくべきと考えたのだと思われる．

[156]BNJ 93a5-b1 と 101a4-5 によると，この「他の者たち」(*gzhan dag*) とは，Śāntarakṣita 以外の者たち (*zhi 'tsho las gzhan dag*) で，Bhāviveka (*legs ldan; legs ldan byed*) のことであるという．MMA の GNP 版割注 (G228b5 N168b2 P174b3) も，ここの論者は「外界の対象を認める中観派の師 Bhāviveka 等」(*phyi'i don 'dod pa'i dbu ma pa slob dpon legs ldan byed la sogs pa*) であると言う． fn. 157 を見よ．BNZhG は論者名を挙げず，「外界の対象は存在すると説く中観派説」(*phyi rol kyi don yod par smra ba'i dbu ma pa'i lugs*) がここで説かれていると言う．BNZhG 311, 8 と 313, 1-4 を見よ．

[157]MMA D143a1-2 G228b5-6 N168b2-3 P174b3-4: [1] *kun rdzob tu (D tu: GNP tu ni) rnam par shes pa bzhin du phyi'i don yang gnas te / gzhang du na*[2] *'phags pa sa bcu par / sa brgyad pa la byang chub sems dpas 'jig rten gyi khams su grogs pa'i rdul phra rab kyi grangs la sogs pa yongs su shes par (D par: GNP par gang) gsungs pa de dang 'gal te /.* ([1] GNP 版割注: *phyi'i don 'dod pa'i dbu (GN dbu: P b of dbu illegible) ma pa slob dpon legs (GN legs: P l of legs illegible) ldan byed la sogs (GN sogs: P s of sogs illegible) pa na (GN na: P illegible) re / (PN /: G om.).* [2] GNP 版割注: *phyi'i (GN phyi'i: P phy of phyi'i illegible) don med (GN don med: P illegible) na (GN na: P na /).*)

ここの対論者は，世俗として外界の対象を認める者であることは分かるが，果たして Bhāviveka なのであろうか．筆者が知る限りでは，Bhāviveka は，『十地経』の第八（不動）地の極微に関する記述には言及していないと思われる．筆者が現在知る限りで，この第八地における極微の記述に言及しているのは次の二人である．一人は Śubhagupta である．*Bāhyārthasiddhikārikā* (BASK) 59-60: *mi g-yo sogs gnas blo ldan ni / grangs la sogs pa'i bye brag gis / dmyal sogs rdul phran la rtog pas / de phyir med par mi rung ngo // gal te de 'khrul dbang las gsungs / drug pa blo tsam rtogs pa ni / ji ltar brgyad par rdul phran gyi / grangs sogs 'khrul pa skye bar 'gyur //.* BASK 59-60 の和訳等に関しては，御牧 (1989) を参照せよ. BASK 64 も見よ. 和訳は神子上 (1983) p. 13 を，テキストは神子上 (1986) を見よ．BASK 59-60 は BSGT に引用される．BSGT の解釈によると，Kamalaśīla は Śubhagupta のこの反論に対して，*Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP) 中の次の文によって答えたとされる：(TSP$_k$ p. 568, 8-10:) *jñānajñeyayoḥ parasparam eka evopalambho na pṛthag iti / ya eva hi jñānopalambhaḥ sa eva jñeyasya ya eva jñeyasya sa eva jñānasyeti yāvat /.* BSGT p. 132, 4-25 と御牧 ibid. pp. 346-347 を見よ. しかし，これはあくまでも BSGT の解釈であり，これまでのところ，Śubhagupta の上記の反論に対する Kamalaśīla 自身の直接的な回答は，彼の著作には確認されていないと思われる．MĀ のここでの対論者は誰であるかについてだが，この対論者は，あくまでも “世俗として” 外界の極微を認める者であるから，Śubhagupta ではないと考えられる．Cf. 森山 (1991).

かの〔菩薩〕は，極微が微細であることを知り，大量であることも，無量であることも，分類されることも知る．無量なる極微の分類についての巧みさをも知る．世界において，地界の極微がどれくらい在るかも知り，同様に，水界と火界と風界の〔極微がどれくらい在るか〕をも知るのである[158]．

と詳細に説かれた如くである．

§76. 認識作用と同様に，外〔界〕の対象も一般的に認められるから，〔唯心論者の「外界の対象は非存在である」という主張命題は，世間上の〕常識 (*grags pa*) により排斥されるものでもある．正理によって考察されたならば，〔認識作用と外界の対象〕両者いずれも考察の重みに全く耐えないので，事物としての確立を得ないけれども，世間的活動の真理としては，事物〔として〕両者いずれも，牛飼い女にまで全く一般的に認められているのである[159]．

第八地の極微の記述に言及するもう一人は Candrakīrti である．*Madhyamakāvatāra* (MAt) XI k. 6: *mi g-yo'i sar gnas rnam rtog med pa des / stong gsum brgya phrag stong bsdoms 'jig rten na / rdul tshad ji snyed yod pa de rnams dang / grangs mnyam yon tan dag ni 'thob par 'gyur //.* 「不動地にいる無分別〔状態〕の彼は，幾百千の三千大千世界を合わせたところにあらん限りの極微と同数の功徳を得るであろう．」MAtBh ad MAt XI k. 6 p. 353, 10-12: *byang chub sems dpa'i sems [brgyad pa] bskyed pas ni ji skad du bstan pa'i yon tan dag stong gsum gyi 'jig rten gyi khams 'bum gyi rdul phra rab kyi rdul snyed 'thob bo /.* 「第八心を生じた菩薩は，上説の功徳を，三千大千世界の極微の数ほど獲得するのである．」不動地の記述ではないが，MAt XII k. 39 と MAtBh p. 403, 9-13 も参照せよ．

Kamalaśīla が Candrakīrti を知っていたことを示す文献学上の確定的な証拠は現在まで見つかっていない．しかし，以下に説かれる，外界の対象を認める中観論者の見解を見ると，Candrakīrti の見解とも見なしうるものが説かれているので，彼が対論者であるという可能性は即座に否定されるべきことではないと思われる．KEIRA (2004) pp. 122-123, fns. 195-196 を参照せよ．

[158]DBhS p. 139, 1-6: *sa paramāṇurajaḥsūkṣamatāṃ ca prajānāti / mahadgatatāṃ cāpramāṇatāṃ ca vibhaktitāṃ ca prajānāti / apramāṇaparamāṇurajovibhaktikauśalyaṃ ca prajānāti / asyāṃ ca lokadhātau yāvanti pṛthivīdhātoḥ paramāṇurajānsi tāni prajānāti / yāvaṃty abdhātoḥ paramāṇurajānsi tāni prajānāti / yāvaṃti tejodhātoḥ paramāṇurajānsi tāni prajānāti / yāvaṃti vāyudhātoḥ paramāṇurajānsi tāni prajānāti /. paramāṇurajas* のチベット訳は *rdul phra rab kyi rdul* であるが，単に *rdul phra rab* と訳される場合もある．E.g., *Saddharmapuṇḍarīka* (SDhP) p. 316, 7; (Tib:) P136b1-2. Cf. 一郷 (1995) p. 239, n. 31). 和訳は，荒牧 (1974) p. 248, 6-12 を参照．『佛説十地經』 p. 560b, 5-10: 又知微塵細相麁相。無量相及差別相。於何世界所有若干微塵積聚。微塵差別皆能了知。於何世界所有若干地界微塵皆能了知。所有若干水界微塵皆能了知。所有若干火界微塵皆能了知。所有若干風界微塵皆能了知。MMA D143a2-3 G228b6-229a2 N168b3-5 P174b4-6 に引用される．

[159]MMA の GNP 版割注は，対論者を Candrakīrti と見なし，MAt VI kk. 91ab-92 を引用する：(MMA D143a3-4 G229a2-5 N168b5-7 P174b6-175a1:) *grags pa dang yang 'gal te* [1] *rnam par shes pa bzhin du phyi rol gyi don yang grags pa'i phyir ro /* [2] *rigs pas dpyad na ni* [3] *gnyis ka yang (D yang: GNP 'ang) brtag mi bzod pa nyid kyis dngos por med do // tha snyad kyi bden pa la dngos po*[4] *gnyis ka'ang ba lang rdzi mo'i (GNP mo'i: D po'i) bar la grags pa nyid do //.*

([1] GNP 版割注: *zla (GN zla: P illegible) grags zhabs (GN zhabs: P zh of zhabs illegible) kyis (GN kyis: P kyi of kyis illegible) / (G /: N om.; P illegible) 'jig rten pa yi (GN 'jig rten pa yi: P illegible) de nyid la gnas la / (GP /: N om.) phung po 'jig (GN 'jig: P illegible) rten grags te lnga char yod (GN yod: P d of yod illegible) / (GP /: N om.) (= MAt VI k. 91ab) ces gsungs pa ltar / (GP /: N om.).*) [2] GNP 版割注: *gzugs med na ni sems yod (GN yod: P y of yod illegible) ma (GN ma: P m of ma illegible) 'dzin (GN 'dzin: P n of 'dzin illegible) gcig (GNP gcig: MAt$_T$ zhig) // (GP //: N om.) sems yod nyid na'ang (GN na'ang: P illegible) gzugs (GN gzugs: P zu of gzugs illegible) med (G med: N mad; P m of med illegible) ma 'dzin cig (GN cig: P illegible; MAt$_T$ zhig) // (GN //: P /) de dag shes rab tshul mdor sangs rgyas (GN tshul mdor sangs rgyas: P illegible) kyis (G gyis: NP kyi) // (G //: P /; N om.) mtshungs par spangs shing mngon pa'i chos las gsungs / (GP /: N om.) (= MAt VI k. 92) shes dbu ma 'jug par (GN 'jug par: P 'jugr) bshad pa ltar / (NP /: G om.).* [3] GNP 版割注: *don (GN don: P do of don illegible) dang sems.* [4] GNP 版割注: *don dang sems (GN sems: P sems /).*) 上記のとおり，MMA 所引の MĀ は，*grags pas gnod pa yang yin te /*の一文を欠いている．

MAt$_{Li}$ VI kk. 91ab-92: *pañcāpy ete santi lokaprasiddhāḥ skandhās tattve laukike 'vasthitasya / rūpābhāve mā grahīś cittasattāṃ rūpābhāvaṃ cittasattve ca mā gāḥ / prajñānītau sūtra ete samānaṃ buddhaiḥ kṣiptā varṇitāś cābhidharme //.* 「世間の真実に住する者にとっては，諸蘊は世間において一般的に認められるものであり，これらは五ついずれも存在している．色形が存在しないなら，心は存在すると捉えてはならない．心が存在するならば，色形の非存在に陥ってはならない．それら（＝色形と心）は，智慧〔の完成〕の方法〔を説く〕経典（＝般若経）においては，諸仏により等しく断ぜられ，アビダルマにおいては，〔有ると等しく〕説かれた．」*shes rab tshul* (*prajñānītau*) の訳は，MACDONALD (2015b) pp. 357-358, Appendix III (re: §2., n. 38): *nīti* を参照して訳した．Cf. YONEZAWA (2013) p. 142, 12-13: (**Lakṣaṇaṭīkā* 12a7:) *prajñāpānītiḥ prakaśo yasmin sūtre / prajñāpāramitāyām ity arthaḥ /.*

MAtBh ad MAt VI k. 92 pp. 192, 18-193, 2: *gang gi tshe 'thad pas gzugs med par rtogs na ni / de'i tshe gnyi ga'i yod pa 'thad pa dang bral ba'i phyir sems med par yang rtogs par bya dgos la / yang gang gi tshe sems yod pa nyid du rtogs na ni de'i tshe gzugs kyang rtogs par bya dgos te / gnyi ga yang 'jig rten la grags pa'i phyir ro //.* 「道理によって『色形は存在しない』と理解するならば，その場合〔色形と心の〕両者が存在することは道理を欠いているから，心は非存在であると理解するべきである．また，『心は存在するものである』と理解するならば，その場合色形も〔存在するものであると〕理解するべきである．〔心と色形の〕両者いずれも世間において一般的に認められているからである．」

MMA の GNP 版割注が，Candrakīrti が説く思想内容から判断して，彼をここの対論者と考えるのは理解不可能なことではない．しかし，Kamalaśīla 自身が本当に Candrakīrti をここの対論者と考えていたのかどうかは文献学上確定困難なことである．他方，世俗において，認識作用と同様に，外界の対象も成立すると考えるのは，Candrakīrti だけでなく，以下に見て行くように，Bhāviveka も同じである．つまり，ここで言えることは，Kamalaśīla が Candrakīrti を知っていたかどうかという歴史的事実関係は別として，ここの対論者が述べていることの内容は，Bhāviveka と Candrakīrti 両者の中観思想のどちらにおいても成り立ち得る内容と見なされることである．**§75-§80** の理解のために予め述べておくと，このことは，ここ **§76** だけではなく，**§75-§80** において対論者が述べていることの内容全てについて言えることである．従って，**§81** で Kamalaśīla が述べる結論についても，上記の歴史的事実関係は別として，対論者の思想内容だけを問題とする立場から見れば，我々は，Candrakīrti の中観思想をも，世俗として外界を認める中観思想の一つとしてそこに含めて，Kamalaśīla の結論の意味を考察することができると思われる．

さて，**§76** の対論者の考えに相当する Bhāviveka の考えについては，MHK$_{Eck}$ (= MHK$_S$) 5-17 を見よ: *cittamātropalambhena rūpādyagrahaṇaṃ na ca / abhyupetapratītibhyāṃ pratijñā bādhyate yataḥ //.*

§77. 「心のみに過ぎない」と説かれる目的 (*'bras bu; *kārya*) は，他者によって構想された行為主体 (*kartṛ*) と享受主体 (*bhoktṛ*) を否定することである．世間的活動としても，心とは異なった別の行為主体〔と享受主体〕は，一般的に認められないからである[160]．或いは又，〔「心のみに過ぎない」と説かれるのは,〕心は一切法に

「心のみ〔である〕という認識により色形等の把握はない，というのもまた正しくない．なぜならば，〔唯心論者の〕主張命題は，承認説と〔世俗上の〕理解 (*pratīti*) とにより排斥されるからである．」Cf. 齋藤 (2007) pp. 216, 2-4，ECKEL (2008) p. 232, 9-11. TJ ad MHK 5-17 D204b5-6 を見よ: *khas blangs pas gnod par 'gyur ba ni mig dang gzugs rnams la brten nas mig gi rnam par shes pa 'byung ngo zhes gsungs pa'i lung dang 'gal ba'o // grags pas gnod par 'gyur ba ni 'jig rten na gzugs la sogs pa'i don med par mig la sogs pa'i rnam par shes pa mi skye bar grags pas gnod par 'gyur ba'o //.* 「承認説により排斥されるとは,『眼と色形に依拠して眼識が生じる』と説かれた伝統教説 (*āgama*) と矛盾することである．〔世俗上の〕理解 (*pratīti*) により排斥されるとは,『色形等の対象無くして眼等の識は生じない』という世間における理解により排斥されるということである．」*prasiddhabādhā / pratītibādhā* については，TILLEMANS (1997) p. 169. fn. 18 と TILLEMANS (2000) pp. 153-189 と pp 219-228 Appendix B を見よ．また，NBṬ ad NB III k. 51, pp. 183, 5-184, 6 も見よ．Cf. NBṬ$_{VD}$ p. 106.（注記：TILLEMANS (1997) p. 169. fn. 18 では，*prasiddhabādhā* は *invalidation by what it commonly recognized* と訳され，他方 *pratītibādhā* は *invalidation by concepts* を意味するものと解されている．しかしながら，TILLEMANS (2000) では，*pratītibādhā* は，一貫として，*invalidation by [conventional] acknowledgement* と訳されているようである．）

TJ を参照すると，MHK 5-17 の「*pratīti* による排斥」は，唯心論者の「外界の対象は非存在である」という主張命題が, ただ単に牛飼い女までもが認めるような世間一般の常識により排斥されると述べているようではなく，むしろ，Bhāviveka は，より踏み込んで考察し，実際どのような世間・世俗上の理解・考えがその主張命題を排斥するのかを明確にし，「色形等の対象無くして眼等の識は生じない（即ち，色形等の対象は眼等の識が生じるための必要条件である）」という考えによって，その主張命題は排斥されるのであると述べているように思われる．これは，PP XXV の同じ唯心説に関する議論で説かれる「*grags pa* による排斥 (*gnod*)」についても同様である．ECKEL (1985) p. 62, 1-8 と同ページ fn. 5，そして p. 65, 17-21 も見よ．テキストは，PP XXV$_{Ldt}$ pp. 88,18-89, 2 と p. 90, 16-18 を見よ．MHK 5-17 の *pratīti* は，ECKEL (2008) では *common sense* と訳され，齋藤 ibid. では「明瞭な知」と訳されている．

上記に基づき考えると，**§76** で説かれる *grags pas gnod pa* は，MHK 5-17 の *pratītibādhā* が説いていることとは異なっているように思える．ここでは，むしろ単に，世間一般的に認められている事柄 (*prasiddha*) によって排斥されると述べているだけに過ぎないと思われるからである．それゆえ，ここの *grags pas gnod pa* に対応するサンスクリット語の原語は，*pratītibādhā* よりも，*prasiddhabādhā* の方が適当であると見なし，「〔世間上の〕常識により排斥される」と訳すこととした．

[160]MMA の GNP 版割注は，MHK 5-28cd と MAt VI k. 86 とを引用し註記するので，ここの対論者は，Bhāviveka と Candrakīrti の双方であると考えているようである．MMA G229a5-6 N168b7-169a1 P175a1-3 を見よ．

MHK$_S$ 5-28cd: *sūtre ca cittamātroktiḥ kartṛbhoktṛniṣedhataḥ //.* Cf. MHK$_{Eck}$ 5-28cd. 和訳（齋藤 ibid. p. 224, 12-13）:「また，経典の中で唯心が語られるのは, 行為主体と享受主体を否定することによるのである．」PP XXV$_{Ldt}$ p. 89, 7: *de ngo bo nyid las yod pa ma yin pa'i phyir, phyi rol gyi don ngo bo nyid yod pa ma yin ...* ., p. 89, 14-16: *bcom ldan 'das kyis «sems tsam» zhes gsungs pa'i mdo sde'i don kyang sems las gzhan pa'i byed pa po dang za ba po med pa'i phyir sems tsam mo zhes gsungs par khas blangs pa'i phyir,*

先行するものであるから，一切法に関して，心が主要なもの〔である〕と証明するためである[161].

§78.「対象はない．心のみである」(LAS X k. 153cd) ということとさらに「習気によって乱された心が，対象の顕現を持つものとして生じる」(LAS X k. 155ab) 云々と説かれたことについても，無形象の心では，どのようにしても対象の把握は不可能であるので，従って必ず，それ（＝心[162]）は有形象であると承認されるべきである．それゆえ，心の〔中の〕形象とは区別された〔外界の〕対象の形象は〔心に〕顕現しえないから，〔それらの経文は〕その〔顕現，即ち外界の対象それ自体の形象が心に顕現すること[163]〕を否定することによって，心は有形象であると説き示しただけに

---

de ltar nes par byar mi nus te, ... 英訳 (ECKEL ibid. pp. 63, 12-64, 1): "The scriptural passages (*sūtrānta*) in which the Lord speaks of mind-only (*cittamātra*) mean that there is no agent (*kartṛ*) and enjoyer (*bhoktṛ*) other than mind (*citta*). Therefore, since we accept (*abhyupagama*) [this interpretation of] the statement of mind-only, [the statement] cannot be specified in that way [i.e. as being a negation of external objects]."

MAt$_{Li}$ VI k. 86: *tasmin tasmin varṇitāḥ śāstra ete tīrthyair yuktyā pudgalādyā yathāsvam / kartṛtvenāpaśyatā tān jinena lokasyoktaṃ cittamātraṃ tu kartṛ //.*「それぞれの論書の中で，非仏教徒たちは，道理によって，各々〔の教義として[1]〕，それら人我 (*pudgala*) 等を説いた．しかし，それらを *kartṛ*（作り手）とは見ない勝者は，心のみを世間の *kartṛ* と説いた．」([1] MAtBh, p. 184, 17-18: *ji ltar rang gi (yathāsvam) zhes bya ba ni rang rang gi grub pa'i mthar zhes bya ba'i don to //.*）森山 ibid. p. 82 を参照．MAtBh VI p. 185, 3-5: *bcom ldan 'das gyis ni gang zag la sogs pa 'di dag byed pa po nyid du ma gzigs pa nas sems tsam kho na 'jig rten gyi byed pa po nyid du bstan to zhes bya ba ni mdo'i don yin no //.*

[161]MAtBh VI p. 190, 5-8: *de'i phyir sems tsam du gsungs pa ni sems tsam zhig kho na gtso bor gyur pa nyid du yongs su gsal bar bya pa'i phyir yin gyi / lung 'di gzugs med pa nyid gsal bar byed pa ni rnam pa thams cad du ma yin no //.*「それゆえ，『心のみに過ぎない』と説くのは，まさに『心のみ』が主要なものであることを明らかにするためであって，この聖典は〔外界の〕色形が無いことを明らかにしているのでは全くないのである．」

MMA D143a5 G229b1-2 N169a2-3 P175a3-4: *yang na sems ni* [1]*chos thams cad kyi sngon du 'gro ba nyid kyi phyir chos thams cad la ltos (D ltos: GNP bltos) nas* [2] *sems gtso bor sgrub (D sgrub: GNP bsgrubs) pa'i don du'o //.* ([1] GNP 版割注: *las dge sdig la sogs. chos* を修飾． [2] GNP 版割注: *bzhi brgya pa'i rab byed snga par (GN bzhi brgya pa'i rab byed snga par: P bzhi brgya pa'i rab 'byed snga par (Inserted in P175a5).) / (N /: G //; P om.) sems ma gtogs par 'gro sogs la // (G //: NP /) gang phyir bsod nams la sogs pa // (G //: NP /) ma mthong de phyir las kung la // (G //: NP /) yid ni don por bsgrub par bya / (N /: GP om.) (= CŚK 5-4) zhes pa ltar / (NP /: G om.).*)

Āryadeva の *Catuḥśatakaśāstrakārikā* (CŚK) 5-4 (D6a5) と Candrakīrti 註 *Bodhisattvayogācāracatuḥśatakaṭīkā* (CŚṬ) の和訳は上田 (1994) p. 72 を見よ．

bsgrub pa'i phyir ro の *phyir* は，上の MMA 中の対応文により，この場合，理由の意味ではなく，目的の意味にとるべきである．Cf. 一郷 (1995) p. 221, 25:「心が中心であると成立しているからです．」

[162]Cf. MMA の GNP 版割注: (MMA G229b3-4 N169a5 P175a6:) *gdon mi za bar [sems kyi yul 'dzin pa] de rnam pa dang bcas pa kho nar khas blang par bya'o //*（*[ ]* 内が割注の語）．)

[163]Cf. MMA の GNP 版割注: (MMA G229b4 N169a5-6 P175a6-7:) *[sems kyi rnam pa las gzhan pa'i*

過ぎないのであり，それ（＝心[164]）より外の対象は非存在であると理解されるだろうとは〔説き示して〕いないのである[165].

---

don rnams] de bkag pas sems rnam pa dang bcas pa kho na sgrub pa 'ba' zhig ste /（*[ ]* 内が割注の語）. Cf. 一郷 ibid. p. 222, 6:「それ (心が無形象であること) の 否定によって.」一郷 ibid. p. 239, n. 39) も見よ.

[164]Cf. MMA の GNP 版割注: (MMA G229b4-5 N169a6 P175a7:) *[mdo'i ngag] de las phi rol gyi don med par rtogs pa ni ma yin no //*（*[ ]* 内が割注の語）.

[165]Bhāviveka の考えでは，心は「対象としての顕現」(*viṣayābhāsatā*) を持ち，従って有形象であり，その「対象としての顕現」以外に心の本質はない，即ち，その顕現とは別の心・識自体の顕現は見られないとされる． MHK$_S$ 5-20: *viṣayābhāsatā cet syāc cittasyālambanaṃ matā / viṣayābhāsatāṃ projjhya cittātmānyo 'sti kīdṛśaḥ //.* 和訳（齋藤 ibid. p. 218, 2-3）:「もしも，対象としての顕現が心の対象的根拠であると考えられるのなら，対象としての顕現を捨ておいて，別のいかなる心の本質があるのか.」英訳は ECKEL (2008) p. 234 を見よ．TJ (ad MHK 5-20) D205a7-b1: *'di ltar kho bo cag gis ni gzugs la sogs pa'i yul du snang bar skyes pa nyid rnam par shes pa'i ngo bo nyid yin par mthong gi yul du snang ba ma gtogs par rang du snang ba gzhan ma mthong ngo //.* 和訳は齋藤 ibid. p. 218, 6-8, 英訳は ECKEL ibid. p. 234, 18-20 を見よ．Bhāviveka の認識論と識二分説批判については，齋藤 (2008) を見よ.

Bhāviveka の「唯心」(*cittamātra*) の「唯」(*mātra*) 解釈．PP XXV$_{Ldt}$ p. 90, 2-3: *«tsam» zhes gsungs pa de ni byed pa po de dgag pa yin par shes par bya'i, don dgag pa ni ma yin par shes par bya'o.* 英訳 (ECKEL (1985) p. 64, 13-15): "The word »only« is to be understood as the negation of an agent. It is not to be understood as a negation of external objects." ECKEL ibid. p. 63 と fn. 9 も参照せよ.

Candrakīti は MAt 第 6 章の中で自己認識（再帰的認識 : *svasaṃvedana*）批判を展開しそれを認めないようであるが，彼は YṢV ad YṢ k. 34 において，「心は有形象であること」（有形象論 *sākāravāda*）を世俗として認め，次のように言う： (YṢV$_T$ pp. 74, 23-75, 3:) *rnam par shes pa la 'ga' zhig gi rnam par ma bshag pa la ni 'jig rten gyis yod pa nyid du rnam par gzhag mi nus te / mo gsham gyi bu la sogs pa yang yod par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // de bas na (= na hi vijñāne 'nāropitākārasya kasyacil lokaḥ śakto 'stitāṃ vyavasthāpayituṃ / vandhyāputrādīnām apy astitvaprasaṅgāt / tasmād) 'byung ba dang 'byung ba las gyur pa dang / sems dang sems las byung ba dang / sems dang ldan pa ma yin pa rnams ni rnam par shes pa'i rnam pa'i rgyu can yin pa'i phyir 'byung ba chen po la sogs pa gang dang gang bshad pa ci yang rung ba de dag thams cad ni rnam par shes par yang dag par 'du zhing khongs su chud do //.*「意識の中に何らかのものの形象が与えられていないにもかかわらず，世間の人々が〔そのものの〕存在性を確立することはできないのである．不妊症の女性の〔存在するはずのない〕子供等さえも存在するという誤謬に陥ってしまうからである．従って，元素・元素から成るもの・心・心作用・心に関係のないものは，意識の中の形象 (*rnam pa: ākāra*) を原因としているので，元素などおよそ説かれているものは何でも，それらはすべて意識に集約され含まれるのである.」YṢV ad YṢ k. 34 のサンスクリット断片は，LI AND YE (2014) p. 142, 14-18 を見よ．Candrakīrti による有形象論の世俗的（あるいは暫定的）採用については，SCHERRER-SCHAUB (1991) pp. 252-259, fn. 492 （特に，pp. 258, 39-259, 14）を見よ．Candrakīrti の自己認識（再帰的認識）批判については，MAt VI kk. 73-76, MAtBh pp. 166, 19-173, 3 を見よ.

Candrakīti も，Bhāviveka と同様に，「唯心」の教えは外界を否定するためのものではないと解釈する．既に fn. 161 で，MAtBh VI p. 190, 5-8 を引き言及したが，MAt VI k. 87 と自註も見よ : MAt$_{Li}$ VI k. 87: *buddho yadvad buddhatattvo niruktas tadval lokaś cittamātrapradhānaḥ / uktaḥ sūtre cittamātraṃ niṣedho no rūpasyetīha sūtrārtha evam //.*「『真実の覚者』が『覚者』と表現されるように，そのように『心のみを主要なものとする世間』が，経典の中で『心のみ』と説かれたのである．ここでは，〔外界の〕色形は否定されるというそのようなことは，経典の意味ではないのである.」MAtBh ad MAt IV k. 87: *de ltar*

§79. さらに，「自己 (*ātman*) 等は存在する」等という教説のように，〔「心のみに過ぎない」という〕そのような〔教説〕によって教化されるべき人を考慮に入れて，医師たちが病人に応じて治療するのと等しく，諸仏世尊の様々な説法は行われるのである[166]．そのように，『聖入楞伽〔経〕』の中でも，

---

na re zhig byed pa po gzhan bkag pas don byas zin pa'i phyir tsam gyi sgras shes bya 'gog par mi nus pa brjod nas / rnam pa gzhan tu bshad pa las kyang phyi rol 'gog pa mi srid par bstan pa'i phyir bshad pa / de nyid rgyas la sangs rgyas bsnyad ji bzhin // de bzhin sems tsam gtsor gyur 'jig rten la // mdo las sems tsam zhes gsungs gzugs ni 'dir // 'gog pa de ltar mdo yi don ma yin // (k. 87). 「そうならば，まず，〔心〕以外の *kartṛ*（作り手）を否定したことにより目的を成し遂げたので，〔次に〕『のみ』(*tsam: mātra*) という語によって〔心のみがあるのではなく〕認識対象〔の存在も〕否定し得ないと述べて，別の仕方での説明からも，外界の否定はありえないと示すために，（次の k. 87 が）説かれたのである．（k. 87 の訳は省略）」YONEZAWA ibid. p. 140, 13 を参照：*mātraśabdo (tsam gyi sgras) na jñeyapratiṣedha (shes bya 'gog) _artaḥ /.* また，MAt k. 90 と自註も見よ．

[166]MMA D143a7 G229b5-6 N169a6-7 P175a7-8：*yang na* [1] *gang bdag yod pa nyid la sogs par bstan pa bzhin du* [2]*de lta bus 'dul ba'i skye bo la bltos nas bcom ldan 'das rnams kyis* [3] *bstan pa'o //* [4]．（[1] GNP 版割注: *rdzus te byung ba'i sems can (upapāduka sattva) yod do zhes (GN zhes: P zhes /).* TJ ad MHK 4-55, AKBh ad AK 3-8cd, ECKEL (2008) p. 199 fn. 372 を見よ． [2] GNP 版割注: *sems tsam du bstan pa (GN pa: P pa /).* [3] GNP 版割注: *sems tsam du.* [4] GNP 版割注: YṢ k. 33 の引用がこの後に続く．下を見よ．）

MMK$_{Ye}$ 18-6 を参照: *ātmety api prajñapitam anātmety api deśitam / buddhair nātmā na cānātmā kaścid ity api deśitam //.* 「諸仏によって，『自己は存在する』とも仮に説かれた．『自己は存在しない』とも説かれた．『自己もなく，自己のないこと（＝無我）もない』とも説かれた．」

PP XVIII (ad MMK 18-6a) D186a1-2: *de'i phyir sangs rgyas bcom ldan 'das de dag la / phan gdags par bzhed pa gzhan la phan pa skyed pa'i thugs dam mnga' ba / sems dang sems las byung ba'i rgyun la brten nas / phyi ma la de dag gi rgyun mi 'chad par gzigs pa rnams kyis tha snyad kyi bden pa'i dbang gis bdag yod do zhes kyang gdags par mdzad pas de'i phyir / bdag go zhes kyang brtags gyur cing // zhes bya ba gsungs so //.* 「〔因果を否定する見解により智慧が損なわれ，常に不善を行う者たちがいる〕ために，利他の大慈心に満ちた世尊は，その者たちに利益を与えようと欲し，心・心所の流れ（相続）について，それらの流れは後〔世〕において〔も〕断絶しないと見て，世間的活動の真理に従い，『自己は存在する』とも仮に説いたのである．それゆえ，『自己は存在するとも仮に説かれた』と〔Nāgārjuna は〕説いたのである．」

MAt$_{Li}$ VI k. 43: *evaṃ hi gambhīratarān padārthān na vetti yas taṃ prati deśaneyam / asty ālayaḥ pudgala eva cāsti skandhā ime vā khalu kevalāś ca //.* 「『アーラヤは存在する』・『まさにプトガラは存在する』・『ただこれら諸蘊のみである』．こ〔れら〕の教説は，そのようなより深遠な語句の意味を理解し得ない者に対して〔意図されているの〕である．」(Tib:) *kun bzhi yod cing gang zag nyid yod la // phrung po 'di dag 'ba' zhig nyid yod ces // bstan pa 'di ni de ltar ches zab don // rig par mi 'gyur gang yin de la'o //.* MMA の GNP 版割注 (G229b6 N169a7 P175a8) は，YṢ k. 33 を引いて説明する：*rigs pa bcu drug par / (N /: GP om.) 'jig rten*[1] *(GN 'jig rten: P 'dzin?) dbang du rgyal ba rnams / nga dang nga yi zhes gsungs (NP gsungs: G gsungs pa) ltar / de bzhin phung po skye mched khams / dgos pa'i dbang gis bshad pa yin / (P /: GN om.) ces so // (GN //: P /).*（[1] YṢ$_T$ k. 33 *dgos pa'i*: MĀ (D153a1) と MAV (D77a4) 所引 k. 33 *'jig rten.*）YṢ k. 33 のテキストと

病人各人に対して医者が薬を施すように，そのように，彼等諸仏は衆生たちに対して，「心のみに過ぎない」と説いたのである[167].

と説かれたのである．

§80. 〔「心のみに過ぎない」という教説は〕他の者たちを欺いているのでもないのである．そのような〔教説〕によって教化されるべき人に利益と安楽を獲得させるので，〔「心のみに過ぎない」という教えを〕説くことは有益だからである．他者をただひたすら利することのみが真実であるから，諸世尊は虚偽を説いているのでもないのである[168]．そのように，〔『宝行王正論』(*Ratnāvalī*) の中で[169],〕

和訳については，fn. 89 を見よ．

[167]LAS X k. 406: *āture āture yadvad bhiṣag dravyaṃ prayacchati / buddhā hi tadvat sattvānāṃ citta-mātraṃ vadanti te //.* MMA D143a7-b1 G229b6-230a1 N169b1 P175b1-2 を見よ: *nad pa dang ni nad pa la // sman pas rdzas* [1] *byin* [2] *ji lta bar // de bzhin sangs rgyas* [3] *sems can (DNP can: G tsan) la // sems tsam nyid du gsungs pa yin // (DN //: GP /).* ([1] GNP 版割注: *gang dang gang dus der khams las (NP las: G la) 'phrod (GN 'phrod: P 'phros) pa la (N pa la: G pa; P pa /).* [2] GNP 版割注: *pa.* [3] GNP 版割注: *rnam rig tsam gyi gdul ba'i (G ba'i: NP ba'i /).*)

k. 406 は，筆者が知る限り，Bhāviveka のテキストには引用されていないと思われる．これを引用するのは Bhāviveka ではなく，Candrakīrti である．MAtBh VI p. 196, 8-11: *ji ltar nad pa nad pa la // sman pas sman rnams gtong ba ltar // sangs rgyas de bzhin sems can la // sems tsam du yang rab tu gsungs //.* 森山 ibid. p, 95, fn. (303j) 参照．Dharmapāla (護法) の『大乗廣百論釋論』にも引用されているが，ここでの対論者は瑜伽行派の護法ではないことは明らかであろう：(大正 30 249b8-9 :) 「如世有良醫妙藥投衆病諸佛亦如是爲物説唯心」．

[168]MMA D143b1-2 G230a1-3 N169b1-3 P175b2-5: [1] *gzhan rnams slu (D slu: GNP bslu) bar gsungs pa yang (D yang: GNP 'ang) ma yin te* [2]*de lta bus*[3] *gdul ba'i skye bo la* [4] *phan pa dang* [5] *bde pa thob par byed pas* [6] *bstan pa 'bras bu yod pa nyid kyi phyir ro //* [7] *pha rol la gcig tu phan pa kho na bden pa nyid kyi phyir bcom ldan 'das rnams*[8] *brdzun gsung ba yang mi mnga' ste* [9] */.* ([1] GNP 版割注: *'o na mi bden pa ston pas gdul bya bslus bar 'gyur ro zhe na / (GP /: N om.).* [2] GNP 版割注: *sems tsam du bstan pa (GN pa: P pa /).* [3] DGP *de lta bus*: N *de lta bu'i.* [4] GNP 版割注: *yun du.* [5] GNP 版割注: *'phral du (GN 'phral du: P 'bras bu /).* [6] GNP 版割注: *chos.* [7] GNP 版割注: *gal te gdul bya la phan yang sangs rgyas kyis brdzun du gsungs par 'gyur ro zhe na /.* [8] GNP 版割注: *chos can.* [9] GNP 版割注: *gzhan la phan pa kho na ston pa'i phyir ro / (GP /: N om.).*)「〔非真実を説くことにより教化対象者を欺いたことになるであろうというならば，(唯心の教説は)〕他者を欺いて説かれたのでもないのである．そのような〔唯心の教説〕によって教化されるべき人に〔常に〕利益を与え，〔即刻〕安楽を獲得させるので，〔(唯心の) 教えを〕説くことはまさしく有益だからである．〔もし教化対象者に利益を与えても，仏陀は虚偽を説いたことになるであろうというならば,〕他者をひたすら利することのみが真実であるから，諸世尊〔＝（「利他のみを説く」という）属性の保持者〕は虚偽を説いているのでもないのである．〔他者を利することだけを説くからである.〕」(〔 〕内の語は GNP 版割注．( ) 内の語は筆者による補足.)

[169]MMA D143b2 G230a4 N169b3 P175b4: *ji skad du 'phags pa klu sgrub zhabs kyis [rin chen phreng ba'i le'u gnyis par (GN par: P par /)] gsungs pa / ([ ]* 内の語は *GNP* 版割注*).*「そのように，聖 Nāgārjuna 足下により『宝行王正論』第二章で説かれた.」

欺きがあることは真実ではない．利する意図無きことも〔真実では〕ない．
他者をただひたすら利することが真実である．〔他者に〕利益が無いから，
その反対（＝他者を利さないこと）は〔真実では〕ない[170]．

と説かれた如くである．

以上は〔世俗として外界を認める中観論者が〕述べたことである．

1.2.1.11.3 Kamalaśīla の結論

§81. そうならば，世俗として，外〔界〕の対象が存在するのでも，心のみに過ぎないのでも，〔自身の中観思想の立場に従えば〕良い．〔しかし〕疑い無く，事物の真実の自性を，少しでも証明することになるそのような信頼する人の言葉 (*āptavacana*) は全く無いのである[171]．

---

[170] *Ratnāvalī* (RV) II k. 35: *nāvisaṃvādavat satyaṃ [na bhā]vodbhavam arthataḥ / paraikāntahitaṃ satyam ahitatvān mṛṣetarat //* 「真の意味においては，欺きが無いことが真実であるのではなく，心を翻さないことでもない．ただひたすら他者を利することが真実である．その反対は虚言である．他者を利することが無いからである．」(Tib:) *slu ba med ldan bden min te // sems pas bsgyur ba don du min // gzhan la gcig tu phan pas bden // mi phan phyir ni cig shos min //.* 和訳に関しては，瓜生津 (1974) p. 256, 5-7 を参照．MĀ 所引の k. 35 はサンスクリット原文と比較すると，特に，k. 35ab に違いが見られる．サンスクリット原文をそのまま訳すと，MĀ の文脈に合わないので，ここでは，MĀ 所引の k. 35 のチベット訳を訳することにする．一郷 (1995) pp. 239-240, n. 41) を参照．MĀ を引用する MMA は，k. 35ab を引かず，k. 35cd のみを引用する：(D143b2, G230a4, N169b3-4, P175b4-5:) *gzhan la [mtha'] gcig tu phan pa bden // mi phan nyid phyir [bden pa las (GN las: P las /)] cig shos brdzun // zhes [gsungs] so //* *([ ] 内の語は GNP 版割注).*

[171] 本文の和訳は，ここの文と構造的に同じと見なされ得る，次の *Bodhicaryāvatāra* (BCA) 4-44 を参考にした：(Tib:) *bdag ni bsregs te bsad gyur* ***tam*** *// bdag gi mgo bo bcad* ***kyang bla'i // rnam pa kun du*** *nyon mongs pa'i // dgra la 'dud par* ***mi*** *bya'o //* (Skt:) *galantv antrāṇi me* ***kāmaṃ*** *śiraḥ patatu nāma me /* ***na tv*** *evāvanatiṃ yāmi* ***sarvathā*** *kleśavairiṇām //.* BCA 4-44 のテキストは， BHATTACHARYA (1960) pp. 50, 21-51, 2 を見よ．

MMA D143b3-4 G231b1-3 N169b7-170a1 P175b8-176a2: *de ltar na (D na: GNP om.) kun rdzob tu phyi rol gyi don nam / rnam par rig pa tsam nyid yin yang bla ste the tshom med par dngos po*[1] *'i ngo bo nyid yang dag pa*[2] *sgrub (DG sgrub: NP bsgrub) pa gang yid ches pa de lta bu'i bka'*[3] *rnam pa thams cad du med do /.* ([1] GNP 版割注: *sems la sogs pa (GN pa: P pa /).* [2] GNP 版割注: *don dam pa.* [3] GNP 版割注: *gsung rab.*) BNJ 108b3-4 も見よ: *de ltar na tha snyad du phyi don yod dam med kyang rung ste / the tshom med par yang dag par yod pa phra rab kyang sgrub par 'gyur ba yid ches pa'i lung ni gang du yang med do zhes bya ba ni don bsdus ba'o //.* Cf. BNZhG 311, 8: *shes bya nag gi dbu ma'i lugs dang / phyi rol kyi don yod par smra ba'i dbu ma pa'i lugs dang / gnyi ka ltar yang sems don dam du myi 'grub pa'i don bsdu pa'o /.* BNZhG 313, 4-6 も参照せよ．

＜チベット語テキスト＞

dBu ma snang ba

1. 聖典 (*āgama*) による一切法無自性性の証明（1）

1.1 *Phyogs snga ma* (*pūrvapakṣa*)

C134a2,D133b7
G176b4,N135a7
P143b6

§1. ’di na kha cig[1] don dam pa zab mo’i tshul gyi rgya mtsho’i gting mi dpogs nas smra ba / lung ngam rigs (N135b) pa’i sgo nas chos thams cad ngo bo nyid med par bsgrub[2] par ’gyur grang na / re zhig[3] lung gi sgo nas ni nus pa ma yin te / de (D134a) su yang khas mi len pa’i phyir ro // tshig ni ’dod pa tsam gyi rjes su byed pa yin te / de lta bu’i dngos po dang ’brel pa med pas tshad ma dang mi ldan pa’i yang phyir ro // ’brel pa yod du chug na yang tshu rol mthong ba rnams kyis gtan la dbab par mi nus pa’i phyir ro // rtogs par byed pa gang dag de’i gsung rab kyi lugs khas len pa de dag la (P144a) yang gang gis na the tshom med par dngos po ma lus pa[4] ngo bo nyid med par rtogs par ’gyur ba de lta bu’i tshig ni cung zad kyang nye (G177a) bar bstan par mi nus so //

§2. mdo kha cig las

> chos thams cad ni ngo bo nyid med pa[5] ma skyes pa gzod ma nas zhi ba /
> rang bzhin gyis yongs su mya ngan las ’das pa’o

zhes bya ba la sogs pa ’byung ba gang yin pa de yang drang ba’i don nyid du rtogs par bya ste / bcom[6] ldan ’das kyi[7] bstan pa ni dgongs pa sna tshogs kyi sgo nas ’jug pa’i phyir ro // de la ngo bo nyid gsum po kun brtags pa dang / gzhan gyi dbang dang / yongs su grub pa rnams ni go rim[8] bzhin du mtshan nyid dang / skye ba dang / don dam pa ngo bo nyid med pa las dgongs nas chos thams cad ngo bo nyid med pa nyid du gsungs te / de bas na ngo bo nyid med pa’i phyir ma skyes pa’o // de’i phyir gzod ma nas zhi ba’o // de’i phyir rang bzhin gyis yongs su mya ngan las ’das pa ste / de bzhin du bcom ldan ’das

---

[1] CDGN kha cig: P kha gcig. [2] DGNP bsgrub: C ’sgrub. [3] GNP re zhig: CD re zhig bka’. [4] GNP pa: CD pa’i. See BNJ 30b2: dngos po ma lus pa ngo bo nyid med par... . [5] CDNP pa: G pa la. [6] CDGN bcom: P bcoms. [7] DGNP kyi: C kyis. [8] GNP rim: CD rims.

nyid[1] kyis ’phags pa dgongs pa nges par ’grel pa la sogs pa las mdo’i don gyi dgongs pa sbyar ba bstan pa yin no //

§3. gzhan yang gnyis su snang ba’i rnam par shes pa kho nas[2] chos thams cad skye ba la sogs pa (C134b) bye brag ’byed kyi / rang rig pa tsam gyis ni[3] ma yin no // gnyis su snang ba yang brdzun pa’i phyir des rnam par gzhag[4] pa’i ngo bo thams cad kyang brdzun (N136a) pa nyid yin no[5] // de bas na kun brtags pa’i mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid kyis chos thams cad skye ba med pa la sogs par gsungs kyi[6] / don dam par ni ma yin te /

§4. de’i phyir re zhig lung gi sgo nas ni nus pa ma yin no // C134b2,D134a7 G177a6,N136a1 P144a8

1.2 *Phyogs phyi ma* (*uttarapakṣa*)

§1. de lta bas na ’di la lan gdab[7] par bya ste / C147b6,D147b5 G196a4,N151a4 P160a1

§2. de la re zhig lung gi sgo nas ni chos thams cad ngo bo nyid med par sgrub nus pa ma yin te / de su yang khas mi len pa’i phyir ro zhes bya ba la sogs pa smras pa gang yin pa de la brjod par bya’o //

§3. ci su yang khas mi len pa’i phyir lung gcig tu blang bar bya ba ma yin pa kho na’am / ’on te blang bar bya ba nyid kyang yin /

§4. de la re zhig phyogs dang po ltar[8] ni rigs pa ma yin te / de lta na ni su yang lung gang la yang brten par bya ba yang[9] ma yin par ’gyur te / de su yang khas mi len pa’i phyir (G196b) ro // (C148a)

§5. de la kha cig nga rgyal gyis sam / don du mi gnyer bas sam / sdig pa’i (D148a) grogs po dang phrad pas sam / yid rnam par rmongs pas sam / dge ba’i bshes gnyen yang dag pa ma rnyed pas sam / gzhan gyi ngor ’jug pas (N151b) sam / dad pa la sogs

[1] CD nyid: GNP om. [2] GNP kho nas: CD kho nar. [3] CDNP ni: G om. [4] CD gzhag: GNP bzhag. [5] CD nyid yin no: GNP nyid do. [6] CD kyi: GNP kyis. [7] CD gdab: GNP btab. [8] CD ltar: GNP om. [9] CD yang: GNP om.

pa'i dbang po dang bral bas sam / legs par rtogs pa'i mkhas pa dang bral bas bcom ldan 'das kyi gsung[1] rab rin po che thog ma dang tha ma[2] dang bar du dge ba la mi brten du zin kyang ci de tsam gyis mkhas pa rang dang gzhan la phan pa skyed par byed pa'i thabs thob pa legs par rtog pa la mkhas pa rnams kyang rten[3] par mi byed dam / tshong pa ngan pa rnams kyis rin thang med pa'i nor bu rin po che yongs su ma shes nas bor zhes te / tshong pa bzang po legs par rtog[4] pa la mkhas pa rnams kyang de mi len pa ni ma yin no //

§6. 'on te bsregs pa dang bdar[5] ba dang bcad pa dag gis gser[6] bzang po[7] bzhin du mngon sum dang rjes su dpag pa dang phan tshun 'gal ba dag gis mi 'gal ba'i phyir dang / lung gzhan yang de las[8] bzlog pa nyid kyi phyir mkhas pa mngon par mtho ba dang / nges par legs pa'i 'bras bu 'dod pa phun sum tshogs pa ma lus par bsgrub[9] pa (P160b) la gzo[10] ba rnams kyis[11] de yongs su spangs nas / gsung rab rin po che gcig tu dge ba gang yin pa de la brten par bya ba kho na'o zhes bya ba'i phyogs yin na ni / de'i tshe khyed bcom ldan 'das kyi[12] gsung rab nyid yongs su brtags te khas len na ni bcom ldan 'das kyis (G197a) shes rab kyi pha rol tu[13] phyin pa la sogs pa las dbu ma'i lam gsal[14] rab tu bstan pa mdzad pa 'di la yang ci'i phyir mi brten / gal te bdag nyid de la brten mi nus su[15] chug na'ang[16] / 'on kyang 'phags pa klu sgrub kyi zhal snga nas / rigs pa'i sgron ma'i tshogs rnam pa du mas 'di gsal rab tu[17] brjod na de'i stobs kyis kyang ci'i phyir khas mi len / de nyid kyi phyir slob dpon de ni bcom ldan 'das kyis de ston pa'i phyir dang / sa dang po thob pa'i phyir 'phags pa lang kar gshegs pa la sogs pa las lung bstan to // gal te 'dis 'di log par ston par 'gyur na (C148b) ni bcom ldan 'das kyis de ltar lung (D148b) ston par yang (N152a) mi 'gyur ro // de'i phyir slob dpon gyi tshig spangs na bcom ldan 'das kyi bka' spangs pa kho nar 'gyur ro // de lta bas na de lung dang ldan pas 'phags pa klu sgrub kyi zhal snga nas bstan pa'i lam bor nas / 'phags pa ma yin pa'i skye bos rab tu bstan pa la brten par ni rigs pa ma yin no //

§7. kho bo cag ni[18] sgra rnams la don dam pa'i 'brel pa 'ga' yang mi 'dod do // de'i

[1] CDNP gsung: G gsungs. [2] CDNP tha ma: G tham ma. [3] CD rten: GNP brten. [4] CDNP rtog: G rtogs. [5] CDNP dbar: G brdar. [6] DGNP gser: C gsar. [7] DGNP po: C illegible. [8] CD las: GNP la. [9] CDNP bsgrub: G sgrub. [10] CD gzo: GNP bzo. [11] DGNP rnams kyis: C illegible. [12] CDNP kyi: G kyis. [13] DGNP rol tu: C illegible. [14] DGNP gsal: C gsal ba. [15] CD su: GNP om. [16] CD na'ang: GNP na yang. [17] DGNP rab tu: C illegible. [18] GNP ni: CD gi.

phyir de bkag pas mi ’dod par ’gyur ba ma yin no // ’on kyang ’di ni brda mngon par shes pa la smra[1] ba po’i ’dod pas tha snyad kyi sgo nas ston par byed do // don dang[2] skabs[3] la sogs pas ’khrul pa med pa’i mis brjod pa’i sgra rnams brjod par ’dod pa’i don dang ’brel pa med par yang rnam pa thams cad du nges par bya bar[4] mi nus te / gzhan (G197b) du na tha snyad thams cad chad pa kho nar ’gyur ro // (P161a) sdang ba ma yin pa dang / ma rmongs pa dang / ma chags pa rnams kyi tshig bden pa’i don nyid ston pa’i phyir thams cad kyi tshig log pa’i don nyid kyang ma yin te / de ni rang gi rgyud la yang nges pa’i phyir ro //

§8. de’i phyir bka’[5] gang zhig tshul gsum gyi brtag pas yongs su dag pa thog ma dang tha ma dang bar du dge bar nges pa de ni mi slu[6] ba’i phyir de mkhas pa rnams kyis brten par bya ba nyid do //

§9. kho bo cag ni de bzhin gshegs pa’i gsung rab dang zhe ’gras pa’i mi[7] mu stegs can rnams la / de sgrub pa’i phyir bcom ldan ’das kyi[8] bka’ tshad ma nyid du brjod pa ni ma yin no // ’on kyang lung gi don dpyod na de’i lung dang ldan pa la de khungs nyid du rab tu ston to //

§10. de ston par byed pa’i bcom ldan ’das kyi bka’ med pa nyid do zhes brjod par yang rigs pa ma yin te / ’di ltar bcom ldan ’das kyis nges pa’i don gyi mdo la brten par gsungs kyi / drang ba’i don la ni ma yin no // nges pa’i don kyang gang la bya zhe na / tshad ma dang (N152b) bcas pa dang[9] / don dam pa’i dbang du mdzad nas bshad pa gang yin pa ste de ni de las logs[10] shig gzhan gang du yang drang bar mi nus pa’i phyir ro // chos thams cad mi skye ba yang tshad mas yang dag par grub ste / (D149a) de nyid kyi phyir de ni rigs pa dang (C149a) ldan pa nyid kyis don dam pa zhes bya’o //

§11. de skad du ’phags pa chos yang dag par sdud pa las /

> mi skye ba ni bden no // skye ba la sogs pa chos gzhan ni mi bden te / brdzun pa slu[11] ba’i chos (D198a) can no

---

[1] CDGN smra: P *mr* of *smra* illegible. [2] DGNP dang: C *ng* of *dang* illegible. [3] DGNP skabs: C *k* of *skabs* illegible. [4] CDNP bar: G ba. [5] CDNP bka’: G bka’ ba. [6] CD slu: GNP bslu. [7] CD mi: GNP om. [8] CDNP kyi: G kyis. [9] DGNP dang: C *ng* of *dang* illegible. [10] DGNP logs: C log. [11] CD slu: GNP bslu.

zhes gsungs so //

§12. ’phags pa bden pa gnyis bstan pa las kyang /

> lha’i bu don ni don dam par mi skye ba[1] yin no

zhes gsungs[2] te / de ni kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba’i chos thams cad la rnam par (P161b) gzhag[3] gi ’ga’[4] tsam la ni ma yin no //

§13. de bzhin du yang de[5] nyid[6] las /

> lha’i bu ’di lta ste dper na kham pa’i[7] snod kyi nang gi nam mkha’ gang yin pa dang / rin po che’i snod kyi nang gi nam mkha’ gang yin pa ’di ni don dam par nam mkha’i khams kho nar zad de / ’di la tha dad du bya ba cung zad kyang med do // lha’i bu de bzhin du kun nas nyon mongs pa gang yin pa de yang don dam par shin tu mi skye ba nyid do // rnam par byang ba gang yin pa de yang don dam par shin tu mi skye ba nyid do // ’khor ba yang don dam par shin tu mi skye ba nyid do // mya ngan las ’das pa’i bar du yang don dam par shin tu mi skye ba nyid de / ’di la tha dad du bya ba cung zad kyang med do // de ci’i phyir zhe na / don dam par chos thams cad shin tu ma skyes pa’i phyir ro

zhes gsungs te / de ltar na skye ba med pa ’di yang don dam pa dang mthun pa’i phyir don dam pa[8] zhes bya’i[9] dngos su ni ma yin te / dngos su ni don dam pa spros pa thams cad las ’das pa’i phyir ro //

§14. de’i phyir gang cung zad ji[10] tsam du skye ba med pa la sogs pa’i mtshan nyid kyi don dam pa’i dbang du bstan pa mdzad pa de thams cad ni nges pa’i don du gzung (N153a) bar bya la bzlog (G198b) pa ni drang ba’i don to //

§15. de skad du ’phags pa blo gros mi zad pas bstan pa las / nges pa dang drang ba’i don gyi mdo sde’i mtshan nyid bshad de /

> nges pa’i don gyi mdo sde ni gang / drang ba’i don gyi mdo[11] sde ni gang zhe na / mdo sde gang dag kun rdzob bsgrub[12] pa bstan pa de dag ni drang

---

[1] CD ba: GNP bar. [2] DGNP gsungs: C *ng* of *gsungs* illegible. [3] CD gzhag: GNP bzhag. [4] CDNP ’ga’: G ’gag. [5] CDGP de: N da. [6] CDNP nyid: G om. [7] CNP kham pa’i: D kham sa’i; G khams pa’i. [8] CDNP pa: G par. [9] CDNP bya’i: G bya ba’i. [10] DGNP ji: C ci. [11] DGNP mdo: C *md* of *mdo* illegible. [12] CD bsgrub: GNP sgrub.

ba'i don zhes[1] bya'o // mdo sde gang dag don dam pa bsgrub[2] pa bstan pa de dag ni nges pa'i don zhes[3] bya'o // mdo sde gang dag tshig dang yi (D149b) ge sna tshogs bstan pa gang yin pa de dag ni drang (C149b) ba'i don zhes bya'o // mdo sde gang dag zab mo blta[4] (P162a) dka' ba rtogs par[5] dka' ba bstan pa de dag ni nges pa'i don zhes bya'o // mdo sde gang dag bdag dang / sems can dang / srog dang / gso ba dang / skyes bu dang / gang zag dang / shed las skyes pa dang / shed bu dang / byed pa po dang / tshor ba po skad sna tshogs kyis bshad par bya ba bdag po med pa las bdag po lta bur bstan pa de dag ni drang ba'i don zhes bya'o / mdo sde gang dag dngos po stong pa nyid dang / mtshan ma med pa dang / smon pa med pa dang / mngon par 'du byed pa med pa dang / skye ba med pa dang / ma skyes pa dang / sems can med pa dang / srog med pa dang / gang zag med pa dang / bdag po med pa rnam par thar pa'i sgo ston[6] pa de[7] dag ni nges pa'i don zhes bya'o

zhes rgyas par gsungs pa gang yin pa'o //

§16. skye ba med pa la sogs pa bstan pa mdo gzhan dag las dgongs pa gzhan gyi nges pa'i don du bshad do zhes brjod par yang rigs pa ma yin te / de lta na ni bdag la sogs (G199a) pa bstan pa yang nges pa'i don du 'gyur ro // de lta bas na don dam pa brjod pa kho na nges pa'i don yin la / bzlog pa ni drang ba'i don yin no zhes bya bar khong du chud par bya'o //

§17. 'phags pa sangs rgyas thams cad kyi yul la (N153b) 'jug pa ye[8] shes snang ba'i rgyan las kyang /

nges pa'i don gang yin pa de ni don dam pa'o

zhes gsungs la / skye ba med pa la sogs pa yang 'phags pa blo gros mi zad pas bstan pa las / nges pa'i don to zhes bstan te / de lta bas na skye ba med pa la sogs pa kho na don dam pa'o zhes bya bar nges so //

§18. gal te de lta yin na / 'o na ji ltar bcom ldan 'das kyis 'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa las / ngo bo nyid gsum po ngo bo nyid med pa rnam pa[9] gsum (P162b) las

[1] CD zhes: GNP ces. [2] CDG bsgrub: NP sgrub. [3] CD zhes: GNP ces. [4] CD blta: GNP lta. [5] CDNP bka' ba rtogs par: G om. [6] CDGN ston: P *n* of *ston* illegible. [7] DGNP pa de: C pa da. [8] CDGN ye: P le. [9] CDGN pa: P om.

dgongs nas chos thams cad ngo bo nyid med par bstan zhe[1] na / ’di ni nyes ba med de / gang dag kun rdzob pa’i ngo bo nyid la yang skur pa ’debs par byed pa dang / dam pa ma yin pa’i bstan bcos mnyan pa la sogs pa la mngon par zhen pas blo gros phyin ci (D150a) log tu gyur pa gang dag kun rdzob tu yod pa ma yin pa brdzun pa kho na la yang rtag pa la sogs pa’i dngos por sgro ’dogs (C150a) shing gzugs la sogs pa ji ltar snang ba yang ji lta ba de bzhin du yongs su ’dzin par ’gyur ba de dag sgro ’dogs pa dang skur pa ’debs pa’i mtha’ gnyis su lhung ba’i blos don dam pa’i tshul gyi rgya mtsho mtha’ gnyis dang bral ba shin tu zab mo la mi ’jug pas de’i don du bcom ldan ’das kyis skye ba med pa la sogs (G199b) pa bstan pa don dam pa’i dbang du mdzad pa kho nar brjod cing ngo bo nyid med pa rnam pa gsum gyi dgongs pa bstan pas dbu ma’i lam mtha’ gnyis dang bral ba rab tu bstan pa’i phyir nges pa’i don kho na gzhung ’dzugs par mdzad pa yin no // dbu ma pa rnams kyang ngo bo nyid gsum rnam par gzhag[2] pa khas mi len pa ni ma yin te / gzhan du na mthong ba la sogs pa dang ’gal ba ji ltar spongs par ’gyur /

§19. de la dngos po ma brtags na[3] grags pa[4] ji ltar snang ba[5] sgyu ma bzhin du brten nas byung ba gang yin pa de ni gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid yin no // de yang kun rdzob tu sgyu ma bzhin du (N154a) gzhan gyi rkyen gyi dbang gis skye’i / bdag nyid kho na ni ma yin pas skye ba ngo bo nyid med pa nyid du rnam par gzhag[6] ste /

§20. mkhas pa rnams ni brten nas byung ba gang yin pa de rang bzhin gyis stong pa nyid do zhes bya bar[7] nges par ’dzin te rang bzhin ni bcos ma nyid du rigs pa ma yin no // ma byung ba la byung ba dang / byung nas med pa (P163a) yang ma yin te / gcig la yod pa dang med pa dag ni rim gyis kyang ’gal ba’i phyir ro // de skad du /

rang bzhin rgyu dang rkyen dag las //
’byung bar rigs pa ma yin no //
rgyu dang rkyen las byung na ni //
rang bzhin byas pa can du ’gyur //
rang bzhin dag ni ji lta bur //
byas pa can zhes bya bar ’gyur //
gal te rang bzhin gyis yod ’gyur //

---

[1] CD zhe: GNP ce. [2] CD gzhag: GNP bzhag. [3] CDNP brtags na: G brtags na °brtags° na° (° correction mark(?) by editor). [4] CDGN pa: P om. [5] DGNP ba: C bar. [6] CD gzhag: GNP bzhag. [7] CDNP zhes bya bar: G zhas bya bar zhes bya bar.

de ni med pa nyid mi ’gyur //
rang bzhin gzhan du ’gyur bar ni //
nam yang ’thad pa ma yin no //

zhes bshad do // (G200a)

§21. yang

ngo bo nyid kyis yod yin na // med par rung ba ma yin no //

zhes bshad do //

§22. bcom ldan ’das kyis kyang ’phags pa klu’i (D150b) rgyal po ma dros pas zhus pa las /

gang zhig rkyen las skyes pa de ma skyes //
de la (C150b) skye ba’i rang bzhin yod ma yin //
rkyen la rag las gang de stong par bshad //
gang zhig stong nyid shes te bag yod yin //

zhes[1] bstan to //

§23. klu’i rgyal po rgya mtshos zhus pa las /

gang dag rten cing ’brel par ’byung //
de dag ngo bo nyid kyis med //
gang dag ngo bo nyid med pa //
de dag gang du’ang mi ’byung ngo //

zhes gsungs so //

§24. de nyid kyi phyir ’phags pa yab dang sras mjal ba las kyang / rten cing ’brel par ’byung ba la ’jug pas chos kyi dbyings la ’jug pa bstan te / ji skad du /

bcom ldan ’das de la ma rig pa ni ma rig pa nyid kyis ma mchis so // de ci’i slad[2] du zhe na / ’di ltar ma rig pa ni ngo bo nyid dang bral ba lags so // chos gang la ngo bo nyid ma mchis pa de ni dngos po ma mchis pa’o // gang[3] dngos po ma mchis pa de ni yongs su ma grub pa’o // (N154b) gang yongs

[1] DNP zhes: C *zh* of *zhes* illegible. [2] CDG slad: NP slang. [3] CD gang: GNP gang dag.

> su ma grub pa de ni skye bar yang mi ’gyur / de ’gag par yang mi ’gyur ro // gang ma skyes ma ’gags pa de ni ’das pa zhes gdags par bgyi ba ma lags / ma ’ongs pa ma lags / da ltar byung (P163b) ba zhes gdags par bgyi ba ma lags so // gang dus gsum du yang mi ’thad pa de ni ming ma mchis pa / mtshan nyid ma mchis pa / mtshan ma ma mchis pa / gdags su ma mchis pa ste / sems (G200b) can rnams gzung ba’i phyir ming tsam dang / brda tsam dang / tha snyad tsam dang / kun rdzob tsam dang / brjod pa tsam dang / gdags pa tsam ni ma gtogs so // ma rig pa ni don dam par mi dmigs so // chos gang don dam par mi dmigs pa de ni gdags par bgyi ba ma lags / tha snyad gdags par bgyi ba ma lags / brjod par bgyi ba ma lags te / bcom ldan ’das ming tsam dang brda tsam gang lags pa de yang yang dag pa ma lags so

zhes bya ba rgyas par[1] gsungs so //

§25. de’i phyir gzhan gyi dbang gi[2] ngo bo nyid ni yang dag pa’i ngo bo nyid du rigs pa ma yin te / de lta na ni sgyu ma la sogs pa yang dngos po nyid du thal bar ’gyur te / de dag kyang (D151a) rkyen la rag las par[3] khyad par med pa’i phyir ro // de bas na gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid ’di sgyu ma dang khyad par med pa nyid kyi phyir skye ba ngo bo nyid (C151a) med pa nyid du rnam par gzhag[4] go //

§26. de skad du / ’phags pa dgongs pa nges[5] par ’grel pa de nyid las /

> dper na sgyu ma byas pa ltar de bzhin du skye ba[6] ngo bo nyid med par nye bar blta[7] bar bya’o

zhes gsungs so //

§27. gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid sgyu ma la sogs pa dang khyad par med pa de nyid la rtag pa dang mi rtag pa la sogs pa don dam pa pa’i rang gi ngo bor sgro ’dogs pa[8] gang yin pa de ni kun brtags pa’i ngo bo nyid do // de yang ji ltar kun brtags pa’i mtshan nyid du ma grub pa’i phyir mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid (N155a) du rnam[9] par gzhag[10] go // ngo bo nyid med pa ’di yang dngos su na gzhan gyi dbang gi (G201a) ngo

---

[1] DGNP par: C pa. [2] CD gi: GNP gis. [3] CDNP par: G om. [4] CD gzhag: GNP bzhag. [5] CDGP nges: N ngas. [6] DGNP ba: C bo. [7] CD blta: GNP lta. [8] CD ’dogs pa: GNP ’dogs pa btags pa. [9] DGNP rnam: C rnams. [10] CD gzhag: GNP bzhag.

bo nyid kho na la rnam par gzhag[1] ste / de nyid la de'i mtshan nyid[2] (P164a) du nye[3] bar brtags pa'i phyir ro //

§28. de'i phyir chos thams cad mi rtag pa la sogs pa ji ltar rnam par gzhag[4] pa'i mtshan nyid don dam pa pas[5] stong pa'i phyir ma skyes pa yin no // de'i[6] phyir[7] ma 'gags pa yin no // de'i phyir gzod[8] ma nas zhi ba yin no // de'i phyir rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa yin no // de skad du / 'phags pa dgongs pa nges par 'grel ba de nyid las /

> gang rang gi mtshan nyid kyis med pa de ni ma skyes pa'o // gang ma skyes pa de ni ma 'gags pa'o // gang ma 'gags pa de ni gzod[9] ma nas zhi ba'o // gang[10] gzod[11] ma nas zhi ba de ni rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das pa'o

zhes gsungs so //

§29. yang

> de lta bas na ngas mtshan nyid ngo bo nyid med pa nyid las dgongs nas chos thams cad ma skyes pa'o zhes bshad do

zhes gsungs pa gang yin pa der yang sgra ji bzhin gyi don du yongs su rtog pa de sel bar yang mdzad la / gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid kun rdzob pa la ji skad bshad pa'i kun brtags pa'i bdag nyid kyis dben pa sgrub cing skur ba mi 'debs pa'i kun rdzob kyi ngo bo yang ston pa yin gyi / don dam pa nyid du ni ma yin no //

§30. mtshan nyid med pa'i ngo bo nyid ni 'ga' yang rigs pa ma yin te / ji skad du /

> mtshan nyid med pa'i dngos (D151b) po ni //
> 'ga' yang gang na'ang yod (C151b) ma yin //

zhes bshad pa lta bu'o //

§31. chos thams cad don dam par rtag (G201b) tu rang bzhin gyis ngo bo nyid med pa kho nar gnas pa gang yin pa de ni yongs su grub pa'i ngo bo nyid yin te / de ni rtag tu sgro btags pa med pa nyid du grub pa'i phyir ro // de yang tshad mas yang dag par grub pa'i

---

[1] CD gzhag: GNP bzhag. [2] CDGN nyid: P nyad. [3] GNP nye: CD *e* of *nye* illegible. [4] CD gzhag: GNP bzhag. [5] CDNP don dam pa pas: G don dam pas. [6] DGNP de'i: C *'i* of *de'i* illegible. [7] DGNP phyir: C *ph* of *phyir* illegible. [8] DGNP gzod: C bzod. [9] DGNP gzod: C bzod. [10] CD gang: GNP om. [11] DGNP gzod: C bzod.

bdag nyid kyis don dam pa (N155b) zhes kyang bya la ngo bo nyid med pas rab tu phye ba'i phyir ngo bo nyid med pa nyid kyang yin no // de'i phyir 'di ni don dam par ngo bo nyid med pa (P164b) yin no // de skad du 'phags pa dgongs pa nges par 'grel pa las /

> de ni don dam pa yang yin la / chos rnams ngo bo nyid med pas rab tu phye ba yang yin pas de'i phyir don dam pa ngo bo nyid med pa'o zhes bya'o

zhes gsungs te /[1] gang gi phyir ngo bo nyid med pa 'dis chos thams cad ngo bo nyid med pa kho na yin pas de'i phyir skye ba med pa la sogs pa bstan pa nges pa'i don yin no // de ni don dam pa la dgongs nas bstan pa'i phyir mthong ba la sogs pa dang 'gal ba yang ma yin la / sgra ji bzhin du yongs su rtog pa yang ma yin no // de'i phyir dgongs pa bstan pa yang nges pa'i don nyid du 'gal bar mi byed do //

§32. de nyid kyi phyir skye ba med pa la sogs pa bstan pa[2] nges pa'i don nyid du bsgrub pa'i phyir dang / mthong ba la sogs pa dang 'gal ba bsal ba'i phyir dang[3] / sgra ji bzhin du rtog pa bsal[4] ba'i phyir 'phags pa dgongs pa nges par[5] 'grel pa de nyid las /

> don dam yang dag 'phags gzhan yang // ngas don dam pa ngo bo nyid med pa chos bdag (G202a) med pas rab tu phye ba las kyang dgongs te / chos thams cad ma skyes pa dang / chos thams cad ma 'gags pa dang / gzod ma nas zhi ba dang / rang bzhin gyis yongs su mya ngan las 'das par bshad do

zhes bstan no[6] //

§33. gal te de lta yin na / 'o na dad pa cher 'byung gi mdo las /

> ngas gang sbyor[7] ba las byung ba'i ngo bo nyid las dgongs te / chos thams cad med pa nyid du bstan pa gang yin pa de la sgra ji bzhin du mngon par zhen cing / kun nas nyon mongs pa'i chos rnams dang / rnam par byang ba'i chos rnams kyang med pa nyid du mngon par zhen nas med pa'i mtshan ma bzung ste / med (N156a) pa'i (D152a) lta bar 'gyur ro // de lta (C152a) bas na mtshan ma'i lta ba zhes bya'o[8]

---

[1] CDNP zhes gsung te /: G zhes gsungs te / °gang gas phyar ngo bo° nyad med pa'a °zhas bya'a zhas °gsung ta° / (° correction mark(?) by editor). [2] CD bstan pa: GNP om. [3] GNP phyir dang: CD phyir. [4] CGNP bsal: D gsal. [5] CDNP par: G pa. [6] CD no: GNP to. [7] DGNP sbyor: C sgyor. [8] CDNP zhes bya'o: G om.

zhes rgyas par gsungs pa gang yin pa ’di ji ltar drang zhe na / ’di la (P165a) yang ji skad bshad pa’i gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid kun rdzob tu rgyu dang rkyen sbyor ba’i stobs kyis skyes pa nyid kyi sgyu ma bzhin du ngo bo nyid med pa’i phyir sbyor ba las byung ba zhes bya’o // de skad du ’phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa las /

> sbyor ba las byung ba’i ngo bo nyid ni yod pa ma yin te / rten cing ’brel bar ’byung ba’i phyir ro

zhes gsungs so //

§34. de nyid la ji skad bshad pa’i kun brtags pa’i ngo bo nyid gang yin pa de yang rtog[1] pas mngon par bsgrubs[2] pa nyid kyis de la glo bur ba yin pa’i phyir sbyor ba las byung ba zhes bya’o //

§35. ngo bo nyid ’di ni rnam pa gnyis ka yang don dam par mi rung ste / de’i phyir chos thams cad ngo bo nyid (G202b) ’dis don dam par ngo bo nyid med pa yin gyi / kun rdzob pa’i ngo bo nyid kyang med pa’i phyir ni ma yin no // de med na ni kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba’i chos rnam par gzhag[3] par yang mi ’gyur te / de ni des rab tu phye ba yin gyi don dam pas ni ma yin no zhes mdo gzhan dag las brjod pa’i phyir ro // de’i phyir don dam pa’i dgongs pa mi shes pa gang dag sngar kun rdzob kyi ngo bo nyid kyang dngos po’i ngo bor bzung nas / phyis de yang med par sems shing skye ba med pa la sogs pa bstan pa la sgra ji bzhin gyi don du mngon par zhen pa de dag dngos po med pa la sogs pa’i mtshan ma bzung[4] ba’i phyir mtshan ma la sogs pa’i lta bar ’gyur bas de dgag pa’i phyir ’di gsungs kyi / dbu ma pa rnams la ni ma yin no // de dag ni de kho na nyid de mtshan mar ’dzin pa thams cad las log par brjod pa’i phyir de dag la dngos po med pa la sogs pa’i mtshan mar ’dzin pa med de / ji skad du /

> gzhan gyi rkyen min zhi ba ste //
> spros pa rnams (N156b) kyis ma spros pa //
> tha dad don min rnam mi rtog //
> ’di ni yang dag mtshan nyid do // (P165b)

zhes bshad pa dang / yang /

---

[1] CDGNP rtogs. Emendation to *rtog* due to BNJ 81b6-82a1: gzhan dbang ni rgyu rkyen sbyor ba’i stobs kyis byung bas sbyor ba las byung zhes bya la / kun btags ni rtog pa’i gzos bsgrubs pa’i phyir sbyor ba las byung ba zhes bya ba yin no //. [2] CDNP bsgrubs: G sgrubs. [3] CD rnam par gzhag: NP rnam par bzhag; G rnams par bzhag. [4] CGNP bzung: D gzung.

yod ces bya ba rtag par ’dzin //
med ces bya ba chad par lta //
de ltas yod dang med nyid la[1] //
mkhas pas gnas par mi bya’o //

zhes bshad (D152b) pa lta bu’o // (C152b)

§36. gang dag dngos po med pa la sogs pa’i mtshan mar ’dzin pa de dag ni de kho na nyid mthong bar bya ba’i skabs med pa nyid de /

gang dag rang dngos gzhan dngos dang //
dngos dang (G203a) dngos med nyid mthong ba //
de dag sangs rgyas bstan pa la //
yang dag mthong ba ma yin no //

zhes bshad pa gang yin pa’o //

§37. dngos po med par mngon par zhen pa[2] ’di dngos por mngon par zhen pa sngon du ’gro ba can yin par mdo las brjod de / ji skad du / ’phags pa lang kar gshegs pa las /

med pa[3] yod pa’i zlas drangs te //
yod pa’ang med pa’i[4] zlas drangs so //
de phyir med par brjod mi bya //
yod pa nyid du’ang mi brtag[5] go //

zhes gsungs pa lta bu’o //

§38. de’i phyir dngos po la mngon par zhen pas dbang med pa rnams kho na mtshan ma la sogs pa’i lta ba yin gyi / dngos por ’dzin pa thag bsrings pa rnams ni ma yin te / de dag ni gang la’ang mi gnas pa’i phyir ro // de skad du /

gang dag brten nas dngos po rnams //
bden pa nyid du grub ’dod pa[6] //
de dag la yang ji lta bur //
rtag sogs[7] skyon der ’gyur ma yin //
gang dag brten nas dngos po rnams //

---

[1] CD la: GNP las. [2] CDGN zhen pa: P om. [3] CDNP pa: G par. [4] DGNP pa’i: C pa’a. [5] DGNP brtag: C rtag. [6] CD pa: GNP na. [7] CD sogs: GNP tshogs.

chu yi zla ba lta bur ni //
yang dag ma yin log min par //
’dod pa de dag ltas[1] mi ’phrogs //
dngos por khas len yod na ni //
’dod chags zhe sdang las byung ba’i //
lta ba ma rung yongs su ’dzin //
de las byung ba’i rtsod pa ’dzin //

zhes bshad do //

§39. de lta bas na gang dag skye ba med pa la sogs pa bstan pa la sgra ji bzhin du mngon par zhen pa[2] de dag dgag pa’i phyir mtshan ma la sogs pa’i (N157a) lta ba smad kyi dbu ma par smra ba rnams ni skye ba med pa la sogs (P166a) pa bstan pa la (G203b) sgra ji bzhin du mngon par zhen pa yang ma yin te / de dag don dam par skye ba med pa la sogs pa khas len pa’i phyir dang / kun rdzob pa’i skye ba la sogs pa yang brjod pa’i phyir ro // de skad du /

de nyid tshol la thog mar ni //
thams cad yod ces brjod par bya //
don rnams rtogs shing chags med la //
phyis ni rnam par dben pa nyid //
rnam par dben don mi shes la //
thos pa tsam la ’jug byed cing //
gang dag (D153a) bsod nams mi byed pa //
skyes bu tha shal de dag brlag /
’bras bur bcas (C153a) pa’i las rnams dang //
’gro ba dag kyang yang dag brjod //
de yi rang bzhin yongs shes dang //
skye ba med pa’ang bstan pa yin //
’jig rten dbang du rgyal ba rnams //
nga dang nga yi zhes gsungs ltar //
de bzhin phung po skye mched khams //

[1] GNP ltas: CD lhas. [2] CDNP mngon par zhen pa: G mngon par zhen pa med pa.

dgos pa'i dbang gis bshad pa yin //

zhes bshad do //

§40. gal te de lta yin na / 'phags pa lang kar gshegs pa las /

brtags pa'i dngos po med pa nyid //
gzhan gyi dbang ni yod pa[1] yin //
sgro 'dogs pa dang skur 'debs pa'i //
mtha' la rtog pa brlag par 'gyur //

zhes gsungs pa gang yin pa 'di ji ltar drang snyam pa la / 'dir yang gang zhig kun brtags pa'i ngo bo nyid ji skad bshad pa la yang dag par sgro 'dogs par byed pa'i sgro 'dogs pa de dgag pa'i phyir brtags pa'i dngos po med pa nyid ces gsungs so // gang dag gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid ji skad bshad pa kun rdzob pa yang 'gog par byed pa de'i (G204a) phyir gzhan gyi dbang ni yod pa yin zhes gsungs so // gang zhig ji skad bshad pa'i mtha' 'di gnyis su rtog par byad pa de ni dbu ma'i lam la mi 'jug ste / g-yang sa'i gnas la[2] gnas pa'i phyir phung po dang 'dra bas / sgro 'dogs pa dang (N157b) skur 'debs pa'i // mtha' la rtog pa brlag par 'gyur // (P166b) zhes gsungs so //

§41. 'dis ni

chos rnams thams cad brtags pa yi //
ngo bo nyid kyis ma skyes pa //
gzhan gyi dbang la brten nas su //
mi rnams kyi ni rnam rtog skye //

zhes smras pa gang yin pa de yang bsal ba yin no // 'dis kyang ji skad bshad pa'i sgro 'dogs pa dang skur ba 'debs pa'i mtha' bsal bar mdzad pa yin te / 'di ltar don dam par gzhan gyi dbang ji ltar brtags pa bzhin ma skyes pa'i phyir brtags pa'i ngo bo nyid kyis ma skyes pa nyid do // 'dis ni sgro 'dogs pa'i mtha' bsal ba yin no // gzhan gyi dbang kun rdzob tu skye ba'i phyir dang / de la brten nas sprul pas sprul pa bzhin du rnam par rtog pa gzhan skye ba'i phyir de bas na / (D153b) gzhan gyi dbang la brten nas su // mi rnams

[1] GNP pa; CD ma. [2] CDGN gnas la: P om.

kyi[1] ni rnam rtog skye // zhes gsungs so // (C153b) 'dis ni skur pa 'debs pa'i mtha' bsal ba yin te / kun rdzob pa'i skye ba la skur pa mi 'debs pa'i phyir ro //

§42. de'i phyir de dang de las gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid yod pa nyid du bstan pa dang dngos[2] po rnams skye ba la sogs par bstan pa gang yin pa de thams cad ni byis pa rnams skrag pa'i gnas[3] yongs su spangs (G204b) pa'i phyir kun rdzob pa'i ngo bo nyid dang skye ba'i dbang du mdzad nas bzhugs[4] pa la dgongs pas bstan to zhes bya bar khong du chud par bya'i don dam par ni ma yin te / de ni mdo de[5] nyid las bkag pa'i phyir ro // de skad du / 'phags pa lang kar gshegs pa las /

> blo yis rnam par gzhigs na ni //
> gzhan dbang med cing brtags pa'ang med //
> grub pa'i dngos po yod min na //
> blo yis ji ltar rnam par brtags //
> ngo bo nyid med rnam rig med //
> dngos po med cing kun gzhi med //
> byis pa ro dang 'dra ba yi //
> ngan rtog rnams kyis 'di dag brtags //

zhes gsungs so // (P167a)

§43. 'phags pa chos yang dag par sdud pa las kyang / (N158a)

> rigs kyi bu 'jig rten gnas pa 'di ni skye ba dang 'gag pa la mngon par zhen pa yin pas de la de bzhin gshegs pa thugs rje chen po can gyis 'jig rten gyi skrag pa'i gnas yongs su spangs[6] pa'i phyir tha snyad kyi dbang gis skye'o // 'gag go zhes gsungs[7] kyi rigs kyi bu 'di la chos 'ga' yang skye ba ni med do

zhes gsungs so //

§44. 'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa las kyang /

> tshe dang ldan pa sha ra dwa ti'i bu de ltar na gzugs ni rang bzhin gyis stong pa'o // gang rang bzhin gyis stong pa de la ni skye ba yang med / 'gag pa yang med do // gang la skye ba yang med / 'gag pa yang med pa de ni gzhan

[1] DNP kyi: CG kyis. [2] CDNP dngos: G om. [3] CD gnas: GNP gnas su. [4] CD bzhugs: GNP gzhug. [5] GNP de: CD om. [6] CD spangs: GNP spang. [7] CDNP gsungs: G gsungs rags.

du ’gyur bar mi mngon te / tshor ba nas rnam par shes pa’i bar du yang de dang ’dra’o

zhes rgyas par gsungs so // ’di la kun brtags pa’i ngo bo (G205a) nyid kho na rang bzhin yin par rigs pa yang ma yin te / de ni glo bur ba nyid kyis[1] rang bzhin las phyi rol tu gyur pa’i phyir dang / de ltar sgra’i don mi ’thad pa’i phyir ro // (D154a)

’on te gzugs la sogs pa don dam par ma skyes pa rnams la yang byis pa rnams kyis skye ba la sogs (C154a) pa’i ngo bo’i rang bzhin du kun brtags pa gang yin pa de de[2] dag gis de’i rang bzhin nyid du kun brtags pa’i phyir rang bzhin gyi sgrar brjod par bya bar ’gyur na ni de’i tshe ’dod pa’i don dang mi ’gal ba’i phyir nyes pa med do //

§45. mdo gzhan las /

rigs kyi bu byang chub sems dpa’ chos rnams tshul bzhin ma yin par sgra ji bzhin du rab tu rnam par ’byed[3] pa la theg pa chen po dad pa’i skye mched du mi ’gyur ro[4] // sgra ji bzhin ma yin par dgongs pa can gyi don tshul bzhin du yid la byed pa la theg pa chen po dad pa’i skye mched du ’gyur ro

zhes gsungs[5] (P167b) pa gang yin pa ’dir yang don dam pa’i dgongs pa mi shes pa gang (N158b) dag kun rdzob pa’i ngo bo nyid la yang skur pa ’debs par byed pa de dag chos la tshul bzhin ma yin par rab tu rnam par ’byed pa’i phyir theg pa chen po dad pa’i skye mched du mi[6] ’gyur bas de dgag pa’i phyir ’di gsungs par zad do // mdo thams cad las kyang sgra ji bzhin gyi don du mngon par zhen pa yongs su spangs[7] pa’i phyir[8] dang / dgongs pa can gyi don rtogs (G205b) par bya ba la ’bad pa yang dag par skyed[9] pa’i phyir dang / gzhan yid ches pa yang dag par skyed[10] pa’i phyir gsungs kyi / dbu ma pa’i gzhung lugs dgag pa’i phyir ni ma yin te / dbu ma pa rnams kyi ni sgra ji bzhin gyi don du mi rtog go zhes sngar bshad zin to //

§46. de skad du / ’phags pa dkon mchog sprin las kyang /

ji ltar na byang chub sems dpa’ don dam pa la mkhas pa yin zhe na / rigs kyi bu ’di la byang chub sems dpa’ yang dag pa’i shes rab kyis gzugs la so sor

[1] GNP kyis: CD kyi. [2] GNP de: CD om. [3] CDGP ’byed: N ’byeng. [4] CDGP ro: N om. [5] CDNP gsungs: G gsung. [6] CD mi: GNP om. [7] CD spangs: GNP spang. [8] CDGP phyir: N byir. [9] CDNP skyed: G skye. [10] CD skyed: GNP bskyed.

rtog par byed pa nas rnam par shes pa'i bar du so sor rtog par byed cing de gzugs la so sor rtog pa na gzugs kyi skye ba mi dmigs / kun 'byung ba mi dmigs / 'gog pa mi dmigs pa nas de bzhin du rnam par shes pa'i bar du skye ba mi dmigs te / de yang don dam par skye ba[1] med pa la 'jug pa'i shes rab kyis yin gyi / tha snyad kyi ngo bo nyid kyis ni ma yin no

zhes bstan to // (D154b)

§47. 'phags pa lang kar gshegs pa las kyang /

kun rdzob tu ni thams (C154b) cad yod //
dam pa'i don du yod ma yin //
dngos rnams ngo bo nyid med dang //
dam pa'i don kyang bstan pa yin //

zhes gsungs so //

§48. gang dag skye ba med pa la sogs pa bstan pa chos thams cad don dam pa'i ngo bo nyid du skye ba dang / kun rdzob pa'i ngo bo nyid du mi skye ba thams cad du gzhung (P168a) 'dzugs par byed pa de dag ni 'phags pa dkon mchog sprin la sogs pa las gsungs pa 'di dag thams cad dang 'gal ba kho nar 'gyur te / log par rtog pa'i phyir ro // 'di ltar de las ni gzugs la sogs pa (N159a)(G206a) thams cad don dam par mi skye ba la sogs pa nyid dang kun rdzob pa'i ngo bo nyid du skye ba la sogs par brjod do // bden pa gnyis bstan pa la sogs pa las

lha'i bu chos thams cad ni don dam par ma skyes pa'i phyir zhi ba'o

zhes bya ba la sogs pa gsungs pa gang yin pa de dang yang 'gal bar 'gyur ro //

§49. yang 'phags pa lang kar gshegs pa las kyang /

dngos rnams skye ba kun rdzob tu //
dam pa'i don du rang bzhin med //
rang bzhin med la 'khrul pa gang //
de ni yang dag kun rdzob 'dod //

ces gsungs so //

§50. 'phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa las kyang /

[1] CDNP mi dmigs te / de yang don dam par skye ba: G om.

rab ’byor phyin ci log ma gtogs par byis pa rnams gang la gnas te las mngon par ’du byed pa’i dngos po ni skra’i rtse mo’i cha shas gzugs pa tsam yang med do

zhes bstan pa gang yin pa de dang yang ’gal bar ’gyur te / dngos po’i rang gi ngo bo shin tu phra ba yang bkag pa’i phyir ro //

§51. gal te ’di snyam du phyin ci log ma bkag pa’i phyir phyin ci log gi bdag nyid kyi dngos po ni yod pa kho na ste / de nyid kyang / rang bzhin med la ’khrul pa gang // de ni yang dag kun rdzob ’dod // ces bya ba[1] yin no snyam na / de yang rigs pa ma yin te / gal te phyin ci log gi dngos po[2] yod na de’i tshe dngos po’i ngo bo nyid shin tu phra ba yang bkag pa’i bka’ ji ltar rnar ’ong bar ’gyur / gang gi tshe mdo’i don dngos po’i bag[3] thams cad kyi thams (G206b) cad du med kyang byis pa rnams dngos po’i ngo bo mi bden pa phyin ci log gis (D155a) nye bar brtags pa la mngon par zhen pas (C155a) las mngon par ’du byed do zhes bya bar (P168b) rnam par ’chad par ’gyur ba de’i tshe de rnar ’ong bar ’gyur ro // ’phags pa ting nge ’dzin gyi rgyal po las /

chos kun rtag tu ngo bo nyid kyis stong //
rgyal ba’i sras rnams dngos po rnam par ’jig /
srid pa thams cad rnam pa kun tu stong //
nyi tshe’i stong nyid mu stegs can rnams kyi //

zhes tshigs su bcad de (N159b) gsungs pa gang yin pa ’di yang legs par drangs par ’gyur ro //

§52. gang yang mdo gzhan dag las /

srid pa gsum ni brtags pa tsam //
dngos po’i ngo bo nyid du med //
ngan rtog rnams ni brtags pa la //
dngos po’i ngo bo nyid du rtog /

ces gsungs pa de yang legs par drangs par ’gyur ro //

§53. phyin ci log la sogs pa ni dngos po nyid du rung ba ma yin no[4] // ’di ltar khyed ni khams gsum pa’i sems dang sems las byung ba yang dag pa ma yin pa’i kun tu rtog pa

[1] CDGN bya ba: P illegible. [2] CDGN dngos po: P dngos. [3] CDGN bag: P illegible. [4] CD no: GNP to.

zhes bya ba de dag yang dag pa ma yin pa'i rnam pa nye bar 'dzin par snang ba'i phyir phyin ci log la sogs pa nyid du brjod do // gang dag brdzun pa'i ngo bo nyid nye bar 'dzin pas de'i bdag nyid du snang ba de dag ji ltar yang dag pa'i dngos po nyid du 'gyur te / de nyid dang gzhan nyid dag ni phan tshun spangs te gnas pa'i mtshan nyid yin pas de nyid bdag nyid gzhan du 'gyur ba ni 'gal ba'i phyir ro // de lta ma yin na grangs can (G207a) la sogs pas kun brtags pa'i gtso bo la sogs pa'i 'gyur ba bdag la sdang du ci yod de / gang gis na khyed de dag kyang khas len par mi byed / de nyid kyi phyir /

gal te ngo bo nyid yod na //
ji lta bur na gzhan du 'gyur //

zhes bshad do // 'phags pa bden pa gnyis bstan pa las kyang /

lha'i bu ji ltar bdag don dam par bdag ma yin pa de bzhin du lha'i bu nyon mongs pa rnams kyang don dam par nyon mongs pa (P169a) ma yin no // lha'i bu gal te don dam par bdag de kho na nyid yin par gyur na lha'i bu de'i phyir nyon mongs pa[1] yang don dam par de kho na nyid yin par 'gyur

zhes gsungs so // 'dis ni 'di skad du bdag la sogs pa brdzun pa'i rnam pa nye bar 'dzin par zhugs pa'i phyir[2] (C155b)(D155b) bdag la sogs pa bzhin du nyon mongs pa thams cad brdzun pa'i ngo bo nyid kho na'o zhes bstan par 'gyur ro // de ltar na (N160a) shugs kyis khams gsum pa'i sems dang sems las byung ba thams cad brdzun[3] pa'i rnam pa nye bar 'dzin par zhugs pa'i phyir rang gi rnam pa bzhin[4] du de dang tha mi dad pa nyid kyis brdzun pa'i ngo bo nyid kho na'o zhes bstan pa nyid do // byang chub sems dpa' la ni khyad par du rnam par rtog pa thams cad nyon mongs pa yin pas de brdzun pa nyid yin na rnam par rtog pa thams cad brdzun pa nyid kho na'o zhes yongs su[5] bstan pa (G207b) nyid do //

§54. gal te don dam pa pa'i[6] dngos po'i rang gi ngo bo 'ga' yang med na / 'o na de'i tshe /

phung po la ni bdag med de //
bdag la'ang phung po yod ma yin //

[1] CDNP nyon mongs pa: G nyon mongs pa dang. [2] CD phyir: GNP phyir rang gi rnam pa bzhin du de dang tha mi dad pa nyid kyis. [3] CDG brdzun: NP rdzun. [4] CGNP bzhin: D bzhan. [5] CD yongs su: GNP dngos su. [6] CD don dam pa pa'i: GNP don dam pa'i.

de dag ji ltar brtags bzhin min //
de dag med pa nyid kyang min //

zhes gsungs pa gang yin pa ’di ji ltar drang ste / ’di las ni dgag pa gnyis kyis[1] phung po la sogs pa yod pa nyid du bstan pa yin no zhe na / ’dis ni khungs su mi rung ba nyid de / ’di ltar ’dir / de dag ji ltar brtags bzhin min // zhes bya ba ’dis de kho na nyid du yod pa nyid bkag pa’i phyir dang / de dag med pa nyid kyang min // zhes bya bas ’di dag tha snyad kyi sgo nas ji ltar snang ba bzhin yod pa nyid du bstan pa’i phyir mu stegs can gyis brtags pa’i bdag nyid[2] ni kun rdzob tu yang med pa nyid la / phung po rnams ni tha snyad kyi sgo nas yod pa nyid de[3] / de kho na nyid du ma yin no zhes (P169b) gsal bar bstan pa kho na yin no // de lta ma yin na de’i tshe gcig la med pa nyid du gsungs nas yang yod pa nyid du ston pa ji ltar ’brel pa nyid du ’gyur /

§55. ’phags pa tshangs pas zhus pa las / phung po ngo bo nyid med pa de kho na nyid du bstan pa gang yin pa de dang yang ’gal bar ’gyur te / de[4] ji skad du /

gang gis phung po ma skyes shing //
’byung ba med pa yongs shes de //
’jig rten na yang spyod ’gyur la //
’jig rten ’di la’ang mi gnas so //

zhes gsungs pa lta bu yin no //

§56. ’phags pa dkon (N160b) mchog sprin las kyang / phung po (G208a) rnams don dam par med pa nyid la / kun rdzob tu yod pa nyid do zhes gsal rab[5] kho nar (D156a) bstan te[6] /

rigs kyi bu (C156a) byang chub sems dpa’ chos bcu dang ldan pa ni kun rdzob kyi bden pa la mkhas pa yin no // bcu gang zhe na / ’di lta ste / gzugs su ’dogs par[7] yang byed la / don dam par gzugs su dmigs par yang mi byed / mngon par zhen par yang mi byed de / tshor ba dang / ’du shes dang / ’du byed dang / rnam par shes pa yang de dang ’dra’o[8]

---

[1] GNP dgag pa gnyis kyi: CD dgag pa nyid kyi. *kyi* should be emended to *kyis* due to MĀ Pūrvapakṣa D145a3-4: dgag pa ’di gnyis kyis kyang phung po rnams yod pa nyid du bstan pa yin no //. [2] CD nyid: GNP om. [3] GNP de: CD do. [4] CD de: GNP om. [5] CD rab: GNP ba. [6] CDGN te: P to. [7] CD par: GNP pa. [8] CDG ’dra’o: N ’dra’a; P ’dra’i.

zhes gang rgyas par gsungs pa yin no //

§57. ’phags pa rin chen ’byung gnas las kyang /

> nyi mas byin ’di lta ste / dper na nam mkha’ la ni ri mo byung bar ma gyur / ’byung bar mi ’gyur te / ma byung ma ’gags pa / ’gro ba dang ’ong ba med pa / ma skyes pa / ’chi ’pho med pa / mngon par ma grub pa / brjod du med pa yin pas tha snyad tsam dang / kun rdzob tsam du zad do // nyi mas byin de bzhin du gzugs nas rnam par shes pa’i bar du byung bar ma gyur / ’byung bar mi ’gyur ba nas de bzhin du kun rdzob tsam du zad

ces bya ba’i bar du rgyas par gsungs pa don dang sbyar bar bya’o //

§58. ’o na ni don dam pa[1] stong pa nyid chen po las /

> las kyang yod / rnam par smin pa yang yod de / byed pa (P170a) po ni[2] mi dmigs so //

zhes gsungs pa gang yin pa ’di dang ’gal bar ’gyur te / ’di ltar gal te don dam par las la sogs pa yod na ni de’i tshe dngos po thams cad ngo bo nyid med pa ma yin par ’gyur ro // (G208b) ’on te kun rdzob tu yin na ni de’i tshe byed pa po yang kun rdzob tu yod pas byed pa po ni mi dmigs so zhes brjod du mi rung ngo zhe na /[3] ’dir yang snga ma bzhin du ’gal ba med de / ’di ltar las dang ’bras bu ni kun rdzob[4] kho nar yod pa nyid la / mu stegs can gyis kun brtags pa’i byed pa po ni kun rdzob tu yang med pa nyid do zhes bstan pa’i phyir ’gal ba’i go skabs su ga la ’gyur /

§59. ’o na mdo (N161a) gzhan dag las /

> ji ltar byis pas rnam brtags ltar //
> dngos po thams cad yod pa nyid //
> gal te ji ltar mthong der ’gyur //
> thams cad de nyid mthong bar ’gyur //
> chos rnams thams cad med pa’i phyir //
> kun nas nyon mongs dag pa med //
> de dag ji ltar mthong bzhin (D156b) min //
> de dag med pa nyid kyang min // (C156b)

[1] CD don dam pa: GNP om. [2] CDGN ni: P om. [3] CD zhe na /: GNP zhes. [4] CDGN rdzob: P brdzo.

zhes gsungs pa gang yin pa ’di ji ltar drang zhe na / ’di yang sngar bshad zin par zad de / ’di ltar ’dir yang gal te dngos po thams cad ji ltar snang ba bzhin kho nar don dam par yod par gyur na ni de’i tshe thams cad de kho na nyid mthong bar ’gyur ro zhes ’dis dngos po thams cad don dam par skye ba med pa nyid du gzhung[1] btsugs pa yin no // chos rnams thams cad med pa’i phyir // zhes bya ba ’dis kyang dngos po rnams kun rdzob tu yod pa nyid du brjod de / de dag ji ltar mthong bzhin min // zhes ’byung ba’i phyir ro // tha snyad kyi bden pa la brten nas kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba rnam par gzhag[2] pa ni shes rab kyi pha (G209a) rol tu phyin pa las bstan pa’i phyir te / ji skad du

> rab ’byor thob pa dang / mngon par rtogs pa dang / skye ba dang ’gag pa dang / kun nas nyon mongs pa dang / rnam par byang ba ni tha snyad du yin gyi / don dam par ni ma yin no

zhes gsungs pa lta (P170b) bu’o //

§60. ’o na de nyid las /

> don yod ma yin sems nyid de //
> phyi rol don mthong log pa yin //
> rigs pas rnam par lta rnams kyi //
> gzung dang ’dzin pa ’gag par ’gyur[3] //
> ji ltar byis pas rnam brtags ltar //
> phyi rol don ni yod ma yin //
> bag chags kyis ni bsgribs pa’i sems //
> don du snang bar[4] rab tu ’byung //

zhes gsungs pa dang / gzhan las kyang /

> kye rgyal ba’i sras dag / khams gsum pa ’di ni sems tsam mo

zhes gsungs pa gang yin pa ’di yang (N161b) ji ltar drang / de bzhin du ’phags pa dgongs pa nges par ’grel pa dang / ’phags pa stug po bkod pa la sogs pa las / chos thams cad sems

[1] CDGN gzhung: P gzhud. [2] CD gzhag: GNP bzhag. [3] CDGP: ’gag par ’gyur: N dgag par ’gyur. [4] GNP bar: CD ba.

tsam gyi lus nyid du bstan pa'i phyir sems kho na don dam par yod kyi / gzhan ni ma yin no zhes bsgrubs par 'gyur ro // de'i phyir chos thams cad ngo bo nyid med pa nyid du 'grub par mi 'gyur ro zhe na /

§61. de yang khungs su mi rung ba nyid de / ji ltar sems yod pa nyid du bstan pa de bzhin du gzugs kyang mdo de dang de las rnam pa du mar yod pa nyid du bstan pa kho na ste / de'i phyir de yang ci ste don dam par yod pa nyid du mi (D157a) bzung /

§62. 'on te don tshad mas gnod (G209b) pa'i phyir dang / mdo gzhan dag las kyang bkag (C157a) pa'i phyir don dam par[1] yod par rnam par mi gzhag[2] ste / gang zag la bdag med pa tsam la gzhug pa la ldem por dgongs pas gdul bar bya ba de lta bu'i bsam pa la ltos[3] te / de bstan pa 'ba' zhig tu zad do zhes bya bar brjod na

§63. gal te de lta na ni sems kyang 'og nas 'byung ba'i tshad mas gnod pa'i phyir dang / de mdo gzhan las kyang / ngo bo nyid med pa nyid du bstan pa'i phyir don dam pa nyid du ma 'dzin par sems tsam po nyid de ni rim gyis don dam pa'i tshul gyi rgya mtsho la gzud pa'i[4] phyir bstan pa 'ba' zhig tu zad do snyam du zung shig /

§64. 'di ltar gang zhig cig car chos ma lus pa ngo bo nyid med pa nyid du rtogs par mi nus pa de re zhig[5] sems (P171a) tsam la brten nas / rim gyis phyi'i don ngo bo nyid med pa nyid la 'jug go // de nyid kyi phyir / rigs pas rnam par lta rnams kyi // gzung dang 'dzin pa 'gag par 'gyur // zhes gsungs so //

§65. de'i 'og tu rim[6] gyis sems kyi ngo bo nyid la so sor rtog na / de yang bdag[7] med pa nyid du khong du chud nas zab mo'i tshul la 'jug par 'gyur te /

§66. de skad du / bcom ldan 'das kyis /

sems tsam la (N162a) ni brten nas su //
phyi rol don la mi rtog go //
de bzhin nyid la dmigs nas ni //
sems tsam las kyang bzla bar bya //
sems tsam las ni bzlas nas su //
snang ba med la bzla bar bya //
snang med gnas pa'i rnal 'byor pa //
des ni theg pa chen po mthong //

[1] CDNP don dam par: G don dam dam par. [2] CD gzhag: GNP bzhag. [3] CD la ltos: GNP las bltos. [4] CGNP gzud pa'i: D gzung ba'i. [5] CD re zhig: GNP re shig. [6] CD rim: GNP rims. [7] DNP bdag: C 'dag; G dag.

’jug pa lhun gyis grub cing zhi //
smon lam dag gis rnam par sbyangs //
ye shes dam pa bdag med pa //
snang ba med la mi mthong ngo[1] //

zhes gsungs so //

§67. gzhan dag na re sems tsam ni rang gis rab tu grub pa’i ngo bo nyid yin pa’i phyir kun rdzob tu gnas pa kho na yin la / phyi’i don ni kun rdzob tu yang mi gnas te / sems kyi rnam pa las ma gtogs par de grub pa med pa’i phyir ro // de’i phyir de rab tu bstan pa’i ched du bcom ldan ’das kyis dngos po[2] rnams sems tsam nyid du bstan gyi / de[3] don dam par yod pa nyid ni ma yin te / (D157b) mdo gzhan las de yang ngo bo nyid med pa nyid[4] du bstan pa’i phyir te /

§68. ji skad du ’phags pa sangs rgyas thams cad kyi (C157b) yul la ’jug pa ye shes snang ba’i rgyan las /

sangs rgyas rnams kyis nam yang ni //
gtan du chos rnams thams cad dang //
sems ma brnyes shing chos mkhyen pa //
dmigs mi mnga’ la phyag ’tshal bstod //

ces gsungs pa lta bu’o //

§69. ’phags pa dkon mchog brtsegs pa las kyang /

’od srungs sems ni yongs su btsal na mi (P171b) dmigs so // gang mi dmigs pa de ni nye bar mi dmigs so //[5] gang nye bar mi dmigs pa de ni ’das pa yang ma yin / ma ’ongs pa yang ma yin / da ltar byung ba yang ma yin no // gang ’das pa ma yin / ma ’ongs pa ma yin / da ltar byung ba ma yin pa de ni dus gsum las ’das pa yin no // gang dus gsum las ’das pa ’di ni yod pa yang ma yin med pa yang ma yin no // gang yod pa yang ma yin med pa yang ma (N162b) yin pa de ni ma skyes pa’o // gang ma skyes pa de la ni ngo bo nyid

[1] DGNP: snang ba med la mi mthong ngo: C snang ba med la me mthong ngo. Cf., however, BK I’s quotation of LAS X k. 258cd: (BK I p. 259, 14:) *snang ba med pas mthong bar ngo*. [2] CD po: GNP om. [3] CD de: GNP om. [4] CDGN med pa nyid: P om. [5] CDGN gang mi dmigs pa de ni nye bar mi dmigs so //: P om.

med do // gang la ngo bo nyid med pa de la skye ba med do // (G210b) gang la skye ba med pa de la ’gag pa med do // gang la ’gag pa med pa de la ’bral ba med do // gang la ’bral ba med pa de la ’gro ba yang med / ’ong ba yang med / ’chi ’pho ba[1] yang med / skye ba yang med do[2] // gang la ’gro ba yang med / ’ong ba yang med / ’chi ’pho ba yang med / skye ba yang med pa de la ’du byed ci yang med do // gang la ’du byed ci yang med pa de ni ’dus ma byas so // gang ’dus ma byas pa de ni ’phags pa rnams kyi rigs so

zhes rgyas par gsungs so //

§70. des na yang de nyid las /

’od srungs rtag ces bya ba ’di ni mtha’ gcig go // ’od srungs mi rtag ces bya ba ’di ni mtha’ gnyis pa’o // ’od srungs de bzhin du yod ces bya ba ’di ni mtha’ gcig go // ’od srungs med ces bya ba ’di ni mtha’ gnyis pa’o // mtha’ ’di gnyis kyi dbus gang yin pa de[3] ni brtag tu med pa / bstan du med pa / thogs pa med pa / mi gnas pa / snang ba med pa / rnam par rig pa med pa gnas pa med pa[4] ste ’di ni chos rnams kyi dbu ma’i lam la yang dag par so sor rtog pa (D158a) zhes bya’o

zhes gsungs pa yin te / de ni dbu mar gyur ba[5] / dngos por yod pa rnam par shes pa’i ngo bo yod pa nyid[6] du sgrub par byed pa ma yin gyi / ’on kyang chos kyi dbyings mtha’ gnyis po thams cad dang bral ba / chos ma lus pa ngo bo nyid med pa’i mtshan nyid (P172a) spros pa med pa rjod (C158a) par byed pa yin no // chos kyi dbyings de yang bdag nyid kyis ’di’o de’o zhes brtag par mi nus pa’i phyir / brtag tu med pa’o // gzhan dag la bstan par mi nus pa’i phyir bstan (G211a) du med pa’o // nang gi khams dang skye mched kyi ngo bor mi gnas pa’i phyir mi gnas pa’o // phyi’i khams dang / skye mched ltar snang bar mi ’gyur ba’i phyir snang ba med pa’o // mig gi rnam par shes pa la sogs pa’i khams (N163a) kyi rang bzhin las ’das pa’i phyir rnam par rig pa med pa’o // ’dod chags la sogs pa nyon mongs pa mtha’ dag gi gnas ma yin pa’i phyir gnas pa med pa zhes bya’o //

§71. gal te dbu ma la sems kyi rang gi ngo bo bdag nyid kyi dngos po don dam pa ci yang rung ba zhig yod par gyur na ni de’i tshe de la de yod pas rtag go zhes bya ba’am /

[1] CD ba: GNP om. [2] CD do: GNP om. [3] GNP pa de: CD pa. [4] CDGN gnas pa med pa: P om. [5] CD ba: GNP pa. [6] CDNP yod pa nyid: G nyid pa nyid.

mi rtag go zhes bya bar mngon par zhen pa yang ji ltar mthar ’gyur te / dngos po’i de kho na nyid[1] ji lta ba bzhin gyi rjes su song zhing tshul bzhin yid la byed pa nyid ni ltung ba’i gnas so zhes bya bar rigs pa ma yin no // rtag pa la sogs pa’i ngo bo nyid las ma gtogs pa dngos po’i ngo bo nyid du gyur pa dngos po’i rnam pa gzhan ni mi srid do //

§72. gal te dbu ma la dngos po’i rang gi ngo bo med na med do zhes bya bar ’dzin pa yang mthar mi ’gyur ro snyam du sems na / de yang rigs pa ma yin te /[2] med do zhes bya bar ’dzin pa yang yod par ’dzin pa med na med pa yin pa’i phyir ro // yul med pa’i dgag pa ni yod pa ma yin te / de[3] bas na gdon mi za bar gang la med par ’dzin pa yod pa de la yod par ’dzin pa de yang yod pas mtha’ ’di gnyi (G211b) gar ’gyur ro //

§73. gal te dbu ma la dngos po yod na de’i tshe de la yod par ’dzin pa gang gis bzlog par ’gyur / ’phags pa ting nge ’dzin gyi rgyal po (P172b) las / dbu mar yod pa don[4] dam pa pa’i dngos po la gnas pa dgag pa’i phyir gsungs pa gang yin pa de (D158b) dang yang ’gal bar ’gyur te /

> yod ces med ces gnyi[5] ga’ang mtha’ //
> dag dang ma dag ’di yang mtha’ //
> de phyir mtha’ gnyis rnam[6] spangs nas //
> mkhas pa dbus la’ang gnas mi byed //

ces gsungs pa gang yin pa’o // mdo’i don ni brten par bya ba (N163b) dbu mar yod pa’i dngos po’i rang gi ngo bo ’ga’ yang med na ni / (C158b) mkhas pa dbus la’ang[7] gnas mi byed // ces bya ba[8] rung bar ’gyur ro zhes bya ba yin no // dngos po zhig yod na ni ji ltar na de la mkhas pa gnas par[9] byed par mi ’gyur /

§74. ’phags pa ’jig rten las ’das pa’i le’u las kyang /

> kye rgyal ba’i sras dag gzhan yang khams gsum sems tsam du ’jug ste / dus gsum yang sems dang ’dra bar rtogs par byed la / sems de yang mtha’ dang dbus med pa nyid du ’jug go

zhes gsungs te / mdo’i don ni skye ba dang ’jig pa’i mtha’ dang / gnas pa’i mtshan nyid kyi dbus don dam par med pa’i phyir sems mtha’ dang dbus med pa la ’jug par ’gyur /

---

[1] CDGN nyid: P om. [2] CD te /: GNP te / med do zhes bya bar ’dzin pa yang rigs pa ma yin te /. [3] CDNP de: G des. [4] CDGN don: P dan. [5] CD gnyi: GNP gnyis. [6] CDGP rnam: N rnams. [7] CD la’ang: GNP la. [8] CDNP ba: G bar. [9] CD par: GNP pa.

rtogs par ’gyur zhes bya ba yin no zhes zer ro //

§75. gzhan dag na re kun rdzob tu rnam par shes pa dang ’dra bar phyi’i don yang gnas pa yin no // de lta ma yin na ’phags pa sa bcu pa las / sa brgyad pa la byang chub sems dpa’ ’jig rten (G212a) gyi khams su gtogs pa’i rdul phra rab kyi grangs[1] la sogs pa yongs su shes par gsungs pa gang yin pa de dang ’gal bar ’gyur te / ji skad du /

> de rdul phra rab phra mo yang rab tu shes la / chen por gyur pa dang / tshad med pa dang / rnam par phye ba yang rab tu shes so // rdul phra rab kyi rnam par phye ba tshad med pa la mkhas par yang rab tu shes so // ’jig rten gyi khams gang na sa’i khams kyi rdul phra rab ji snyed yod[2] pa yang rab tu shes la / de bzhin du chu’i khams (P173a) dang / me’i khams dang / rlung gi khams kyi yang rab tu shes so

zhes rgyas par gsungs pa lta bu’o //

§76. rnam par shes pa bzhin du phyi’i don yang grags pa’i phyir grags pas gnod pa yang yin te / rigs pas rnam par dpyad na ni gnyi ga yang brtag pa’i khur mi bzod pa nyid kyis dngos po’i gnas mi thod la / tha snyad kyi bden (N164a) par ni dngos (D159a) po gnyi ga yang gnag rdzi’i chung ma yan chad la grags pa nyid do //

§77. sems tsam du gsungs pa’i ’bras bu ni gzhan gyis kun brtags pa byed pa po dang za ba po dgag pa yin te / tha snyad du yang sems las[3] ma gtogs pa’i byed pa po la sogs pa gzhan rab tu ma grub pa’i phyir ro // yang na sems ni chos thams cad kyi sngon du ’gro ba yin pa’i phyir chos thams cad la ltos[4] nas sems gtso bor bsgrub pa’i phyir ro // (C159a)

§78. gang yang / don yod ma yin sems nyid de // zhes bya ba dang / de bzhin du / bag chags kyis ni (G212b) dkrugs pa’i sems // don du snang bar rab tu ’byung // zhes bya ba la sogs pa gsungs pa der yang rnam pa med pa’i sems kyis ji ltar yang yul ’dzin par mi rung bas de’i phyir gdon mi za bar de rnam pa dang bcas pa nyid du khas blang dgos so // de bas na sems kyi rnam pa las ma gtogs pa don gyi rnam pa[5] mi snang ba’i phyir de bkag pas[6] sems rnam pa dang bcas pa[7] nyid du bstan pa ’ba’ zhig tu zad kyi / de las phyi rol gyi don med par rtogs par ’gyur ba ni ma yin no //

---

[1] CGNP grangs: D gangs. [2] CD yod: GNP om. [3] CD las: GNP om. [4] CD ltos: GNP bltos. [5] CDGN pa: P par. [6] CDGN pas: P pa. [7] CDNP pa: G pa de.

§79. yang na bdag la sogs pa yod pa la sogs par bstan pa bzhin du de lta bus ’dul ba’i skye bo la ltos[1] nas sman pa rnams nad pa ji lta ba bzhin gso bar byed pa dang ’dra bar sangs rgyas bcom ldan ’das rnams kyi chos bshad pa sna tshogs rab tu ’jug ste / de skad du ’phags pa lang kar gshegs pa las kyang /

nad pa dang ni nad pa la //
sman pas rdzas[2] byin ji lta bar // (P173b)
de bzhin sangs rgyas sems can la //
sems tsam nyid du gsungs pa yin //

zhes gsungs so //

§80. gzhan dag la slu[3] ba yang ma yin te[4] // de lta bus ’dul ba’i skye bo la phan pa dang bde ba thob par byed pas bshad pa don yod pa’i phyir ro // pha (N164b) rol la gcig tu phan pa nyid bden pa yin pa’i phyir bcom ldan ’das rnams la brdzun gsung ba yang mi mnga’[5] ste / ji skad du /

slu[6] dang ldan pa bden ma yin //
don gyi dgongs pa[7] med pa’ang min //
gzhan la gcig tu phan pa bden // (G213a)
phan pa med phyir cig shos min //

zhes gsungs pa lta bu’o zhes brjod do //

§81. de ltar na kun (D159b) rdzob tu phyi rol gyi don yang yod dam / sems tsam nyid kyang bla ste / the tshom med par dngos po’i ngo bo nyid yang dag pa[8] phra rab kyang sgrub par ’gyur ba gang yin pa de lta bu’i yid ches pa’i bka’[9] ni rnam pa thams cad du
C159a7,D159b1 med do //
G213a2,N164b3
P173b4

[1] CD ltos: GNP bltos. [2] CDGN rdzas: P rjes. [3] CD slu: GNP bslu. [4] G te: CD no; NP to. [5] CDNP mnga’: G mda’. [6] CD slu: GNP bslu. [7] CDNP dgongs pa: G dgongs pa °mad pa° (° correction mark(?) by editor). [8] CD pa: GNP pa pa. [9] DGNP bka’: C bga’.

略号・参考文献

AAA — *Abhisamayālaṃkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā* of Haribhadra: U. Wogihara. *Abhisamayālaṃkārālokā Prajñāpāramitāvyākhyā: The Work of Haribhadra.* Tokyo, 1932. Reprinted in 1973.

AK — *Abhidharmakośakārikā* of Vasubandhu: P. Pradhan. *Abhidharma Kośabhāṣya of Vasubandhu.* Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1967.

AKBh — *Abhidharmakośabhāṣya* of Vasubandhu. AK を見よ.

APDṬ — *Avikalpapraveśadhāraṇīṭīkā* of Kamalaśīla. D4000, P5501.

AS — *Abhidharmasamuccaya* of Asaṅga: 瑜伽行思想研究会. 梵蔵漢対校, E-text, *Abhidharmasamuccaya* and *Abhidharmasamuccayabhāṣya*. Volume I, II, III, Shiga (www.shiga-med.ac.jp/public/yugagyo/), 2003.

ASBh — *Abhidharmasamuccayabhāṣya*. AS を見よ.

ADSPP — *Aṣṭādaśasāhasrikā prajñāpāramitā*: Edward Conze. *The Gilgit Manuscript of the Aṣṭādaśasahasrikāprajñāparamitā, Chapter 70 to 82, Corresponding to the 6th, 7th and 8th Abhisamayas.* Rome: Is.M.E.O., 1974.

ATBS — Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien.

BASK — *Bāhyārthasiddhikārikā* of Śubhagupta. 神子上 (1986) を見よ.

BCA — *Bodhicaryāvatāra* of Śāntideva.

BCAP — *Bodhicaryāvatārapañjikā* of Prajñākaramati: Louise de la Vallée Poussin. *Bodhicaryāvatārapañjikā: Prajñākaramati's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Çāntideva.* Calcutta, 1901-1914.

BK I — *First Bhāvanākrama* of Kamalaśīla: Giuseppe Tucci. *Minor Buddhist Texts, part 2: First Bhāvanākrama of Kamalaśīla, Sanskrit and Tibetan Texts with Introduction and English Summary.* Rome: Is.M.E.O., 1958.

BNZhG — *dBu ma'i yig cha / dBu ma snang ba'i gzhung go don rigs pa'i tshul dang myi 'gal zhing blo chung bas kyang bde blag tu rtogs pa byis pa'i 'jug ngogs* of Phya pa chos kyi seng ge: dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang. *bKa' dgams gsungs 'bum 'phyogs bsgrigs* Volume 6. Chengdu: Khron mi rigs dpe skrun khang, 2006. 265-428.

BNJ — *dBu ma snang ba'i brjed tho* of bShad grub bsTan dar: Lokesh Chandra. *Works of bsTan dar sngags rams pa.* Śatapiṭaka Series. Volume 291. New Delhi, 1982.

BBh — *Bodhisattvabhūmi*.

BBh_{TK} — *Bodhisattvabhūmi* edition of Chapter 4. 高橋 (2005) を見よ.

BBh_{W} — *Bodhisattvabhūmi* edition: U. Wogihara. *Bodhisattvabhūmi: A Statement of whole course of the Bodhisattva (Being fifteenth section of Yogācārabhūmi).* Tokyo: 大正大学聖語学研, 1930-1936. Reprinted 荻原雲来　梵文菩薩地経, Tokyo: 山喜房佛書林 (Sankibo Buddhist Book Store), 1971.

BSGT	*Blo gsal grub mtha'* of dBus pa blo gsal. MIMAKI (1982) を見よ.
C	Co ne Tibetan Tripiṭaka.
CŚK	*Catuḥśatakaśāstrakārikā* of Āryadeva. D3846, P5246
CŚṬ	*Bodhisattvayogacāracatuḥśatakaṭīkā* of Candrakīrti. D3865, P5266.
D	sDe dge Tibetan Tripiṭaka.
DBhS	*Daśabhūmikasūtra*: Ryūko Kondō. *Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtraṃ.* Tokyo, 1936. Reprinted in Kyoto: Rinsen Book Co., 1983.
DhSS	*Dharmasaṅgītisūtra*. D238, P904.
G	Golden Manuscript.（G 版の番号は MIYAKE (2000) に従う.）
JIP	*Journal of Indian Philosophy.*
KP	*Kāśyapaparivarta*. VON STAËL-HOLSTEIN (1977) を見よ.
LAS	*Laṅkāvatārasūtra*: B. Nanjio. *The Laṅkāvatārasūtra*. Kyoto, The Otani University press, 1923.
LNy	*Legs bshad snying po (Drang ba dang nges pa'i don rnam par phye ba'i bstan bcos legs bshad snying po)* of Tsong kha pa. *The Collected Works of rJe Tsong kha pa Blo bzang grags pa*, vol. 21. New Delhi, 1979.
MAK	*Madhyamakālaṃkārakārikā* of Śantarakṣita. D3884, P5284.
MAK_I	*Madhyamakālaṃkārakārikā* edition. 一郷 (1985) を見よ.
MAP	*Madhyamakālaṃkārapañjikā* of Kamalaśīla. D3886, P5286.
MAt	*Madhyamakāvatāra* of Candrakīrti. MAtBh を見よ.
MAtBh	*Madhyamakāvatārabhāṣya* of Candrakīrti: L. de la Vallée Poussin. *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti: Traduction tibétaine.* St.-Petersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1907-1912. Reprinted in Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.
MAt_{Li}	*Madhyamakāvatāra* edition of Chapter 6. LI (2015) を見よ.
MAt_T	*Madhyamakāvatāra* Tibetan edition. MAtBh を見よ.
MAU	*Madhyamakālaṃkāropadeśa* of Ratnākaraśānti. D4085.
MAV	*Madhyamakālaṃkāravṛtti* of Śāntarakṣita. D3885, P5285.
MAVMS	*Madhyamakālaṃkāravṛttimadhyamāpratipatsiddhi* of Ratnākaraśānti. D4072.
MĀ	*Madhyamakāloka* of Kamalaśīla. C133b6-242a4, D3887, G3286, N3278, P5287.
MHK	*Madhyamakahṛdayakārikā* of Bhāviveka.
MHK_{Eck}	*Madhyamakahṛdayakārikā* editions of Chapter 4 and Chapter 5. ECHEL (2008) を見よ.
MHK_S	*Madhyamakahṛdayakārikā* edition of Chapter 5. 齋藤 (2007) を見よ.
MMA	*Munimatālaṃkāra* of Abhayākaragupta. D3903, G3298, N3290, P5299.
MMK	*Mūlamadhyamakakārikā* of Nāgārjuna.
MMK_{Ye}	*Mūlamadhyamakakārikā* edition. YE (2011) を見よ.

MMK_L	*Mūlamadhyamakakārikā* edition in PsP. PsP_L を見よ.
MMK_M	*Mūlamadhyamakakārikā* edition in PsP Chapter 1. PsP_M を見よ.
MS	*Mahāyānasaṃgraha* of Asaṅga. 長尾 (1982) と (1987) を見よ.
MSA	*Mahāyānasūtrālaṃkāra:* Sylvain Lévi. *Asaṅga, Mahāyānasūtrālaṃkāra: Exposé de la doctrine du grand véhicule selon de système Yogācāra, Tome I-texte.* Paris: Librairie Honoré Chanpion, 1907. Reprinted in Kyoto: Rinsen Book Co., 1983.
MV	*Madhyāntavibhāga* of Maitreya. MVBh を見よ.
MVBh	*Madhyāntavibhāgabhāṣya* of Vasubandhu: Gadjin Nagao. *Madhyāntavibhāgabhāṣya: A Buddhist philosophical treatise edited for the first time from a Sanskrit manuscript.* Tokyo: Suzuki Reserch Foundation, 1964.
MVṬ	*Madhyāntavibhāgaṭīkā* of Sthiramati: Susumu Yamaguchi. *Madhyāntavibhāgaṭīkā: Exposition Systématique du Yogācāravijñaptivāda.* Nagoya: Librairie Hajinkaku, 1934. Reprinted in Tokyo: 鈴木学術財団 (Suzukigakujutsuzaidan), 1966.
N	sNar thang Tibetan Tripiṭaka.
NB(Ṭ)	*Nyāyabindu* of Dharmakīrti (Dharmottara: *Nyāyabinduṭīkā*): D. Malvania, *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a subcommentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a commentary on Dharmakīrti's Nyāya-bindu.* Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1955, Second edition 1971.
$\mathrm{NBṬ}_{VD}$	*Nyāyabinduṭīkā* of Vinītadeva. Louis de la Vallée Poussin, *The Tibetan Translation of the Nyāyabindu of Dharmakīrti with the Commentary of Vinītadeva.* Calcutta: Asiatic Society, 1913. Reprinted in 1984.
NVinV	*Nyāyaviniścayavivaraṇa* of Śrī Vādirāja Sūri. JAIN (2000) を見よ.
om.	omit; omitted.
P	Peking Tibetan Tripiṭaka.
PP	*Prajñāpradīpa* of Bhāviveka. D3853, P5253.
PP_{Ldt}	*Prajñāpradīpa* edition of D234b2-249a1 P303a6-312a8 in Chapter 25. LINDTNER (1984) を見よ.
PPS	*Pitāputrasamāgama*. P760(16).
PPU	*Prajñāpāramitopadeśa* of Ratnākaraśānti. D4079.
PsP	*Prasannapadā* of Candrakīrti.
PsP_{LVP}	*Prasannapadā* edition: Louis de La Vallée Poussin. *Mūlamadhyamakakārikās (Madhyamikasūtras) de Nāgārjuna: Avec la Prasannapadā, Commentaire de Candrakīrti.* St. Petersburg, 1903-1913. Reprinted in Osnabrück: Biblio Verlag, 1970.
PsP_M	*Prasannapadā* edition of Chapter I. MACDONALD (2015a) を見よ.
PsP_T	*Prasannapadā* Tibetan translation. D3860, P5260.
PV	*Pramāṇavārttika* of Dharmakīrti.

PVSPP I — *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* Chapter 1: Nalinaksha Dutt. *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*. Calcutta, 1934.

PVSV — *Pramāṇavārttikasvavṛtti* of Dharmakīrti: R. Gnoli. *The Pramāṇavārttikam of Dharmakīrti: The first chapter with the autocommentary, text and critical notes.* Rome: Is.M.E.O., 1960.

RV — *Ratnāvalī* of Nāgārjuna: Michael Hahn. *Nāgārjuna's Ratnāvalī: Vol. 1, The Basic Texts (Sanskrit, Tibetan, Chinese). Bonn: Indica et Tibetica Verlag, 1982.*

SBhS — *Subhāṣitasaṃgraha*. BENDAL (1903)(1904) を見よ.

SBVAJĀA — *Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra*: 木村高尉・大塚伸夫・木村秀明・高橋尚夫. 梵文校訂『智光明荘厳經』(*Sarvabuddhaviṣayāvatārajñānālokālaṃkāra nāma mahāyānasūtra*: Sanskrit Text). 小野塚幾澄博士古希記念論文集　空海の思想と文化＜下＞ Tokyo: ノンブル (Nonburu), 2004. pp. 596 (1)-508 (89).

SDNS — *Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* of Kamalaśīla.D3889, P5289.

SDVK — *Satyadvayavibhaṅgakārikā* of Jñānagarbha. D3881.

SDVP — *Satyadvayavibhaṅgapañjikā* of Śāntarakṣita. D3883, P5283.

SDVV — *Satyadvayavibhaṅgavṛtti* of Jñānagarbha. D3882.

SDhP — *Saddharmapuṇḍarīka*: H. Kern and Bunyiu Nanjio. *Saddharmapuṇḍarīka*. St.-Petersburg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1912.

SNS — *Saṃdhinirmocanasūtra*: Etienne Lamotte. *Saṃdhinirmocanasūtra: L'Explication des mystères.* Université de Louvain, Recueil de travaux publiés par les membres des Conférences d'Histoire et de Philologie 2e Série, 34e Fascicule. Louvain: Bibliothèque de l'Université; Paris: Adrien Maisonneuve, 1935.

SR — *Samādhirāja*: P.L. Vaidya. *Samādhirājasūtra*. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning, 1961.

ŚS — *Śikṣāsamuccaya* of Śāntideva: Cecil Bendall. *Çikshāsamuccaya: A Compendium of Buddhistic Teaching compiled by Çāntideva Chiefly from Earlier Mahāyāna-sūtras.* ST.-Petersburg: Commissionnaires de l'Académie Impériale des Sciences, 1897-1902. Reprinted in Osnabrück: Biblio Verlag, 1970 and in Tokyo: Meicho-Fukyūkai, 1977.

TJ — *Tarkajvālā*. D3856, P5256.

Tr — *Triṃśikā* of Vasubandhu. TrBh を見よ.

TrBh — *Triṃśikābhāṣya* of Sthiramati. Hartmut Buescher, ed. *Sthiramati's Triṃśikāvijñaptibhāṣya: Critical Editions of the Sanskrit Text and its Tibetan Translation*. Vienna: VÖAW, 2007.

TrṬ — *Triṃśikāṭīkā* of Vinītadeva. JAINI (1985) を見よ.

$\mathrm{TrṬ}_T$ — *Triṃśikāṭīkā* Tibetan edition. D4070.

TS — *Tattvasaṃgraha* of Śāntarakṣita.

TS_k — *Tattvasaṃgraha* edition. TSP_k を見よ.

TSP	*Tattvasaṃgrahapañjikā* of Kamalaśīla.
TSP_k	*Tattvasaṃgrahapañjikā* edition: E. Krishnamacharya, ed. *Tattvasaṅgraha of Śāntarakṣita: With the Commentary of Kamalaśīla.* Vol. I and Vol. II. Baroda: Oriental Institute, 1926. Vol. I reprinted in 1984, Vol. II reprinted in 1988.
VCCH	*Vajracchedikā Prajñāpāramitā*. HARRISON AND WATANABE (2006) を見よ.
VCCHṬ	*Vajracchedikāṭīkā* of Kamalaśīla: P. Tenzin. *Prajñāpāramitāvajracchedikāsūtram with Prajñāpāramitāvajracchedikāṭīkā of Acārya Kamalaśīla*. Sarnath: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1994.
VKN	*Vimalakīrtinirdeśa*: 大正大学総合佛教研究所　梵語佛典研究会 (Study Group on Buddhist Sanskrit Literature, The Institute for Comprehensive Studies of Buddhism, Taisho University). *Vimalakīrtinirdeśa: A Sanskrit Edition based upn the Manuscript Newly Found at the Potala Palace.* Tokyo: 大正大学出版会 (Taisho University Press), 2006.
VY	*Vyākhyāyukti* of Vasubandhu. D4061.
VÖAW	Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.
VYṬ	*Vyākhyāyuktiṭīkā* of Guṇamati. D4069, P5570.
WZKSO	*Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens.*
YṢ	*Yuktiṣaṣṭikā* of Nāgārjuna.
$YṢ_{LY}$	*Yuktiṣaṣṭikā* edition. LI AND YE (2014) を見よ.
$YṢ_T$	*Yuktiṣaṣṭikā* Tibetan edition. SCHERRER-SCHAUB (1991) pp. 7-18 を見よ.
YṢV	*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* of Candrakīrti.
$YṢV_{Ldt}$	*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* edition. LINDTNER (1982), pp. 102-118 を見よ.
$YṢV_{LY}$	*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* Sanskrit fragments. LI AND YE (2014) を見よ.
$YṢV_T$	*Yuktiṣaṣṭikāvṛtti* Tibetan edition. SCHERRER-SCHAUB (1991) pp. 19-98 を見よ.
荒牧 (1974)	荒牧典俊. 十地経. 大乗仏典 8 十地経. Tokyo: 中央公論社 (Chūōkōronsha).
磯田 (1993)	磯田 熙文.　Abhayākaragupta と *Madhyamakāloka*. インド学密教学研究 上: 宮坂宥勝博士古稀記念論文集. Kyoto: 法蔵館 (Hōzōkan). pp. 501-516.
一郷 (1985)	一郷正道. *Madhyamakālaṃkāra of Śāntarakṣita: With his own commentary or Vṛtti and with the subcommentary or Pañjikā of Kamalaśīla.* Kyoto: 文栄堂 (Bun'eido).
一郷 (1991)	一郷正道. カマラシーラ著『中観の光』 和訳研究 (1). 京都産業大学論集 20-2 人文科学系列 18: pp. 229-279.
一郷 (1993)	一郷正道. カマラシーラ著『中観の光』 和訳研究 (2). 京都産業大学論集 22-3 人文科学系列 20: pp. 104-125.
一郷 (1994)	一郷正道. カマラシーラ著『中観の光』 和訳研究 (3). 京都産業大学論集 24-1 人文科学系列 21: pp. 301-316.
一郷 (1995)	一郷正道. カマラシーラ著『中観の光』 和訳研究 (4). 京都産業大学論集 25-1 人文科学系列 22: pp. 213-241.

一郷 (2011) 一郷正道. 瑜伽行中観派の修道論の解明 :『修習次第』の研究（課題番号 20520049）. 2008 年度〜2010 年度科学研究費補助金基盤研究（C) 成果報告書.

上田 (1994) 上田昇. チャンドラキールティ著『四百論注』第一〜第八章和訳． Tokyo: 山喜房仏書林 (Sankibōbusshorin).

上山 (1977) 上山大峻. エセイデの仏教綱要書. 佛教學研究 32-33: pp. 19-45.

上山 (1981) 上山大峻. エセイデの仏教綱要書 (II). 佛教學研究 37: pp. 54-84.

瓜生津 (1974a) 瓜生津隆真. 六十頌如理論（六十詩頌の正理論および註釈）. 大乗仏典 14 龍樹論集. Tokyo: 中央公論社 (Chūōkōronsha). pp. 5-88

瓜生津 (1974b) 瓜生津隆真. 宝行王正論（一連の宝珠 : 王への教訓）. 大乗仏典 14 龍樹論集.Tokyo: 中央公論社 (Chūōkōronsha). pp. 231-316.

瓜生津・中沢 (2012) 瓜生津隆真・中沢中．全訳チャンドラキールティ入中論．Urayasu： 起心書房 (Kishinshobō).

江島 (1980) 江島惠教. 中観思想の展開: Bhāvaviveka 研究. Tokyo: 春秋社 (Shunjūsha).

遠藤 (1932) 遠藤二平. 大乗廣百論釋論. 國譯一切経中觀部３. Tokyo: 大東出版社 (Daitōshuppan-sha). pp. 197-442.

大前 (1988) 大前太． ダルマキールティの聖典観：『プラマーナ・ヴァールティカ』第 1 章および自註の和訳 (1). 九州大学文学部・哲学年報 47: pp. 15-36.

加納・李 (2013) 加納和雄・李学竹. 梵文『牟尼意趣荘厳』(*Munimatālaṃkāra*) 第 1 章の和訳と校訂 : 冒頭部. 密教文化 229: pp. 86 (37)-60 (63).

金 (2014) 金建峻.『大乗掌珍論』における一切法の無自性性論証の研究．博士（文学）学位論文．大谷大学.

計良 (2013) 計良龍成．Kamalaśīla 著『中観光明論』における " 世俗知に依拠した無自性性論証 " の成立について．法政哲学 9: pp. 15-27.

齋藤 (2007) 齋藤明．『中観心論』 *Madhyamakahṛdayakārikā* および『論理炎論』 *Tarkajvālā*, 第 5 章「瑜伽行派の真実〔説〕の〔批判的〕確定」(*Yogācāratattvaviniścaya*) 試訳．大乗仏教の起源と実態に関する総合的研究：最新の研究成果を踏まえて (研究課題番号 15320010). 平成 15〜18 年度科学研究費補助金・基盤研究 (B)(2) 研究成果報告書. pp, 199-269.

齋藤 (2008) 齋藤明．バーヴィヴェーカの識二分説批判．印度學佛教學研究 56-2: 903(134)-897(140).

勝呂 (1989) 勝呂信静. 初期唯識思想の研究. Tokyo: 春秋社 (Shunjūsha).

高橋 (2005) 高橋晃一.『菩薩地』「「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開： vastu 概念を中心として． Tokyo: 山喜房仏書林 (Sankibōbusshorin).

武内 (1967) 武内紹晃. Kāçyapaparivarta の中道説をめぐって. 龍谷大学論集 383: pp. 55-78.

長尾 (1954) 長尾雅人. 西蔵佛教研究 Tokyo: 岩波書店 (Iwanami-shoten).

長尾 (1976) 長尾雅人. 中辺分別論. 大乗仏典 15 世親論集. Tokyo: 中央公論社 (Chūōkōronsha). pp. 215-358.

長尾 (1982) 長尾雅人. 摂大乗論: 和訳と注解 (上). Tokyo: 講談社 (Kōdansha).

長尾 (1987) 長尾雅人. 摂大乗論: 和訳と注解 (下). Tokyo: 講談社 (Kōdansha).

長尾・桜部 (1974) 長尾雅人・桜部建. 迦葉品（カーシャパの章）. 大乗仏典 9 宝積部経典. Tokyo: 中央公論社 (Chūōkōronsha). pp. 5-124.

羽渓 (1932) 羽渓了諦. 大乗掌珍論. 國譯一切経中觀部３. Tokyo: 大東出版社 (Daitōshuppansha). pp. 100-138.

藤田 (2007) 藤田祥道. 大乗の諸経論に見られる大乗仏説論の系譜 III :『解深密経』; 三無自性という一乗道の開示. インド学チベット学研究 11: pp. 1-30.

堀内 (2009) 堀内俊郎. 世親の大乗仏説論 :『釈軌論』第四章を中心に. Tokyo: 山喜房仏書林 (Sankibōbusshorin).

本庄 (1990) 本庄良文. 阿毘達磨仏説論と大乗仏説論：法性，隠没経，密意. 印度学仏教学研究 38-1: pp. 410-405.

本庄 (1990) 本庄良文.『釈軌論』第四章 : 世親の大乗仏説論（上）(*Vyākhyāyukti* by Vasubandhu: Chap. IV, (1)). 神戸女子大学紀要 23-1 文学部篇: pp. 57-70.

本庄 (1992) 本庄良文.『釈軌論』第四章 : 世親の大乗仏説論（下）(*Vyākhyāyukti* by Vasubandhu: Chap. IV, (2)). 神戸女子大学紀要 25 文学部篇: pp. 103-118.

本庄 (2014) 本庄良文. 倶舎論註ウパーイカーの研究 : 訳註篇（上）. Tokyo: 春秋社 (Shunjūsha).

松下 (1987a) 松下了宗. 中観光明論に見られる無自性説批判: 聖教による吟味. 印度学佛教学研究 35-2: pp. 899-896.

松下 (1987b) 松下了宗. 無自性説と密意趣：中観光明論に見られる中観派批判の背景. 佛教學研究 43: pp. 503-482.

松田 (1983) 松田和信. 教説と意味：釈軌論・第四章より. 大谷学報 03-2: pp. 79-80.

松田 (1984) 松田和信. 縁起にかんする『雑阿含』の三経典. 佛教研究 14: pp. 89-99.

松田 (1985) 松田和信. Vasubandhu の二諦説：Vasubandhu 研究ノート (2). 印度学佛教学研究 33-2: pp. 756-750.

松田 (1986) 松田和信.『大乗起信経』と *Mahādharmādarśa* : プトゥンとロドゥーギェンツェンの記述をめぐって. 山口瑞鳳監修，チベットの仏教と社会 Tokyo: 春秋社 (Shunjūsha). pp. 269-289.

松本 (1981) 松本史朗. *lTa baḥi khyad par* における中観理解について. 曹洞宗研究員研究生研究紀要 13: pp. 93-124.

松本 (1984) 松本史朗. 後期中観派の空思想:「瑜伽行中観派」について. 理想 610: pp. 140-159.

神子上 (1983) 神子上恵生. シュバグプタの極微説の擁護：知識の認識対象の問題をめぐって. 龍谷大学仏教文化研究所紀要 22: pp. 1-17.

神子上 (1986) 神子上恵生. シュバグプタの *Bāhyārthasiddhikārikā*. 龍谷大學論集 429: pp. 2-44.

御牧 (1989) 御牧克己. シュブハグプタの『外界成就偈』第 59-60 偈. 藤田宏達博士還暦記念論集 インド哲学と仏教. Kyoto: 平樂寺書店 (Heirakujishoten): pp. 341-354.

森山 (1991) 森山清徹. 後期中観派の唯心説と二諦説：三種の唯心解釈＜勝義，ヨーガ行者の世俗，凡夫の世俗＞. 佛教大學研究紀要 75: pp. 47-96.

森山 (1994) 森山清徹. 中観派の瑜伽行派の空，二諦，三性説を巡る論争：*Madhyamakāloka* の和訳研究．佛教大学文学部・文学部論集 78： pp. 59-80.

山口 (1935) 山口益．安慧阿遮梨耶造中邊分別論釋疏．Nagoya: 破塵閣書房 (Hajinkakushobō). Reprinted in Tokyo: 鈴木学術財団 (Suzukigakujutsuzaidan), 1966.

李鍾徹 (2001) 李鍾徹 (Lee Jong Cheol). 世親思想の研究：『釈軌論』を中心として．Tokyo: 山喜房仏書林 (Sankibōbusshorin).

李・加納 (2014) 李学竹・加納和雄. 梵文『牟尼意趣荘厳』第 1 章末尾の校訂と和訳 (fol. 67v2-70r4)：『中観光明』一乗論証段の原文回収. 密教文化 232: pp. 138(7)-103(42).

BENDAL (1903) Cecil Bendal. *Subhāṣitasaṃgraha*: An Anthology of Extracts from Buddhist Works Compiled by Unknown Author, to illustrate the Dotrines of Scholastic and of Mystic (Tāntric) Buddhism. Part I. *Muséon, Études Philologiques, Historiques et Religiueses*, Nouvell Série IV. Louvain: J.-B. ISTAS: pp. 375-402.

BENDAL (1904) Cecil Bendal. *Subhāṣitasaṃgraha*. Part II. *Muséon, Études Philologiques, Historiques et Religiueses*, Nouvell Série V. Louvain: J.-B. ISTAS: pp. 1-46.

BHATTACHARYA (1960) Vidhushekhara Bhattacharya. *Bodhicaryāvatāra*. Calcutta: The Asiatic Society.

ECKEL (1985) Malcolm David Eckel. Bhāvaviveka's Critique of Yogācāra Philosophy in Chapter XXV of the *Prajñāpradīpa*. *Miscellanea Buddhica*, ed. by Chr. Lindtner. Copenhagen: Akademisk Forlag. pp. 25-75.

ECKEL (1987) Malcolm David Eckel. *Jñānagarbha's Commentary on the Distinction Between the Two Truths: An eighth century handbook of Madhyamaka philosophy.* Albany N.Y.: State of University of New York Press.

ECKEL (2008) Malcolm David Eckel. *Bhāviveka and His Buddhist Opponents.* Cambridge: Harvard University Press.

FRAUWALLNER (1961) Erich Frauwallner. Landmarks in the history of the Indian logic. WZKSO 5: pp. 125-148.

HARRISON AND WATANABE (2006) Paul Harrison and Shōgo Watanabe. Vajracchedikā Prajñāpāramitā.*Buddhist Manuscripts Volume III*. Manuscripts in the Schøyen Collection. OSLO: Hermes Publishing 2006. pp. 89-132.

HSU (2013) Chien Y. Hsu. *Bhāviveka's Jewl in the Hand Treatise: Elucidating a Path to Awakenning Utilizing Formal Inference.* A Thesis submitted to the Faculty of Graduate Studies in Partial Fulfilment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy. Department of Religious Studies, University of Calgary.

ICHIGO (1992) Ichigo Masamichi. On the *dBu ma snang ba'i brjed tho*. *Études Asiatiques* 46-1: pp. 195-211.

JAIN (2000) Mahendra Kumar Jain. *Nyāyaviniścayavivaraṇa of Śrī Vādarāja Sūri: the Sanskrit Commentary on Bhaṭṭa Akalaṅkadeva's Nyāyaviniścaya.* 2 volumes. Delhi: Nharatiya Jnanpith, 2000 (1st ed., 1944).

JAINI (1985) Padmanabh S. Jaini. The Sanskrit Fragments of Vinītadeva's *Triṃśikāṭīkā*. Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London 48-3: pp. 470-492.

KAJIYAMA (1978) Yuichi Kajiyama. Later Mādhyamikas on epistemology and meditation. *Mahāyāna Buddhist Meditation: Theory and practice*, ed. by M. Kiyota. Honolulu: University of Hawai'i Press. pp. 114-143. Reprinted in *Y. Kajiyama, Studies in Buddhist Philosophy: Selected papers.*

KANO (2016) Kano Kazuo. The Transmission of Sanskrit Manuscripts from India to Tibet: The Case of a Manuscript Collection in the Possession of Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna (980-1054). *Transfer of Buddhism Across Central Asian Networks (7th to 13th Centuries)*, ed. by Carmen Meinert. Leiden/Boston: Brill. pp. 82-117.

KEIRA (2004) Ryusei Keira. *Mādhyamika and Epistemology: A study of Kamalaśīla's method for proving the voidness of all dharmas; Introduction, annotated translations and Tibetan texts of selected sections of the second chapter of the Madhyamakāloka.* Vienna: ATBS.

KEIRA (2006) Ryusei Keira. The proof of voidness and scriptural authority: Kamalaśīla's way of adopting scriptures. 望月海淑編，法華経と大乗仏教の研究 (*The Lotus Sutra and Related Systems,* ed. by Kaishuku Mochizuki) Tokyo: 山喜房仏書林 (Sankibōbusshorin). pp. 177-192.

KEIRA (2009) Ryusei Keira. The description of *niḥsvabhāvatā* and its intentional meaning: Kamalaśīla's solution for the doctrinal conflict between Mādhyamika and Yogācāra. *Acta Tibetica et Buddhica* 2: pp. 1-24.

LA VALLÉE POUSSIN (1933) Louis de La Vallée Poussin. Le Joyau dans la main. Mélanges chinois et boudhiques 2. Bruxelles: Louvain. pp. 60-146.

LÉVI (1911) Sylvain Lévi. *Asaṅga, Mahāyānasūtrālaṃkāra: Exposé de la doctrine du grand véhicule selon de système Yogācāra, Tome II-traduction-introduction-index.* Paris: Librairie Honoré Chanpion, 1907. Reprinted in Kyoto: Rinsen Book Co., 1983.

LI (2015) Li Xuenzhu (李学竹). *Madhyamakāvatāra-kārikā* Chapter 6. JIP 43: pp. 1-30.

LI AND YE (2014) Li Xuenzhu (李学竹) and Ye Shaoyong (葉少勇). 六十如理頌：梵蔵漢合校・導読・訳注 (*Yuktiṣaṣṭikākārikā*: Editions of the Sanskrit, Tibetan and Chinese Versions, with Commentary and a Modern Chinese Translation). Shanghai: 中西書局 (Zhongxi Book Company).

LINDTNER (1981) Christian Lindtner. Atiśa's Introduction to the Two Truth and its Sources. JIP 9: pp. 161-214.

LINDTNER (1982) Christian Lindtner. *Nagarjuniana: Studies in the Writings and Philosophy of Nāgārjuna.* Copenhagen: Akademisk Forlag.

LINDTNER (1984) Christian Lindtner. Bhavya's Controversy with Yogācāra in the Appendix to *Prajñāpradīpa*, Chapter XXV. *Tibetan and Buddhist Studies: Commemorating the 200th Anniversary of the Birth of Alexander Csoma de Körös*, ed. by Louis Ligeti. Volume 2. Budapest: Akadémiai Kiadó. pp. 77-97.

MACDONALD (2015a) Anne MacDonald. *In Clear Words: The Prasannapadā, Chapter One, Vol. I, Introduction, Manuscript Description, Sanskrit Text.* Vienna: VÖAW.

MACDONALD (2015b) Ann MacDonald. *In Clear Words: The Prasannapadā, Chapter One, Vol. II, Annotated Translation, Tibetan Text.* Vienna: VÖAW.

MIMAKI (1982) Katsumi Mimaki. *Blo gsal grub mtha': Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités et chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit.* Kyoto: Zinbun Kagaku Kenkyūsho.

MIYAKE (2000) Shin'ichiro Miyake. Comparative Table of the Golden Manuscript Tenjur in dGa'-ldan Monastery with the Peking Edition of Tenjur. 真宗総合研究所紀要 17: 1-65.

SCHERRER-SCHAUB (1991) Cristina Anna Scherrer-Schaub. *Yuktiṣaṣṭikāvṛtti: Commentaire à la soixantaine sur le raisonnement ou Du vrai enseignement de la causalité par le Maître indien Candrakīrti.* Bruxelles: Institut Berge des Hautes Études Chinoises.

SCHMITHAUSEN (1969) Lambert Schmithausen. *Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścayasaṃgrahāṇī der Yogācārabhūmiḥ*. Wien.

SCHMITHAUSEN (1987) Lambert Schmithausen. *Ālayavijñāna: on the Origin and the Early Development of a Central Concept of Yogācāra Philosophy.* Part I and Part II. Tokyo: The International Institute for Buddhist Studies.

SEYFORT RUEGG (1981) David Seyfort Ruegg. Autour du *lTa ba'i khyad par* de Ye šes sde (Version de Touen-Houang, Pelliot tibétain 814). *Journal Asiatique* 269: 207-229.

SILK (2009) Jonathan A. Silk. Remarks on the *Kāśyapaparivarta* Commentary. *Pāsādikadānaṁ: Festschrift für Bhikkhu Pāsādika, Herausgegeben von Martin Straube, Roland Steiner, Jayandra Soni, Michael Hahn und Mitsuyo Demoto*. Marburg: Sonderdruck/Offprint. pp 381-397.

VON STAËL-HOLSTEIN (1977) Baron A. von Staël-Holstein. *Kāçyapaparivarta: A Mahāyānasūtra of the Ratnakūṭa class edited in the original Sanskrit in Tibetan and in Chinese.* Shanghai, 1926. Reprinted in Tokyo: Meicho-Fukyū-Kai, 1977.

TILLEMANS (1990): Tom J.F. Tillemans. *Materials for the Study of Āryadeva, Dharmapāla and Candrakīrti: The Catuḥśataka of Āryadeva, chapters XII and XIII, with the commentaries of Dharmapāla and Candrakīrti, introduction, translation, Sanskrit, Tibetan and Chinese texts, notes.* Two volumes. Vienna: ATBS.

TILLEMANS (1997): Tom J.F. Tillemans. Dharmakīrti on *prasiddha* and *yogyatā*. *Aspects of Buddhism,* ed. by Bareja Starzyńska and Marek Mejor. Studia Indolgiczne 4. Warsaw: Oriental Institute, Warsaw University. pp. 161-176.

TILLEMANS (1999) Tom J.F. Tillemans. *Scripture, logic, language: Essays on Dharmakīrti and his Tibetan successors*. Boston: Wisdom Publications.

TILLEMANS (2000) Tom J.F. Tillemans. *Dharmakīrti's Pramāṇavārttika: An annotated translation of the fourth chapter (parārthānumāna). Volume 1 (k. 1-148).* Vienna: VÖAW.

VAN DER KUIJP (2004) Leonard W.J.van der Kuijp. *The Kālacakra and the Patronage of Tibetan Buddhism by the Mongol Imperial Family*, Bloomington: Department of Central Eurasian

Studies, Indiana University.

VAN DER KUIJP (2014) Leonard W.J.van der Kuijp. The **Madhyamakālokabhāṣyatattvapradīpa*: An Indic Commentary on Kamalaśīla's *Madhyamakāloka* (*Dbu ma snang ba*). *China Tibetology* 01-2014: pp. 1-3.

VOROBYOVA-DESYATOVSKAYA (2002) M.I. Vorobyova-Desyatovskaya in collaboration with Seishi Karashima and Noriyuki Kudo. *The Kāśyaparivarta: Romanized Text and Facsimiles.* Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology, Soka University.

YE (2009) Ye Shaoyong (葉少勇). A Preliminary survey of Sanskrit manuscripts of Madhyamaka texts preserved in the Tibet Autonomous Region. *Sanskrit manuscripts in China. Proceedings of a panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*, ed. by Ernst Steinkellner, Duan Qing and Helmut Krasser. Beijing. pp. 307-336.

YE (2011) Ye Shaoyong (葉少勇). 中論頌：梵蔵漢合校・導読・訳注 (*Mūlamadhyamakakāriā: New Edition of the Sanskrit, Tibetan, Chinese Versions, with the Commentary and a Modern Chinese Translation*).Shanghai: 中西書局 (Zhongxi Book Company).

YE, LI AND KANO (2013) Ye Shaoyong, Li Xuezhe and Kano Kazuo. Further Folios from the Set of Miscellaneous Texts in Śāradā Palm leaves from Zha lu Ri phug: A Preliminary Report Based on Photographs Preserved in the CTRC, CEL and IsIAO. *China Tibetogy* 01-2013: pp. 30-47.

YONEZAWA (2013) Yoshiyasu Yonezawa. **Lakṣaṇaṭīkā*: Sanskrit notes on the *Madhyamakāvatārabhāṣya* Chapter VI. 成田山仏教研究所紀要 36: 107-175.